

魔法少女リリカルなのは Goddess Was Fallen

ルル・ヨザミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

く黒の魔導士編く

闇の書事件から数か月後、いつも通りの態度で周りに接する高町なのは。しかし、周りには高町なのはの異常なまでの疲労が否が応でも感じ取ることができた。

そんなある日、高町なのはに異変が起きた――

その日から始まるフェイトの戦い。友の涙を止めるため、彼女は空を駆ける。

く紅き白騎士編く

突如設立を宣言した私設武装組織【時空保安局】。他の武装組織のみならず、管理局の部隊にまでその手を向けた。

管理局の30人以上の部隊をたった一人で壊滅させた白騎士と呼ばれている保安局に属する魔導士の話を聞き、彼女が立ち上がった。

もつと高みを目指すため、人殺しを止めるため、少女はまた空を駆ける。

くく欲望の影”編く

これまで様々な事件で姿を現した”影”たち。遂に残り一体となった。

”影”が起こした事件としては最後のものとなったこの事件。最後の”影”の目的もまた：『高町なのはの抹殺』：。何故こうも”影”たちはなのはを殺そうとするのか…。

そして”影”を止めるため、少女たちは再び光当たらぬ戦場へと飛

び立つ…。

↳ LAST CHAPTER

ついに姿を現した最後の敵。なぜ彼女が“欲望の影”を作ったのか。なぜ彼女はこの世界にやってきたのか。

ふとした事から始まった“欲望の影”が関連した事件。今それを終わらせるべく高町なのはが最終決戦へ向かう…。

その時『なのは』は何を思い、何を胸に戦うのか——

精一杯頑張りますのでよろしくお願いします。

※本編完結しました。

目次

世界観、及びオリジナルの設定	1
黒の魔導士編	
第1話 疑惑	4
第2話 墮つ	7
第3話 決意	11
第4話 欺き	15
第5話 惨敗	21
第6話 事後	24
第7話 今後	27
第8話 反逆	30
第9話 開戦	33
第10話 葛藤	36
第11話 中断	39
第12話 休戦	42
第13話 覚悟	45
第14話 前夜	48
第15話 開戦	51
第16話 奪還	55
第17話 決戦	58
第18話 活路	61
第19話 “影”	65
第20話 終焉	69
第21話 運命	76

紅き白騎士編

第22話	なのはの心	83
第23話	戦いへの準備	86
第24話	なのはの違和感	90
第25話	作戦開始！なのは対白騎士	95
第26話	白騎士の正体	102
第27話	なのはの心と“断罪の影”	110
第28話	レイジングー猛き心ー	115
第29話	なのはの償いと騎士の恨み	120
第30話	“影”との融合	127
第31話	拮抗する戦い	135
第32話	”なのは”の償い	139
第33話	終結後の心の傷	151
“欲望の影”編		
第34話	門出	158
第35話	始動	164
第36話	折れないハート	171
第37話	秘策と対策	178
第38話	すずかと“欲望の影”	184
第39話	再戦	190
第40話	怨恨	195
第41話	怒りと『なのは』と並行世界	200
第42話	絶望の影	211
第43話	なぜ彼女は人に純度を求めるのか	219
第44話	星が強く輝くとき、そこに影はいる	225

第45話	夢	233
第46話	搜索と創作	237
第47話	少女の目的	244
第48話	時と次元の狭間の戦い	257
第49話	星光VS星光、覚悟の戦い	263
第50話	もう一つの目的、もう一人のなのは	273
第51話	救済のA／決意のA	286
第52話	輝くは桜金の如く	292
第53話	桜金が導く未来	303
最終話	NANOHAアフター	319

世界観、及びオリジナルの設定

・舞台

第97管理外世界地球 海鳴市

・高町なのは（黒）がいた潜伏先のパラレルワールドの東京と“影”が来たところ

高町なのは（黒）が潜伏していたパラレルワールドの東京は、CCさくらの東京。故に、パラレルワールドの海鳴市に潜伏をしなかった。（CCさくらの世界には海鳴市がないため）

“影”はパラレルワールドから来たのであるが。CCさくらの世界ではない。

・すずかとアリサの怪我

高町なのは（黒）の攻撃を受け、すずかは右胸を負傷、その後怪我から一週間後に目を覚まし、事件終結から三日後に退院するという驚異の回復力を見せた。アリサは描かれていないところで怪我をした。（ただ書き忘れただけ）すずかと同じく生死を彷徨う怪我を負っていた。怪我を負ったのは高町なのは（黒）がシグナムたちを連れ去ろうとした時で、はやてが倒れた後アリサも向かっていったが、腹部をなのはの手で刺されてしまった。アリサはすずかと同じ病院だったが、事件終結後まで目を覚ますことはなく、事件終結から二週間後行方不明となった。

・海鳴市臨海公園

リリカルなのは内でたびたび登場していた、公園のことです。

もしかすると、正式名称があるのかもしれませんが、わからなかったので、こういった名前を書きました。

・“影”と“隷属の影”

“影”と“隷属の影”は同じモノを指す。

どこから来て、どのような目的で事件を起こし、本当の姿は何なのか、本当に消滅したのかわからない、何から何まで謎の存在。

闇の書事件が解決された後、高町なのはの中に入り込み、事件発生まで誰にも気づかれず潜伏していた。

“影”が起こした事件は本部に知られておらず。地球支部の局員のみで対処された。しかし、時空保安局事件に“影”の関与が認められたため、早急にクロノによって管理局本局に報告された。

・ “隷属の影” 事件以降に発見された、謎のロストロギア

“隷属の影”との戦いで約7割が消滅した公園から見つかった、結晶型のロストロギア。大きさは成人男性の握りこぶし程。どうやって起動するのかわからないため、第一級危険物として、ミッドチルダに保管されている。

それは魔力の元リンカーコアを持たない生物（人も含む）に埋め込むことでリンカーコアとしての役割をする結晶だった。管理局では、『魔法石』と呼称している。

・ 時空保安局

“隷属の影” 事件から三ヶ月後、突如設立を宣言した私設武装組織。時空管理局はその存在を認めていないが、各次元世界で法外な活動をしている。

“白騎士”と呼ばれる魔導士が所属している事のみ判明している。

・ レイジング・ハート・エクセリオン・リペア

“隷属の影”により、改造され、レイジング・ハート・ザンバーになつていたため、管理局の整備士となのは、ユーノが協力し、修復した。

ザンバーモードは使えなくなっている。

・ 高町なのは オリジナルモード

桜色のバリアジャケットと金色のオーラを放つなのはが作ったオリジナルのモード。

故に特に名称は無い。

能力はなのはが見たことのある魔法をすべて使用でき、魔力によるダメージは金色のオーラが吸収し、自らの魔力として蓄えるため無効。物理的なダメージも桜色のバリアジャケットによりどんな強力な攻撃であってもゼロに近いダメージしか与えられない。

事実上最強のモードではあるが、事件後二度と使えなくなつてし

まった。

以後加筆・修正していきます。

黒の魔導士編

第1話 疑惑

どうも、私立聖祥大附属小学校5年生フェイト・テスタロッサ・ハラウンです。

突然ですが私には親友がいます。

高町なのはというある事件で知り合ったとても大切な友達が。

また別の事件で知り合った八神はやたとその騎士ヴォルケンリツター達の人達も私の親友です。

アリサ・バニングス、月村すずか、この2人ももちろんです。

しかし、ある日…とても大きな事件が起きました…。

別次元の世界にまで及んだ事件、その時の親友たち全員が口を揃えて言います。

その時のなのはは悪魔だったと…。

◆◆◆

「ねえ、何か最近、なのはって話しかけにくくない？」

「へ？」

アリサが突然物凄いことを言い出した。

「いきなりどうしたんや？アリサちゃん」

「そ、そうだよ！私もフェイトちゃんも驚いたよ！」

「え、ああ、ごめんごめん、ただ、最近なのは疲れてるみたいだからさ、どう接していいかわからなくてね」

「なるほどなあ…」

「そつとしておいた方がいいんじゃないかな？なのはちゃんの周りではうるさくしないとか」

「わ、私はすずかに賛成…かな」

「私もすずかちゃんに賛成や〜」

「じゃ！決まりね！なのはの周りでは騒がないようにするのと、なのはを…じゃなくてなのはは無理しないように言うとか！」

「お昼もそんなに強く誘わないようにしようか」

「すずかちゃん…それはイジメられてるとか思われんやろか…」

「なのははきつとわかつてくれるわよ！」

「アリサちゃん…」

「はやて…きつと大丈夫だよすずかの意見に私も賛成だな」

「フェイトちゃんまで…わかったわ…でも程々にせんとホントにイジメられてると思われるよ」

「それぐらい気を付けるわよ！」

と、まあこのようにしてなのはを休ませようと私とアリサ、すずかはやてとで話し合ったわけですが…

—NANOHA SIDE—

昨日は仕事で全然ちゃんと寝れなかったなあ…。

でも、皆と話してれば元気出て眠気飛ぶかな？

と思つてたらあそこにいるのはフェイトちゃん達じゃないかな。

廊下でワイワイ話してるのが見えるよ。

あ、少し驚かせちゃおうかな♪

そおつと…そおつと…

「…なのは…しないとか…」

？私の事話してるのかな？

「…なのはを…む…し…するとか…！」

!?え…き、聞き間違いか、かな？

お、お昼の時にかに聞こうかな。

話しかけちゃおつと。

「…なのはを…お昼に誘わないとか…」

!?あ、あれ？す…すずかちゃん？な、なんで…

でも、皆反対してくれるよね…

「…きつと…わよ…」

あ…聞いてなかった…

「…私も…賛成…」

フ…フェイトちゃん…？

「…わかったわ…」

はやてちゃん…まで…

…皆：私がない時はいつもこんな話してるのかな…

ひ：酷いよ…私にダメなところがあつたら直接言えばいいのになんな陰口なんて…

…無視なんて…

ーヒドイヨー

—SIDE OUT—

この後私達が教室に行くと、なのはが早退したと聞かされました。心配だったので放課後皆でお見舞いに行く事にしました。

そう…皆で…

To be continued…

第2話 墮つ

今日の放課後に私とアリサとすずかそして、はやてとで早退したなのはのお見舞いに行くことにしました。

「何か持っていていったほうがいいかな」

「なのはが好きな緑茶でいいんじゃない?」

「アリサそんな適当に…」

「まあ、ええんやないの? 緑茶で」

「じゃあ、緑茶にしようか」

緑茶はなぜかアリサが凝りだして玉露になりました…しゅ、出費が…。

「緑茶も買ったし! さ、なのはの家に行きましょう」

「アリサちゃんが一番時間かかったんやけどな」

「い、いいじゃない! どうせ買うならいい物を、よ!」

「お、お金を払ったのは私だよアリサ…」

「フェイトちゃんお金大丈夫?」

「な、なのはのためだと思えば…いける!」

「たくましいな」

などと話しながら私達4人はなのはの家に向かっていきました。

そして、スーパーから10分程でなのはの家に着きました。

「さてと、着いたしインターホン押すわよ」

「いちいち言わんでもええよ」

「き、気分よ!」

「早く行こう?」

「アリサちゃん」

「はいはい」

ピンポンというよく聞く音が鳴りました。

ドアを開けて出てきたのはなのはのお母さんの桃子さんでした。

「あら…皆来てくれたのね、ありがとう」

「いえ、ただ心配だったので」

とすずかが返事をする。

「これ、お見舞いの緑茶です！」

とアリサが桃子さんに緑茶を渡す。

「なのはちゃんどうしたんですか？」

とはやてがなのはの事を聞く。

しかしその時、後ろの扉をよじ登り家の外に出ていくなのはの姿が私の目に飛び込んできた。

「あ、あれ…なの…は？」

「え？あ！ほんとだ！」

「な、なんであんな事してるんや!？」

「ちよつとー！なのはー！」

3人とも気づいたようだ。

「わ、私追いかける！」

「私もや！」

「私もー！」

「ええ!?私もー！」

と、4人でなのはを、追いかける。

なのはは確か運動が苦手だったはず！

4人ともそう思い走っていたのですがなのはのスピードは全く衰えず、むしろ早くなっていってる気が…。

—NANOHA SIDE—

…。

静かな家にインターホンの聞きなれた音が響く。

誰だろう…。

そういうなのはの目には光が無かった。

外を覗くとそこには母と話す、フェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんがいました。

「!?…なんで…」

まさか…家にまで来て、イジめるつもりなのかな…

背筋が凍る…。

…逃げなきゃ…!

そして私は、急いで、家の裏口から出て、塀をよじ登り外に出ました。

「……なののは？……」

どうやら、フェイトちゃんに見つかってしまったようです…。

誰に話すでもなく、心で今の自分を実況する。

不思議と疲れが出てこない…さつきまで寝てたからだろうか。

追いかけてくる4人の顔がとても怖い…まるで私…なののはを食べ
てしまいそうで…。

そんな事、人にできないのはわかってるけれど、そう…思った…。

ーナンデニゲルー

!?頭の中でいきなり声があった

「誰かが…念話してきてるのかな…」

少なくとも、フェイトちゃんとはやてちゃんの声ではなかった。

で、だれ…、

ーナンデニゲル、ジブンハワルクナイノニー

え、どういう…意味…？

ーアイツラガイジメテクルナラ、ヤリカエセー

やり…返す…。

ーソウダ、ヤツラヨリモオオキナチカラデー

大ナチカラ…

ー解放セヨー

カイ…ほウ…

その瞬間私の体ハ光だした。

ーSIDE OUTー

私達は目の前で何が起こってるか全く理解できなかった。

なののは体が急に光りだし球体に身を包んだのだ。

「なののはー」

私は思わず叫んでなののはを包んだ球体に触ってしまった。

「!?っっー」

「フェイトちゃんー」

はやてから下がってと念話で指示される。

でもっ…

「バルディッシュュ!!」

《YES. SIR》

バリアジャケットを、着て球体を攻撃しようとした瞬間―

一筋の閃光がすすかの胸に突き刺さる。

「え…す…ずか…」

皆突然の事に動揺が隠せないようだ…かくいう私もだが…。

そして球体が卵の殻の様に割れていく。

中から出てきたのは、いつもの様な純白のバリアジャケットとは正

反対の…漆黒のバリアジャケットに身を包んだ高町なのはの姿だっ
た…。

「…見イつけたあ…」

t o b e c o n t i n u e d …

第3話 決意

「…見イつけたあ…」

今はどんな状況だろう、整理がつかない。

なのはが魔力で出来た球体に飲み込まれ、その球体にヒビが入ったらヒビから出てきた細い光がすずかの胸を貫いて球体の中からは黒いバリアジャケットを着たなのはが出てきて…。

つまり…どういうこと…なの…？

わからないよ…わからない…

「わからないんじゃ無くてわかってないんじゃ無いの」

突然なのはから話しかけられる。

いつもはあんなに嬉しい事なのに…今はどうしてか、とても…なのはが怖い…

「ふふふ…足を震えさせちゃって、涙目にもなって…情けないねー
フェイトちゃん」

いつものなのはとは思えないような、人を小馬鹿にしたような態度で話し始める。

「なあに？そんなにすずかちゃんが撃たれたのショックだった？ふふつ、なら残念だったねー」

まるで子供のように人の事を馬鹿にしてくる。

どうしよう…何てなのはに声をかければいいんだろう…。

いつもは溢れるように出てくる言葉が今回は全く出てこない。

まるで喉に何か塊が詰まってるようで…。

「フェイトちゃん、すずかちゃんは私とアリサちゃんで見てるからなのはちゃんの方はお願いや！」

とはやてが言う。

「わ、わかった！」

とは言ったものの、今のなのはをどう対処すればいいのか…。

「ねえーまだー眠くなってきたー」

抑揚の無い声で話しかけてくる。

何で私はここまでなのはを恐怖しているんだろう…あの時、心を

救ってくれた彼女を…。

「まだ…つて殺る気ナイノ？」

「え、い、いやなのはと戦う気なんて…」

「は？つまんなつ、なら殺る気にさせてあげる！」

そう、なのはが言った途端、レイジング・ハートと思われるデバイスから細い魔力のビームが縦に私のすぐ横を通った。

「え」

後ろから聞こえたアリサの声、しかし次の瞬間には

「ぎゃあああああうわああああ!!!」

絶叫へと変わっていた。

「アリサっ!?!」

そう言つてアリサに視線を向けると

アリサの左手が真ん中から切られていた。

泣き叫ぶアリサ…、苦痛に顔を歪めるすずか、その二人を看護しつつ守っているはやて

私に何ができるの…?

…なんでなのははこんな事をするの…?

なんでなんでなんで…

《S I R》

「!?!」

考え事をしてしまっていた私にバルドイツシュが声をかける。

「ねえ？殺る気になった？」

そうだ、今はなのはと話すんだ、で、でも私に…

「来ないなら…こっちからイクヨ…」

「くっ!」

なのはからアクセセルシューターが数発出される。

「フォトンランサー！ファイアー!!」

二つの魔法が相殺する。

「まだマダア!!!」

「なのは！なんで、なんでこんな事するの!?!」

「こんナ事？」

「すずかを撃つたり、アリスの手を切つたりなんて、そんなの人のする事じゃないよ!!」

「いやー実際した人にそんな事言われてもねエ」

「私達は友達じゃなかったの!?!」

「友…達? ええ、まさかあの言葉信じてたの?」

「なのはが、なのはが言ってくれたあの言葉のおかげで今の私が…」

「ぷっ、あつははははははははははははははは、あんな誰でも言う言葉信じてたのオ?」

「えっ…」

後ろから

「止めるんやー!なのはちゃん!」

はやてがなのはが言おうとしてる事がわかった様に、なのはへ言葉を発する。

「友達になりたいんだ”ア?そんなの、嘘に決まってるんじゃないやんwだーれがお前みたいなのと友達になりたいと思うの?」

「え…そ、そんな…」

全身から力が抜ける、膝から地面に倒れる

「ふふふ…弱いねー」

そんな…なのはが、あのなのはがかけて来てくれた言葉は全部…嘘だったの…

そんなのって…そんなのってないよ…

何だかどうでもよくなって来た…このまま倒れていけば、もしかしたらなのはに殺されちゃったりするのかな?

それも…いいかな…

「起きないねーw試しにディバイーン…」

《S I R》

いきなり体が宙へ浮かびなのはから距離をとる。

「バル…ディッシュ…?」

《S I R 諦めないで下さい、酷な事かもしれませんが、すずか嬢やアリス嬢を今守れるのはS I R、貴女だけなのです、戦って下さいS I R!》

驚いた…、いつも無口なバルディッシュがこんなに喋った事も
ど…ううん…そうだよね…バルディッシュ…今出来る事に…全力で
!!

「はやては、二人の看護に専念してるから戦うのは無理だ…だから私
が!!」

「へエー…やっと殺る気になったんだねエ…」

「なのは…例え今までののが全て嘘だったとしても…私は友達として貴
女を止めてみせる!」

話を…聞かせてもらうんだ!!

第4話 欺き

保存日時：2014年11月17日(月) 08:39

話を：聞かせてもらうんだ！

なのは！

「殺る気まんまんって感じー？」

「ねえ、なんで？なんでこんな事するの？なのは」

「はあ？そんなの自分で考えろよ」

「な、なのは…」

今のなのは話を聞かせてもらえる状況じゃない…。

なら1度落ち着いてもらってからにしよう。

でも、どうやって落ち着かせよう…、出来れば戦いたくないし…

うーん…

フエイト・テスタロッサ・ハラオウンの思考時間ここまででおおよそ十数秒である。

「ねえーまだ？」

「…わかった、いいよ、戦おう…」

「やあーつと殺る気二なつたんだねエ」

「…バルディツシュ…！」

《YES SIR》

「レイジングハート！」

《Okay, my lord》

「レイジングハートのなのはへの呼び方が変わってる…」

「正直さー、マスターよりこっちの方がかっこヨクナイ？」

「そ、そうかな」

「うん、じゃあイクヨ」

「え、あ、うん、バルディツシュ、ザンバーモード」

《YES SIR》

「レイジングハート、私達もザンバーモード」

《Okay, my lord》

え、レイジングハートがザンバーモード!?

ていうかなのはは遠距離型の魔導師の筈なのに…？

…なんでだろ…。

「はああア！」

!?

「ぐっ…！」

考え事をしてたら突然…、戦うと言っておいて考え事してた私が悪いか。

「剣なら私の方が！」

「それはどうかなア！」

なのはの剣撃はしばらく続いた、その威力は衰える事無く…。

さらになのはは的確に私の頭を狙ってくる。

こちらを、殺す気まんまんの相手がなのはだなんて…、でも今は…っ！

「はあー！」

なのはの脇腹にクリーンヒットする。

苦痛に顔を歪める事も無く、こちらを蹴り返して来た。

「グアッ！」

「ふうー痛かつたなあー」

「ゲホッ、ガッハ…」

「あーもしかしてクリーンヒットしてたア？」

「…い、いや、全然…」

「おおー、イイネいいネねー」

すると通信でシグナムとヴィータがこちらに向かって来ているという事がわかった。

「シグナム…ヴィータ…」

「おやア？援軍かナー？」

これで、優位に立てるかもしれない…、でもっ！

「なのは…シグナム達が来るまでに終わらせる！」

「おオー、強キだねー」

なのははおどけて答える。

どう見ても正常じゃないなのはを…助けなきゃ！

手を差し延べるんだ…あの時なのはが私にしてくれたように！

「テストarroツサ！」

「え」

え、ちよ、シグナム達早い!?

あんな事言っちゃったよ!?

シグナム達に来るまでに終わらせるって言っちゃったよ!?

「ひーっひーっお腹痛いww」

うう…なのはに笑われてる…。

「どうした、テストarroツサ」

「なんでもないです…」

「はやて！」

「ヴィータ！来てくれたんかー！」

どうする気なのだろう…なのはは、笑っているけどこの状況圧倒的になのはが不利だ。

ヴィータにシグナム、そしてはやて、夜天の騎士と主がいるこの状況で…？

「役者は揃ったアアア!!」

「「!?!」」

突然なのはが叫んだ。

役者は揃った？

何を始める気何だろうか。

「な、なのはがおかしくなったってのはマジだったみてえだな…」

「ヴィータ…」

「フェイト、オメーもなのはに借りがあんだろうがそれはアタシも一緒だ、とつとと正気に戻すぞ」

「私も同意見だテストarroツサ」

「う、うん！」

3対1は気が進まないけど…でもやるしかない!

「おやおヤア?ヴィータちゃん、3人集まってじゃないと私と戦えないのカナー?いづくじなしーw」

「な、…いくらなのはでも…今のは頭に来たぞ!!!」

!?!いけない! ヴィータそれはなのはの罠だ!

わざとヴィータを挑発して何かしようとしてる!

そう言おうと思ったけれどそれより早くヴィータはなのはへ突っ込んで行ってしまった…。

「迂闊だぞーヴィータ!」

シグナムも言う。

「シグナムのー? 言う通り♡」

「は?」

ヴィータがなのはに到着する直前ヴィータは空中に両手両足を広げた状態で縛られてしまった。

「な、なんだ! これ! 外せねえ…」

「危ないからー、グラーフアイゼン取っちゃおうかー」

「返せ! あたしのグラーフアイゼン!」

「ダーめ♡…さてさて! ここからがー…show! time
!!!!!!」

「シグナム…私がヴィータを助けます」

「私も行こう!」

「お二人はバインドねー」

「!?!」

ば、バインド!

くっ…硬い!

「な、何する気だよ、なのは…」

心なしかヴィータの声は震えているように聞こえた。

「えー? 何するかってー? 勿論ー面白い事だよー? 私がね♪」

「えっ…」

「ヴィータちゃんを縛っているのはー」影「デース!」

ヴィータは顔を青くしてガクガクと震えている、遠くからでもわかるくらいに。

そしてあの黒いのは…影?

「この”影”でー! ヴィータちゃんのお腹をー…刺しまーす!」

「!? や、やめ「やめないよー?」

ヴィータの声を遮ってなのはさ喋る…。

どうにかしてヴィータを助けなきゃ…くっ！

「ヴィータアア!!」

シグナムの苦痛の叫びがこだまする…それも悲しく響くだけだったが。

「いつくよー☆」

「い、嫌だアー！やめてよ！ねえ!!!」

「ふっふっふー！問答無用♪」

「嫌だああアアア!!ゲフツ」

刺さった…”影”が、ヴィータのお腹の中心を…刺した…。

「ゲッフ！ガハツ！うああ…痛い、痛いよ…」

ヴィータのいつもの強気 성격が完全に飛んでいる。

それ程の痛みなのだろう…。

「どんどんいくよー☆」

「え!?そ、そんなあ…!?!」

「だ、れ、もお…一回だなんて言っていないでしょー?」

「やめてよ！なのはああー!」

ヴィータ…泣いている…助けたいの…助けたいのにつ!

「高町…なのはあー!」

シグナムが気合でバインドを解いていた。

「許さんぞ…ヴィータを…よくも!」

もうヴィータは何回刺されているだろう…シグナムはガマンの限界だったのだ…。

「おや?来るかい?」

「騎士を…舐めるなあ!」

シグナムが勢い良くなのはへ突撃する、ヴィータは空中で罨に引つかかった、その事からかシグナムは地上からなのはへ近づいた。

「残念でしたア☆地上にもお、罨はあつりまあーす!」

「何っ!?!グフツ」

突如シグナムを背中から黒い物が突き刺した。

”影”だ。

「シグナムー！ヴィータ!」

二人とも倒された…、なのはに よって、ものの数秒で。

決して彼女らが弱いわけではない…今のなのはが強過ぎるのだ…。

私はよく生きていた、と言えるのか…、生きた心地などしなかった。

「ふふふふふふ…」

なのはの不敵で不気味な笑みはこちらを向いていた―。

第5話 惨敗

「ふふふふふ…」

そのなのはの不適で不気味な視線は確実に私、フェイト・テストア
ロツサ・ハラオウンを貫いていた。

「なのは…一体…どうすればいいの…」

「デ？フェイトちゃんは来ないの？だっさー」

「じゃあ、バインド解いてよ、なのはが闘いたいなら…戦うよ…！」

シグナムとヴィータ、すずかにアリサが心配だ、短期決戦で…!!

「いいネー、今のヴィータちゃんたちはフェイトちゃんに恐怖感を
与える為ニやったんだけど、戦う気までそがれてなくっテよかつた
ヨ」

「!?それだけの為にあんな酷い事を!？」

「まっさカー、それだけじゃないヨ」

「えっ…」

それだけじゃないって…どういう…いいやそれより!

「さあ、バインドを解除して!」

「はい、はい」

そうするとあんなに強固だったバインドがすつと消えた。手足の
自由が戻ってきた、ここから一気に畳みかけてなのはを元に戻して見
せる!

「じゃア、イクヨ…！」

なのはが真正面から来る。レイジングハートはザンバーモードだ。
「でえあああああ!!!」

ザンバーモードのバルディッシュとレイジングハートがぶつかり
合う。魔力で出来た刃から火花が散る。何度も何度もなのはは刃を
打ち付けてくる。その威力は少しでも気を緩めたら遠くまで吹き飛
ばされてしまいそうなくらい強い。でも威力が強いだけでその剣に
繊細さがない。少しづつでもいい、段々と有利に持っていけば…。

「ふふ…私はまだまだいけるケるヨー、ほら、ほら!ホラ!!!」

「ぐっ!ふっ…！」

なんでこの威力が無くならないんだ…？むしろ段々と強くなってる!？」

「だあああ!」

私も勢いをつけて斬りかかってみる。

「いいネエ!」

「なっ!？」

なのはは突然空へ回避し、私の渾身の一撃は空を斬った。

「隙ありイイ!!」

しまった!?! バランスを崩した私の頭上からなのはが思い切り斬りかかって来る。

《sonic move》

「ちっ!」

バルディッシュの機転によりなんとか避けることができた。

今ならなのはもバランスを崩してるはず!。そして素早く後ろに回り込んだ。

すると突然お腹の辺りが熱くなってきた。

「えっ…!」

お腹には、なのはの右手が刺さっていた。

「ああ…あああ…!!」

「アレえ? もう後ろにいたノ? すっゴーい早いねエ」

そう言うなのはの右手はぐりぐりと私のお腹の中を弄ってきた。

「うああああ!! ああああつかはっ…!」

なのはは容赦なく右手を動かす。尋常じゃない痛さがお腹から全身を伝わって私の抵抗力と体力を奪ってくる。

「もういいかなア? ヤッ!!」

「!? ぐっ!!!」

なのはは右手を引き抜き私を思い切り蹴り飛ばした。

「うあああああああ!」

私は離れた家の塀にぶつかながら、上空へ上がっていった。その時の意識はあまりないけど、バルディッシュが必死に話しかけてきたり、空中での体勢を整えてくれていたのをうすらぼんやりと覚えている。

た。

そうして次に私の目に映ったのは自室の天井で、あのなのはとの最初の戦いから4日後の事だった…。

第6話 事後

ある日突然、私フエイト・T・ハラオウンに起こった事件。それは親友の高町なのはの暴走。その暴走はさすがとアリサ、シグナム、ヴィータたちに深い傷を負わせた…。

「うう…あれ…う…ここは…」

私の目の前にあるのはとても見慣れた天井。自分の部屋の天井だ。さつきまで私は黒いなのはと戦っていたはずじゃ…？もしかしてあのまま負けちゃったのかな…。

「フエイトさん！目が覚めたのね…よかったわ」

「あつ、義母さん」

リンディ提督が心配そうな顔をしながら部屋に入ってきた。

「あ、あの…私は一体どうなったんですか？あとなのはは…」

「落ち着いて、フエイトさん。まず状況からみてあなたはあの黒いなのはさんに負けたとみて間違いないわ。幸運だったのは命がある事かしらね…」

「命が…ある事…」

「そう、ずずかさんとアリサさんは4日経った今でも生死をさまよっている状態なのよ…」

「!?そんな…シ、シグナムとヴィータは…どうなったんですか…?」

「実はね、黒いなのはさんが2人とも連れて行ってしまったのよ。はやてさんも抵抗したんだけど軽くあしらわれてしまったの」

「2人を連れて行った？いったい何のために…！はやては大丈夫なんですか！」

「ええ、はやてさんはちよつと背中に軽い打撲をしたくらいだったわ。今は流石に落ち込んでいるけどね…」

「そう…ですか…怪我が軽く済んだのはよかったですか…」

大切な家族の2人をなすすべもなく連れ去られたんだ、ショックに決まっている。

「なのはの行方は？」

「未だ掴めていないわ、エイミイも頑張っているんだけど…」

管理局の包囲網を突破し行方を眩ますなんて…流石って言うべきなのかな、なのはは。

…これからどうしよう。まずなのはと戦うって覚悟を決めないと、やっぱり辛いな…。でも、友達が間違っている事をしているなら身体を張って止めないと。なのはが私にしてくれたように。ちゃんとお話しをしてね。

意外と早く覚悟ができたな…。

「フェイトさん」

「あ、はい。なんですか？」

「はやてさんの所に行って様子を見て来てくれるかしら？やっぱり私より友達のフェイトさんの方がはやてさんもリラックスできると思うのよ」

「はい！わかりました！」

そうして私は部屋を飛び出しはやての家に向かった。

—SIDE NANOHA—

都内某所にて。

「うフふ…ちゃんと目的の戦力も確保できたし、順調♪順調♪」

《…で…ん…事…する…の!?!…も…や…てよ…!》

「モー、うるさいなア…何ナノさ。本当にいつマデも黙らないネえ。静かにしなイト、消すよ?」

《…!…くっ…》

「ふう…やっとしズかーになっタ」

黒いバリアジャケットを着たなのはは自らの中の何かを静かにさせると、自分のいるビルから見える景色を眺めていた。

—SIDE OUT—

フェイトがはやての家に着き30分が過ぎた。

「はやてがインターホンに出てくれない…」

このままじゃ様子が見れないな、どうしよう…。

第7話 今後

どうしよう…。はやてがインターホン出てくれない。シャマルさんもザフィーラも居ないのかな？そんなことないと思うんだけど…。やっぱり皆落ち込んでたりするのかな。

「すみませーん、はやてさんいらっしやいますかー？」

取りあえず、大声で家に向かって話しかけてみるけど…来るかな？

あ、名前も言った方がいいかな。

「フェイトです。誰か居ませんかー？」

どうかな…。まだかな…。

するとはやての家のドアがガチャツと音を立てて、重々しく開いた。

「フェイトちゃんか…？よかった…なのはちゃんやったらどないしよ思ってたわ…」

「はやて…」

「あつ、ごめんな、フェイトちゃんも怖い思いしたんやもんね…」

はやての顔は最後に見た時の笑顔は無くて、憔悴しきった、どう見たって普通の状態ではなかった。やはり家族2人を目の前で痛めつけられ、連れ去られたのは精神的にかなりのダメージだったのだろう…。

「ううん、私は大丈夫だよ…、それよりはやての方が…」

「と、取りあえず中入って？話はそれからや」

「うん、お邪魔します」

や、やっと家は入れた…。シャマルさんとザフィーラは奥にいるのかな。はやては辛いだろうけどこれからの事、話さなきゃだね。

「フェイトちゃんは、もう気持ちの整理できたん…？」

「え、ああ…まあ一応ね」

「そっか…流石やね、私はまだやわ…全然気持ちが落ち着かないんよ…、きつとなのはちゃんも異常事態だったのはわかってはいるんやけど…どうしてもヴィータの怯えた顔と泣き声、シグナムの怒号が頭から離れないんよ…」

やっぱり、はやての精神的ダメージは計り知れないものだ。…無理になのはとの鬨に向けての話をしなくてもいいかもしれないな。

「ところで、フェイトちゃんはなんか用があったんか？」

「まあね、でも無理にはやてとしなくてもいいかなって、はやての気持ちの整理の方が大切だからね」

「ありがとう…でも気にしなくても大丈夫だよ？いつかはちゃんとしないとやしなあ…」

「はやて…一応知ってるかもだけど今なのは行方は分からないんだ、もちろん連れて行かれた2人もね」

「居場所がわからないんか…」

「うん、全く管理局のサーチに掛からないらしくて、でもエイミイがきつと見つけてくれるよ」

「そうやね、でも一体なのはちゃんに何があったんやろ」

「うん、追いかけてたら突然黒い球体に包まれて…」

「そういえばあの球体も何やったんやろあれに包まれた後になのはちゃんがおかしくなったんよね」

「確かに、あれが何かわかればなのはの暴走の理由も必然的にわかるよね」

「まあ、そんな早くわかったら苦労せんけどなあ…」

そう言っではやてはリビングの天井を見上げる。

しばらく沈黙が続く、私もだろうけどはやてはさつきほどではないけど疲れた顔をしている。…あれ？そういえばシャマルさんとザフィーラが居ないな…2階かな、にしては静かだな…。

「はやて、シャマルさんとザフィーラはどこに…？」

「ああ、シャマルとザフィーラは別の任務で居ないんよ、しかもしばらく家を空ける感じの任務で…」

「ええ!?じゃ、じゃあすぐに戻れない感じなのかな？」

「みたいやねえ…」

そう言っているはやての目は怯えと寂しさが入り混じっていた…。

頭から離れない景色と静かな家。これじゃあどうしても中々気持ちの整理がつかないのかもしれないのかもしれない。

何かできることないかな…。

「な、何か私にできることないかな…?」

「えー?別に大丈夫やよー?」

「そ、そっか…」

ち、違う。こういうんじゃない。私が想像してたのと違う!どうにかして少しでもはやての心を前向きにしないと…。

どうしよう…。

そんな風に考えているとバルディッシュが突然警告音を鳴らし、こう言った。

《I FEEL VERY STRONG MAGICAL POWER WITHIN 5Km RADIUS》

(半径5km以内にとても強い魔力を感じます)

第8話 反逆

《I FEEL VERY STRONG MAGICAL POWER WITHIN 5km RADIUS》

(半径5km以内にとても強い魔力を感じます)

「半径5km以内に!？」

「も、もしかしてなのはちゃんやろか…?」

「バルディッシュ、どうなの?」

《IT CLOSELY RESEMBLES THAT OF AKAMACHI NANOHA》

(高町なのは嬢のものと酷似しています)

「くっ…なのはがこつちに来てるって事か…!」

「そうみたいやね、どうする?フェイトちゃん…?」

どうする…、私はもう戦う覚悟はできているけど…はやてはまだできている。

ここで突然今いないシヤマルさんたちが帰ってきてきて同じような展開になったらはやてはもう二度と立ち直れないかもしれない…。よし、ここは…。

「はやて、はやてだけでも逃げるんだ」

「えっ、フェイトちゃんは どうするん…?」

「私は戦うよ、もちろんここから離れたところでね」

「そんな!あかん!あかんよ!フェイトちゃんだけ置いていくななんてできひん!それにフェイトちゃんまでヴィータみたいな目にあつたら…」

「はやて…大丈夫だから、安心して…なのはは私が止めるから!」

《IT IS COMING SO NEAR, PLEASE BE CAREFUL》

(かなり近くまで来ています、ご注意ください)

「フェイトちゃん…」

「本当に大丈夫だから、早く逃げて!」

「ご、ごめんな…本当に…ごめんな…」

そう言うってはやては裏口を飛び出し、走っていった。
私は逃げるまでの時間稼ぎと前回のリベンジをしよう。

…よし!

そうして私は外へ飛び出しバリアジャケットを着て空へ上がった。
はやての家のすぐ上空になのはは居た。

「あれ? フェイトちゃんだけエ? せっかくはやてちゃんに会いに来たのニイ」

「はやてに…? 何のために?」

「もちろん持って帰った2人ノ処遇についてだヨ」

なのはは黒くなってから声にノイズの様な違和感がずっとある。
これって一体…。

「ねエ、はなし聞いてる?」

「え、あ、ごめんちゃんと聞いてなかった」

「エエー!? ひっどーい、傷ついちゃっター」

とてもそう思っていないような棒読みで言ってくる。それでもなのはが傷つくと言ってくると心に来るものがある。

でも、戦うって決めたんだ。止めるって決めたんだ!!

「…シグナムたちの処遇について…だっけ?」

「なんダちゃんト聞いているじゃナイ。ソーだよ、その事をはやてちゃんニいつテ反応を見た力つたのに」

「そんな事しようとしたの…?」

「うん♪」

そのなのはは満面の笑みで返事をしてきた。

「いくらなのはでも、許さないからね…そんな事…!」

「えエー、裁判で無罪になった犯罪者モドキに言われたくないなア」

「っ…:…なのはあ!」

私は今でも何でこんな簡単な挑発に乗ってしまったんだろうと思う。言われた瞬間私はなのはに突撃していた。

「アラ、意外ト チョロイノネ、フェイトチャン」

私が思い切りたたきつけたバルディッシュを難なく受け止めたなのはは完全なノイズに変わった声でそう呟いた。咄嗟に何か危険

だと判断した私は急いで後ろに下がりなのはと距離を取った。

「ドウシタノ？フェ・イ・ト・チャン♪」

なのはの手にあるレイジングハートはバスターモードになっている。

恐らく砲撃をしようとしているのだろう。と考えると私は背後から気配を感じ緊急上昇をする。

《SONIC MOVE》

するとさつきまで私がいたところにレヴァンティンの刃が通り過ぎた。

「レヴァンティンか…あれ…？レヴァンティン!？」

「アハハ！凄イネ、フェイトチャン！ヨク、シグナムノ背後カラノ攻撃ヲ避ケレタネエ！」

「シグ…ナム…？」

私の目の前にはなのは同様バリアジャケット、ベルカの場合は騎士服が黒くなったシグナムが佇んでいた。

「…どうしたテストタロツサ、何を不思議そうな目をしている」

「シグナム…なんで…」

なんでそんな恰好を、と聞こうとした私は恐ろしいことに気づいた。そうここにはヴィータが居ないのだ。

「ヴィ、ヴィータも同じ状況なら…！はやてが危ない!!」

—HAYATE SIDE—

「よう、しばらくぶりだな、はやて」

突如空から私を襲撃してきたのは黒い騎士服に身を包んだヴィータやった…。一体何が、何が起こってるん!？」

「ちよつと、アンタは邪魔だからあたしが排除させてもらうぜ」

ヴィータはとても愉快そうな表情で私にそう告げた…。

—SIDE OUT—

第9話 開戦

—HAYATE SIDE—

「ヴィータ…本当にヴィータなんか？」

「ああ、本物だぜ？まあちつとばかり騎士服変わったけどな」

ヴィータ…何でこんな事に…。

「ま、いいや、早いところ殺り合おうぜ」

「嫌や！ヴィータと…ヴィータとそないなことしたくない！」

「ちつ…うるせえなあ…いいからセットアップしろよ」

「ヴィータ…」

どないしよ…ヴィータと戦うなんて…やっぱ嫌や…！

「うわあああ!!」

「!?な、なんだ？」

取りあえず叫んで走る。それだけやけど成功したみたいやな。

とにかく…とにかく遠くへ！逃げな、フェイトちゃんの邪魔にならんようにとにかく遠くへ…。

「そんなに必死にどこへ行くんだ？」

「!?ヴィータ…」

くっ…早い…。

「全く手こずらせやがって…おら、さっさと戦おうぜ」

「…嫌や…」

「あ？」

「嫌や！何度でも言うで！嫌や!!家族と戦うなんてできひん！」

「じゃあ何も抵抗せずに殺されるよ」

「!?」

ヴィータのその一言には恐ろしい程の殺意が込められていた。このままやと本当に殺されてまう…。でも…。

「アイゼン!!」

《EINVERSTANDEN》

(了解)

！来るか!!

「であああ!!!」
「くっ!」

紙一重で避けることができた。次はどうする?とにかく逃げる!
「なっ、また逃げやがるのか!」

「ごめんな…ヴィータ…。私はとことん逃げさせてもらおうわ…!」

—SIDE OUT—

「やああああ!!」

「バルディッシュユ!」

《SONIC MOVE》

「むっ…やるなテストタロツサ」

「シグナム、やめて下さい!こんな事…今戦わなきゃいけないのは…」

「シー?ナンデ、私ヲ見ルノカナ?」

「…なのは…」

「確かに、今の貴様にとっての戦う相手は高町なのはかもしれん…だが、今の私にとって戦うべき相手はテストタロツサ…お前だ!!」

シグナムは斬りかかりながらそう答えた。

「ぐッ…!!シグナム…今のあなたは…!!」

「おかしくなっているのだろうか?」

「なっ…!?!自らわかつているんですか!?!」

「そうとも、ヴィータもまた同じ…だがな、今の状態にさほど違和感はなく、むしろすがすがしいくらいだ」

「そんな…シグナム…なんで…」

「フェイトチャンモ、私ノ“影”ニ刺サレレバ分カルヨ♪」

「ああ、どうだ?テストタロツサ?」

「そんなの嫌に決まってるじゃないですか…私は決めたんです、なのはを止めるって、元に戻すって!シグナム、あなたもヴィータも元に戻すと決めました…絶対に!!」

「ふん…まず私に勝つてからいうがいい…!」

「ソウダヨ?フェイトチャン、コノ状況デ有利ニ立テルト思ツテルノ?今ハ二対一。圧倒的ニコチラガ有利!」

「不利であろうと、勝つのは私だ!」

「言うじやないか、テストロッサ：レヴァンティン!!」

《EXPLOSION!》

「紫電…」

「バルディッシュユ！ハーケン…」

《LOAD CARTRIDGE》

「一閃!!」

「セイバー!!」

ちょうど中心点で爆発が起こる。かなりの煙だ…

《DIVINE BUSTER》

えっ…!?

視界がピンク色に染まる。

しまった…なのはシグナムの援護射撃をする可能性を忘れていた…。こんな凡ミスするなんて…。

「ぐあああ!!!」

悲鳴を上げたのは、シグナムだった。

「何!?何デー・フェイトチャンハ…!?!」

「こつちだよ！であああ!!!」

「高町!!上だ!」

「ソコカ!」

「ザンバー!!!」

なのはとシグナムが回避行動をとろうとしているが大丈夫だ。こちらが先に攻撃できる!

「チイ!!避ケラレナイ!!」

「レヴァン…」

そうして…とても大きな爆発が海鳴市上空を覆った。

第10話 葛藤

「グウウ…煙ガ…何トカ直撃ハ避ケラレタミタイ…」

「そこだっ!!」

「シマツタ!?後ロカ!」

《HAKEN SABER》

「レイジングハート!」

《PROTECTION POWERED》

2つの技がぶつかり火花が散る。シグナムの奇襲にも注意して戦わないと…。

「別ノ事考エナガラ戦ウナンテ、余裕ダネ!フエイト…チャン!!」

《BARRIER BURST》

「くっ…!」

《SONIC MOVE》

「甘いぞ!テスタロツサ!!」

「シグナムが左方向から…!なのはは…右方向!」

「ディバイーン…バスター!!!」

「紫電一閃!!」

同時に魔法が放たれる。どうやって防ぐ…?ソニックムーブで避けられるか…。

紫電一閃とディバイーンバスターがぶつかる。

「チツ、マタ避ケラレタカ!」

「逃げるのが上手い奴め…」

「…?ドコカラモ攻撃ガ来ナイ?何故…」

「本当に逃げたのか?」

「探シテミルカ、レイジングハート!」

《OKAY MY LORD》

《WIDE AREA SEARCH》

なのははレイジングハートで周辺の魔力サーチを行い始めた。

「どうだ、見つかったか?」

「イヤ、マダ見ツカラナイ…本当ニ逃ゲタノカナ…?」

「プラズマ・ザンバー…」

《BREAKER》

金色の収束砲がシグナムとなのはの真下から放たれる。その砲撃は真つすぐ2人を包み込む。

「真下だ?!?」

「ナンデサーチニ、カカラナカッタノ!？」

また海鳴市上空に爆発が起きる。それは先ほどの爆発よりもはるかに大きい爆発であった。

—HAYATE SIDE—

「はあ…はあ…」

遠くの方から爆発音が聞こえる。フェイトちゃんやろか?きつとなのはちゃんと戦っているんやろな。…恐らくシグナムとも…。

私は逃げてばかりや…。ヴィータが追ってきたのはつきりとわかるけど、戦いたくない…。だから逃げてる。これって間違ってるんやろか?だって誰だって家族や大切な人と戦いたくないやろ?なんでフェイトちゃんは戦うって覚悟ができたんやろ?…なのはちゃんと戦うんは辛くないんかな…。

ヴィータと戦いたくない…。でも…あのままは嫌や…またいつもの優しいヴィータに戻って欲しい…。元に戻すにはきつと戦わなくちやいけない…。でも戦いたくない…。

「はあ…はあ…ヴィータと…戦う…?そないな事…」

出来るんか?私に…?なんかジレンマになっていつてる気がするわ…。

「ようやく止まりやがったな、はやて」

「!ヴィータ…」

…元に戻す、それって私がすべき事なんやろか…。私がしなくてもきつといつか誰かがやる事…でもそんな人任せでいいんやろか…?

「グラーファイゼン!!」

《EXPLOSION》

「ラケーテン…ハンマー!!!」

「ブリューナク!」

アイゼンにブリューナクがヒットする。

「ぐつ、ちくしょう…戦いたくないんじゃないのかよ、わけわかんねえ」

「はあ、はあ…戦いたくない、でも誰かに任せて自分は何もしないで見てるだけ…そんなのはもつと嫌や！だから決めた！今決めた！
ヴィータもシグナムも私が元に戻す！フェイトちゃんと一緒になのはちゃんも元に戻すって、今決めた！」

「い、今決めたって…」

「せや、今決めたんや！」

「さっきまであんなに嫌がってたくせに…」

「ええんや、私は未来に進むと決めたんや、数分前だって過去や！」

「なんじゃそりや」

「細かい事はええんや」

「いやいやいや…」

「さ、戦うんやろ？やったるで！」

「急に好戦的だな、おい…」

ヴィータはさっきまでの悪意に満ちた顔ではなくなるとなく呆れた感じの顔をしていた。

早速騎士服に着替えて、シユベルトクロイツを構える。

「ま、いいや…手加減なしだかな！」

よーし、ヴィータを元に戻すんや！

第11話 中断

—KANRIKYOKU SIDE—

「エイミイ！どうなってる！なんでなのはとシグナム、ヴィータが海鳴に入ってきたのがわからなかったんだ！」

「そんなこと言ったって、索敵に引つかからなかったんだもん！」

「で、フェイトたちの現状はどうなってるんだ！」

「全く人使い荒いんだから…えつとね…今はなんか向かい合って話してるみたいだよ？」

「話してる？何を」

「それが、周りに変な結界張られてるみたいで音声が入ってこないの」「結界？…はやての方は？」

「はやてちゃんの方も結界が貼られてるね…場所は海鳴市臨海公園だね」

「ん？フェイトとの場所と近いな、接触の可能性は？」

「いやー…近いけど結界の影響からなさそうだね」

管理局側は突然の事態に未だ対応し切れていないという状況だった。未だなのはがどこに逃げているのかもわからないという事でも焦っているという。

管理局の索敵システムになのはが引つかからない理由は、なのはが索敵システムの穴をばれない程度に作りそこを使っているというものである。見つきりそうなものだが中々見つからないという。不思議である。

「その結界は外からは入れないのか？」

「うん…どうやら中からは出れるみたいだけど…」

「ん？そうなのか？」

「さつきフェイトちゃんが結界外の海の中から収束砲を撃つてたからね」

「なるほど…」

そしてこの沈黙の後クロノは出撃した。…20分後ではあるが。

—SIDE OUT—

収束砲を当てることには成功した。しかしなのはの咄嗟のプロテクションによってダメージは半減してしまった。

「アブネー…危ウク墜落スル所ダツタヨ。酷イナア、フエイトチャン」
「くっ…！いくらなんでも硬すぎる…」

「助かった、すまない高町」

「イエイエー」

ここ気づかないうちに結界張られてたんだな。中から外に出れるって何のための結界なんだろう…。外からは入れないのかな…今さつき私がいるところまで入るようにするためなのか結界張りなおしてたし。

「結界バレタミタイダネ」

「そのようだな…」

「いつから張ってたの…?」

「ソナノ最初カラニ決マツテルデシヨウ、管理局ニ邪魔サレタクナカッタシネ」

「まあ…そうか…で？次は何するの？さつきから同じことの繰り返しだけど？」

「不満か？テストロッサ」

「そつちが殺すって言うてくる割にはあんまりにも軽い事しかしてこないからさ…」

挑発っぽい事してみたけど…どうかな？ちゃんと挑発になつてるのかな？

「ダツテ、サツサト殺シタラ…ツマラナイデシヨ？」

「ま、そんなところだと思つたよ…」

「何を呆れている」

「自分カラ聞イトイテ、酷ーイ」

「殺そうとしてくるあなたに言われたくないな」

「マアネ」

しばらく睨み合いの様な時間が続いている。しかしなのははなにも仕掛けてこない…。前やっていたレイジングハートのザンバーモードはしてこない。

にしてもちよつと魔力を消費しすぎたな…。ここからしかけられ
たらだいぶきついかも…。

「チツト…管理局が感ズイタナ…シグナム」

「…ああ、この魔力はクロノ執務官だな」

「クロノ君カ、ソレハ面倒ダネ、一度ココハ退散カナ？」

「何!?逃げる気なの！」

「マー、フェイトチャンモ魔力ヤバクナツテキタデシヨ？」

「ぐっ…」

「凶星ツポイネー」

「高町、私はまだいけるが」

「イヤ、次ニシタイ事ガアルカラ今回ハシグナムモ退散ネ」

「…承知した、ヴィータには私から念話しよう」

「ヨロシクー」

「どんどん話が進んでいくな…」

「ジャアネ♪フェイトチャン、次ハ真正銘ノ一騎打ち、シテアゲル」

「さらばだ、テストロッサ」

そういうと2人は天高く飛び去って行った…。

これは勝ったとは言えないな…次は一騎打ち…そこで決着をつけ
るんだ！絶対に!!

第12話 休戦

— HAYATE SIDE —

「…ん、なるほどな…はあ…」

突然ヴィータが独り言をはじめた。どうやら念話をしているみたいやな。

「どうしたんや…?」

「どうやら、時間切れみたいだ、次だ、次、殺してやる!」

「なっ! 待て! 逃げるんか!」

「けっ、何とでも言え」

そう言ってヴィータは空へ飛んで行き消えていった…。

むう、決意遅すぎたんかな、あんまり戦えんかったわ。

どーしよかな…フェイトちゃん近くにおるかな?

(フェイトちゃん、どこにいるん?)

(えっ、はやて? どうしたの急に)

(いやーヴィータと戦ってたんやけど…逃げられてもうて)

(えっ、えっ、ヴィータと戦った? と、とりあえず海鳴市臨海公園に来て)

(お、ちようどええわ今そこにおるわ、じゃあ海の見えるところで待ち合わせな)

(う、うん)

ふう、念話って便利やわー。さ、海の方行こうつと。

— SIDE OUT —

…はやて…戦ってたんだ、ヴィータはやっぱりはやての方に行ってたんだ。大丈夫かな怪我、してないかな?

「ここら辺でいいかな…?」

うーん 一体はやてに何があつたんだろう…? とりあえず気持ちの整理ができたならよかったけど。

「おーい、フェイトちゃん」

「あつ、はやて」

道沿いにはやてが走ってきた。どうやら怪我はなさそうだ…。

「ふう…で、そっちはどうやった?」

「どうって…ああ、なのはの事?」

「そやー」

「だめだった…まあだいぶびっくりさせる戦術をとれたと思うけど、あとシグナムが乱入してきたからちよつと焦ったけどね」

「やっぱり、シグナムはフェイトちゃんの方にいつてたんやね」

「うん」

「でも、流石フェイトちゃんやわ、二対一で怪我が無いあたり」

「あはは、今の2人は本気で殺しにきてるから当たったら結構大変なんだよ…」

「そやねー…今は一応お疲れ様やー」

「うん、お互いに…」

すると、空の向こうからクロノが飛んできた。

「フェイトー、はやてー、2人とも大丈夫かー?」

「うん! 私もはやても、怪我無いよー」

「なんとか、無事にいられたわー」

「そうか、それはよかった。それにしてもすまなかった、管理局の対応がいつも後手で…」

「い、いいってクロノ、なのは何か特殊なルートを使ってるっぽいし…管理局が中々掴めないのもしょうがないって…」

「そやー、とりあえず今回はどうにかなったしなー」

「ありがとう…でもその特殊なルートがわからないという事はこちらの力不足だ…すまない」

「クロノ…」

「クロノくん…」

そうしてその日ははやても、私の家に泊まる事となった。

これで作戦会議できるし、はやても寂しくないだろうし、こういう事を一石二鳥って言うのかな?

—NANOHA SIDE—

とあるビルの屋上になのはたちはいた。

「全ク…決心シタフェイトちゃんハ本当ニ面倒ダナア、戦イ方ガワカ

リニクイ」

「なのはは空を見上げながらそう言った。

「確かにな…：テストタロツサはその胸に秘めた決意が強ければ強い程その力は高まり、太刀筋は鋭くなる」

「はー、すげーなフエイト」

するとなのははシグナムたちの方を向きこう言った。

「マア、一騎打ちデモ私ガ負けル要素ハナイケドネ…：フフフ…」

「わざとらしい笑い方だ…：今回は押されているようだったが？戦い方がよめない以外の理由でもあったのか？」

「ソウダヨ、ウルサイ中身ガイテネ…」

そう言って、なのははまた自らがいるビルの屋上で空を見上げ始めた。

「本当になのはは空見るの好きだよなあ」

「ヴェータはそう、小さな声で呟いた…。

—SIDE OUT—

次の日の夕方、エイミイはなのはたちの居場所を突き止めた。

そうして最終決戦の日は着々と近づいてきた…。

第13話 覚悟

「なのはちゃんたちの居場所は…別の世界の東京のビル…だね」
「別の世界の東京?」

フェイトの自宅にて、エイミーがタブレット端末を持ちながらフェイトと会話をしている。フェイトの隣にははやてもいる。

「エイミー、別の世界って、この世界にも東京ってあるよね」

「そやね…別の世界…」

「ああ、それはね、んー…端的に言うとならぬ世界って感じかなー?」

「パラレルワールド…」

「そういうものって本当にあるんやね、物語だけの話かと思ってたわ」
「あはは、でもはやてからすれば魔法もそうだったんじゃない?」

「言われてみればそうやなあ」

「2人とも凄く和んでるね…結構な戦いなのに」

「まあ、こうなってしまったもんはしょうがないしなあ…」

「うん、戦う覚悟はもうできてるしね」

「流石だね、これならいつ出発でも大丈夫だね」

「うん!」

その後エイミーはなのはの動向を探りにコンピュータールームへ入っていった。

— NANNOHA SIDE —

同時刻、別世界の東京の東京タワー近くのビルの屋上にてシグナム、ヴィータが話していた。

「どうやらここが管理局側に見つかったようだ」

「え、マジか…どーすんだろなのは」

すると遠くの空からなのはが屋上をめがけて飛んできた。

「ヤッホー、ン?ドウシタノ?」

「高町、どうやらここが管理局に見つかったようだぞ」

「アーソウナノ?マア、モウ大丈夫だよ…拠点ハ要ラナクナツタシネ」

「あ、そーなのか、元の世界に行くのか?」

「ソウダヨ、ヴィータちゃん」

「そうか…で？いつ海鳴市のある世界に行くのだ？」

「イツデモイイケド…3日後ニシヨウカ」

「ふーん、いいけど意外と先だな明日とかかと思った」

「ソウ？」

「なら3日の間はどこを拠点とするのだ？」

「各次元世界ヲ転々トシテレバイインジヤナイ？」

「そーするか…んじゃ、早速移動しようぜ」

「しかしいつものルートはバレたのだろう？」

「ダカラ、別ノルートヲ使ウンダヨ」

「…用意周到だな…」

「エツヘン！」

そしてなのはたちは今までの拠点を捨て、別世界へと旅立っていった。

「にしても、いつになくなのはのヤローテンション高かったな…」

と、ヴィータは小さな声で呟いた。

—SIDE OUT—

フェイトはなのはの家も中から出てきた。それはなのはの家族にしばらくなのはが帰れない事をなんとなくであるが伝えていた為である。

「大変だった…なのはが騒動を起こしてると言わずに伝えるのすごく疲れた…」

そう呟きながら歩いていった。

すると前から知っている人影が歩いてきた。

「あつ、クロノ！おーい！」

「ん？ああ、フェイトか」

「何してるの？」

「エイミィに差し入れを買って来たんだ」

「そっか、なのはは今もパラレルワールドのビルに居るの？」

と、フェイトが聞くとクロノは少し俯きながら

「いいや、突然別の世界に転移してしまったんだ」

「えっ、じゃあ今の居場所は…?」

「すまない、またわからなくなった…でもすぐにエイミイたちがすぐに見つけてくれるさ」

「そうだね、じゃあ帰ろうか」

「ああ」

そうして、フェイトとクロノは共に帰路についた。

第14話 前夜

夕方、フェイトとはやてが学校から帰ってくるとエイミーがドタドタと足音をたてながら走ってきた。

「ど、どうしたの？エイミー？」

「随分慌てとるなあ」

エイミーは息を切らしながらタブレット端末を2人に見せた。

「な、なのはちやんの…今の居場所わかったよ…はあ…はあ…」

「おお、エイミーさんお疲れさまやー」

「うん、お疲れ様エイミー、そしてありがとう」

「あはは、でもまた転移する可能性があるんだけどね…」

「え？また転移する可能性があるの？」

「そう、実はなのはちやんたちこの2日間別の次元世界を転移し続けてみたいなの」

「ちゅー事は、一日ごとに拠点を変えてたつてことなんか？」

「うん、前の拠点を管理局側が見つけたのを向こうにバレたつぽくて、それから各次元世界を転々とね」

「なるほどなあ…」

「今いる次元世界ってここに近いの？」

「どうしたんや？フェイトちゃん」

「ちよつと気になって…」

「えつとねー、ああ近いね今までの拠点の中でも一番近いよ」

「そつか、もしかしたらなのはたちはそう遠くない時期にこの世界に来るかもね」

「確かに、拠点が段々こちらに近くなってきたのはそのためなのかもね」

「今のうちに準備しないとなあ」

「ようし、クロノ君にも伝えておかなきゃ、今のフェイトちゃんの予想もね」

「ありがとう、エイミー」

そして、3人はやっと玄関から移動するのだった。

—NANOHA SIDE—

「ココハ快適ダネー」

なのはは暖かい風を全身に受けながら呟いた。

「ああ、そうだな…」

「いよいよ明日か？第97管理外世界に行くのは」

「ソウダヨ、楽シミ？」

「楽しみつつーか、いよいよなのはが言う最終決戦ってのが始まるんだなって思ってたよ」

「最終決戦ツテ、響キ格好イイデシヨウ？」

「それだけの理由かよ…」

「いいだろヴィータ、我々が口を挟む事ではない」

「わーつたよ…つたくシグナムは忠誠心が強いのかな」

「そういう風になったのだから当然だろう…？」

「おかしくなっているのにわかっているのに、主人はなのはだって頭や体が言ってくる…そしてはやてには心の底からの殺意しか感じられないしそれに違和感も何も感じない、不思議だな」

「記憶が改ざんされたわけではないのだがな、あの暖かい記憶が全て憎悪の対象にしかなくなっている」

「ああ…」

と、今の自分たちの状況について話していると、風を受けていたなのはがシグナムたちの方を向いた。

「面白いデシヨウ？中々体験デキナイヨ、ソナナ感覚」

「普通なら感じたくないけどな」

「オオ、息ピツタリ」

—SIDE OUT—

フェイトの部屋で、フェイトとはやては次の戦いに向けての話し合いをしていた。

「なあ、フェイトちゃん」

「なに、はやて？」

「前の戦いの時になのはちゃん次は一騎打ちでって言うたんよな」

「ああ、うんそうだよ」

第15話 開戦

早朝、海鳴市のフェイト宅に緊急アラートが鳴り響く。

「どうやら、なのはたちがこの世界に来たらしい。今は臨海公園の海上にいますらしい」

そしてフェイトとはやてはキツと目つきが鋭くなった。

「ついに、来たんだね…」

「そうやね…さあ、いこか!」

「うん!」

そうして2人はバリアジャケットに着替え、家を飛び出した。

—NANOHA SIDE—

海鳴市臨海公園海上になのはたちはいた。

「じゃ、作戦通りニネ…ウフフ」

「ああ、了解した」

「わかったよ」

シグナムとヴェータはなのはから離れ、別の場所へ飛んで行った。

「チャント一騎打ちニシタヨ、フェイトチャン」

そういったなのはの顔は禍々しい笑顔を浮かべていた。

—SIDE OUT—

「フェイトちゃんは真つすぐなのはちゃんのところに行つてな」

「わかった、ありがとうはやて。」

「お互いに頑張ろうな!」

「うん!」

そう言つてフェイトちゃんは公園の方へ飛び去つて行った。

ようし!私もシグナムとヴェータの所に行かなきゃやね。

「さつ、2人はどこかな…」

「ここだ」

「ここにいるぜ」

真後ろやん…。

「ひゃー、びつくりしたわあ…」

「ふん…我々の気配に気づかんとは…」

「ごめんなー」

「さ、やろうぜ？戦うつもりなんだろ」

「せや、覚悟はできたし、2人を元に戻すって決めたんや！」

「そうか…なら行くぞ！紫電一閃!!」

「おお!?プロテクション！」

白銀の盾が紫電一閃を防ぐ。

危なかった…危うく一発KOになるところやった。

「ラケーテン！ハンマー!!」

「ぐう…!」

急上昇をする。しかしラケーテンハンマーは追いかけてくるから安心できない。

「ブリューナク!!」

「ちっ！アイゼン！」

《PANZER HIN DASNE》

ヴィータの周りに深紅の防御壁が現れ、ブリューナクが防がれてしまふ。

「流星やな…!」

「飛竜…一閃!」

「しまった!?うわああ!!」

このままやと墜落してしまう…!どうにかして体制を立て直さな…。

「シュワルゲフリーゲン!!」

「!追撃か…!!」

地面ギリギリで、浮上しもう一度空高く飛び上がる。

こんくらい飛ばばええやろ…。

「デアボリックエミツション!!」

「何!?!」

「ここか!シグナム!」

「わかっている!」

黒い魔力が私を中心に広がり、シグナムとヴィータを包んでいく。その時にヴィータのシュワルゲフリーゲンも包み攻撃を防いだ。

「どうや…ある程度のダメージくらいは与えられたかな…？」

「くっ…流石夜天の書最後の主だな…この局面でこの魔法を使うとはな…」

「もう少し防ぐのが遅れてたらやばかったな…」

「意外とダメージ与えられてたみたいやな…ん？」

「何やあれ？騎士服の腹部が破れてシグナムとヴィータのお腹の辺りが見えるようになったけど…地肌に変なマーク？紋章？の様なものが書いてある…。あんなの見た事ないんやけどいつの間に…。」

「あ！そういえばなのはちゃんか”影”を刺したのっってお腹の部分じゃなかったやろか？もしかするとあそこをどうにかすれば元に戻るんじゃないやろか！」

それを目的にして戦ってみよ！

「じゃ、どんどんいくでえ！」

ちよつと正確さは欠くけどこれいってみよか！

「フリースヴェルグ！」

「なあ!？」

「レヴァンティン！」

《PANZER GEIST》

ヴィータにはクリティカルヒットしたやろか？

「第2波いくでー！」

「第2波だと!？」

「なんつーバカ魔力…！」

そしてその後もう一度撃ち、合計3回のフリースヴェルグを放つた。

動きを止めたいんや…どうや…！

…ヴィータは木に落ちとる…シグナムは…？

あれ？シグナムはどこや!？」

「空牙ツ!!」

「後ろか!!」

油断した…!!

レヴァンティンが私のプロテクションの端に当たった時に爆発が

起きてしまった。

くっ、誤算や…。このままやと真っ逆さまに落ちてまう…！

第16話 奪還

ぐっ……このままやと……地面に……。そうや！一か八か！

「…ブリュー…ナク…！」

その発されたブリューナクはシグナムではなく、木に落ちている
ヴィータ目がけて飛んで行った。お願いや…！

「なに…！こちらではないだと…！」

そして、そのままヴィータの腹部に直撃した。

ヴィータはその時に「ぐえ！」とうめき声をあげた。ちよつと痛
かったのかな？

そしてヴィータは目を覚ました。

「どうや…お願いや…。」

「これはダメみたいやな…」

もう、地面にぶつかると…その瞬間、私の体は誰かに抱えられてい
た。

「大丈夫か！はやて!」

「ヴィータ…もしかしなくても、元に戻ったんやな…！」

「元に戻る?…どういうことだ?」

「あれま、もしかしてその時の記憶はなくなってまうんか? まあええ
わ、それより今の敵はシグナムやで! 気を引き締めや!」

「えっ、シグナム!? なんでお前が…!」

「ちっ…どうやら『影』の力を無力化されたみたいだな」

「『影』? 何言ってるのか全然わかんねえ…でも、どんな奴でもはや
てを傷つける奴はぶっ倒すって決めたんだ! シグナムだろーと容赦
しねえ!!」

「こちらが二対一にされるとはな…まあこのような状況でも、このシ
グナム引きはせん!」

そう言っつてシグナムはレヴァンティンをシユランゲバイゼンを放
とうとしている。

「アイゼン!!」

《EXPLOSION!!》

「テートリヒ・シユラーク!!!」

ヴィータとシグナムの技がぶつかる。凄い余波や…。

あ、私も参戦せんと!

「クラウ・ソラス!!」

当たれ!!

「でやあ!」

シグナムは急上昇をして、私のクラウ・ソラスを回避した。

「ちっ!避けられたか…!」

「じゃあ、もう一回や!クラウ・ソラス!!」

「ぬるい!」

シグナムがレヴァンティンを一振りするとクラウ・ソラスを吹き飛ばされてしまう。

そんなバカな…!なんでや!クラウ・ソラスはかなり威力の高い魔法の筈なのに…。

「クラウ・ソラスって結構な魔法なはずなのにどうやって…!」

「パンツァーガイストを発動していたのだ、防御魔法を使ったことぐらい予想してみせろ…初歩的な事だろう」

「う、うるせー!」

「なはは…いわれてみればそうやな…ブリューナク」

「何!?ぐあっ…!」

だまし討ちみたいになってしまったけど…ええよね。

「はやて…それは流石に…」

「ええ!?だ、ダメなん?」

「騎士の戦いでだまし討ちは…」

「あっ…」

そういえばこれって騎士同士の勝負やった…。

でも二対一で戦いを挑んでおいて何をいまさらって気がしないでもないんやけど。

「どうや…シグナムは…?」

シグナムの姿が煙が晴れて来て見えるようになってきた。どうやら倒れているみたいや。

ヴィータみたいに成功してたええんやけど…。

「うう…」

「！目え覚ましたみたいだぜ！」

「どうなった…！」

「ここは…ん…主はやてなぜそのような格好を…？私もなぜ騎士服を…？この状況は一体…？」

「や、やったー!!! シグナムも元に戻ったわー!! やったー！成功やー！」

「おお、すげー…」

「ど、どうなっている？ヴィータ？」

「あたしもよくわかんね…？」

何とか…私の目的である2人を元に戻すはできたなあ…フェイトちゃん…今頃戦ってるやろか？頑張りや…フェイトちゃん…！

そして気づいたら私はその場に倒れていた…みたいや。

第17話 決戦

そろそろ…なのはのいる地点だ。この戦いでなのはを…元に戻すぞ！

「ここだ…」

なのはの姿が見えない。恐らく隠れているんだろうけど…橋の下になのはの魔力を感じる。

多分あちらも私が来てる事がわかってるだろうし、私が気づいてるのもわかってるんだろうけど…何で隠れてるんだろう…？

「なのは！出ておいで！わかってるよ！橋の下にしていること！」

そして、なのはは案外すつと橋の下から出てきた。

「アレ？バレットタ？」

「えっ…ばれないと思ってたの…？」

「ウン」

「ええ…」

どういふことだろう…？魔力を感じるしバレるよね普通…？

もしかして今のなのはは魔力を感じ取れないのかな？

「マ、ドウデモイイヤ…サ戦オウカ？一騎打ちだよ、真正正銘ノネ」

「わかった、どちらかが倒れるまで、やり合おう」

「フッフ、イイネエ…殺ル気満々ツテ感ジ？」

初めての戦いの時もそんなこと言ってたな…何でそんなにその言葉好きなんだろ。

「ジャ、ヤロウカ…！」

「うん…！」

…ここではあの言葉は使わないんだなあ…。

よし…！早速！

《Photon Lancer》

「フォトンランサー！ファイア!!」

「来タネエ！アクセルシューター」

《Acceler Shooter》

「シュート!!」

フォトンランサーとアクセルシューターがぶつかり合う。が、一つだけフォトンランサーが多くなのはにヒットした。

「グッ！何ト…コレハコレハ…痛クハナイケド面倒ナ事ヲ…」

「貴女はさんざん煽ってくるくせに」

「ウルサイナア…レイジングハート!!!」

《ZAMBER MODE》

レイジングハートがザンバーモードになる。

「サ、次ノラウンドダヨ」

「第一ラウンド短かったね」

「別ニイイデシヨウ！」

「はいはい、バルデイツシュ！ザンバーモード！」

《Yes, Sir》

バルデイツシュがザンバーモードに変形する。

さあ、どう来る…？また打ち合いになったらこちらが不利だし…。

こつちから仕掛ける！

「でああ!!」

素早くなのはの後ろに回り込みザンバーで斬りこむ。

「ソツチネー！」

なのはは振り向きザンバー同士で鏝迫り合いとなる。

「ぐううう…!!」

「苦シソウダネエー！ハアアアア!!」

なのはが一気に力を入れてくる。くっ！かなりキツイ…！

「…でも負けるわけには…！いかないんだあああ！」

「ナツ…!？」

思い切り目をつむって手を押し出していたので最初何が起きたかわからなかったけど…どうやら私が押し勝ったようだ。なのはは目の前にしりもちをついている。

「ド、ドウナツテイル…ナゼ押し負ケル？コノ我が…人間ナンゾニ…!!」

「！我…!?!?どういうこと…?」

「チツ…！モウ隠ス必要ハナイカ…」

「隠す？」

「我ハ厳密ニハ高町ナノハデハナイ、高町ナノハハ我ガ吸収シ、ソノ形ヲコピーシタノダ」

「なのはを…吸収…？じゃ、じゃあなのはは今…」

「モウ、居ナイ」

「…っ!? な、なのはが…なのは…ああ…なのはあああああ!!!」

「ブン…動揺シタナ！」

ただただ怒りや悲しみとか色々な気持ちが混ざったどうしようもない感情で突っ込んでしまつて、なのはの形をした敵に軽々とザンバ―で薙ぎ払われてしまった。

「うわああ…いぐあっ！」

そのまま橋に直撃してしまい、口から血が吐き出された。

「オ前ハスグニ激情スルナア…」

なのはの形をした敵は私を嘲笑うかのように、恍惚の表情で飛んでくる。

「くっ…！貴様ああ…!!」

「悔シソウダナ、お前ガ弱いせいで、高町ナノハは帰ツてこナイノダ！」

「くそ…！なんで…！」

…何か頭がスーツとしてきた…。…そういえば今敵の声のノイズが薄れているところがあつた様な…。…試しに……………。

「お前は一体何者なんだ…？」

なんとかバランスを保ちながら立つ。

「我か？我ハ〃影〃ダ。ソレも〃隷属ノ影〃ダ」

「〃隷属の影〃…あつ！隷属だからシグナムとヴィータが…！」

「そういう事ダ」

やつぱり、ノイズが無くなつているところがある。

“隷属の影”…なんで私にそれを使わないのかもわからないし、ノイズが何でなくなつてきているのか…。

とにかく何かきつと敵に何かが起こっているのだろう…！
体勢を取り直していくぞ…!!

第18話 活路

橋の大きな欠片のところに立つ。

ああ：頭がくらくらする。まだ橋にぶつかった衝撃が続いている。早くこれから抜けないとあの“隷属の影”にまたやられる…。

「オヤオヤ、フェイトちゃん：そんなにフラフラ私二勝てルと思ッているノカイ？」

“隷属の影”が話しかけてくる。なのはそつくりの魔力を覆わせながら。注意深く感じて見ないと別物とは思えないな…。にしてもなんでこの“隷属の影”は私やはやてをその支配下に置こうとしなかったのだろうか？そうした方がこうやって戦うより相手にとっては処理しやすかつたろうに…。

「はあ：はあ：げほっ！っはあ：なんで私やはやてをその“影”で支配しなかつたの…？」

「突然何カと思エバ：そんなものは：面白ソウだト思つタからダヨ！」

答えながら“隷属の影は”レイジングハート・ザンバーで突進してきた。

「そんな、くだらない理由でっ…！」

「くだらないイイ？私ガ面白イと思エるノナラソレでいい!!」

“隷属の影”は思い切り振り切り私を空中へと押し上げた。

悠長に実況している場合じゃないな…。空中だと空を飛ばなきや逃げ道がないや。

でも今そんなに魔力を使いたくないんだよな…。どうしようか…。

まだ頭くらくらする…。こんな時に…!

「デイバイーン…」

デイバ：イン：!?デイバインバスター撃ってくるつもりなのか！ならなおさら空を飛ぶ魔法を使わなきや!!

「バスター!!」

「ソニック・ムーヴ！」

デイバインバスターを紙一重で躲すことができた。

危ない危ないギリギリセーフ…。

ていうかさつきから一人称が私になっているな、“隷属の影”。我
とも言っていたし…これってなんか裏というか、“隷属の影”の状態
になんか関係あるのかな…？

「はあ…はあ…息が整わないな…はあ…もう…はあ…はあ…」

「お疲れカイ？」

「はあ…はあ…誰の所為だと…」

くっ…ここからどうする…”影”は未だに余裕そうだ。一度取り
乱していた気もするけれど。

「さアさあ、オ次ハドウすル？」

次…本当にどうしよう…。どうやって…”影”を…倒そうか…。

でもただ倒すだけじゃダメなんだ。なのはを…なのはをどうする
かも考えないと。

「ソツチガ何にもしないなら…こっチカから行くヨ!!」

くっ…!!

バルディツシユのハーケンとレイジングハート・ザンバーがぶつか
り合う。

「ぐぐ…っ！」

「きつソウダネエ…フフフ…」

「…そつちは余裕だねっ…！」

「そりやア君ガ全力でやらナイからダよ」

「なっ…！何を…っ！」

突然”影”は私のお腹を蹴り、今度は地面に叩きつけられた。

背中に激しい痛みが走る。

「ぐあああ!!」

「早く全力でやらナイと死んじやうヨ？」

「全力で…やってる…！」

「イヤイヤ、今君ハ全力デハナイ…まあ君が全力でやらナクても私は
全力でヤルダケダ」

全力じゃない…？…なんで…私は全力のはず…。

「デアあああ!!」

「プロテクション！」

レイジングハート・ザンバーの刃をプロテクションが防ぐ。

「うう……！」

「押しレ気味だネエ……でも防ぎきれるカナ？」

するとプロテクションをザンバーが貫き始めた。

「何!？」

「ほらほら、カ入れナイト……!死んじやウよお!!」

「くう……!はあああああ!!」

お腹に力を入れて前に踏み出す。

ザンバーがプロテクションの圧に押されたのか魔法で出来た刃の部分が折れた。

「コレが全力?まだマだ出るでしヨウ?」

「あなたが私の何を知っているというの!!」

「ワカルサ、私……いや我ハ高町なのはノ記憶を持つているカラナ」

「なのはの記憶を……!そうか……なのはを取り込んでいるから」

「そういう事デはナイ、我が高町なのはの中に潜ミその魔力量ト記憶、身体能力ヲ我自身にインストールシタのだ……」

「潜んでいた……?」

「ソウだ、君たちで言うところの闇の書事件が終結シタあたりカラナ」

「そんな昔から……!？」

「と言ってもホンの数か月だけレドナ」

「それでもずっと中にいたのか……もしかしてここしばらくなのはが異常な疲労を見せていたのって……」

「我が高町なのはノ解析ヲしていタカラだろうナ」

「やっぱり、あなたの所為か……!」

多分なのはが私達から逃げたのも〃影〃の所為だろう。

「サ、雑談もここまデだ……来なサイ」

「言われなくても!」

全力で攻撃ができていないのは恐らく〃影〃がなのはの姿をしているからだろう。

無意識のうちに力を抜いてしまっていたのだろう。

「ここから……優勢に立たないと……!」

「さア、殺ロウか…」
再び「影」は恍惚の表情を浮かべ、レイジングハートを構えた。

第19話 “影”

「はあああー！」

バルディツシユの魔法刃がレイジングハートの柄の部分にぶつかり、火花が散る。

「いいネ…っ！本気でできたんジャナイノ？」

「まだまだ余裕そうだね…！」

一度、距離をとる。

「オヤ、離れタネ」

「サンダー！レイジ!!!」

“隷属の影”の頭上に雷が落ちる。

「…もう一度…！サンダーレイジ！」

二回目のサンダーレイジが“影”に落ちる。

どうだ…。どの位のダメージだ…！

「イッターい…いいヨ…かなり本気になってきたネ!!」

「んっ…まだそんなにダメージを喰らってないか…！」

「フフフ…焦らない焦らない…♪」

「時間短いと何か問題でも…？」

「君ハ知らなくてイイノ♪」

なんであんなに時間をとらせたがるんだろう？

きつと何かあるはずなんだけど…。取りあえず、もう少しダメージ

を与えてみよう。

「バルディツシユー！」

《Yes, sir》

バルディツシユはハーケンモードに姿を変える。

ソニックモードにもなった方がいいのかな…でもダメージ喰らわないとも限らないし…。

「オラあ!!」

「ていー！」

再び、2つのデバイスがぶつかり合う。

この至近距離なら…！

「はあああ！プラズマランサー!!」

「?!この距離デだト!」

この攻撃は確実に“影”の頭部と腹部に当たった。

なのはの身体大丈夫かな…。

少しすると、激しい煙の中から“影”の姿が見えてきた。

随分と大人しいな、目を凝らすと、当たった腹部はバリアジャケツトが破け地肌が見えるかと思いきや、謎の黒い物質がそこには蠢いていた。

何だあれは?!もしかして…。

そう思い“影”の頭部を見ると、顔の右半分が黒い物質になっていた。これも先ほどのプラズマランサーが当たったところだ。

「な、なんだその黒い物質は…!」

恐る恐る聞いてみる、今だ空いては俯いたまま動かない。

「……」

まだ黙っている。まだ動かない。

「何か言ったらどうだ!」

そう言いながら、バルディッシュを構える。ザンバーモードだ。

「……」

何も言わない…先ほどまでの激しい口調や戦闘と打って変わり、静かな睨み合いの様なものが続いている。

「……っ」

“影”は何か呟いたようだ。だがこちらには聞こえない程の音量だったため何と言ったかは不明だ。そして“影”は少しづつ浮かんでい

る。何をするつもりなんだろう…。様子をうかがいながら“影”への注意を怠らにしようと…。

「……っ……」

また何か呟いた…?

「………後ろダヨオツ!!バーカ!!!」

「何!?!」

後ろ?!どういう…。

そこで私の意識は途切れた。そう、背後から来ていたのは“隷属の影”の分身というのだろうか、つまるところ“隷属の影”に取り込まれたのだ。

—KANRIKYOKU SIDE—

今対策本部は荒れに荒れていた。

はやては何とかシグナムとヴィータの奪還に成功したがその同時にフェイトが“隷属の影”に取り込まれてしまったからである。

「どうなっているんだ!?!」影“は分離できたというのか!ここで新しい戦い方を見せてくるなんて…!」

「フェイトちゃんの生体反応…だめ、ジャミングされているみたいな感じになってこちらからじゃわからないよ…」

「くっ!どうする…今はやてはボロボロだし…シグナムとヴィータも万全じゃない…」

「クロノ君は…」

「僕はダメだ、艦長が居ない今僕が指揮を執らなくてはだからな」

「そうだよね…うう…どうしよう…」

解決策が見当たらないまま対策本部のクルーたちは、ただモニターを眺めている事しかできなかった。

—SIDE OUT—

…うう…ここは…?どこだろう…。

瞼に中々力が入らないが、無理やり目を開くとそこは…真っ白な空間だった。

「何…?…?…」

段々思い出してきた…!そうだ私は何かに覆いかぶさられて…:…:…もしかしてこれがその中なのかな?白い…どこまでも…白い。そして広い。

「誰も居ないのかな」

少し歩いてみる。

「万が一のためにバルディッシュは構えて…あれ?バルディッシュが…無い…?」

なんで!?!覆いかぶさられた時には確かに持っていたはずなのに…

ていうかバルディッシュが無いと“影”と戦えないぞ!!どうしよう…。

「バルディッシュ探さないと…!」

あたりを見渡す。無い。

なんてことだ…!どこかわからない所に来て大切な相棒を無くすなんて…。

「あとう…」

「!?」

突然後ろから話しかけられた。もしかして…“影”…?もしそうなら絶体絶命だ…!

恐る恐る後ろを振り返る。

……そこには高町なのはが立っていた…。

「!“影” かつ!」

「ええ!?ち、違うよ、フェイトちゃん…私、高町なのはだよ…」

「なの…は…?本当に…?なのはなの…?」

「うん!本当だよ!!」

「な、なんでなのはがここに…?」

「ここは“影”の中の世界なんだよ…だから私が存在できるんだ」

「“影”の中の世界…」

「そう…あと、これフェイトちゃんバルディッシュ」

「あ、ありがとうなのは」

これは一体…どうなっているんだ?

第20話 終焉

一体…どうなっているんだ。“隷属の影”の中ではなのはが普通に存在している。

てつきりなのはの精神的な部分に入り込み洗脳のような形で操作しているのだと思っていたけど…中に入れるというところから、どうやらそうではないみたいだ。

「フェイトちゃん？どうしたの？」

「ああ、ごめんね、考え事してたんだ」

「考え事？」

今、目の前にいるなのはが本物の肉体を持ったなのはであるならば、ここから一緒に脱出できるし、“影”との戦いも有利に進められる！

「ねえ、なのは…今、なのは肉体を持っているの？」

「えつとね……」

なのはは黙ってしまった。どうしよう、“影”がここに来ないとも限らないし…ん？ていうか“影”自身が自らの中に入ってこれるか？どうなんだろう…。でも自分を切り離しそれを遠隔操作できるのだから、自分の中にだつて入つてこれそうだなあ…。

…遠隔操作？なんで私そんな事覚えているんだろう。さつきまで直前のこと忘れてたのに…。

どうもここにきてからの私は変だ、それにさつきからなのはと私以外の気配、恐らく“影”であろうがそれも気になるし、目の前のなのはは黙ったままだし、どうしたものか、このままでは何も進まないぞ…。

「今ここにいる私は、肉体は持っているよ…」

「っ！肉体を持っているんだね！じゃあここから脱出することを考えよう！そうすればあとは“影”を倒すだけだ！」

「それは無理だよ」

「えつ、なんで…？」

「ここからは出られないんだ、私も試したけどダメだった…」

「ひ、一人でダメだったとしても二人なら！」

「仮に脱出口を見つけたら作り作るなりしても、『影』がやってきてこちらの魔力を根こそぎ奪って意識を奪われてしまおうんだ」

「二人でもダメかな…？」

「どちらか一人が囷になればいけるかもね」

「なら、私が囷になるよ」

「フェイトちゃんが？でも私は今ほとんど魔力がないから私だけ脱出して、『影』と戦えるかは…」

「はやてがいるから多分大丈夫！多分…」

「はやてちゃんは、ヴィータちゃんたちと戦ってるんだよね？なら、期待はできないんじゃないのかな、二対一だし」

「ぐぬぬ…」

今のなのは少しネガティブだな…何回もチャレンジして失敗したんだろうな。

でも、なのはを囷にしたんじゃ結局『影』との戦いはこちらに不利だ。どうにか、なのはと一緒に脱出できないかな？

「まだ、考えているの？今のフェイトちゃんすごく前向きだね」

「な、なのはが後ろ向きすぎるだけだよ…」

なんとなく上を見上げてみる。白い。白い天井のようなものが広がっている。これは決して空ではないということはある。なぜならそこは見るからに物質的なのだ。胎動するように小刻みに動いている。ここが『影』の体内ということが否が応でもわかる。

あの天井がどのくらいの厚みなのか…それがわからない…。

「ねえ、あの天井の厚みってどのくらいかわかる？」

「あそこはそこまで厚くなかったよ、アクセルシューターで穴が開いたからね」

「ならあそこから脱出するか…」

「じゃあ行こうか」

「…なのはは自分が囷になればいいって思ってるでしょう？」

「うん」

「やつぱり…それだとここに来た意味がないんだよ！」

「別に望んでここに来たわけではないでしょう？」

「でも、本物のなのは会えたんだ！助けたいんだよ！」

「フェイトちゃん…」

「ナラ、一緒二我がお前らヲ地獄ニ叩き落としてやル」

「!?お前は！」

「い、いつの間に…」

「お前ラが悠長に話してイたカラ、ゆっくりと中に入ル準備ができたヨ…」

「ちっ！やはり時間を与えてしまっていたか…！」

このままだとなのはがピンチだ！どうにかして切り抜けなきゃ…。

「フ、フェイトちゃん…どうする？」

「どうするも何も…強引にでも脱出させてもらおう!!」

バルディッシュを構え、なのはの腕もつかんだ。

ここを突破すれば…!!

「そう簡単ニ逃がスと思ウカツ！」

“影”は自身の腕を伸ばしこちらに飛ばしてきた。

「フォトンランサー!!」

《Fire》

フォトンランサーが当たり、あたりが煙に包まれた。この隙に天井へ行けば！

「行こう、なのは」

「う、うん…」

なのはの腕をしっかりと掴み天井へ向かう。急がなきゃ…!

「逃がさナイ」

「！」

気付いた時には“影”が目の前にいた。くっ！どうする…!どうにかして振り切らなければ！

「ここカラ出スワケにはイカンのダ！」

「貴方の中にずっといるだなんてお断りだ!!」

「ドウあがコウトここからハ出られヌ我ガイル限りナ!!」

「フェイトちゃん…！」

「大丈夫だよ、絶対にここから脱出してみせるとも！」
振り切るぞ！バルドイツシユをハーケンにして、“影”に斬りかかる。

「アタルとデモ？」

“影”は難なく避けた。しかし、そのおかげで道は開けた！

「フォトンランサー!!」

《Fire》

「サツキの攻撃はソレが目当てノ牽制ダツタのカ！」

「まったく…頭がいいのか悪いのか、よくわからない子だ、貴方は」

さっきのフォトンランサーは天井に大きな穴を開けた。確かにそこまで厚い穴ではなかったようだ。

「フェイトちゃん、ここからが大変なんだ…」

「えっ」

目の前の穴から無数の黒い物質が現れた。“隷属の影”だ。

なのはが言っていた“影”が来てというのはこのことだったのか

！

パツと見て、200はいる…どう突破するか…。

「逃がさナイと言ったロウ！」

後ろにまわっていた“影”もこちらに向かってくる、どうする…このままじゃ…！

「フェイトちゃん！」

「っ!?しまった!」

気付いたら足に“影”の分身が絡みついていた。

すごい力で私を下へ下ろそうとしてくる。

「はああああ!!」

“影”を斬り、穴めがけて一気に上昇する。

しかし、それも唐突に引つ張られ止まってしまう。

「また足を…!?」

足元を確認するとなのはが“影”とその分身に腰元までがっちり
と掴まれていた。

「なのはあ!!」

バルディッシュを振ろうとすると、”影”たちはなのはを前に持つてきて、盾にする。

「卑怯な！」

「フははハは!!コチラの作戦勝ちだア!!」

「こんな単純な手に…！」

「フェイトちゃん!私の事はいいから!フェイトちゃんだけでも…！」

「そんなのダメだ!なのはを連れて帰らなきゃ…そうじゃなきゃダメなんだ!」

「でも、このままじゃ二人とも…」

「この手を離したら…またなのはあの場所で一人になってしま…う…!そんなのダメだ!絶対に!」

「でも…どうしたら…」

「無駄無駄無駄ア!二人仲良く、我の中で生きそのまま果テヨ!!」

「諦めるわけにはあ…！」

その時、私の後ろから紫の光が”影”を貫いた。

—KANRIKYOKU SIDE—

上記より数分前、クロノとエイミイは突如次元空間に現れた高エネルギー物質の解析に追われていた。

「フェイトのこともあるというのに…!エイミイ、どうだ、何かわかったか!」

「何かはわからないけど、この座標は時の庭園があった場所って事がわかったんだ」

「時の…庭園…だと…!?!」

「そう、その座標の中心部に高エネルギー物質があるんだ。でもそれが何なのかは…」

「くそっ!一体あれは何なんだ!」

アラーム音が鳴る、警告音だ。

「どうした!」

「高エネルギー物質が次元干渉魔法を展開しました!」

「何!?狙いはどこだ!」

「狙いは… 第97管理外世界地球の海鳴市！」

「海鳴市だと?！」

そして次元干渉魔法は海鳴市の臨海公園へ放たれた。

それは“影”に直撃し、辺り一帯を光の中に包み込んだ。

「フェイト…!!」

クロノの声は直撃の際の爆音で無情にもかき消されてしまっていた…。

—SIDE OUT—

「諦めるわけにはあ…！」

そう言った直後に、背後から突如来た紫色の光が“影”だけを攻撃している…。

「何イイイイイイイ!!？」

これは一体…。紫色の光…というより紫の雷…?

「っ！今だああああああ!!！」

思い切りなのはの腕を引っ張り“影”を引き?がす。

「なのはああああ!!！」

そして、そのまま天井の穴めがけて加速する。さっきの雷で穴がさらに大きくなっている。

「このまま!!！」

「逃ガスモノかアア！何ナノだコノ魔法ハアアアアア!!！」

“影”も何かわからない様子…クロノたちが助けてくれたのかな…?

そして、私となのはは、無事穴を抜け外の世界へ脱出できた。

「穴を抜けたよ！フェイトちゃん！」

「うん！」

よかった…なのはを助けることができた…本当によかった…。

『フェイト！大丈夫か！無事なら返事をするんだ！』

クロノの声がする。ああ、通信が来ていたんだ。

「クロノ？私もなのはも無事だよ…ちゃんと生きてる！」

『なのはも？それは一体』

「“影”の中に閉じ込められていたんだ、それで今どうにか一緒に脱

出できたんだ」

「クロノ君、色々ごめんね…」

『そういうことだったのか…なのはは心配するな責任も感じることはない、こちらがうまくやるから』

「ありがとう、クロノ君…」

「なのはは、ちよつと離れたところにいて」

そう言いながらなのはを地上に降ろす。

「うん、フェイトちゃんも気を付けて」

「もちろん！なのはの分までアイツを痛めつけてくるよ！」

「フェイトちゃんちよつと過激かも…」

そう言っただなのはは離れた場所にいる局員さんに保護された。

とりあえず、これで一安心だ。

「お前ラァア…」

「影…もう貴方に手加減する理由は私にはない、いくら貴方がなのはに似ていようとも今は身体ごと偽物だとわかっているからね」

「どんな二本気を出シタトコロで我を打ち消スコトハでキヌのだヨ！」

その身をインストールすることで対象の意識と身体を乗っ取り、記憶、魔法技術をもコピーする『隷属の影』…貴方についてわからないことはまだたくさんあるけれど——

「——終わりにしよう」

第21話 運命

「終わりにしよう」

「舐メヤがつてエええエエ!!」

“影”に以前ほどの冷静さはなく、ただ手に持ったレイジング・ハートザンバーを振り回しながら突撃してくるだけだ。

それをいなすのはとても容易なことだ。

「でやああー!」

バルディツシュザンバーでレイジング・ハートを弾き飛ばす。

レイジング・ハート、ちゃんと回収しないとな…。

「考え事シナがライナサレルとは!何タル屈辱!!」

「そうやりながらも優位に立てるほど、今の私は落ち着いてるし、怒っている」

「子供風情がいい気ニナルんじゃアねえエエエエ!!!」

雄叫びを上げる“影”の姿を見てなおさら、なのはの姿をしていることに対する怒りがこみ上げてくる。

【その姿で、下品な声を上げるな】

そんな思いが私の中を占めている。しかし、怒りに任せて剣を振るうのではダメだ。理性の剣で斬らなければならない。はやとその家族を弄び、なのはの心も身体もボロボロにして、アリサとすずかにも心と身体に深い傷を負わせた…。そんな敵を…私は…

「許さない!!」

「ウルセえエエエエえ!」

“影”がまた突撃してくる。不思議とその動きはゆっくりに見える。奴を倒すのは三人の…いや、

「雷光——閃!」

《PLASMA ZAMBER BREAKER》

「ブレイカー!!」

「何イ!?収束砲撃!?コの至近距離デ!」

私と“影”の距離は恐らく5メートル弱。同士討ちにする気はないけれどそれくらいの心持で…!

「勝たせてもらう!!」

「チクしょオオおおオオ!!」

辺りは金色の光に包まれ、激しい爆音が響き渡った。

—KANRIKYOKU SIDE—

「なんつーバカ魔力…」

「フェイトちゃん…」

地球支部にいるクロノとなのははモニターに映る金色の光を見つめていた。その先にいる仲間の安否が何より心配なのだ。

「や、やっぱり私行った方がよかつたんやろか…」

「はやてはダメだ、ヴィータとシグナムとの戦闘での傷がかなり深いからな」

「うう…でも…」

「我慢してくれ…僕もこう見えてかなり我慢しているんだ…」

そういうクロノの表情はとても険しく、反論させてももらえる雰囲気ではなかった。

「はやてちゃん、本当にごめんね…」

「だから、なのはちゃんが謝る必要はないんや、気にしなくてええよ」
先ほどから何度もはやてに謝るなのは。フェイトとはやてになのは自身に罪があるわけではないのだから、謝らなくてもよいと言うのだが、なのはは自身の未熟さと体調管理の甘さが招いた事件だとし、ひたすらに謝る。クロノもどうしたものかと頭を悩ませている。

「エイミィ、現場はどうだ、こちらのモニターはどうやらフリーズしてしまつたみたいで…」

「えつとね…無事なカメラが…あ、あつた。現場の公園の約7割が…消滅!…」

「消滅だ?!?どういうことだ!」

「もしかしてだけど…」

「わかるん、なのはちゃん?」

「フェイトちゃん、非殺傷設定を解除してたんじゃないのかな」

「なのはちゃん、それだとフェイトちゃん自身もかなりの怪我を負うことになっちゃうけど」

「それくらいしないと、完全に倒しきれないっちゆうことなんか…」
「ともかく僕は現場に行く！なのはとはやてはここで待機！エイミイは新しいことがわかったら連絡を頼む！」

「OK！」

クロノはバリアジャケットに身を包み出動した。

—SIDE OUT—

辺り一体海になっている。波が岩に当たる音がザブンザブンと鳴っている。

まさしく海鳴り市って感じだ…。

「ああ…終わったのかな…」

私は海に浮いてるのかな…ああ浮いてるや…。

“影”は倒せたのかな…非殺傷設定を解除して思い切り砲撃したけど…。

「大丈夫かな…大丈夫か…」

近くに“影”の魔力を感じない。完全に消滅したことだろう。

それにしても、だいぶ沖に流されてきたなあ…。

「戻らなきゃ…力が…入らないなんでだろ…」

自分の体を見てみると、恐ろしいほど血だらけだ。

「あちゃー…これは…」

なんか前テレビに見たけどサメって血の匂いにつられてやってくるって…おお、これはちよつと緊急を要するようだ。

「空飛べるかな…」

少しばかり魔力が残っていたみたいだ。空は飛べるみたいだ。

「とりあえず陸へ行こう」

ふわふわした感じで陸へと向かう。

向こうに何かが見える。あれは…。

「まさか…!?!」

「アアア…! 焼ける…身体ガ焼ケルウ…!」

“隷属の影”！あの砲撃を受けてまだ存在できるのか…!?

「フェイトお…テストアアアああアア!!」

「バルディッシュ…!」

身体が痛む。だとしても…!

「とどめだああああ!!!」

ザンバーで“影”を勢いよく突き刺す。確かな感触。

「ぐううう!! 貴様アアア!」

「最後の最後だ! 終われえ!!」

バルディツシユの刀身を爆発させる。かなりの衝撃だ。

私はその衝撃で陸地の方に飛ばされる。“影”は…

「アアアアあああ!!!」

燃えている…どうやら私の勝ちのようだ。やった…やったよ…!

そうこうしているうちに、私は木の幹にぶつかり、地面に落ちた。

「い、痛い…」

街の方から何かが飛んでくる…あれは…クロノかな…?

「もう力が出ないや…」

遠くにいた“影”は燃え尽きているのを確認した。正真正銘、私の勝ちだ。

…この数分で何回勝ちつて言っただろう。まあいいか何回でも…。

「フェイトー! 大丈夫かー!」

クロノの声だ…安心する声だ…。

「クロノー…ここーここだよー…」

「なっ! 血だらけじゃないか!」

クロノが隣に来て一言目に言われた。

「非殺傷設定を解除して砲撃とかしたから…」

「あとザンバーの刀身を爆発させたとも聞いたぞ」

「それも確かにやったよ…だって相手はそうでもしないと倒せなかつたんだもん…」

「まったく…とりあえず医務室に運ぶからな」

「うん…お願い…」

そこで私の意識は途切れた…。

—NANOHA SIDE—

フェイトちゃんと“隷属の影”の戦いから、数週間が過ぎた。

はやてちゃんとヴィータちゃん、シグナムさんの戦いの傷はだいぶ

回復し、いつもの生活に戻りつつある。

しかし、フェイトちゃんは至近距離での爆発を二度も行つたためか、まだ入院状態。

私のせいで…こんなことに…“影”が私の中に入ってきたのは闇の書事件の直後らしいけど自分では全く気付くことができなかった。取り調べでも結局私が言っていることは管理局地球支部の誰もが知っている事件発生後のことだった。発生前のメイカルチエツクでは何も異常はなかった。発生前の私に何か異常はあったかと言われれば、異常な疲労と魔力消費、不自然な会話の聞こえ方、くらいなもの。これらは全て“影”の影響だとわかっている。つまり私にもよくわかっていないのだ。“影”の中にいた時の記憶は曖昧で、フェイトちゃんが中に来て、脱出した辺りは覚えているんだけど…。

ヴィータちゃんが私と“影”が会話しているのを見たらしいけど、私にそんな記憶はない。どうやら、抵抗していたらしいけど…。私にはわからない。

本当に、ダメだな…私は…魔法を手に入れてから、手が届くところ、魔法が届くところを救うためにと努力をしてきたはずなのに…。

なんだか、自分でも考えがまとまらなくなってきた。

「これから…どうしよう…」

「なのは！」

「ユーノ君…」

「大丈夫？ 顔色悪いけど…」

「大丈夫だよ、で何か用だったの？」

「えつとね、また取り調べなんだけど…」

「ああ、わざわざありがとう…」

「なのは…」

「大丈夫、じゃあ行ってくるね」

「うん…」

話していれば何か思い出すかもな…

—SIDE OUT—

天井のマスを数えてみる。うーん…飽きる。

「痛たたた…」

変に動いたせいで傷が痛んでしまった。病院のベッドだと、やるこ
とが少ないなあ…。

枕元のプレートに書いてる自分の名前を読んでみる。

「フェイト・テストロツサ・ハラオウン」

だからどうしたのだろう。

コンコンと、ノックの音が鳴る。

「はい」

「フェイト、入るよ」

ユーノの声だ。

「はい」

ユーノが入ってきた。

「身体の調子はどう？」

「だいぶ良くなってきたよ、まだ動くことはできないけれどね…」

「そっか、まだ入院は続きそうだね」

「そうだね。あ、そういえばなのはは…」

「なのはは今取り調べを受けている頃だと思うよ」

「そっか…大丈夫かな…」

「なのは自身が覚えていることが少ないからね、事件の真相…」 隷属
の影」の目的もわからないままだ」

「目的…私がそれらしいことを聞いたのは」

「面白いから」だっけ」

「うん、なのはの体に乗っ取った理由をそう言っていた、そこに理由も
あるんじゃないかって思うんだ」

「面白いから…か…」

「そもそも」隷属の影」がどこから来たのか…」

「ああ、それについてなんだけど、エイミイたちが、どうやら別の次元
世界から来たみたいだっけって言っていたんだ」

「別の次元世界…管理世界からなのかな…」

「そこがわからないらしいんだ」

「そっか…」

別世界から来た謎の存在、“隷属の影”。生物なのかもわからない。でも刺したり、斬ったりした時の感触、あれはなのはの身体をコピーしていたからあったものなのか…。砲撃後の“影”の姿は、なのはだった。

つまり、本体は実体を持っていないのかもしれない。私は“影”の本当の姿を見たことがない…。

あの断末魔、倒せたと思うんだけど…段々不安になってきたぞ…。

「じゃあ、僕はこれで失礼するよ、お大事にね」

「うん、ありがとう」

ユーノが部屋から出て行った。また一人になってしまった。

……もう一度みんなで遊びに行ったりとかしたいな、それで、また思い出を作るんだ。今回の悲しい事件のことより強く、楽しい思い出を…。

——数分後、なのはが部屋に来た時、フェイトは気持ち良さそうに寝ていた。

「寝返りうつたび目を覚ましてたけどね」

これはなのは談である。

紅き白騎士編

第22話 なのはの心

” 隷属の影” 事件から三ヶ月。私こと高町なのはにはなんとなく平穏が訪れていた。

平穏と言っても、あの事件以来行方不明になった友達や、未だ入院をしている友達。怪我が治って私のことを心配してれる友達、あの事件が原因で戦闘がトラウマになってしまった友達…。私は色々な人に迷惑をかけてしまった。今の私の気持ちはこの先ずつと忘れることはないだろうし、誰もわかってくれないものだと思う。だからこそ私は、贖罪のため、前よりもつと今よりもつと強くならなければならぬ、そう思うようになった。

「なのはー！こんなところにいたんだね、探したよー」

フェイトちゃん” 隷属の影” 事件を解決し、私が特に迷惑をかけてしまった人だ。入院していたはずなのにどうしたんだろう。

「怪我はもう大丈夫なの？」

「うん！動けるくらいまで回復したよー！」

笑顔で答えてくれる。笑顔が見れるのはすつごくうれしいことなんだけど…。私の心には深く刺さる何かがある。辛い…辛いよ…。

「なんか用でもあったの？」

「そうそう、用事があったんだ。なのはは聞いた？時空保安局の話」
「名前だけならさつき廊下で聞いたよ。フェイトちゃんは何か知ってるの？」

「沢山って程ではないけど知ってるよ。うーん…一応なのはも知っておいた方がいいかもしれないから話すね」

「あ、うんお願い」

フェイトちゃん曰く、先週の火曜日にその【時空保安局】を名乗る武装組織が一部の次元世界に設立を宣言したらしい。その組織が行っているのは法外な治安維持活動。他の武装組織の構成員を一人残らず殺していくというものだ。それは、下請けの組織にも及ぶ。こ

これらの行為に時空管理局は、武装組織たちによる戦闘行為で一般の人たちを危険な目にあわすということは確かに許されるべきではないことではあるが、保安局側の行為はそれと何ら変わりないとして、時空保安局をテロリストグループと認定した、ということらしい。一週間でもかなり色々あったんだなあ…。私そんなこと何も知らなかった。：それほどボーっとしていたんだ、反省しなきゃ。

「多分、地球支部の人たちも駆り出されることになるだろうね」

「保安局ってそんなに大きな組織なの？」

「いや、白騎士って呼ばれている凄腕の魔導士がいるんだ。30人の部隊が一日で壊滅するくらいの凄腕のね」

「そんなに強いんだ…」

白騎士…昔読んだ本には優しい騎士として描かれていたっけ。その本は確かすずかちゃんから借りたんだよね、懐かしいな。

…：戦いたい、白騎士という魔導士と。戦ってみたい。

「私、時空保安局の取り締まりの部隊に志願するよ」

「え、なのは？どうしたの突然…：志願って、ええ!？」

「隷属の影の贖罪のためっていう理由が一番んだけど、フェイトちゃんから白騎士さんのお話聞いたとき思ったんだ。戦ってみたいって」

「いくらなんでも戦闘狂すぎるよ…」

「戦闘狂だなんて、ひどいなあ」

「いや、あの話聞いて戦いたいって思うなんて戦闘狂か戦闘マニアくらいなものだよ？」

「そ、そうかな？」

で、でも決めただ！白騎士と戦って、さらに時空保安局を止めるって！

——それから四日後、時空管理局本部の対時空保安局部隊の中に立つ高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの姿があった。

なのはは、自らの心に刺さった罪の意識を振り払い戦意を満たすため、フェイトはそんなのはをかつての事件のように二度と離れ離れにならないように共に戦うため。互いに方向は違えど、強き意思を持

ち保安局との戦いに身を投じることとなった。

第23話 戦いへの準備

時空保安局打倒のため結成された、対保安局戦 第21部隊FATE。21部隊というのは、20部隊までが保安局側に全滅させられたからである。部隊名のFATE、これは部隊長に任命されたフェイト・T・ハラオウンの名前をとったものである。

部隊への任命式が終わり、なのははフェイトのところへ駆けて行った。

「すごいねフェイトちゃん、まさか部隊長だなんて」

「さつきリンディ提督から言われたんだけど、部隊長というのは名前だけで実際は中隊長みたいなものなんだってさ」

「テストロッサ、だとしてもやることは同じだろう?」

「し、シグナム!そうですね。保安局の暴走を止める、これが部隊の目標です」

「あと白騎士って魔導士を保護?するだよね」

「うん、そうだよなのは」

「なのはは無理をするなよ、まだ体調は万全ではないのだからな」

「あうう…わかつてはいるんですけど…」

なのはとシグナムの会話を聞くとわだかまりはなくなり、かつての関係に戻っているかのように思えるが、なのはの方が責任を感じ続けてしまっているため、未だにシグナムに対して壁のようなものを作ってしまったている。シグナムはむしろ前よりなのはのことを気にかけているくらいだ。

「じゃあ、指定された艦に乗りに行こうか」

三人で今回の作戦専用の次元航行戦艦『グラナード』に向かった。

「うわあ、大きい戦艦だね」

「テストロッサ、艦長は誰だか知ってるのか?」

「確か、リンディ提督だったはずですよ」

「そうだったか…確かに大きい船だ。今回の作戦専用の船なのだろう?余程上の人間は保安局が邪魔と見える」

「全長50m超の大型戦艦を専用で作ってしまうくらいだもんね、

この部隊で保安局を倒すつもり満々だよね」

「私たちの手で、被害を食い止めよう！」

「おおー！」

心なしかシグナムは頬を赤らめていた。

「突然やるものだから…全く…」

なのはたちはグラナードに乗り込んだ。そして、時空保安局が潜伏しているときれている世界への時空転移の準備に取り掛かることになった。出発は3時間後の13時20分だ。

—NANOHA SIDE—

今私はグラナードのコックピットに来ている。次元航行艦とは違う次元航行戦艦の内装は見慣れたアースラとほぼ同じであった。後から知った話だけど設計した人が同じ人らしい。

コックピットはざっと見て回れたので、次は自分の部屋に行こう。そこで今の私の気持ちを整理しなくちゃ。このままじゃ作戦中に迷惑をかけちゃうかもしれない…また…迷惑を…。

自室へ向かう廊下を歩いていると、向かい側からはやてちゃんが歩いてきた。はやてちゃん、フルネームで八神はやて。“隸属の影”事件ではフェイトちゃんの次に迷惑をかけた相手だ。私はこの子の大切な家族の絆を一時的にとはいえ断ち切ってしまったんだ…。

などと考え込んでいるとはやてちゃんの方から話しかけてきた。

「やつほーなのはちゃん！…まだ本調子じゃなさそうやね？」

「にやはは…そうだね、でも大丈夫作戦までには戻すから」

「そんな…無理せんほうがええよ…？結構あの“影”深くまで入り込んでたんやろ？」

「深くって言っても海馬？っていう記憶を司る場所に長期間謎の信号を出されていただけだっただけ」

「それを人は、重症って言うんよ」

「にやはは、そうとも言う」

「そうしか言わへん」

はやてちゃんはシグナムさんやフェイトちゃんと違ってここまでの会話で笑顔を見せてこない。これはあえて笑わないようにしてい

るのかな…？

「なあ、なのはちゃん」

「なに？はやてちゃん」

「なんで私がここにいるか気にならない？」

「えっ…？」

そういえばはやてちゃんは今回の保安局の部隊には配属じゃなかった。なんでここにいるんだろう？シグナムさんの見送りかな。

「シグナムさんの見送りで来てたの…？」

「まあそれもあるけど、私この作戦の救援部隊に配属されたんよ。その打ち合わせでなあ、この戦艦に来てたんや」

「救援部隊？」

「そう、もしもなのはちゃんやフェイトちゃんの部隊が壊滅しそうになったり、予想外のハプニングとかで作戦の続行が難しくなったりした時に、応援で駆け付ける部隊や！もし、ピンチになったら、私たちに任せてな！」

「そうなんだ…。うん！もしもの時は頼りにしてるね、はやてちゃん！」

「うん！」

ようやくはやてちゃんが笑ってくれた。この笑顔はなんだか心がいたくはないな。でも、はやてちゃんに頼らないくらい頑張らなくちゃ…！

「ほな、任務が終わったらな」

「うん、またねー！」

はやてちゃんは戦艦を降りて行った。救援部隊は本局で待機しているそうだ。もしものことがあったらすぐに迎えるように転送ポイントも常にかけてあるらしい。

…そうだ。自分の部屋を見に行く途中だった。

先ほどの地点から、歩いて2分ほどの場所にあった。自動ドアが開き、部屋に入る。

内装は特に変わったところはない。よくある次元航行船とほぼ同じだ。違う点を挙げるとしたら、部屋自体が少々狭いところだ

ろうか。

「もしかしてアースラが特別大きかったのかな？…そんなことないか」

少し狭く感じるけど、まあ贅沢なんて言っていられない。これから保安局、白騎士と戦うことになるんだから。気を引き締めないと…！やるぞ！

「おー！」

「どうしたの、なのは」

「えっ…」

背後にいたのはフェイトちゃんだった。

フェイトちゃんの目、可哀そうなものを見る目だ…。

第24話　なのはの違和感

「グラナードの出撃準備完了しました」

高町なのははこと私が自室でお茶を飲んでいると、そうアナウンスで流れてきた。グラナードの準備、つまり整備が終わったということ。遂に保安局との戦いが始まるということだ。取り合えず、コックピットに行った方がいいのかな？

「部隊の方々は自室で待機。次元航行を開始し安定に入った時に再び連絡されるそうです」

なるほど、じゃあこのままお茶飲んでよ。…あー麦茶おいしい。でもたまには紅茶も飲みたいな…。またすずかちゃんやアリサちゃんと一緒に…。

そんなことを考えていたら、ガタガタと揺れ始めた。グラナードの発進である。今座っている椅子に付いているシートベルトを巻いた。そして窓の外が光に包まれた。

しばらくすると、窓時から見えるのはいつもの次元空間の景色となった。あとは保安局の拠点となっている世界に着くのを待つだけだ。

「安定に入りました。部隊の方々はミーティングルームに集まってください」

指示のアナウンスだ。この声はフェイトちゃんだな。部隊長にもなるとこんな仕事もするんだ…。大変だな。

シートベルトを外し、部屋を出てミーティングルームに向かう。

その途中、シグナムさんと出会った。特に話すこともなかったが取り合えず一緒に部屋へ向かった。

ミーティングルームに到着。中に入ると薄暗い照明で、部屋の真ん中にある大きな円卓が目に入った。出入口から見て真正面の奥の席にフェイトちゃんが座っていた。

「あ、なのははにシグナム！早かったですね」

フェイトちゃんがさつと立って、出迎えてくれた。

「なのははは右側の席で、シグナムは左側の席ね。机に名札置いてあ

るから、すぐわかるよ」

「はい」

「む、この席か。」

「どうやら、シグナムさんとは向かい合わせの席のようだ。このミーティングは部隊全員で行うため、席はあらかじめ決まっている。変に混雑しないためだ。」

今回の作戦の役割分担を確認するためのミーティング。ちなみに私はシグナムさんと一緒に、白騎士を保安局制圧まで足止めするのと、保護が役割だ。まあ保護はできたらやる程度でいいと本局からは言われたけど、私は話し合って戦闘が止まるならそれはそれで…いや、でも戦いたい…。

…あれ？私ってこんなに戦いたいって欲求強かったっけ。前はもつと、助けたいとか、救ってあげたいとかそういう気持ちで戦っていた気がするんだけど…。なんでだろう、まるで私の中の信念や信条が丸ごと書き換えられたような感覚だ…。昔はこう思っていたというのは覚えているのに、その時の感情や考えに自分自身が理解できないし共感できていない…。そういえば、この部隊に志願する時、フェイトちゃんと話していた時の私も戦いたいからって言ってたな。これってもしかして、“隷属の影”が私の海馬に出した謎の信号が関係しているのかな？

色々考え事していると、続々人が集まってきたり席に座っていった。どうやら全員集まったようだ。フェイトちゃんが周りを見渡して欠席がないかどうかを確認している。

「全員集まった様なので、これから今回の作戦の再確認と質疑を行います」

ミーティングが始まった。最初の数分間は保安局の拠点の世界に到着した時の行動の確認。私は上空から敵局員の体制を崩す段取りである。

「そして、保安局の建物内に入った時はまず、私を含めた突入隊の五人が局長室に向かいます。あ、これを見せるのを忘れていました…」
「そう言い、フェイトちゃんが皆に見せたのは保安局が拠点としてい

る建物の見取り図である。なるほどこれがあるから、一番最初に局長室に行けるって事なんだ。

「えっと、なのはとシグナムはできるだけ白騎士をこの建物から離れさせてください。向こうの局長を捕まえるのに時間がかかる場合も想定されるので、すぐに白騎士が局長を助けに行けないようお願いします」

「わかりましたー」

「了解した」

しまった、気の抜けた返事をしてしまった…。ちよつと反省。

「そうだ、テストロツサ。白騎士について情報が欲しいのだが…。私知知っているのは凄腕の魔導師ということだけだな」

とシグナムさんが質問した。そういえばそうだ。私たちは白騎士について何も知らないな。

「白騎士についてですが…今でもほとんど情報は無く、唯一あるのは白騎士が使うデバイスがジャマダハルの形をとっているということだけです」

「ジャマダハル？」

「先に刃の付いた籠手のような物だ」

「ま、まあそれは種類によりますけど様はそういう事です」

「つまり近接戦闘向けなんだね！」

「そうなるな。が、それしか情報がないのか…」

「そうですね、使う魔法もよくわかっていないようですし」

シグナムさんとフェイトちゃんの話で部屋の空気が少し重くなる。そもそもこの作戦自体うまくいくのかわからないのに、もつとわからない白騎士の存在が部隊の士気を下げているのだろう。さらに今までの部隊がことごとく壊滅させられているのに、自分たちがこの事件を解決できるのか不安に思っている人も多いただろう。

「とにかく、私たちは白騎士を足止めすればいいんだね。使ってくる魔法がわからない以上、主に私が足止めする形の方がいいですかね？」

とシグナムさんに問いかける。今はこの空気を変えなきや。この

ままじやどんどん士気が下がってしまう。

「ふむ、確かに相手の出方がわからない今、近接戦は向こうが圧倒的有利だろうからな…しかし、お前にばかり負担をかけるような事になっては…」

「シグナムさん中距離魔法ありませんでしたっけ」

「無いことはないが少ないからな、中距離戦闘となるとお前に頼る点が多くなってしまいうだろうな。だから私はできるだけ前に出るさ。私が危なくなったら援護してくれ」

「危なくなっても勿論援護しますけど…無理しないでくださいね？」

「ああ、わかっている」

そして、他の作戦の確認も終わり、ミーティングは予定より少し遅く終了した。そして、私の心の中にある不思議な感覚が、再び私に襲ってきた。そのままミーティングルームで立ち尽くしてしまっていた。

さらに、その所為でしかめっ面をしていたらしく、フェイトちゃんが心配して声をかけてきてくれた。

「なのは、大丈夫？何か体調悪そうだけど…」

「ううん、大丈夫だよ！心配してくれてありがとうフェイトちゃん」

「なのは…」隷属の影”に潜伏されている時もそんな風に辛そうだったんだから、無理しちゃだめだよ。もしかしたらまだなのはには“隷属の影”の影響が残っているかもしれないんだよ？」

「わかってるって、ただ…なんだか変な気持ちなんだよね。」

「変な気持ち？」

「うん。何か…私の中にあつた何かが、無くなっているような気がするの」

「ほ、本当に大丈夫？」

「にやはは…多分…。あ、身体的な面は問題ないのは自信あるよ！」

「もう…心配だなあ…」

「ご、ごめん…」

皆、部屋に戻り私とフェイトちゃんだけになったミーティングルー

ムでずっとこのようなことを話していた。

ただ、私の今の心の中の変化は詳しくは言わなかった。別に心配をかけたくなかったとかそういうわけではない。なんだか話す気にはならなかったのだ。

精神的に何か問題があるのかと言われればどうなんだろうか…？自分にもわからない。さつきフェイトちゃんに言った私の中にあつた何かが無くなっているような気がするというのは本当のことだ。ただこれが今の私の心の違和感に関係しているのかもわからない。

こんなにも考えが纏まらないことがあつたかな。…部屋についた。…今部屋に戻ったらまたこのことについて色々考えてしまいそうに入りづらい。でもこの違和感はなんだかとても大切なことのような気もする。

「休憩室に行って何か飲み物買おうと」

休憩室でミルクティーを飲んでみると、そろそろ保安局の拠点世界に到着するというアナウンスが艦内に響いた。

予定より数分速い到着となるが、遂に戦いの時が来たんだ。

INSIDE OUTER

高町なのは心の靄は消えることなく、フェイト・T・ハラオウンの心配もまた消えることなく戦いの時を迎えてしまった。

シグナムは段々と思いついてきた“影”に操られていた時期のことを思い出し、その時のようなことを二度と起こさせないためにも、自身が高町なのはを守ろうと固く決心していた。

そんな一行を待っていたのは、白騎士の熱烈な歓迎であつた。

第25話 作戦開始！なのは対白騎士

14:30にグラナードは時空保安局の拠点の世界『リーリヨ』に到着した。

フェイトによって、整列させられる隊員たち。ついに始まる戦いに各々の緊張がひしひしと伝わってくる雰囲気になっている。

そんな中、高町なのはは小さな声でレイジングハートに話しかけていた。

「レイジングハート、前言っておいたモード最適化できた？」

《はい。しかし、まだどのくらい稼働できて身体に対する影響がどれ程のものかわかっていません》

「そっか…わかった。ありがとうレイジングハート」

《どういたしまして》

そして、フェイトに本局より出撃命令が下されたとの報告がついたため、いよいよ出撃だというところで、グラナードを大きな揺れが襲う。そして響くエマージェンシーのアラート。

ブリッジの通信士から次のように報告された。

「グラナードの真下に魔力反応！恐らく白騎士と呼ばれる魔導師の物かと思われます！」

それを聞いたフェイトは次のように指示した。

「なのは、シグナムは今すぐ出動を！お願いします！」

予想外の出来事に慌てるフェイトだったが、なのはは実に落ち着いた声色で「了解！」と返した。

IN ANNO HA SIDEー

到着早々の白騎士による攻撃…予測していなかったと言われれば嘘になる。でも今までの情報だと保安局に手を出さなければ攻撃はしてこないと言われていた。なのに今回はさっそく攻撃。流石に20回も部隊を出されたら多少の対処は考えてくるか…。

「アクセルシューター！」

《ACCELERE SHOOTER》

「シューター！」

グラナードの真下に仁王立ちしていた白騎士に6つのシューターを放つ。

コントロール…！弾によってスピードを変える変則的な攻撃でどう…！

「なのは！私は地上に降りる。援護を頼む！」

「わかりました！」

シグナムさんが地上に着く前に白騎士がその手に持つジャマダハルを空に掲げ、横に振った。それだけだった。

「なに?！」

シグナムさんの目の前で6つ全てのシューターが爆破されたのだ。一体何が…？

「大丈夫ですか!?!」

「ああ、問題ない。しかしこれは…！
すると下から女性の声が聞こえた。

「ただ魔力弾を斬っただけでその驚きよう。どうやら今回も私の相手ではなさそうだな」

白騎士だ。ここで私はその声に既視感を覚えた。この声どこかで聞いたことがあるような…。

「貴公が白騎士か？」

私が考え事をしてしまっている時、シグナムさんが問いかけた。

「白騎士…：そうだな貴方たちからはそう呼ばれているわね」

「話方が一定ではない…：まるで“影”に操られている時の高町だな…。まあいい、ならば武器を置き話し合おう。グラナードに攻撃したことなどはいったん置いておいてな」

「話し合い?なぜ」

「なぜだど?そんなのは勿論戦わずに済んだら物事の進みが早く、貴公の罪も軽くなるかもしれないからだ」

「へえ…：私の罪ねえ…」

白騎士は少々浮ついた声でそう言った。どうしたというのだろう。

「もう一人の魔導師は話し合いする気はないのか?ずっと黙っているが」

「えっ、わ私ですか？勿論話し合えればそれが一番ですけど…」
「ふふっ…あはははははっ！」

白騎士が突然笑い出した。なにか私は面白いことを言ったのだろうか？

「貴女がそれを言うのは面白い…！面白いぞ高町なのは！」

「!?私の名前を…！」

私が驚いているとシグナムさんが念話で（なのはのことは知っているのは何もおかしいことではない。数多くの事件の解決に貢献したお前の名を知っている者がいたとしてもな）と私を落ち着かせてくれた。

それもそう…なのかな？とりあえずここまで話しているんだから話し合いを…。

「高町なのは、私は貴女との一騎打ちを所望する。」

「何!?!」

「そんな!?!」

「話し合いで終わるとでも思っていたの？私は最初からあなたが来るのを待っていたのよ…私自身の復讐を果たすためにね！」

「復…讐…?私に…?」

シグナムさんがどうするか尋ねてきた。どうしよう…一騎打ちだなんて。しかも私に復讐しようとしている。これはもしかかしくなくても命が危ない。

（フェイトちゃんたちは今どこに?）

（テストタロツサたちはそろそろ拠点の建物につく頃だろう）

（…じゃあ、私一騎打ちを受けようと思います）

（!?!…そうか、わかった。しかし無理はするな。もしお前が危なくなったらすぐに助けられるようにしておこう）

（すいません。ありがとうございます）

「白騎士…さん。一騎打ちお受けします！」

「今の貴女なら受けてくれると思っただわ…」

白騎士は私の何かを知っているような口ぶりだ。でもここで戦い私の中の昂ぶりを抑えることができれば、私の無くなった何かかわか

るかもしれない！それに白騎士の正体も確かめなくちゃ……！

「いこう！レインジングハート！」

《All RIGHT MY MASTER》

「気を付ける…なのは…」

シグナムさんは直前まで私の心配をしてくれた。

INSIDE OUT

IFATE SIDE

「武装局員の方々！施設内の保安局員の捕縛は？」

「現在の四階までの階層にいた保安局員は全て捕縛しました！残り
は保安局長と白騎士のみかと思われます！」

「わかりました！では、行きましょう！」

予想より早く制圧が進んでいる…。白騎士を抑えているだけでこ
うも上手く物事が進むことなの…？

「少々、作戦が上手く行き過ぎていきます。注意をしていきましょう」

「了解しました！」

保安局員をミッドチルダに送るために、何人かの武装局員はリー
リヨから離れている。今局長を逮捕するための武装局員は私を抜い
て6人と、当初の予定より少し多くなった。予定外の順調さによつて
だけど、流星に局長はスムーズに捕縛とまではいかないだろう。

局長室前についた。武装局員たちを見ると、準備はできていると頷
く。

「では行きますよ…！」

私はそういった後フォトンランサーで扉を壊し、武装局員と共に、
室内に突入した。

「時空管理局です！今すぐ武装を放棄し、投降してください！」

局長にバルディッシュを向ける、武装局員は局長を囲むように左右
に三人づつに分かれる。

「今回の部隊はそこそこ手際がいいねえ」

椅子に座りこちらに背を向けたままの局長が呟く。

「武器を捨て、投降して下さい。そして白騎士にもこちらの指示に
従うよう貴女から命令を。」

私がそう言うと局長はニヤニヤと笑った顔でこちらを向いた。局長は思ったより年老いた男性であった。詰襟のぴっちりとした黒い服を着ている。

「白騎士は私の管理下にはいない。故に投降の意思を確認はするとはできないんだあ」

「なん…だと…?!それはどういう事なんですか?!」

「あの子は自身の感情に素直になっていてだけさあ、復讐を果たすための怒りの感情にねえ…」

「復讐?怒り?白騎士は管理局を恨んでいるということですか?」

「違う違う!あの子が恨んでいるのはただ一人。高町なのはだけさあー!」

局長は笑いながらそう言った。白騎士がなのはを恨んでいる…?なんで、どういう事なんだ。

「どういう意味か分からないって顔をしているねえ…」

「貴方はなぜか知っていますか…?」

「勿論!私とあの子は仲間だからねえ…!」

「保安局の仲間として…ということですか?」

「いや、そうじゃあない。違うなあ…」

こつちをおちよくつてきているのは十分わかる。バカにして…!

「何が言いたいんですか!」

「さあ?なんだと思う?」

この人、まともに話す気がないな…!

—SIDE OUT—

—IN ANOHA SIDE—

「ダイバイーン!」

《BASTAR》

私の放ったピンク色の魔力砲が白騎士へまっすぐ伸びて行く。

「当たらないんだけど?」

白騎士はそれを右に避ける。

「わかってたよ、貴方ほどの人だから…きつと避けるって!」

右には設置しておいた魔力球がある。いつもアクセルシューター

とかで使っているものだ。

「！狙いはこつちか！」

白騎士が恐らく右利きであることからきつと右に避けるのではな
いかと思つたんだ。攻撃を避けるときつて無意識に利き手とかの方
に行つてしまいがちだから。

白騎士が右利きという予測ができたのは、両手武器を使っているか
らわかりづらかったけど、魔力弾を撃つとき、必ず右手で撃つていた
から。

「…防がれたな、なのは」

シグナムさんがそう呟いた。

「そう…ですね…」

眼前の煙から、ほぼ無傷の鎧姿で白騎士が出てきた。鎧が堅いのか
…それとも防御魔法が堅いのか…。

「どちらにしても、有効打が与えられていないのは確か…」

「なのは。まだ手を貸さなくても大丈夫か？」

「はい、まだ大丈夫です」

「当たり前でしょ、私が戦うのは高町なのは、貴方だけよ。貴方だけ
をずつと待ち続けていたんだから！」

私を待ち続けていた？ いったいどういう…。

「それつてどういう事？ なんで私を待っていたの？」

「貴方は覚えていないでしょうね！ そんなだから私は復讐を誓つた
のよー！」

「だから復讐つて何のことなの！ 私が一体貴方に何を…！」

「うるさい！ 貴方は何もわからず私に殺されればいいのよ!!」

白騎士は一気に飛び上がり、私のいる高さに来た。そしてジャマダ
ハルを振りかざす。その刃の部分には魔力が纏っていた。

「くっ！ 早い！」

《protection》

レイジングハートの機転でジャマダハルの一閃を防いだ。

「はああ!! ぶち抜けええ!!」

「!? 一気に威力が上がった…！」

「食らいなさい！炎の剣を!!」

ज्याマダハルの刃に炎が纏う。白騎士は炎の魔力変換資質を持っているの…!?

「うう…!!レイジングハート!!」

《Protection Burst》

プロテクションを爆破させて、白騎士と距離をとる。やっぱり近接戦だと、向こうの方が上手だ…。

「全く、よく知恵が回るわね…そこに関しては流石といってあげるわ」

「にやはは…ありがとう…」

「だけど、体力はもうギリギリみたいね」

確かに、白騎士の言う通りだ。限界というわけではないけど、だいぶきつくなってきた。でもこんなところで諦めるわけにはいかない!まだなんで白騎士が私のことを恨んでいるのかわからないし、このまま負けちゃったらまたシグナムさんやはやてちゃんに迷惑がかつちやう!私がここで白騎士を止めないと…!

「さあ、仕切り直しよ。もう一度私の炎の剣を…食らってもらおうわよ!」

白騎士がまた一気に間合いを詰めてくる。迫る白騎士を見て私は決意した。

「どうしたなのは!避けるなり受け止めるなり、何かしろ!!」

シグナムさんが心配してアドバイスをくれる。でも大丈夫!…多分だけだ。

「レイジングハート!!例のモードを!」

《OK MY MASTER》

《MODE FALLEN SET UP》

第26話 白騎士の正体

《MODE FALLEN SET UP》

「何…!？」

白騎士が急停止した。むしろ少し下がっている。そりやあ警戒するよね。だって…

「黒い球体に身を包んだ…だと…!？」

シグナムさんも驚いている。そう、これは私とレイジングハートが編み出した必殺技!

《Burst》

レイジングハートの掛け声を合図に私を身を包んでいた黒い球体がひび割れ、爆散する。

「…!その姿…」

「なのは…」

私のバリアジャケットは黒く染まり、その姿は完全に“隷属の影”に取り込まれていた時の私だ。シグナムさんの表情が強張る。それもそうだよ。シグナムさんにはいい思い出ないものね。でも白騎士も距離をとって、さっきまで程しやべりかけてこなくなっている。

「この姿は私の中に残っていた僅かな“隷属の影”をレイジングハートが最適化してくれて実現した新たな力…モードフォーレン。まだ安定はしないけど白騎士さん、貴方と対等にそして話を聞かせてもらえるようにするため、この力を使うよ」

「…忌々しい…」

「えっ…?」

「忌々しいって言ってるのよ!その姿が!」

「この姿が…?」

戸惑う私に、白騎士は再び間合いを詰めてくる。…この姿に忌々しいと言う程恨みを持っているのって…。白騎士の正体って…まさか、いや…でも…。

「行こう、レイジングハート…。ザンバー!」

《ZAMBERMODE STAND BY READY》

レイジングハートがザンバーモードへと変わる。ピンクの魔力刃をもつ大剣へと姿を変える。

「貴方が接近戦…!？」

この姿の私ができるを使うことを知らない…。やっぱり白騎士の正体は…あの子だ…!

ジャマダハルとザンバーがぶつかり合う。私は受け止める形になったが。このモードは私の近接格闘能力を底上げしてくれるので、意外と辛くはない。

「ザンバーは使えなくなっていたはず…なぜ？」

(このモードの時だけ、レイジングハートにザンバーモードの機能が追加されるんです)

「そういう事か…」

とシグナムさんの疑問にすっかりではないけれど答えながら、白騎士と鏢迫り合いを続けていた。

「念話しながらで私を止められるとでも…!!」

急に魔力が…上がった!?なんでこんな急に、それも大幅に魔力が上がるんだ？

「ごめんね…！集中するよ！ここカラね！」

しまった。声にノイズが入りだした。もう限界なのかな…。じゃあ、短期決戦だ!

「はあア嗚呼ああ!!刀身爆発!!」

《Burst Zamber》

白騎士と私の間でレイジングハートの魔力刃が爆発する。これはフェイトちゃんが「隷属の影」を倒す時に使った技だ。ここではちよつと間を取るのに使わせてもらおうよ!

「ぐっ！小癩な真似を！」

爆発が思った以上の効果を見せてくれた。白騎士の右膝が地面についたのだ。今がチャンス!

「スターライトオ…!」

《Starlight Zamber Breaker》

「ザンバーブレイカアアー!!」

「何だと!？」

私と白騎士の距離は爆発のおかげで20mほど開いた。この距離からの収束砲撃はいくら強い白騎士でも避けるのは容易ではないはず。

この砲撃分の魔力をどうやって短時間で溜めたかというところ、このモードを維持する魔力を全てにチャージにまわしたら一気に溜まったんだ。なので、この砲撃が終わったらモードフォーレンは解けてしまう。

そうこうしているうちに、ピンク色の砲撃は左側に避けようとした白騎士を飲み込み、大きな爆風が巻き起こった。

「近くにグラナードがあるんだぞ!なんて無茶を…なのは!!」

上からシグナムさんの怒号が飛んでくる。そういえば私の真後ろにグラナードがあるんだった。忘れてたよ。にやはは。

「ごめんなさーい!」

「謝るなら真面目に謝れ!」

シグナムさんのごもつともなお説教を聞いていると、爆発の中心地にある煙の中から、ゆらりと立ち上がる人影が。白騎士だ。まだ…まだ倒せないの…?…倒す…?…なんで私こんなに倒すことに躍起になっっているんだろう。昔の私は倒すことを目的に戦っていただろうか…。もちろんそんなときもあるにはあるだろうけど、常にそう思っていたのか、という話だ。

「やってくれたわね…。なのなあ…」

白騎士の辛うじて聞こえる声は息も絶え絶えといったところだった。やはり収束砲撃を受けたらさすがの白騎士も疲労はくるんだね。安心した。

「まだ、やりますか?もう貴方に戦えるだけの体力は無いように見えるけど」

「そんなのアンタも同じでしょ…!忌々しいあの姿じゃなくなっているし、魔力もかなり限界なんじゃないの?」

私のモードフォーレンは確かに解けている。しかし、魔力的に限界

かといわれればそうでもないのが事実だ。

「私はまだ大丈夫ですよ。魔力的にも身体的にも。でも貴方は…もう限界でしよう?」

「…ホント、バカ魔力ね…」

私の心とは裏腹に戦いたくないような言葉を紡ぐ口。なんなんだろうこの違和感…。やっぱり“隷属の影”の影響が未だに強く残っているのかもしれない。

「こうなったら…奥の手よ…」

「えっ…」

そう言った白騎士は赤い魔力光に包まれ、身長が縮んでいった。

「変身魔法を使っていたのか!」

シグナムさんに言われハッと気が付く。そうだったんだ…。

縮んだ白騎士はシグナムさんほどだったものが私と同じくらいの背丈になり、急にこじんまりとした印象を与える。

「ここから…ここからよ…」

ブツブツと独り言を言っている、白騎士。そして突然、常に着けていた頭部甲冑を取ったのだ。

「いくわよ。なのは」

「…!?やっぱり、貴方だったんだね…」

―SIDE OUTER

―FATE SIDE―

この目の前にいる飄々とした男。時空保安局局長が言った白騎士がなのはを恨んでいるという言葉に私は答えを出せずにいた。

「まだ、わからないい? まあしようがないのかなあ、君はその時忙しく動き回っていたしねえ」

「動き回っていた? ここ最近で私が忙しかったのは…“隷属の影”事件…」

「お、じゃあなんで白騎士が恨んでいるか分かったかなあ?」

「…もしかして、白騎士の正体って…」

「もう、そこまで考えがいったんだねえ。流石フエイト・テストタロツサ!」

「うるさい！今私の中の白騎士候補は魔法を使えないはずなんです！でも白騎士は確かに魔法を使っている。でも、もしなのはに恨みを持つとしたらあの人しか…。」

「君は忘れたのかい？君が吹き飛ばした公園の近くの海から発見された謎の結晶型のロストロギアを」

「結晶型のロストロギア！しかし、あれは管理局が嚴重に保管を！」
「別にあれは君たちの世界だけで見つかったものではない…！このリーリヨでも見つかったんだよお！」

局長は何が面白いかはわからないが大笑いしながらそう言った。この世界でもあのロストロギアが見つかったのか…。だからここを拠点に。

「あのロストロギアはねえ、魔力を持たない人間にい、魔力を与える力を持っているのさあ！」

「なん…だと!?それじゃあ…あの人が魔法を使えるかもしれないということ…!?!」

「さしずめ魔法石とでもいうかなあ。あれはいいよ、うんいいものだ。ただの少女だったモノを、白騎士と言う復讐の悪鬼に変えてしまうんだからあ」

再びニヤニヤとしながら話し始めた。

「ただの少女だった…じゃあやっぱり、白騎士の正体は…アリサ…アリサ・バニングス…！」

「せいにかあい！大正解だよお！」

「貴方は…！貴方という人は…！どこまで腐っているんだ!!」

アリサが行方不明になったのはこの人が病院から誘拐したんだ。アリサを！アリサを使って魔法石の実験をするために…!!

許さない…。

「許さないぞ!!」

「じゃあ、私を捕まえてごらんよお！君にならそれができるんじゃないのかいい?」

やってやる…アリサを狂わしたこいつを…捕まえて見せる…!!

—SIDE OUT—

「やっぱり、アリサちゃんだったんだね…」

「なに…!?なぜバニングスが、お前が魔法を…?」

「シグナムはちゃんと驚いてくれていたみたいね。なのは、アンタは別にそんなでもないのね」

「いや、驚いてるよ。シグナムさん同様なんでアリサちゃんが魔法を使えるのか、なんで保安局にいるのか。まだ何もわかっていないもの。ただ私にわかったのは、私の黒いバリアジャケットを見て忌々しいと言って、私がザンバーを使うのを知らないのは、私が“隷属の影”に取りこまれた直後に怪我を負い入院していたアリサちゃんかすずかちゃんだけだったことくらい。」

「全く知らないわけではなかったけどね。アンタのザンバー」

「私がアリサちゃんの手を切った後、痛がつてる中で見たの?」

「少しだけね。まあそんなことはどうでもいいわ…今重要なのは、アンタへの復讐を完遂すること!それだけよ!」

白騎士改めアリサちゃんが大きく叫ぶ。どういう訳かさつきからアリサちゃんは全く間合いを詰めようとしたり、そもそも攻撃しようとしてこない。

ここまでの話を聞くに、別に戦闘を止めようとはしていないみたいだけど。

「アリサちゃん…もし、もしこのまま戦闘を続けちゃうと、どんどん罪が重くなっていつちゃうんだよ?止めよう?もう戦闘なんて…」

こう私がアリサちゃんを諭した時、アリサちゃんから信じられないような言葉を言われた。

「そんなこと言って、あたしわかってるんだからね。アンタが口ではそんな事言っているけど心では微塵もそんな事思っていないだつてね!」

「!?な、なんでそう思うの!?!」

「当たり前でしょ、だってアタしも“影”ノ力を使っているんだから」

「そ、その声のノイズ!」

「…テスタロッサか？…そうか、わかった。どうもバニングスの様子がおかしいと思っただら…なのは！テスタロッサから連絡で奴には“影”が入り込んでいるらしい！」

ふと横を見るとシグナムさんがいた。フェイトちゃんもどうやら白騎士の正体に辿り着いたらしい。

「はい、今私もわかりました。アリサちゃん自身がそう言っていたのと、声に入るあの不快なノイズ。確かにアリサちゃんには何かしらの“影”が入り込んでいますようです」

「そうか…！」

「シグナム、降りてきたところ悪いンダケどこレまで通り私が望むのはなノはとノ一騎打ち。邪魔しないでモラエル？」

「…そう言われてもな、私とてただ見ているだけというわけにはいかない。」

シグナムさんは毅然とした態度でそう答える。ここまですっと黙って見てくれていたんだもんね。さすがにこれ以上は…一騎打ちはダメだよな。

「二応高町もそう望んだため一騎打ちをさせたが、これ以上は流石に許可できない。まがいなりにも今お前はテロリストの仲間であることを忘れるな。管理局はテロリストの要求を呑んでしまつてしまつては問題だからな」

「既に一回呑んでるのはイイの？」

「だから、これ以上は呑んだことになるということだ」

どうやら、シグナムさん的には一回目は私が望んでそうしたからアリサちゃんの要求を呑んだ内に入らないらしい。

「ふーん。じゃ、いいわ。このままいかせてもらうから」

そう言うと、アリサちゃんの周りの空気がガラッと変わった。何か…来る…！

「何をするつもりだ！バニングス！」

「つまり、シグナム！貴方を倒せばなのはと一騎打ちできるわけでしょう！ダカラあたしノ奥ノ手！いくわヨ!!」

アリサちゃんは両手に持っていたジャマダハルを背中 of 左右の肩

甲骨辺りに取り付けた。一見するとロボットのブースターの様だ。

「アトはこうするだけ……！」

そしてジャマダハルの三本あるうちの中心の一本の刀身が抜け、剣となった。もう片方のジャマダハルからも中心部分の刀身が抜け剣となった。

「二刀流か。だがそうなったところで私に勝てるだけでも？」

私もそう思っていた。二刀流で、さらにジャマダハルと比べると軽量化がなされているのはわかっていたが、それだけで勝てるほどシグナムさんは弱くない。それにここからはアリサちゃんにとっては二対一になるんだ。どうするつもりなんだろう。

「フォームチェンジ！天！」

とアリサちゃんが叫ぶと背中の中の刀身が二本になったジャマダハルが漢字の『天』を作るように開いた。しかしそのままでは『天』の下の線が無い、と思っていたら、背中から火が出て、アリサちゃんは背中に『天』を背負うようなバリアジャケットに変化した。

「アリサちゃんの背中に『天』が……」

「心なしかバリアジャケットの色も少し赤みがあったようだな……高町氣を付ける、恐らくあの姿は奴に入り込んだ“影”の力を解放する姿だろうからな。」

「はい、わかりました……！」

私とシグナムさんは眼前に両手に剣を携え、背中に天の字を持つアリサちゃんと戦う覚悟を決めた。もし“影”に意識まで乗り移られていたら、私のように乗っ取られていたら……助けなきや……！

「さア、第二ラウンドよ……二人とモ……！」

アリサちゃんはどうつろな目でそう言った。

第27話　なのはの心と　『断罪の影』

「さア、第二ラウンドよ…二人とモ…!」

アリサちゃんがそう呟くと、両手の剣を前に突き出す。その刀身に炎を纏わせる。

「来るぞ…なのは!」

「はい!」

《Protection Powered》

《Panzergeist》

「そんな防御魔法!無駄無駄無駄無駄!!」

勢いよく突撃してきたアリサちゃん。右手で私を左手でシグナムさんを攻撃する。プロテクションを張ってはいるけど…!確かにこれは…。

「ここにきて魔力が増大している!?なのはと戦っている時もあったが、なんなのだこれは!ぐっ…!」

レヴァンティンでアリサちゃんの剣を押さえているシグナムさんの呟き一つ仮説ができた。

「も、もしかしてこの急激な魔力量の変化、『影』の特性なんじゃ…っ!」

「フッフ、マダ余裕そうじゃない?ナノハあ!」

ぐっ!しまった…プロテクションに少しづつだけヒビが入ってきた。このままじゃ押し切られる…!シグナムさんはまだ大丈夫そうだ…。恐らくこれはさつきまでの戦っていたかの違いだろう。私はあと数秒で破られるだろう。どうする…どうやったら…アリサちゃんを助けられる…!…ん?たす…ける…?私今助けるって…。そういえば戦う覚悟を決めた時も助けるって…。

あ、ああ、ああ…そうだ。そうだった…!私は…私が今まで戦ってきた理由は…!」

—SIDE OUT—

—FATE SIDE—

「うおおおお!バルディッシュ!!」

《Photon Lancer》

「ファイア!!」

「当たらないねえ!」

フォトンランサーはウネウネと動く局長には何一つ当たらなかった。まさしく「影」の様に避ける局長に、射撃魔法はまるで意味をなさなかった。

なんで…!なんで!私はずっと…!いざという時に!

「次はどうするう?近接かい?もっと強い射撃、砲撃で来るかい?」

砲撃…なんて…こんな周りに他の局員がいる中で使えるわけがない!射撃だけでもギリギリの手なのに!

なら次は接近戦。でも当たる可能性は低い…。やるしかない、か。

「ザンバー!」

「近接かあ!いいねえ…!でも「断罪の影」たるこの私にい、ただの人間の君が勝てるのかなあ?」

「「断罪の影」…。それがあなたの名前なんですね。「影」の名前は全て隷属というわけではないのですか?」

それを聞いて私は攻撃をピタリと止めてしまった。

「もちろんさあ!六つの「影」に六通りの名前があるう」

「六つ!?「影」はそんなにいるの…?」

「君のお友達である高町なのは「隷属の影」、私「断罪の影」、そしてアリサ・バニングスの…」

そこまでで局長は黙ってしまった。

「どうしたんですか?早くアリサに入った「影」の名前を教えてください!」

「ただこのまま教えるんじゃないやあ、なんかつまらないよねえ…」

「何をふざけたことを!早く!」

なぜこうも自分が焦っているのかはわからなけど、局長に対して私は強く催促する。

「そもそもここまでの会話である程度予測はつくはずだよ?アリサ・バニングスは高町なのはに対して何をしようとしているか、それ

をもう一度考えれば、おのずとわかることさあ！」

局長は急に魔力弾を私に向かって撃ってきた。ここまで完全に話を聞くことに集中していた私は不意を突かれ、ダメージを負ってしまった。

「ぐっ、がはっ……！ひ、卑怯な……！」

「卑怯も何もないさあ。ここは君にとって敵の本拠地だよ？警戒しない君がいけないのさあ」

くっ、でも今のうちにアリサの「影」について考えなきゃ。戦いながらでも、動きながらも考えるんだ。アリサはなのはに何をしようとしている？確か復讐だったはずだ。復讐は恨みを持った相手にやるものだ。ということは恨みの影？でも何かしつくりこない。なにか私の中の奥底から違うって言われているような気分だ。

恨み：恨みの根本って何だろう。誰かを恨んで、その復讐を果たそうとする人は、ほぼ本とか物語の中では怒りで表現されているよね。恨んでいる対象の人物への怒り、それが復讐の力となっている。ということは、怒り：怒りの影……？

なんか近くなってきた気がする……。

「はあ……はあ……！もしかしてアリサの中にいる「影」は怒りの影、ですか？」

局長の猛攻をどうにか抑え、答え合わせのような聞き方をした。

「いいねえ、惜しいい！だがそこまで考え付いたならあ、もう教えてもいいだろう、答えは怒りを少し言い換えた「憤怒の影」さあ！まあ正解でいいでしょうねえ！」

「「憤怒の影」……。あと三つあるんですよね……その名前ももしかしてクイズみたいにするつもりですか？」

私は息も絶え絶えに、局長に聞く。あと三つの「影」の名前がわからない。それにここまで「影」やその事情に詳しいのなら、誰に憑依したかわかっているはずだ。それも聞きださなくちゃ！

「それについては言えないかなあ……！そもそも二つの所在は本当に私知らないし、最後の一つだけは絶対に言えない存在の「影」だしねえ……。きつと君たちもすぐに出会うだろう。その圧倒的な「影」

に。ここから生きて帰れたらねえ」

圧倒的な…「影」？一体何が圧倒的なんだ。

「とにかく…！貴方を捕まえ、全てを聞き出します!!」

「それは無理さあ、私は捕まらない。君にも、誰にも」

局長の右人差し指から魔力砲が出ているのにその時私は気付かなかった。気付いたのはザンバーで斬りかかろうと、突撃した時だった。

「しまっ…！」

その魔力砲は私の腹部を軽く貫通した。やってしまった、あの時みたいに、なのはが「影」に乗っ取られた時の初戦みたいに、私はまた失敗するのか…？私は薄れゆく意識の中でそう考えていた。

い、嫌だ！そんなの嫌だ！私は「隷属の影」を倒せたじゃないか！あの「影」を倒せて今回の「断罪の影」を倒せない道理はない…！でも奴に攻撃は何一つ通らない。…「隷属の影」は面白いからシグナムやヴィータを洗脳したと言ってた。これは「隷属」は戦いをゲームの様に楽しんでいた、ということなのではないか？つまり「隷属」はこの「断罪」の様に「影」として戦うのではなくあくまでも一人の戦士として戦っていたのかもしれない。

しかし今回の「断罪」は指揮官だ。「憤怒の影」という別の「影」まで操って…。魔法攻撃は全く当たらない…。もしかして「影」の力が無いと倒せないのかな…？

でも「影」の力って…なのはみたいになるかもしれないし、アリスサの様になるかもしれない。やっぱり…今回ばかりは…ダメ、なのかな…。

(…けて…たす…け…て…)

誰だろう…誰かが私に話しかけてくる。でも、この声どこかで聞いたことがあるような…。

(ねえ…たすけて…たすけてあげるって何度言ったらわかるのよー!!)

わあ!?急に大きな声で念話しないでよ…。助けてあげるって…一体君はどこの誰…なの…？

(私？私は「不屈の影」！さつき「断罪」が言っていた所在のわ
かない「影」の一つよ！)
なん…だと…!?

第28話 レイジングー猛き心ー

“不屈の影”よ、“不屈の影”覚えておいてね)

う、うん…：ていうか今の状況がわからないんだけど…。私お腹を撃ち抜かれて、意識を失いかけて…：そこから、どうしたんだっけ。

(今は私があなたの意識を保っているのよ。このままじゃ私ごと死んじゃうしね)

し、死ぬ!?そんな…。

(だーかーら！私が助けてあげるって言ったでしょ！全く…) “隸属”の時も全然声聞いてくれないし…)

“隸属”の時…？も、もしかして私とはやてが話してる時に聞こえた『フェイトちゃん』って声、“不屈の影”が言ってたの？

(そうよ…) “影”は“影”の力が無いと倒せないから、私が力を貸そうって言ってたのに！)

で、でも私このままで倒せたよ?“隸属の影”。

(完全には倒せてないわよ。私たち“影”は“影”に倒される以外の倒され方をしたら、憑依者に種を残すの。復活するためのね)

種…。！まさか、なのはの中には！

(まだ、“隸属の影”はいるわよ。着々と復活する時を待ってる) そんな…あれだけやって倒せてないなんて…。

(だからこそ、私が力を貸してあげるって言ってるの！私は“隸属”や“断罪”、“憤怒”と違って人の身体を乗っ取ったりしないしね)

え、そうなの？てつきり“影”はそういうものだと思ってた。

(そもそも乗っ取る奴等が、私たちを作った親を殺してこの世界に来たの。私が来たのはあいつ等を止めるため。私と“忠誠の影”がね)

“忠誠の影”…：二人だけで止めに来たの？そんな無茶な…。

(しようがないでしょ！六つの“影”で人の心の善意を司っていたのは私たちしかいなかったんだから…)

そっか…：じゃあ、とりあえずあの局長…：“断罪の影”を捕まえるた

めに、力を貸してもらおうかな…!

(うん…!任せなさい!!現実に戻ったらバルディッシュにモードチェンジって命令するの。そうすれば私の力を使えるわ!)
わかった!…ここ夢の中だったんだね…。

(ああ、うん。そうよ)

「はっ!危ないところだった…!」

「おやあ?今ので死んでない…。どういう事だい?」

「どうもこうもないですよ!…いこう、バルディッシュ…!」

《Yes sir》

「何を…するつもりだい?」

“断罪”は未だ呆けた顔でこちらを見ている。周りの武装局員は私を心配そうに見ている。ここからは…ここから優勢に持つていくのは私の番だ!!

武装局員に逮捕の準備をするように念話し、私はモードチェンジの準備をした。カードリッジロードだ。

武装局員からは大丈夫か聞かれたが、心配ないことを伝えた。

「じゃあ、行きますよ”断罪の影”…。バルディッシュ!モードチェンジ!!」

《Yes sir MODE RAISING GET SET

》
「モードチェンジだとお!?なぜ、なぜ君がそれを使える!?それは”影”が、”影”がいないと使えないはず…!」

私を白い球体が包み込む。

「私にも憑依していたんですよ。”影”が…。その名も”不屈の影”!」

「”不屈”…あいつかあああ!ふざけるなあ!」

「どうやら”不屈”は嫌われているらしい。まあ、そんなことはどうでもいい。私のバリアジャケットが変化していく。黒いレオタードの部分や手袋は藍色に。マントは表が白、裏が青になった。

「すごい力…。これなら!」

私はバルディッシュをザンバーにして、“断罪”に突っ込んだ。これ以上、好きにはさせない……!

「覚悟！でやあああ！」

ザンバーを“断罪”の部上に向かって振り下ろす。“断罪”の避けるスピードを越えたこの斬撃は確実に“断罪”の脳天に直撃した。

「うぐおあああ！なんだこの速さは!?!」不屈“ 貴様フェイト・テスタロッサにどんな能力を……!”

“断罪”の質問に答えてもらうために、私は“不屈の影”に意識を貸した。

「……サンキュー、フェイト。“断罪”！私がフェイトに渡したのは別に何か特別な能力でも何でもないわ」

「何!?!じゃあこれは……」

「そもそも私には特殊能力なんてない。私ができるのは純粋な身体能力の強化と戦闘センスの向上、魔力強化だけよ」

「な、なに!?!何が『だけ』だ!そんな、身体能力や戦闘センス向上、魔力教化を一気に行うだと……!?!そんなもの、インチキ以外何物でもない!勝てない、我々“影”は貴様に勝てないではないか!?!」

「勝てないのは当たり前じゃない。私の役目は“影”の討伐なんだから」

「じゃ、じゃあお前は“影”を倒すために生まれた“影”だとしてもいいのか!?!奴は我々の反乱を、预期していたとでも……!?!」

「私が“影”を倒すために生まれたのは肯定するけど、あんた等の反乱を预期していたかは私にだってわからないわ。ただ、私がいるという事はそうなんじゃない?」

……意識が私に返ってくる。意識を渡していたとはいえ会話は聞いていたんだけどね。……“影”たちの会話で気になったことがいくつかある。一つはなぜ、“不屈”が与える力だけで“影”たちが勝てなくなるのか。そしてもう一つ、“影”たちの製作者は何を目的に“影”を作ったか。

他にも色々あるけどとりあえずこの二つが特に気になる疑問。

「さあ、お喋りは終わりだ。“断罪”、このまま貴方を逮捕する!」

「逮捕だとお…？できるわけないだろう！」影”を持つ君にならともかく、時空管理局の他の局員に私を抑えられるわけがないだろうう！」

「だから、ここであなただを無力化するんですよ。」

“不屈”が貸してくれたこの力なら…！できる！」

「舐めるなよお…この“断罪の影”をおお!!」

真正面から、突っ込んでくる。どうやら、先ほどまであった余裕は私がモードチェンジしたことによって完全に無くなってしまったようだ。

…恐らく“断罪”も誰かを乗っ取っているのだろう。何とも哀れに思える。別に乗っ取られた人に罪はない。だけど自分の意思とは関係なしに情けのない顔を見せてしまっている。“断罪”も、ただ一度の予想外でこうも壊れるとは…哀れ…という他ない。

いつもなら思わないようなことを考えているのは、少なからず私も“影”の影響を受けているからだろう。つまり、“不屈”は今日の前の人物に哀れという感情を抱いているのだ。

まあ、私自身わからない感情ではない。私はむしろ可哀そう…かな？

「プラズマ…スマッシュャー！」

「フォトンランサーが当たらなかつたくせにい、懲りずにまた射撃かあい！」

「当たりますよ、これは」

プラズマスマッシュャーの金色の光は真つすぐと“断罪”を包もうとする。しかし、“断罪”は横に移動し避けた。

「ほらあ！当たらない！」

しかし、プラズマスマッシュャーは、少し進んだところで急転回し、“断罪”を背後から攻撃した。完璧なコントロール、直撃だ。これが…

“影”の力…！
「ぐおおおお…!!こんな、こんなことが…あつてたまるかあ…!私
が負けるなどおおお！」

どんどん冷静さを欠いていつている。逆に私はどんどん心が落ち

着いてくる。今何をすべきか、次にやるべきことは何か、すぐに浮かんでくる。

そういえば今さっき“断罪”が言っていたこと“隷属”も似たようなこと言っていたな。余程自分の能力や力に自信があるんだろう。

「追撃……ハーケンスラッシュユ！」

バルディッシュユがザンバーをすぐさまハーケンに変え、放つ一撃。この斬撃は“断罪”の腹部に直撃し、“断罪”は「ぐえ……」と眩き倒れこんだ。

終わりはあつけないものだった。“隷属”の時と同じで少々不安が残る。しかし、これも“不屈”が力を貸してくれたからだ。本当にありがたい。

そして、“断罪”にはストラグルバインドをかけた。“不屈”曰く、“影”も一応魔力生物に分類されるようで、効果は十分にあるそうだ。つまり魔法を無効化する拘束の仕方をすればいいわけだ。

六人の武装局員たちが“断罪”のバインドが解けないように、慎重に運んでいく。私も途中までついて行くけれど……やっぱりなのはたち心配だ。一回報告したきりだったもんね。

リンディ提督曰く、戦闘場所がコロコロと変わっているらしく、一筋縄ではいっていないらしい……。

そして、武装局員をグラナードまで送った後、私はアリサとなのは、シグナムが戦闘を行っている場所へ、急いだ。

「なのは……シグナム……どうか無事でいて……！」

第29話　なのはの償いと騎士の恨み

時間は少し前に遡る。フェイトが“断罪の影”から“影”の情報について聞いている頃。

なのはたちはアリサの猛攻に、グラナードから何とか離れようとするしかできず、一向に無力化することはできていなかった。

しかし、その戦いの最中、なのはは、自らが戦う理由、目的を思い出した。悲しむ人を救うため、悲しむ人の涙を止めるため、自分の魔法が届く距離にいる人たちを救うため。

そんななのはの思いは、“隷属”に仕込まれた種によって歪められていたのはの思考、感情が解放されたのだ。

今、なのはが思うのは目の前の親友を、大切な友達を救う事。

—NANOHA SIDE—

アリサちゃんを助ける…！ そうだ、いつだって私はそうしてきた！目の前で助けを求めている人もそうでない人でも、手を差し伸べて何か手伝えることがあるはずだって言ってきた！だから今回も変わらない。手を差し伸べよう。アリサちゃんに！

「だいぶっ！グラナードから離れたな…っ！」

アリサちゃんの攻撃を受けながらシグナムさんがそう言う。

確かにグラナードからはだいぶ離れた。でもまだアリサちゃんを助けるための方法がわからない。

「結構離れましたけど…！…アリサちゃん！戦闘を止めて…！」

「嫌に決まっついていルでしょう！それにこの天は止まらないのよ！ア
ンタの命を…奪うまで！」

「アリサちゃん…！」

「バニングス！目を覚ませ！いくら恨んでいようと、なのははお前の親友だろう？」

シグナムさんも諭しに入る。

「親友？だからドウしたっていうの！あたしの復讐ノ前にはそんな事些細なことではかないわ！」

「バニングス…貴様…！それ以上、怒りに囚われるな！怒りに囚わ

れてしまったら、周りの大切な物が見えなくなるぞ！」

「別にいいじゃない、あたしが今見るべきはなのは！復讐の対象であるのはだけよ！」

そう言い切ると、両手の剣の炎を竜巻の様にして、シグナムさんを吹き飛ばした。私はシグナムさんの背後に魔法陣をいくつも張り、クッションの様にシグナムさんを受け止めた。

「大丈夫ですか！」

「ああ……すまない！」

シグナムさんはまた飛び出して、アリサちゃんに斬りかかる。私はアクセルシューターを牽制として放ち、アリサちゃんの気を逸らせ、シグナムさんの攻撃が通りやすいようにアシストをしている。これは、今までの戦闘で疲労した私を回復させようというシグナムさんの作戦だった。恐らくアリサちゃんはこの作戦に気づいているだろう、私が万全の体調になったら一気に攻撃をしてくるはずだ。完璧な私を完膚なきまでに叩き潰す……きつとそれが彼女の復讐なのだ。

「本当に、本当にいいのか！なのはを殺しても！なのはを殺したとて、貴様のそれほどの怒り収まるわけでもあるまい！」

「収まらなければ、その時はその時よ！とりあえずあたしは今、なのはを殺す！それだけよ……」

「そこまで貴様を怒らせるものは何だ？なのはが一体お前に何を……？」

シグナムさんが、その怒りの根本を質問する。私は気になってはいたが何か怖くて、聞くことができなかつた。無力化して、お話しできるようにになってから聞こうと思っていたことを今、シグナムさんが口にした。

「シグナム、知らないの？じゃあ教えてアゲル。」

アリサちゃんは攻撃の手を緩めず剣をたたきつけるように、レヴァンティンを攻撃している。

「あいつはネー！私の左手を斬った後にアタしのお腹をその手で突き刺したのよ！」

それは、私が「隷属の影」に乗っ取られた時に行った。私の罪だっ

た。

「あの時のなのはは『影』に乗っ取られていたんだぞ！その罪すら高町に背負えと……！」

「いいんです、シグナムさん……」

「なのは……!？」

私は、自分を庇おうとしてくれているシグナムさんを止めた。これはきつと私が向き合わないといけない罪だから。

「アリサちゃんの復讐の理由……それだったんだね……」

「ええ、そうよ！何？そんな事でもか思ツタ？だつタとシたらなお許せないわね！あたしのあの時の絶望感、誰もいない病室で目が覚めた時左の手首から上が存在しないときの悲壮感！アンタにはわからないでしょう！」

……わからないわけではない。決してそのアリサちゃんが受けた体と心の傷の痛みがわからないわけじゃない。でも、私はそれを与えてしまった。たとえどんな理由があろうと、与えてしまった事実是不変ではない……。

「……私には……わかるよ……アリサちゃんの痛み……」

「はあ!?何言ッてンのよ！アンタにわかるわけないでしょう！適当なことを……！」

「適当なことじゃない。……でも、わかっていたとしても、同情や理解は私がしたことの償いになつてならない……」

「わかつてるじゃない。じゃあ、シんでくれるかしら?」

そう言っているアリサちゃんの攻撃は止まっていた。

「ううん、死ねない。いや死なない。死んでしまったら、本当に償うことができなつちゃうから。……私の償い、それは生きてその罪を背負う事。決して死ぬことじゃない！」

「なのは……」

「もつともらシイコと言うじゃない……どうやら『隷属』の影響はなくなりなくなってきたようね……」

アリサちゃん……。まだ戦おうとしている。剣を構え今にも私に突撃をしようとしている。

このまま戦っちゃっていいの？まだ、助ける方法すら見つからないのに…。

「バニングス。あれを聞いてもまだ殺すつもりなのか？」

「ええ、もちろんよ。『隷属』の影響がなくなっただけで、やることは変わらない！しかも殺せばあいつはもつと苦しむとわかってやる気がムシロ増したくらいよ！」

「アリサちゃん！……これ以上戦うのはよそうよ！お互いに傷が増えていくだけだよ…」

「イイじゃない、あたしはアンタを苦しメたいのよ！傷が増えてくれればそれに越したことはないわ！」

私だけならまだいい…でも、アリサちゃんにも傷は残るんだよ…？これ以上友達と戦いたくない…喧嘩したままでもいい私気持ちなんでもわかってくれないの…なんで…。

「なんで、わかってくれないの!？」

私がそう叫んだ時、空から金色の光が私とアリサちゃんの間を通り過ぎた。

「!?な、なによ！」

「まさか、テストロツサか！」

上を見上げると、そこにはバルディッシュをハーケンモードにしたフェイトちゃんがいた。

「よかった…なのはもシグナムも無事だったんだね…」

「テストロツサ、保安局の方はどうなった？」

「局長と局長…全員逮捕したよ。もう時空保安局は実質壊滅した」

フェイトちゃんがそう言った後、アリサちゃんの方を改めてみるとアリサちゃんはフェイトちゃんを睨んでいた。

「フェイト…アンタまであたしノ邪魔をしに来たノ？」

そう言われたフェイトちゃんは、少し黙っていた。

「何とか言いなさいよ！」

「うるさい。アリサの声で話しかけられないでくれる？」

「ふえ、フェイトちゃん？どうしたの一体…アリサちゃんにそんなことを言うなんて…」

私はフェイトちゃんの言った言葉に動揺してしまった。フェイトちゃんが起こっている？でもフェイトちゃんは怒っていてもそんなこと言うかな…？

「いい、なのは？シグナムも。あそこにいるのはアリサだけどアリサじゃない」

「…!?テストタロツサそれはつまり…！」

「そう、あれは“影”。その名も“憤怒の影”。憑依者の怒りのエネルギーを利用する“影”だよ」

アリサちゃんが…“影”に乗っ取られていた…？じゃ、じゃあ…。「じゃあさつきまで、アリサちゃんがどれだけ説得しても、戦闘を止めようとしなのは…今もなお戦おうとしているのは…」

「全部、“影”がアリサの人格を乗っ取っているから。つまりなのはの時と同じ、アリサの意思なんてない。あるとしても、奴のエネルギー源となった発端の怒りだけ」

「バニングスの意思がないか…。なのはを何より殺そうとしているのは…」

「それは多分だけど…なのはを殺すことで、アリサ本人はきつと“影”を恨む。その恨みをさらに自分のエネルギーにしようとしているんじゃないかな？」

フェイトちゃんはこつちがビツクリするくらい、“影”について詳しくかった。局長から聞いたのかな…？

「スゴイナア…。褒メテアゲルヨ。大当たりサ…ニシテモ、ヨク局長ヲ倒セタネ、彼モマタ、“影”ダツタハズ」

アリサちゃん…いや“憤怒の影”はさつきまで出ていたアリサちゃんの声を止め、隷属に完全に支配された時の私のような、話す言葉全てにノイがかかっているような声で話し始めた。どうやら本当に、今までの演技だったようだ…。でも、それでも私の償いも、決意も変わらない…。そう思っているとフェイトちゃんが自信に満ちた顔でこう言った。

「“断罪の影”でしたね。確かに苦戦しました。しかし、私はその戦いであなたたち“影”と戦う力を手に入れた！」

「戦う…」

「力？」

私とシグナムさんは顔を見合わせて疑問符を浮かべた。

すると、フェイトちゃんはバルディッシュを三回ロードさせて叫んだ。

「モードチェンジ！」

《Yes sir MODE RAISING GET SET

》

そして、フェイトちゃんは白い球体に包まれた。しかし次の瞬間にはその球体は割れ、中から、色が変わったバリアジャケットを着たフェイトちゃんが現れた。

モードチェンジ：私とレイジングハートが考えたものとなんか似てるな…。

「!?…ソノ姿…成程、戦闘向キジヤナイ奴が敗レルワケダ」

「テストarroツサ、その姿は…」

「これは、私に憑依していた」不屈の影に力を貸してもらった姿。モードレイジングです！」

「お、お前にも」影が憑依していたのか!？」

「はい。でもこの子は大丈夫ですよ。私たちに協力的ですから！」

「そうなのか…?」

協力的な「影」なんていたんだ。つまり、あの姿のフェイトちゃんがいればアリサちゃんを救うことができるかもしれない…!でも今のままじゃきつとフェイトちゃんの足手まといになっちゃう…それなら…!

「フェイトちゃん!私も一緒に!」

「え、なのは。」「影」は「影」の力が無いと完全に倒せないし、無力化もできないんだよ?」

「大丈夫!」

私にもモードあるから…!

《MODE FALLEN SET UP》

私のバリアジャケットが黒くなる。私のモードフォーレンも使え

ば確実に助けられる…！」

「な、なのは!?それは…」

「これは私のモード！モードフォーレンだよ！」

「や、やっぱり…なのはの中にまだ“隷属”が居たんだ…ああ…何てこと…」

急に、フェイトちゃんが落ち込みました。どうかしたのかな？

「我ヲ無視スルトハイイ度胸ダナ…！」

“憤怒の影”は強い口調でそう言った。

「おっと、なのはに驚きすぎて忘れていた…。じゃあなのは、一緒にやろう。でも無理はしないでね」

「うん！わかった！」

“憤怒の影”と対峙する。アリサちゃんを救うための戦い…ここからが本番。絶対に取り戻して見せるよ…アリサちゃん！

第30話 “影”との融合

「駆ケロー炎剣ーアマツー！」

“憤怒の影”が双剣を振ると、私とフェイトちゃんを目がけ炎の柱が飛んできた。

「いくよーなのはー！」

「うんー！」

私とフェイトちゃんは左右に分かれて同時攻撃をする作戦に出た。“憤怒の影”は魔法を撃った場に立って動いていない。恐らく受け止めるつもりなんだろう…。私は三つのシューターを用意して突撃をした。

「はあああ!!！」

私のザンバーは右手の剣で抑えられてしまった。

「でやあああー！」

フェイトちゃんも斬りかかる。しかし、私と同じように左の剣で抑えられてしまった。用意しておいてよかった…ここがチャンスだ！

私はシューターを“憤怒の影”の左手に向かって撃ちこんだ。

「ホウ…！」

“憤怒の影”の左手はバランスを崩し、フェイトちゃんのザンバーが腹部に当たる。

「ナイス、なのはー！」

フェイトちゃんは当たったザンバーをそのまま振りぬぎ、“影”のバリアジャケットには大きな傷ができた。その切れたバリアジャケットから見えたのは、肌ではなく、黒く蠢く何かだった。

それは映像で見た私の時と同じ現象だった。つまりアリサちゃんの身体はあの中に…！

「やっぱり、そうなっていたか…。なのはの時と全く同じ、でもあの時は“隷属”が私を吸収しようとしたから中に入れたんだよね…今回はどうしよう…」

「無理やりってわけには…行かないもんね…」

「…アリサにも被害が及ぶかもしれないからね。でも、どうする…」

？」

そんな悩んでいる私たちをみて“憤怒の影”は笑っていた。大笑いではない、クツクツクと堪えるような笑い方だった。…そういえば私が切ってしまったアリサちゃんの左手…なんであるんだろう。“影”が不便だから、そこだけ作ったのかな…？

「才前等ハ、マダコノ身体ノ娘ヲ助ヨウトシテイルノカ？…ソウカ、ソウカ…。ナラバ今カラ、ソノ望ミ、希望ヲ…絶ツ…！」

「何!?!何をしようというんだ…？」

「望みを絶つ…あつ！まさか…！」

「どうしたのなのは？なにか思い当たることが…？」

「もしかして…アリサちゃんと完全に融合するつもり…？」

「ヤハリ、一度憑依サレテ肉体ノ所有権ヲ奪ワレタダケアツテ、知ツテイタカ」

「ど、どういう事なの？なのは」

「フェイトちゃん、私が“隷属の影”の中にいる時、抜けだそうとして失敗したみたいなこと言ったの覚えてる？」

「え、ああうん。それで私が連れて逃げようとしたら沢山の“隷属”が出てきて中に戻そうとしてきて…」

「そう、その戻そうとする行為、あれが融合なの。私は三回逃げようとして、少しずつ融合させられていった…。 “隷属の影”は完全融合すれば、誰にも負けないって、よく言ってた」

「という事は…完全融合って、“影”たちにとっては一番早い強化方法…!?!」

「マ、ソシナトコロダ！見テナ！コノ我が完全体ニナル所ヲ！」

「そんな事…！させない！」

フェイトちゃんが物凄いスピードで“憤怒の影”に近づいていた。全く私には見えない速度だった。あれがモードレイジングの力。凄…い…。

「飛竜一閃！」

すると後方からシグナムさんの飛竜一閃が私の視界を横切った。

「シグナム!?!何を!?!」

フェイトちゃんも突撃を止められ、さらにレヴァンティンで巻かれて私の隣まで戻されてしまった。

「テストロッサ、気持ちはわかる、だが奴の背中を見てみる！」

「あの天の炎がどうかしたんですか？」

「お前は気付いていないようだったが、あれがお前に向かっていたのを私は見た。推測ではあるがあれは自動防衛システムの様なものではないか？」

私も気づかなかった…そっかあの天はブースター以外にも用途があつたんだ…。

「そ、そんな…じゃあアリサが融合されていくのをただ黙って見ていろって言うんですか…!?!」

「そんな事誰も言っていない。奴の融合を防ぐため私も援護する。高町も手伝ってくれるな？」

「勿論です！」

「一人で抱え込むだけでは解決しないこともあるんだぞ、テストロッサ」

「わ、わかってますよ！じゃあ仕切り直して、行きましょう！」

「おう！」

私たちは一気に“憤怒の影”に突撃した。先ほどから“影”が静かなのは、内部で融合を始めているからだろう…。早く、早く助けなきゃ！

そして、シグナムさんの読み通り、背中の中は、私たちにその炎を向けた。どうやら剣の様に鋭くなっているようで、こちらの防御魔法を軽く切って切る。

「面倒くさい仕掛けだな…だが！」

シグナムさんが立ち止まり、「紫電一閃」が放たれる。それにより“

憤怒の影”までの道が空いた。

「今だ！なのは！テストロッサ！」

「うおおお!!!」

「やあああああ！」

さつきとは違うザンバー二本による同時攻撃。私とフェイトちゃ

んの斬撃は確かに“影”に当たった。当たったのだ。

だけど、当たった場所から見えたのは黒いものではなかった。肌。人間の肌だった。

「そ、そんな…!？」

間に合わなかったの…?という思いが私の中に立ち込める。

「チイ…」

しかし、“影”が次のように言ったことで、私たちが間に合っていないことを証明した。

「才前等ア！完全融合マデアト少シダツタトイウノニ！」

「完全融合まであと少し…?なら！」

「なのは!？」

私はもう一度、“憤怒の影”に向かって振り下ろしたままのザンバーをそのまま振り上げ攻撃する。この攻撃は、防がれてしまう。しかし、この攻撃で“影”がどのくらい融合できているかがわかった。

「急ニ来ルジャアナイカ…!」

「成程…礼を言うぞなのは!」

「え、どういう事なんですか?なんでなのはは攻撃を…」

「なのはは“影”がどのくらいバニングスと融合したのかを確かめたのだ」

「…!反応速度を見たの…?」

「だろうな。見たところ、左手の反応が少々遅かった」

「はい。なのでまだ左手の融合はできていないんだと思います」

とはいえそれ以外の反応に差が無かったことを見ると…左手以外はまだ融合されてしまったという事…。アリサちゃん…。いや、まだ諦めない。絶対に助けて見せる!

「本当にギリギリだったんだね、融合を止められたのは」

「アリサちゃんは私たちみたいに魔法使えないから…抵抗できないんだよ」

「左手クライ、ナンテ事ハナイ。コノママ才前等ヲ叩キ潰シテヤル!」

「こつちだって、モードがあるんだ!そう簡単にやられない!」

《MASTER Mode fallen 稼働限界時間です。
強制解除します》

「え、そんな?！」

私のばリアジャケットがみるみる白くなっていく。これじゃ…
アリサちゃんを助けられない…!?

「ナノハハ、ドウヤラ終ワリラシイナア。フェイト才前ハドウダ?」

「まだまだ行ける!覚悟しろ!」憤怒!」

フェイトちゃんは再び、「憤怒の影」に接近戦を挑みに行く。「憤怒の影」は今までの戦いを見てきた通り、接近戦が得意なのだけど。フェイトちゃんはそれに負けず劣らずの戦いを繰り返している。

「防戦一方だった私とは大きな違いだな」

とシグナムさんが言う。しかし、この互角の勝負の鍵は「影」の力なのだろう。フェイトちゃんはどうかやら「影」と協力しているらしい。私の制御とは全く違う。私はどうしたらいいんだろう…。目の前で何度も何度も剣で罅迫り合いを繰り返すフェイトちゃんを見て、私はそう思った。今の私じゃ変に手伝えばピンチを作ってしまうかもしれない…。しかし手伝わなくてもいいというわけでもない。私がモードフォーレンになってからおよそ10分…短すぎる。これが協力関係にある者との差なのかもしれない。

《Master モードフォーレンを使えないわけではないのです。あのままでは暴走していたかもしれないのです》

「暴走…」

暴走をしたらどうなるだろう。多分だけ乗っ取られている時と同じになっちゃうと思う。という事は、アリサちゃんを助けられない…。じゃあダメだ、暴走してでも助けられるかわからないじゃ…。なら今私が撮るべき選択肢は…。

「やっぱり…援護射撃…かな?」

邪魔になるかもしれない、ピンチを作ってしまうかもしれない。でも、それでも、何もやらずにいるよりは…いい!」

「フェイトちゃん!援護するよ!デバイスバスター!」

フェイトちゃんの真後ろからデバイスバスターを撃ちこむ。

フェイトちゃんはそれを紙一重の瞬間にしゃがみ込んで攻撃を“憤怒の影”に当てる。

「グウ！小癩ナ真似ヲオ！」

“憤怒の影”は反撃として炎の球を私に飛ばしてきた。その数はおおよそ30個。私もアクセルシューターで迎え撃とうとした時

「飛竜一閃！はあああ!!」

シグナムさんが、全て撃ち落としてくれた。

「お前は、テストロッサの支援に集中しろ！なのはへの攻撃は全て私が防ぐ！」

「あ、ありがとうございます！いくよ！フェイトちゃん！」

「ありがとうなのは！シグナムも！」

私とフェイトちゃんで“憤怒の影”を追い詰めていく。アクセルシューターを使い、“憤怒の影”の足元を崩し、フェイトちゃんの斬撃が左手に当たる様にする。デイバインバスターで空へ逃げようとする“影”を止めたりもする。私が支援している間、フェイトちゃんは着々と“影”にダメージを負わせていた。既に左手で剣は持てないくらいには追い詰めている。

「ハア…ハア…。二対一デココマデキツイノハ、流石ノコンビネーションダト、誉メテヤロウ…」

「まだ、そんな口を利けるとは…！しぶとい！プラスマスマツシャー！」

今度はフェイトちゃんが射撃魔法を“影”に撃つ。“影”は疲労していたのか全く回避行動を

取らず直撃した。背中の中のバーニアはまだ出ていることから、直撃は少なくとも回避できたはず…。

「フェイトちゃん！警戒して！何か来るかも！」

「うん！わかった！…確かにおとなしく直撃したのは妙だな…」

「…ッ！フウ…ギリギリダツタゼ…！」

相変わらず、頑丈なバリアジャケット…“影”のダメージは斬撃の物しか見受けられなかった。…斬撃のダメージだけ？これって…。

（フェイトちゃん、もしかして“憤怒の影”って斬撃とか近接の技

に弱いのかな?)

(なのは、私もちょうどそれを考えていたところだよ。今までなのは支援レベルの射撃、砲撃しかしてないから、現実ではないけどね)(じゃあ、今から、本気で砲撃してみるね…! フェイトちゃんにはできれば時間稼ぎをお願いしたいんだけど…)

(OK! やってみよう!)

よし、じゃあ、久しぶりにスターライトブレイカーやってみようかな…。近接と砲撃、どっちがダメージが多いかでここからの作戦が変わる…かも。

スターライトザンバーブレイカーは、あまりダメージ入っていない気がしたけど…。変に不安定なモードより、安定しているこっちの方がいいかもしれないし、とにかくやってみよう!

「お願い! レイジングハート!」

《All LIGHT MY MASTER》

「チャージ完了まで…あと15秒!」

「! 何ヲスルツモリダ! ナノハ!」

「邪魔はさせない! ハーケンスライサー!」

「チイイ!! 邪魔ダ! フェイトオオオ!!」

「あと5秒!」

「ライトニングバインド!」

「シマッター! コレデハ…収束魔法ノ直撃コース!!」

焦ってはいることから、どうやら完全にダメージを0にするわけではないらしい。この砲撃だとアリサちゃんと融合したところにもあたってしまう…ごめんね…絶対助けるから、その時今までのこと全部謝るから!

「スターライトオ!」

《Starlight Breaker》

「ブレイカー!!」

フェイトちゃんはバインドを保ったまま爆風範囲から離脱。シグナムさんも同様に、援護体制のまま爆風範囲から離脱。

さあ…ダメージはどのくらいなの…?

爆風が収まるが、視界には砂ぼこりが舞う。まだ“影”の姿は見えない。フェイトちゃんとシグナムさんも注意しながら周りを見ている。どこから攻撃してくるとも限らない。

しかし、私たちの目の前には、先ほどバインドを受けた場所から一歩も動かず、立っていた“憤怒の影”が目に入った。

「…フッフ、意外ト大丈夫ナモノダナ、収束魔法砲撃ノ直撃ヲ食ラツテモ」

「射撃や砲撃はあまり意味がないって事だね…」

「うん。…なのはもしかして…」

「モードはタイミングを見計らって使うよ。フェイトちゃんみたい
に自由がきかないし」

「よし、作戦はそのまま、私なのはの援護、なのははテストロッサ
の支援、テストロッサが攻撃のフォーメーションで行くぞ」

「そうだね…そうしよう」

フェイトちゃんは少し心配そうな目で私を見た。心配かけちゃつ
たな…まあ仕方ないかな、モードに関しては。私も心配だし。

「でも、まだ、まだ使うべき時じゃない…!」

—SIDE OUT—

第31話 拮抗する戦い

「流石〃不屈〃ダ…！攻撃が全ク緩マナイ！シカシ！ソレハコチラモ同ジ！」

「砲撃だけじゃない…、今までの斬撃によるダメージもあるはずなのに！なんでこうも重い攻撃が…！」

フェイトと〃憤怒の影〃の打ち合いは延々と続いている。互角の戦いにより終わりの見えないものとなってしまっている。〃憤怒〃は背中の中の炎で、なのはとシグナムにも攻撃している。そちらの攻撃も全く緩む様子はなく、なのははフェイトの援護が中々できないでいる。シグナムはなのはを守る為に、天からの攻撃を防いでいるが、その顔には疲労の色が見えてきていた。

「シグナムさん！支援しながらでも、防御はできます！少し休んでください！」

「ここは戦場だ！そんな悠長なことは言ってられん！それに、今〃影〃に対抗できる力を持っているのはお前とテスタロッサだけだろう？なら、それを万全の状態にしろ！どんなタイミングでチャンスが回ってくるかはわからないのだからな！」

シグナムは、攻撃を払いのけながら、なのはに言った。なのはは少し微妙な顔をしたが、納得はした様子でフェイトの支援に戻った。

支援を受けているフェイトはというと、斬撃が全ク〃憤怒の影〃に当たらなくなってしまった。スターライトブレイカーを受けたのにもかかわらず、むしろ受ける前より動きが良くなってきているのだ。スピードはフェイトに追いつけるほどまで回復した。故に、先ほどまで食らっていた斬撃が全く当たらなくなったのだ。

「なんで…！こんな…！」

「ドウシタ？当たらナイゾ？コツチカラモイクゾ…！デエイ！」

〃憤怒の影〃が炎に包まれた右の剣を振り下ろす。その速度は恐るべきもので、〃影〃で強化されているはずのフェイトでもとつきに反応できなかつた。

「フェイトちゃん!？」

吹き飛ばされたフェイトに思わず近寄るなのは。幾重にも重ねた魔方阵でフェイトを受け止める。シグナムにも行ったものだ。

「大丈夫?」

「うん…。ありがとう!」

フェイトはそう言うと、またすぐに“憤怒の影”のもとに、駆けていった。なのはも、空に戻り、アクセルシューターとデイバインバスターのコンビネーション技でフェイトを支援する。

しかし“憤怒の影”の攻撃はどんどん強くなっていくばかりで、なのはの支援も意味を成しているかわからない状態になっていた。バランスを崩すや、避けるのに気を取られたりなどしなくなってきているのだ。この調子だと、いずれnこちらの攻撃が全て効かなくなる可能性がある。そう考えたなのは、次はバインドを中心にした支援をすることにした。デイバインバスターはやめ、アクセルシューターとバインドのみの支援だ。

「唐突に変えちゃうけど、フェイトちゃんごめんね…!」

なのはは、“憤怒の影”が両手で剣を振り上げた時を狙い、バインドをした。作戦は見事当たり、“憤怒の影”は突然のバインドに動けなくなってしまった。

「何?!バインド…コノタイミングデ…!」

「はああああ!疾風!迅雷!スプライトザンバー!!」

フェイトの大型の魔力斬撃は、“憤怒の影”を横に切り裂き、その背後にあつた大きな岩までもが切り落とされた。

「はあ…どう…?」

フェイトは魔力消費の大きな魔法を使ったため、息切れが出てきた。しかし、それでもモードレイジングが解けないのは“不屈の影”とフェイトの相性の良さが成せるものだろう。

「どうやら、切れはしたようだな。まだ生きてはいる、早く拘束を…」

「…コレデ我方終ワルトデモ?」

上半身と下半身に分かれてしまった“憤怒の影”は、まだ戦意を

失っておらず、むしろ先ほどより増していた。

「まだ…戦う気なの…?」

なのは半分になった体の方が気がかりだった。完全融合していないとはいえ、アリサは半分以上融合されているのだ。魔力に変換された肉体に何かしらの不具合があってはならない。故に少し心配になっていた。

「戦ウサア!マダ、ナノハ、才前方死ンデナイダロウ!!」

「まだ、そんなことを…!いい加減にしなさい!」

フェイトが上半身の“憤怒の影”にザンバーを振り下ろす。

しかしその剣先は“影”に届かなかった。フェイトの腕を“憤怒の影”の下半身が止めたのだ。両足を上にあげ、ザンバーを持っている手の降ろす動作を止めている。

「なっ!?!半身が動く…!?!」

フェイトはとっさに距離を取った。

「コノ身体ハ、“影”ダ。正シクナ。影を斬レルカ?斬レナイダロウ」

「融合しても身体の構造は変わらないってこと…?」

なのはがふと疑問を呟く。“憤怒の影”はそれに答えた。

「ドウカナ?確力ニ我ノ身体ノ構造ハ変ワツテナイガ、アリサ・バニングスノ身体ハ魔力トシテコノ身体ニ入ツテイルノダゾ。何モ影響ガ無イトモ言エナイダロウ」

なのははその答えに、違和感を覚えた。その違和感はなぜわざわざ、自らの体の構造について話したのかという点である。これまでの話の中でも、人格が明確に“憤怒の影”になってから、目的などを話し話したりしていたが、今回は自らの弱点を知られるかもしれない話なのに答えた。なのははそれに違和感を覚えたのだ。

「我ハ…不滅ダアアア!!」

“憤怒の影”が叫んだ時、上半身が浮き上がり、下半身の付け根もその上半身の付け根を指し浮き上がった。そして、その二つはくっつき、先ほどまで二つに分かれていたなどと感じさせない回復をした。

「そんな…!?!」

フェイトが目を見開き驚く。

「影」とは何でもありなのか…!?!」

シグナムもまた、その回復力に驚愕していた。

しかし、なのはは一人その様子を見て驚くわけでもなく「憤怒の影」を打ち破り、アリサを救う方法を思いついていた。そして、その方法を実行する気持ちも決まった。

「やれるかじゃない、やるんだ。絶対に…!」

なのはは、モードフォーレンを使うタイミングを見つけたのだ。絶好のタイミングを。

「フェイトちゃん、私が今度は「憤怒の影」と戦うよ。私と交代ねフェイトちゃん」

「な、何を言ってるのなのは!?!今の見てなかったの?それになのはの攻撃はほとんど「憤怒の影」にダメージを与えられないんだよ?」

「ダメージを与えづらいからいいの。安心して、無茶なことはしないから!」

「なのは…わかった。今度は私がなのはを支援するね」

「うん!ありがとう、フェイトちゃん…」

なのはは立ちあがった「憤怒の影」を改めてじっくり見た。その「影」はアリサの形と声をしているが完全に別物の雰囲気と威圧感だ。なのはは息をのむ。そして、先ほど親友に言った『無茶なことはしない』という約束を破ってしまう事を、心の中で謝った。

第32話 ”なのは”の償い

なのはの作戦。それはモードフォーレン時にできたことを思い出した時に思いついた作戦だった。『スターライトザンバーブレイカー』、なのはがとつきに思いついた魔法。想像していたのはフェイトの『プラズマザンバーブレイカー』。想像したとおりの魔法ができたのだ。かつて、射撃魔法を想像し使った時、フェイトのバインドを見て真似した時とも違う。理論も計算も無いところから生まれた魔法。放つ姿を想像しただけで撃った。もう一度できるかと聞かれればその答えは、否。つまり、その場限りの技である。ただ、一度きりとはいえその場で最高の技を撃てるのだ。その最高の技を今度はアリサを助けるために、なのはは使おうというのだ。

「ナノハ、オ前ガ我ニ、ダメージヲ与エルニハ、モードフォーレンヲ使ワナケレバナラナイノダロウ？早くナツタラドウダ」

「今はまだいいの。使うタイミングを決めるのは貴方じゃない」

「ドンナ作戦ガアルカ知ラナイガ、我ハ負ケヌー！」

“憤怒の影”は剣を前に突き出し、突進してくる。突きをしようとしているのだ。背中の天のバーニアによって上げられた凄まじいスピードで迫ってくる剣を、なのはは上に避ける。

上に飛んだところで、“憤怒の影”にバインドをかける。

「チッ！マタコノ手カー！」

なのはのバインドが破られそうになると、支援にまわっていたフェイトがバインドをかけることで、延々とバインドをかけつづけられる。その隙になのはが、モードフォーレンのための準備、カードリッジロードを行う。

「レイジングハート、準備はいい？」

《Yes My Master》

《MODE FALLEN Set Up》

なのはを黒い球体が包み込む。ここまでの稼動限界時間はおよそ10分。それまでに、決着をつけなければならぬ。

なのはの考える魔法は決まっていた。アリサを助け出す、この場限

りの魔法。使えばモードは強制解除となるがそれでいい。

球体が割れていく。モードチェンジが終わったのだ。

「上手くいく…うん…私の想像通りにすれば…大丈夫…大丈夫…」

球体が完全に割れると同時に、“憤怒の影”に突撃する。レイジングハートは杖の状態だ。

その杖の攻撃を“憤怒の影”は左の剣のみで受け止めた。

「ナンダ？ザンバーハ使ワナイノカ？」

「使わないよ、今必要なのは剣じゃない。助けたいって気持ちだけ！」

なのは杖を持った手をより一層強く握りしめた。すると後ろから、フェイトのフォトンランサーが飛んで来る。“憤怒の影”はあえてそれを避けず受けた。なのはもまた避けず、攻撃の余波を受けた。

「なのは!?!どうしたの!？」

フェイトは慌ててなのはに声をかける。しかし、なのはは返事を返さない。

「捨テ身ノ突進力？無謀ダナ…。モードノ時ハ“影”ノ性格ガ反映サレヤスイカラナ!’’ 隸属”ノ様ニ、戦イヲ楽シンデイルノカ？」

「そう見えるの…?別にいいよ…。私の作戦はここからだから!」

「何?」

レイジングハートと剣が接しているところにピンク色の魔方陣が展開する。なのはの魔方陣だ。

「はああああ!!」

なのはは魔方陣に片腕を添え、魔方陣を無理やり“憤怒の影”の腹部に押し付けた。

「ナニヲ…!」

「クリティカルスリップアウト!」

なのはの思いついた魔法。それは、アリサと“憤怒の影”を分離させ、アリサの肉体を自らの魔力と分離した時に内部から出る魔力で再構築させるというもの。この魔法はアリサが“憤怒の影”に人格を乗っ取られ、半分以上“影”と融合している場合にのみ効果を発揮する魔法。

「ナ、ナンダ：!?!コレハ：!?!」

“憤怒の影”の腹部に付けられた魔方陣からなのはのピンクの魔力とアリサの肉体の情報が入っている赤い魔力が収束していき、段々と人の肉体を形作っていく。

「マサカツ：：：コンナ手ニ出ルトハナ：：ッ！」

“憤怒の影”は空いている右手を使い妨害しようとするが、背後からのフェイトのバインドにより、阻止されてしまう。

「流石ニ、三対一ハキツカツタカ：：？シカシ、我ハマダ終ワツテイナイ：：才前ガココカラダト言ツタ様ニ、我ノ作戦モココカラダ：：！」

「私の作戦もまだ終わってない！」

魔方陣で再構築された肉体は、完璧にアリサの姿であった。融合していた“憤怒の影”の身体は左手を除き、ボロボロと穴が開いたようになってしまった。なのはは、魔法を創造する力を使ったことによりモードフォーレンの制限時間が早まり、強制解除。白いバリアジャケットに戻ってしまった。

「アリサちゃん！」

「アリサ！」

「バニングス！」

なのははアリサを抱え、後方に戻った。そして、三人はアリサが生きているか確かめるため呼び掛けた。何度も何度も。その間、“憤怒の影”に変化がないか確認もしながら呼び掛けた。しばらくすると、シグナムが呼んだ、シャマル率いる医療部隊が到着し、アリサをグラナードへ運んで行った。

「：：私はシャマルたちの護衛に行こう：：ここからはお前たち“影”をもつ者だけの領域だろうからな：：」

「そうですね：：アリサをお願いします。シグナム」

「ああ、しかし、私はあまり役に立たなかったかもしれないな：：この戦いでは」

「そんなことないです！私がアリサちゃんを実体化させている時も、フェイトちゃんが右手を防いでいる間、背中の中の天の相手をしてくれたのはシグナムさんじゃないですか！あれだけじゃない：：今回私

のことをいつも心配してくれて、危ない時いつも助けてくれたじゃないですか！だから役に立たなかったなんて言わないでください！」

「そうか…お前がそう言ってくれたなら、そう思えるよ。…じゃあ、行ってくる。」

そう言つてシグナムは医療部隊と共に、グラナードへ向かった。

その場に残った、なのはとフェイト。フェイトは先ほどのなのはの無謀とも取れる作戦に苦言を呈していた。

「無茶はしないって約束したのにあんな作戦…確かにアリサは戻ってきたけど、言ってくれば、私があの時フォトンランサー撃つたりとかしないで、最初からバインドで支援とかできてたのに…。」

「ご、ごめんね？だってあの時頭に思い浮かんだ魔法を忘れないようにするために必死だったんだもん…。一度でも忘れたらその魔法は使えなくなる同じ効果の魔法は二度と作れないの…モードフォーレンはね」

「ならなおさら…言えるタイミングなかった？」

「念話しようにも、フェイトちゃんはその時前で戦つてて中々言えなかったよ…」

「うーん…それもそうか…でもなあ…」

そう簡単にフェイトが納得してくれるはずもなく、話し合いに五分を使ったあたりでなのはは説得を半分諦めつつあった。

すると、地面に広がって正しく影になっていた“憤怒の影”が立体的になってきた。その形は“隷属の影”の最期の時の姿そっくりである。

「黒くて蠢く何と云って表現したらいいかわからない不気味な姿。あれが“影”たちの本当の姿なの…？」

となのはが疑問をフェイトに聞くと、“不屈の影”がフェイトの口を使い答えた。

「そうであるとも言えるしそうでないとも言える。元々概念みたいな存在だったし。実態を持ったのは貴方たちの世界に来る数ヶ月前くらいよ」

「そうなんだ…。」

「…はあ突然出てくるからビックリした…」

「にやはは、ごめんね。協力関係にあるなら私の疑問にも答えてくれるのかなって思っちゃってさ」

「大丈夫。なのはのさつきのに比べたら驚きは少ないよ」

「ま、まだ引きずるの…？」

“憤怒の影”の口と思しき場所が動き言葉を紡いだ。

「ガググア t w f s…アアア…ヨシ、話セルヨウニナツタゾ…」

「さあ！どうする？あなたの背中の中も、両手の剣も無くなっていくよ。どうやらあれはアリサが中にいる時に使えた技だったみたいですね」

「マア、ソウダナ。否定シナイサ。シカシ！我ハココカラデモ勝テル！」

「凄い自信…！なにかあるよフェイトちゃん！」

「そうだね…！」

身体をウネウネと動かし、なのはの方へ飛んでくる“憤怒の影”。なのははそれを横に緊急回避した。

「危な…いな…！もう！」

「どうやら、なのはの中に入ろうとしたみたいだね…」

“隷属”ヲ宿セタナラ、我モ宿セルトイウ事ナンダヨ。我ト、“隷属”ハ魔力構成ガ似テイルノダ」

「魔力構成の問題で私に入ろうとしたの？」

「なのはは“隷属”と相性がいいってこと…？」

「相性ナド関係ナイ。憑依デキルトイウコトハ、ソレダケデ、ドンナ影”デモ身体ニ入ラレルト言ウ事ダ。フェイト・テスタロツサハ“不屈”ニ防ガレソウダツタカラナ」

“影” ってそんなに限られた人にしか入れないんだ…」

“憤怒の影”がまたなのはをユラユラと揺れながら狙って飛んで来る。

「まだ…っ！モードの時に使った魔力の回復もできてないのに…！」

なのははプロテクションで、“憤怒の影”の突撃を防ぐ。その防い

でいる間に、フェイトが「影」の後ろに回り込み、ザンバーで斬りかかる。モードレイジングの状態のため、「影」に対して攻撃を与えられる。そして、斬られた「憤怒の影」は飛ばされ、近くの岩に叩きつけられた。

「グオオ！コレハ：流石二退却シタ方ガ良サソウダナ：」

「逃がすかあ！撃ち抜け、雷神!!」

《Jet Zamber》

「ジェットザンバー!!」

ジェットザンバーは、影の両足を切り落とした。切り落とされた足は地面に落ち、溶ける様に消えた。

「ギリギリセーフダッタナ！コノママ、サヨナラダ！」

「憤怒の影」は足がなくなつたことを気にすることもなくそのまま、空へ逃げていく。別の世界へ逃げようとしていた。

「くっ！待て！」

「フェイトちゃん！とりあえずバインドを！」

「わかった！」

フェイトは「影」を追いかけながら、「影」の身体にバインドをかける。しかしここでアクシデントが起こる。

《MODE RAISING 稼動限界時間です。強制解除します》

「な：…なんだって!?!どうして!」不屈!…なんで!」

(ごめん：…これ以上は貴女の身体に負担が大きすぎる…)

「こんな時に…!」

フェイトのモードレイジングの強制解除により、「影」に対する効力を失ったバインドは、「憤怒の影」を縛ることない輪になってしまった。

「コレハキテイル！運ガ我ニキテイルゾ!!」

「憤怒の影」はバインドから抜け出し、さらに上空へ逃げていく。フェイトは今からモードレイジングになるための魔力と肉体の回復が始まるため、「憤怒の影」を捕まえることができない状態になってしまっていた。

フェイトの隣にいたなのは、フェイトの隣から一気に加速し、“憤怒の影”に追いつこうとする。

「なのは何を！」

「私が倒すよ！もう一度モードフォーレン使えば倒せる！」

「そんな…!?なのははまだ回復できてないんじゃない？」

「それでもフェイトちゃんよりは回復してる！今この場で倒せるのは！私だけ！」

“憤怒の影”の隣まで追いついたなのはモードフォーレンにチェンジする。しかし、高速の移動により、魔力消費が激しかったのと、完全に回復できていない事が影響し、バリアジャケットとレイジングハートからバチバチと火花が散る。

「ぐう…でもなれた！これなら！」

「何イ！ダガココカラサラニ、速度ヲ上げレバ！」

スピードが上がる“憤怒の影”。しかしなのはも負けじとスピードを上げる。

「貴方を倒すまで…私は止まらない！」

なのははレイジングハートをザンバーにして、“影”に斬りかかる。しかし、互いにかかりのスピードを出し飛んでいるため、剣を振り降ろそうにも狙いが中々定まらない。

「どうする…どうする…」

「時間ガカカレバ、カカルホド、我ノ勝ちガ見エテクル！フハハハ！」

悩むなのはを見て、“憤怒の影”は大笑い始める。ほとんど勝ちを確信しているようだ。なのはのモードフォーレンは時間制限付きで今はさらに短い時間での運用しかできない。“憤怒の影”にとってもう勝ちしか見えない勝負だった。だが、ここで“憤怒の影”は悔っていた。なのはの想像力とモードフォーレンの魔法創造の力を。

「思い…ついた!!こんな時に使える魔法！」

《Standby Ready》

「コノ局面デ魔法ヲ…!？」

「スターライト・エクスプロージョン!!」

なのははザンバーの先をを影に向ける。

「斬フナイ…：ダト？」

そして、先から小さなピンク色の球体が出てくる。それは魔力を感じることが苦手な“影”でもわかるほど高密度の魔力が凝縮されたものだった。

「コレヲ、オ、オ前モ死ヌゾ！コノツ…距離デソソナモノヲ放ツタラ！」

「でも！ここで貴方を逃がすよりはよっぽどいい！！」

「ク、狂ツテイル…！」

「シュート！！」

なのは合図の後数秒の間もなく、高密度の魔力球は爆発した。その爆破は地上にあるグラナードと遠くから見守っていたフェイトの両方が目にするほど大きく、爆風で地上の一部の地形が変わってしまうほど凄まじいものだった。

― F A T E S I D E ―

…気づいたら、周りにクレーターができていた。

私は、とつきにプロテクションを張って何とか堪え切れた。でもダメージを完全に防ぐことはできず、バリアジャケットはボロボロだ。私のことはどうでもいい。今はなのはを探そう。あの爆発はきつとなのはが起こしたものだ。ということなのはは“憤怒の影”と一緒に爆発を至近距離で食らっていることになる。

つまり、今なのははどこかに倒れているかもしれないのだ。

私が、クレーターの中で探していると、シグナムから通信が入った。

『テストアロツサ、無事だったか』

「はい、シグナムとグラナードも無事みたいですな」

シグナムの背後に移るグラナードを見て私はそう言った。

『ああ、だがあの爆発は何だったんだ？一体何が起きた』

シグナムは先ほどの爆発について質問した。私も詳しくはわかっていないけどとりあえずわかることを話した。

「あの爆発は恐らくなのはが起こしたものです。別世界に逃げようとした、“憤怒の影”を倒すために…なのはがまたモードフォーレン

になって創った魔法を放ったものだ」と

『そうか…で、そのなのはどこにいる』

「…わかりません」

『何？』

「なのはは“憤怒の影”のすぐ隣でこの魔法を放ったんです。なので今ここになのはいません。今私が捜索しているところです」

『わかった。私もそちらへ行こう。一人で探すのは時間がかかりすぎだろう』

「で、でも艦の護衛は…」

『医療部隊と一緒に主が率いる支援部隊も来ていたようだな、それは主に任せられる』

「はやてが…わかりました。では私は捜索に戻ります」

『ああ、私もすぐ向かう』

通信は切れた。そっか、はやてたちが来ていたんだ。…急がないと！

「でも、落ちたって確証はない…つまり…宇宙？いやまさかそんな…」

私はクレーターから出て、その周辺を捜索し始めた。

INSIDE OUTER

なのははプカプカと浮いていた。うつろな目で見つめている。その身体は動かない。あの魔法を使った影響だ。バリアジャケットは白い。モードフォーレンはちゃんと解除されているようだ。

なのはは、自分に対し憤りを感じていた。スターライト・エクスプロージョンを発動する時、“憤怒の影”から死ぬぞ！と言われたのに対し、なのはは、それでも構わない。と取れる返事をしたからだ。

なのはは“憤怒の影”との会話の中で、自らの償いは死んでしまっでは果たせないと言っていた自分の矛盾に憤っていた。

結局、心のどこかでは自分は死んだ方がいいのではないかと思っていたのではないか。死ねば色々楽になると考えていたのではないか。と自分を責める言葉が頭の中を占めていく。

「…死んでしまったら終わりってわかってたのに…」

死んでしまったら、償えるものも償えなくなる。なのはにはわかっていて、理解していたことだった。にも拘らず安易に自らの命を捨てるような行為をした自分に憤っていた。

「結局私は…逃げたかったんだ…自分のやったことから…色んな人を傷つけて、心配させて、私はそんな罪の重圧から一刻も早く逃げたかったんだ…」

正直、自分のことをそこまで心の弱い人間だと思っていなかったなのはそんな自分に呆れる思いだった。

しかし、ここであることに気づく。

「この気持ち…隷属の影」が私を乗っ取る直前の時の気持ちによく似ている…この気持ち忘れないようにしよう…もう二度と罪から逃げないように…」

なのはは先ほどまで動かなかった身体が動くようになっていくことに気づく。

「私のするべき償い。その第一歩は、生きること。この罪の重圧を背負いながら生きて、生きて、生き抜くこと。それが私にできる最初の償い。そして私が迷惑をかけてまだ謝れていない、アリサちゃんには、帰ったらちゃんと謝ろう…そして、またみんなで遊んだりしよう…アリサちゃんが辛かったこと忘れられるくらい…」

なのはは態勢を整えて、地上に戻る。ゆっくりと、戻っていく。

― FATE SIDE ―

シグナムと合流した私は、グラナードからもっと離れた場所で捜索していた。

「なのはー！なのはー！いたら合図！なんでもいいから合図してー！」

大声で叫びながら辺りを見渡す。…反応はない。この辺りにもいないのか…！

「なあ、テストアロツサ」

「なんです？」

「そこそこ探して、未だに見つからないということは…」

「シグナム…まさか！」

「成層圏の当たりで浮いているとかは考えられないか？あの爆発だ、上に吹き飛ばされてもおかしくはないだろう」

「えっ…ああそうですね。確かにあるかもしれないね」

「二度グラナードに連絡してみよう、レーダーで何かわかるかもしれない」

「そうですね」

さつきからシグナムに提案されてばかりだな…私…。

『シグナムさん？ちょうどよかった！今貴方たちに通信しようとしてたのよ！』

「艦長、何かあったのですか？」

母さんの表情は別に深刻という雰囲気ではないことから、非常事態というわけではないだろう。

『フェイトさんが最初に探していたクレーターのちょうど上空なのはさんと思しき魔力反応が観測されたの。なのはさんならきつとポロポロになっちゃっているだろうし、急いで伝えなきゃって思ったの』

「クレーターの上空だね、母さん！ありがとう！」

「おい！待て、テストロッサ!!」

『シグナムさんも行ってらっしゃい。フェイトさんをお願いね』

「了解しました、艦長」

—SIDE OUT—

フェイトは猛スピードでクレーターのところまで来た。そして、空を見上げる。目を凝らすと、小さな人影が見える。

「テストロッサ！なのはは！」

「多分、あれだと思います！」

人影を指さすフェイト。シグナムもその指の先に見える人影を確認する。

「私、迎えに行きます！」

興奮気味にシグナムに言う。

「わかった、わかった。そんなに興奮するな。なのはかは近づかないとわからないのだから？」

そう言つて、シグナムがフェイトを見た時既に目の前には居ず、空へ飛び立っていった。

「やれやれ…」

フェイトはみるみるうちに人影に迫っていく。その人影が近づくと共に自分の知っているシルエツになつていくのがたまらなく嬉しかった。

「なのは!!」

嬉しすぎて、遂に叫んだ。

「あ、フェイトちゃん…!」

人影：なのはもフェイトに気づき、返事をする。

母の言う通りボロボロになつた親友をフェイトは受け止め、抱きしめた。ようやく見つけたなのはを離さないように、遠くへ行かないように、消えてしまわないように、強く強く抱きしめた。

その頬には大粒の涙も伝っていた。

第33話 終結後の心の傷

フェイトによって、抱えられたなのはシグナムとも合流し、グラナードへ戻った。グラナードに着くとすぐに、シヤマルが飛んできて、なのはをタンカーに乗せ、医療室に運んで行った。その時、フェイトは少しだけ寂しそうな顔をしてそれを見ていたという。これはシグナムの談だ。

その後フェイトはグラナードが本局帰還のための次元移動に入るため、自室に入れられた。そして、次元航行が安定に入った頃に、フェイトの部屋のドアが開く。

「フェイトちゃん、お疲れ様や」

はやてが、フェイトを労いにやってきたのだ。

「ああ、はやて。はやてもお疲れ様」

「いやいや、私は何にもしてへんよ？フェイトちゃんは何や、“影”に憑依されてるのがわかったり、色々あつたらしいし、そっちの方がお疲れ様やろ？」

「でも、はやてだって、私たちがなのはを探している間この艦の護衛をしてくれていたじゃない」

二人の間に何とも言えない空気が流れる。

「ではどちらもお疲れ様、ということにしましょう。主」

沈黙を破ったのはシグナムだった。

「シグナム、いい考えや。そうしようかフェイトちゃん」

「うん…」

そして、再びシグナムが話し出す。

「そうでした。我が主、バニングスが目を覚ましたようです」

「おお！アリサちゃんが目覚ましたんか！フェイトちゃん、一緒に
お見舞いに行こー！」

「わかった！」

二人は、アリサのいる医療室を目指して駆けだした。

「二人とも、元気だな…。特にテストロッサ。」

シグナムは穏やかな顔で二人を見送った。

場所は変わり、医療室内のベッド。いくつものベッドが並べられているがその一番奥に彼女は寝ていた。アリサ・バニングスだ。

アリサは、なのはと違って目を覚ました時から乗っ取られている時の記憶をハッキリと覚えていた。

ある日いきなり知らない男が病室に入ってきて連れ去られたこと、連れ去れた先でよくわからない宝石を埋め込まれたこと、自分の身体をなのはの様に黒い球体が包み込んだこと、何人もの管理局員を倒したこと、シグナムやなのは、フェイトと戦った事。全部覚えていた。この出来事を忘れられたらどんなに良かったか。

アリサの目には自分の弱さや、行った事の重大さに対する罪悪感、なのに対しての恨みを、怒りを感じてしまった事の後悔、等複雑な感情が入り乱れたことによる涙が浮かんでいた。

「私は…いつもいつも…あの子の足を引つ張つてばかり…今回も私がかもつと…もつと強ければ、こんなことには…!!」

今度はアリサは自分に対しての怒りで頭がいつぱいになってしまっていた。

「アリサ、あまり自分を責めすぎないで…」

「えっ…フェイト…はやても…」

「そうやで、アリサちゃん。もう起きてしまったことはしようがない。過去のことになってしまったんや。今は体調を整えて、これからの事、未来の事を考えるようにしよう?」

「……そう簡単に、切り替えられる訳…ないじゃない。私がしたことは重罪よ?これからの人生、私はこの罪の意識を抱えていかなきゃいけないのよ?」

アリサは涙を流しながら、フェイトとはやてに訴える。

「貴方たちにも…私はこれから罪悪感と共に過ごしていかないといけない…今まで通りの付き合いなんて無理でしょ!」

「それはアリサちゃんの気持ち次第だよ」

フェイトとはやてが振り返ると松葉杖で立っているのはがいた。

「…なのは…」

「なのはちゃん、もう大丈夫なん?」

「隣のベッドに寝ててってシヤマル先生に言われたんだけど、みんなが話している声が聞こえてたから来ちゃった」

「私の気持ち次第って…どういう事？」

「…アリサちゃん、本当は最初に会ったら謝ろうと思っていただけだよ…」

「今はとりあえず、私の疑問に答えて欲しいわ…お願い…」

「わかった。あのね、私は自分が行ったことに対してどう向き合うかは生きていくことで示していこうって思ったの。」

「生きていくこと？」

「そう、生きて罪を背負い続けることが私の償い。死ぬことも罪を忘れることも許さない。それが私にできること」

「その辛いすぎるじゃない…」

「でも私が迷惑をかけた人たちはもつと辛い気持ちになったんだ。それはアリサちゃんもそうだよ。私があの時“隷属の影”に乗っ取られなければアリサちゃんが怒りの感情を覚えることもなかっただろうし…でも傷つけた事実が変わらない。そうなってしまった。だから私は、その事実を受け止め罪を背負う。でも、幸せになつてはいけないわけじゃない、それはアリサちゃんもそう。事件を起こした私と言えることじゃないかもしれないけど“影”に乗っ取られて行った事でもあるから。不必要な罪の意識は持たなくていいの。…クロノ君や管理局の偉い人たちも言ってくれたことでもあるんだけど…」

「え、なのはの事件は管理局の本局には伝えてないんじや…」

「アリサちゃんの事件が“影”関係ってわかった時点で、クロノ君が報告していたんだよ、さつき診察している時に通信で言われた」

「…不必要な罪悪感…難しいわね…結局…」

「だから、必要以上に自分を追い込まないでってこと…。それで自分を追い込んだって、何が残るの？残るのは延々と続く自責の念。私がそうだったように、アリサちゃんも今まで普通に話せていた人から逃げるように生きるの？…自分が計画してやった罪でもないのにそんなに自分を追い込むの？直接的に悪いのは“影”たち。私たちを操った“影”たちなんだよ？」

「…そうね…確かに、私がやったことは自分で考えたことじゃない。起こった事実の罪の意識は忘れずに、事件を起こしたっていう罪の意識で自分を追い込みすぎないようにするってことよね」

「うん、私はそうするよ。…で、アリサちゃん。改めまして、ごめんなさい。」

なのはは、今度は自分のしたことを謝った。アリサの左腕を切ってしまった事、腹を刺してしまった事、そして自らの事件の起こった発端である、友達であるアリサを信じられなくなってしまったことを、打ち明け謝罪した。

「じゃあ、お互いに受け止めあいましょう。私もなのはに身体を直してもらったわけだし」

「そうだね！それがいいよ！」

ずっと黙っていたフェイトが我慢できずに、そう言った。

「フェイトちゃん…今は我慢するべきや…」

「だ、だって、空気が重いから！」

「あははっ…！全くフェイトはしようがないわね」

「あ、アリサ！」

「フェイトちゃん、明るくしてくれるのはいいんだけどもう少しやり方とタイミングが…」

「なのはまで！」

しよんぼりとしたフェイトを横目に、はやてが

「なのはちゃんもずっと立ってちゃ辛いやろ。手貸すから、横になったらっ？」

「ありがとう、はやてちゃん」

「しばらく隣どうしなんだから、色々話しましょ」

「うん！今まで通り、ね？」

「そうね！」

「いやあ…よかったよかった。フェイトちゃんもそう思わへん？」

「あ、はい」

「明らかに元気無くなってるじゃない」

「誰のせいだ?!」

グラナードの医療室では行きの際には聞こえなかった少女たちの笑い声が響いた。その笑い声は廊下まで響き、戦いで疲れたものたちの癒しになっていたことを本人たちは知らない。

そしてリーリオを出発しておよそ二時間、グラナードは本局に着いた。スタッフたちや、なのはたちが艦を降りてくる。

「足元に気を付けろなのは」

「シグナムさんわざわざありがとうございます。でも大丈夫ですよ？ だいぶ松葉杖にも慣れましたし」

「そう言う問題じゃないよ、なのは。松葉杖で躓いたらどうするの？」

なのは、フェイト、シグナムと一緒に艦を降りてきた。

「…それにしても、そこまで長い時間乗っていたわけでもないのに、グラナードを降りるということがなんだか寂しく感じるな」

とシグナムが言うと

「わかります！ なんか…こう…行く時のやるぞ！ って気持ちと終わった後のホツとした気持ちのギャップがあつて、事件解決って雰囲気を感じられて、うれしいんだけど寂しい感じ、わかります！」

となのはが、答え

「確かに計4時間弱しか乗っていないんですね…本当にもっと長い時間乗っていたみたいですよ…」

グラナードとの別れに、感慨深げに話している三人の後ろから、アリサとはやてが降りてきた。

「アンタたち…管理局だと色々な船に乗ることになるんじゃないの？」

「少なくともないやろあ、まああの三人はグラナードに乗る前におーってやってたみたいやから、思い入れがあるんとちゃうかな？」

「あ、主！ その話は誰から！」

「え？ なのはちゃんとフェイトちゃんから、みんなと話している時聞いたんよ？」

「お、お前等あ!!」

「なのは…！」

「フェイトちゃん…!」

フェイトはなのはを背負い、その場から駆け出した。

「こら!逃げ出すな!」

「意外となのはちゃんどフェイトちゃんって、お茶目さんやなー」

「ええ…貴方がそれを言う…?」

そう言いつつもアリサは、再び戻ってきた友情を、心で噛みしめていた。恥ずかしがっているシグナムから逃げるのはとフェイト。隣で一緒に笑っているはやて。連れ去られた時の恐怖を忘れるくらい楽しい気分を感じている。

「お、アリサちゃんもいい顔するようになったなあ。医療室の時は堅い笑顔だったけど、今のは自然な笑顔や!」

「えへへ…そうかな?なら皆のおかげよ。私を救ってくれた皆のね」

はやてはその話をニコニコしながら聞いていた。

「私の中にはまだ魔法石があるらしいし、いつか…みんなと一緒に管理局で働いてみたいわね…」

「え、まだあるん?」

「うん。なんか結構しつかり埋め込まれちゃってるみたいで、逆に取る方が危険なんだって」

中々の衝撃発言をはやてにしたアリサ。流星にはやても驚いたらしく、目をまんまるにしてしまった。

「大丈夫?身体に何か影響とかはないんか?」

あまりに心配になったはやては、慌てて身体への影響について聞く。

「それはわからないって。だからこれから、精密検査するんだから」

「ええ!?!それは心配やー…。何もないとええなあ」

「そりゃあね。何ともないなら私も魔導師になつてみたいわー」

「その時は特訓に付き合うよー!私敵しいけどな」

「ふふふ、お手柔らかにね」

歩きながら話していると、前にシグナムに捕まったのはとフェイトが怒られているのを見つけた。

はやてとアリサはその様子を見て、少し笑い、シグナムたちのもとへ歩いていった。再び、平穏な日常に帰れたことを実感しながら…。

事件の終結から一週間後、アリサの身体の魔法石は身体に何も影響しないことが確認され、アリサは自分にできる償いの形が増えたと、なのはに話したという。

“欲望の影”編 第34話 門出

段々と涼しくなってきたころ、私は再び訪れた平穩を謳歌していた。私こと、フェイト・T・ハラオウンです。一応“隷属の影”事件では私が報告書を担当していましたが、時空保安局事件ではリンデイ・ハラオウン提督が責任者であったことから報告書を書きました。この報告書は、“影”が直接起こした事件では最後になった事件。前二つと合わせて、“欲望の影”事件とも言われる事件の報告書です。

時空保安局の事件から二週間後の事。私、なのは、はやて、アリサは“影”の検査とモードの試運転を行っていた。

なぜ、“影”の検査が行われたかという点、当初なのはだけとされていた“影”の憑依者が私、アリサ、そして時空保安局長と複数人見つかったからであり、二週間かけて管理局員全員を検査した。そして見つかった憑依者は八神はやて一人だけでしたが、もう一人モードを使用できる人間が増えただけでも、残り一つの“影”との戦いに優位に立てる可能性が上がるため、喜ばしいことでもあった。

「モードトロイエ、安定に入ったな」

さらに、“不屈の影”からの情報で、はやての中にある“影”、その名も“忠誠の影”は“不屈の影”と同じ、協力的な“影”であるということもあり、さっそくモードチェンジを行っていたのだ。

「バリアジャケットの色はあんまり変わらなかつたね、白かつたところが黒に、黒かつたところが白になっただけ、フェイトちゃんが一番変わってたって感じかな」

「いや、なのはだと思っよ…だって、バリアジャケットの色だけじゃなくてデバイスのモードまで増やすんだから」

私となのはは、はやてのモードのバリアジャケットの話で盛り上がっていた。当のはやては“忠誠の影”と話をしていた。

「忠誠」さんはどんな能力があるんや？フェイトちゃんの所は特

殊能力ない代わりに、なんや身体能力やら強くするらしいし、“忠誠”さんも何かあるんやろ？」

（そうですねー。私は“不屈”以外の特殊能力やその効力を打ち消すことができますー。私が司るのは守護欲なものでー。守るために他の鎖から仲間を解き放つのが役目ですー）

「へえー…司る欲って何？」

（おや？もしかして、“不屈”や“断罪”は話しませんでしたかー？我々“影”は製作者が持つ欲の力を元に作られているのですー。つまり、私は誰か大切な人を守りたいという感情が元となっているわけですねー）

「結構な重要情報やね…じゃあ、“断罪”や“憤怒”、“不屈”さんは何の欲を司っているんや？」

（“断罪”は支配欲。“憤怒”は破壊欲を司っていますー。“不屈”に関しては私も知りませんー、かなり新しい“影”なので分からない事もありますー）

「そうなんか…まあ、それだけ知れたら儲けものや。ありがとうなー」

（いーえー）

“忠誠の影”との会話を終えたはやては、なのはたちの元へ戻る。

「なのはちやーん、フェイトちやーん。いい情報手に入ったでー」

はやては先ほど聞いた内容を私となのは、そしてさっき来たアリサに伝える。

「司る欲…あれ、はやてちゃん、“隷属の影”の欲ってなに…？」

「あ、聞き忘れてたわ」

「ちよつとー！気になるから早く聞いてよー！」

「わかったわかった！ちよお待っててな」

二人が話している間、アリサとフェイトも会話をしていた。

「私の中にいたのは破壊欲を司っていたのね…だから、なのはを殺すのに執着していたわけね」

「破壊は物理的なモノだけじゃなく、精神的な破壊も含まれているなら、アリサの心も壊そうとしていたんだね。…私のはわからない…」

か」

「直接聞いてみたら？」

「それが自分でもわからないらしくて。司る欲があるのも今知ったんだって」

「なんか、“影”によって知識に偏りがあるのね：私の中には種すら残ってないし聞きようもないけど」

「そう言えば、アリサには残ってなかったんだっけ“影”埋め込む種」

アリサはなのはの“影”の力によって分離されたため、“憤怒の影”が種は消えてしまったのだ。

「でも、なのはにはまだ残っているんでしょ？」

「うん：でも取り除けるようなモノでもないし：そのまま」

「フェイトちゃん！“隷属の影”は戦闘欲を司るんだってー！」

「へー、戦闘欲なんだ。だから戦いたがっていたんだ」

戦いたい：楽しく戦いたいから、私やはやてという、なのはの記憶の中にあつた身近な相手と戦おうとしていたのかもしれない。

それから、私たちは管理局本局のデバイス研究の部署へ向かった。

アリサの臨時デバイスを作ってもらっていたからだ。

「アリサちゃんもこれから管理局のお手伝いしていくのかあ、私みたいに管理局に就職しようって考えてたりする？」

となのはがアリサに聞く。

「いやあ、流石にそこまでは考えていないわ。民間協力者？みたいな感じで」

「あ、なるほどね」

アリサとなのはが話しているのをなんとなく聞いているとはやてが話しかけてきた。

「なあ、フェイトちゃん。これから行くところに確かシグナムとヴィータ来てる？」

どうしたんだろう突然。少し待ってと言った後、端末からクロノのメールを見る。そこにはシグナム、ヴィータが出迎えると書いてあった。

「ああ、うん来てるみたいだよ。それがどうかした？」

「来てるならよかった。実はさつき思ったんやけどな、私のモードで、二人に残っている“隷属の影”の力を解除できるんとちゃうかなって思ってたな」

「そういうことね。確かにできるかも…っていうか“不屈の影”以外に効くって能力ならほぼ確実に聞くんじゃない？」

「そうなんやけど…なんか心配でなあ…」

まあ、わからないでもない。今のシグナムとヴィータははやての言う事は勿論聞くが、なのはの命令も実行してしまうという。それは、未だに残っている“隷属の影”の特殊能力。はやてが隷属の紋章を破壊した時“影”の力を使っていなかったため未だに残っているのではないか、というのはクロノの推論。

おおよそ、クロノの言う通りなんだと思う。しかし、こうやって“忠誠の影”というのがあると考えたと、本来の解除の方法が“忠誠の影”なのではないかとも思えてくる。つまり、“影”の反乱、暴走に対し、“忠誠の影”で無力化、“不屈の影”で殲滅。といったところだ。これが“影”の製作者の意図なのかもしれない。

じゃあなんで“影”は“影”でしか倒せないなんて面倒なことにしたんだろう。なにかそうせざるを得ない理由があったのだろうか？

「ふえ、フェイトちゃん！危ない！」

「えっ…」

私が返事をした瞬間、見事に顔を壁にぶつけた。

「いったあああ!!」

「おお、おでこ押さえてゴロゴロ転がってる」

「こんな古典的な初めて見たわ…フェイト恐ろしい子…!」

「アリサちゃん、それもちよつと古いよ」

私が痛がっているのをよそに、三人は盛り上がっていた。も、もう少し心配してくれてもいいんじゃないかな？

「大丈夫か、テスタロッサ。考え事は構わないが、歩いている時はもつと注意しろ？」

「シ、シグナム…そうですね、これから注意します…」

「はやてー！待ってたぞー！」

「おお、ヴィータ。元気いっぱいやなー」

ヴィータがはやてに抱き着く。いつ見てもほほえましい光景だ。私はこの時、なのはがこの光景を見てほんの少しだけ、悲しそうな表情をしたのを覚えている。

「早速、だがバニングス。お前のデバイスは既にできているぞ」

「えーもう!？」

「マリエルが頑張ってくれていたのもあるが、開発中止になったデバイスを利用して作ったからかなり早くできたらしいぞ」

皆でマリエルさんの元に行く。簡易デバイスが並べられている部屋の奥に、一つレイジングハートのような宝石型のデバイスが机に置かれている。

そして、マリエルさんが出てきてアリサにこう言った。

「これが貴方のデバイス。アリサちゃんにはどうやら魔力の炎熱変換資質があるみたいだから、それにも対応したデバイスにしてあるよ！」

アリサが炎熱変換資質を持っているのは白騎士として戦っていた時の炎魔法を使用していることからわかる。

アリサがデバイスを持ち、マスター認証を始める。

「マスター認証…アリサ・バニングス。術式はミッドチルダ。デバイス名を登録、フレイムアイズ」

どんな形の武器にするんだろう…なんか気になる。

「フレイムアイズ！セットアップ！」

《おっしやあ!》

フレイムアイズって、元気がいいデバイスなんだなあ…。あんな返事するデバイス初めて見た。

そして、アリサはバリアジャケットに身を包んだ。フレイムアイズは、カードリッジシステムを組み込んだ、刀の形となった。

「アリサらしいっちゃアリサらしい形だね」

「へっへーん！それでしょー」

ヴィータがさっそく練習してみようと話している。アリサとヴィータは仲がいい。ここ最近アリサに魔力運用の技術を教えていたのは主にヴィータだ。そのおかげで、アリサは魔法を使い始めて二週間も経っていないのにも関わらず、その腕前は既に一級品だ。

「アリサちゃんとフレイムアイズ、私のモードトロイエ、お互いに今日がデビューや。これから頑張っていこうな！」

「もちろんよー！」

はやてとアリサが決意表明をしている。私はその間に、フレイムアイズの練習や試し切りとモードトロイエの能力をシグナムたちを使うための場所を取ることにした。

さっき使っていたところでもいいかな。…あ、まだ空いてる。じゃあ予約しておこう。

「練習できるところ、予約しといたよ。さっきの場所だけどいいよね」

「フェイトちゃん仕事早いねー」

「ありがと、フェイト！じゃあいきましょー…と、言い忘れると事だった。マリエルさん、ありがとうございました！」

「いえいえー」

シグナムとヴィータも連れて、私たちは練習場へ向かった。…次の事件はこの裏で既に始まっていたのをこの時の私たちは誰も知らない。

第35話 始動

フェイト、なのは、アリサ、はやて、ヴィータ、シグナムは朝から使っていた練習場に再び来てアリサとはやての練習を行うことにした。

アリサはなのはと射撃魔法の撃ち方や、防御魔法の練習を、はやては早速モードトロイエの能力をヴィータとシグナムに使用しようとしていた。

「じゃ、いくでー!」

「来い!はやて!」

「準備はできております」

この能力があれば、いつ、影、か襲ってきてでもドンな能力を持っていても私が皆を守る…もう大切な人と戦わないですむんや…頼むで…。

「スプレームス・サルワテイオ!」

私がそう言うと、ベルカ式の魔法陣が展開し、キラキラとした光がシグナムたちに向かっていく。キラキラした光というんは、魔法もののアニメでよく見かける治癒とかの演出と同じ感じのものや。

「おお…主。私とヴィータの腹部に隷属の紋章が…」

「ちゃんと壊せていなかったって言うんはこの事か!じゃあ、今は上手くいっているって事や!このままいくでー!」

「ありがとうはやて!」

上手くいってる…上手くいってる…。

(そんな焦らなくてもいいのですよー。一度か効果が効き始めればもう失敗することは無いのでー)

あ、そうなん?よかったー…。じゃあ落ち着いて焦らず…クールに

…

「クールに…」

「どうしたんだ…はやて…」

「えっ…声に出てた?」

「う、うん」

そりや恥ずかしいわ。でも特殊能力は出し続けな…！段々目の前
にある紋章が薄くなつていくのがわかる。

そして十分後、遂に隷属の紋章は砕け散り消えていった。

「気分はどんな感じや？ヴィータ、シグナム」

「何か…清々しい…？…っていうか、いつも頭ん中で最優先事項はな
のはって響いていたのが無くなったっていうか…」

「とにかく、ようやく主はやてのみの騎士に戻れた。それは確かだ
す。ありがとうございます…」

「本当…よかったわ…」

よかったよかったと二人と話すはやての目じりには涙が薄っすら
と浮かんでいた。引き裂かれた家族の絆が今ようやく戻ったのだ。
それは涙が出る程嬉しいに決まっている。

「よかったね…はやて…」

私は思っていた事をつい口にしてしまった。まあ、悪いことじゃな
いからいいかな。

「フェイトちゃんもありがとう…。ホンマよかったわ…」

「アリサの方はどんな感じだ？今めちやくちやいい気分だから、あ
たしも試運転手伝うぞ」

ヴィータ…それだと気分良くないと手伝う気ないみたいだに聞こえ
るよ…。でも確かにアリサたちはどんな感じなんだろう。私もはやて
たちの方見てたからわかっていない。

「なのはー！いくわよー！ブレイズハリケーン!!」

アリサがフレイムアイズを展開させたまま身体を回転させると炎
の竜巻が起きる。そして竜巻はそのままなのはの方へ飛んで行く。
なのはの方はプロテクションを張って待機している。

「これって…前方バリアだけでいいのかな…？」

「受ける直前でそれを言うの!？」

なのははアリサのブレイズタイフーンを受け切った。少しだけバ
リアジャケットは焦げてしまったけど。流石なのはだ。防御はお手

の物。

「熱かった…すごいねアリサちゃん…」

「そりゃこのデバイス、フレイルムアイズのおかげでしょ。って…なのはなんか顔色悪くない?」

「え? 本当…? なんだろ…疲れてるのかな…」

「なのは! 大丈夫?」

私も思わず駆け寄る。なのはの顔を見ると少し青白くなっている。確かにあまり体調は良くなさそうだ。

「ご、ごめんね! 体調悪いのに私の相手させちゃって」

「い、いや別に体調が悪い訳じゃ…」

となのは言葉を言い終わる前に膝から崩れ落ちた。

「なのは!?! 本当に何ともないの…?」

「…ねえ、このなのはの症状 “隷属の影” に乗っ取られる直前になんか似てない?」

アリサがなのはに肩を貸しながら言う。言われてみれば確かに…でもなのは “隷属” の種は発芽しないはず…。

そう、なのはの頭に植え付けられた “隷属” の種はモードフォーレンを使う事によって発芽が抑制されているのだ。モードフォーレンは “隷属” の種の発芽の為のエネルギーを使用することによって変身できるシステムらしい。だから、なのはから “隷属の影” が復活するなんてありえない…と私は考えている。

「医務室行こう? なのは」

「え…:うん、わかった」

「アリサ、私はなのはを医務室に連れて行くから、練習ははやてたと」

「わかったわ、なのはをお願いね、フェイト」

私はなのはを医務室に連れて行くことにした。なのはの息は落ち着いているけど、何より顔色が優れていない。早く…早くいかないと。

「なのは…大丈夫かしら…」

「心配やけど、フェイトちゃんが一緒にいるから大丈夫や。アリサちゃんは魔法の練習しよう？」

「…そうね、なのはは大丈夫…！うん！やるわよ！」

「じゃ、やりましょう、アリサさん」

「ヴェータもよろしくね！」

なのはは心配だけど、私は私のできることをやるしかない。さて、私の魔法は基本的に炎を伴うことがさつきまでの練習で分かったんだけど、それ以外の純粋な魔力弾も撃つてみたいのよねえ…。

「でもアリサさんフェイトの魔法を思い出してみてください。フェイトの魔法ってただの射撃魔法でも雷属性ついてますよね」

「ああ、確かに…でも属性対策つてとられやすいんじゃない？」

「そんな事する魔導士って意外と少ないんよ？なのはちゃんはライトニングプロテクションを使えるけど…それはフェイトちゃんと戦うために身に着けた局地的なものだし、そこまで考えなくてもええんちゃう？」

「うーん…なるほど…じゃあ深く考えるのやめるわ」

「じゃ、なのはのアクセルシューター、フェイトのフォトンランサーみたいな万能な射撃魔法の練習しましょう」

「そうね、おねがいするわ！」

「ヴェータもすっかり教官だな」

「そやねえー」

「うっせえぞ、シグナム！」

本当に、この家族仲いいわよね…。…頑張ろう。この人たち見てたらやる気出てきたわ。

「試しに一回撃ってみるわねー」

「はいはい。ちゃんと狙ってくださいねー」

「OK！いくわよ…！フレ임アイズ！」

《おっしやあ！単発の魔力弾だな！魔力制御は任せとけ！》

「頼りにしてるわよ！でやあああ!!」

私がフレ임アイズを横薙ぎの形で振ると、軌跡のように魔力弾が

三発展開された。なるほど、これをヴィータ目がけて撃つのか。

「アリサさん魔力弾の展開上手だなあ」

「うん？お前が教えたんじゃないのか？」

「あたしが教えたのは簡単な魔力の運用の仕方。基礎中の基礎だよ。それを少し応用したものをさっきまでなのはが教えてたんだ」

「じゃああれはなのはの教導のたまものか…すごいな…」

「このまま投げるような感じで…よし、想像できた！いつけえ…」

私がここまで言ったところで目の前の魔力弾が三つとも突如爆発した。

「きゃあ!?な、なによ…」

私は尻もちをついて、その爆発で起こった煙を見ていた。一体何が起こったのか…魔力制御は今回はフレイムアイズに任せていた。つまりフレイムアイズが何かしらのミスをしなければこんなアクシデントは起きない。でも…フレイムアイズには私の魔法の使用パターンをインストールしているからこんな事まず起きないはずなのに…。

「アリサちゃん！大丈夫か！」

「アリサさん！」

「バニングス！」

「あ、ああ大丈夫大丈夫。それより、なんで魔力弾が爆発しちゃったの？私魔力制御は今回はフレイムアイズに任せてそれをお手本にっと思ってたんだけど…」

《言っておくが、俺は何もミスってないぜ。アリサもな》

「…二人とも何も失敗していない…なのに爆発した…じゃあ誰かが攻撃したって事…？」

はやてがそう言った時、この練習場に緊張が走る。…この場に私たち以外の誰かがいる…？

「主！モードを念のため発動して下さい！もしかしたら『影』の手先かもしれません」

「そうやな…モードトロイェー！」

それは、はやてのモードチェンジの為の黒い球体が出る直前だった。はやての身体が練習場の壁に叩きつけられたのだ。私にも何が

起きているノカわからなかった。

「はやてえー！」

ヴィータが駆け寄る。はやては上半身を起こした状態で、ヴィータに止まるよう指示した。

「誰かに突然蹴られたみたいな感覚やった…ヴィータもシグナムも、アリサちゃんも周りに気を付けるんや！」

私たちは陣を組んで周りを見る。特に何か変わったところはない。誰かがいる様にも思えない。もしかしてフェイトがドツキリ…？いやそれなら魔力弾の爆発やはやてを蹴るなんてことしない…。じやあいつたい誰が…。

「意外と勘が鋭いのね。特に夜天の主さん」

「！誰だ！どこにいる！姿を現せ！」

どこからともなく聞こえた声にシグナムさんが厳しく対応する。恐らくはやてが攻撃されたからピリピリしているんだろう…。

「質問が多いわ…全く。いいわよ、出てきてあげる」

「どこから…どこからくるの…？」

私は初めての戦闘であるから、完全に緊張していてあたふたとキョロキョロと周りを見渡しているだけだった。

すると、練習場の入り口の近くにある柱の陰から一人の少女が現れた。その姿に私は見覚えがあった。いや、見覚えがあるどころではない、その姿の人物に私は今日の朝にも会っていたのだから…。

「すず…か…」

「ふふふ…残念。私は月村すずかではない。見た目はそうだけだね」

「つまり、月村の姿を模った…『影』と言ったところか…？」

「ご名答！流石もう二度も『影』と戦っているだけはあるわね。そう私は『影』」

「一体何の『影』か教えてくれる？」

はやてが聞く。『影』は少し高い声で笑うと、こう答えた。

「いいわよ、教えてあげる。私は『束縛の影』司る欲は人の欲そのもの」

「欲そのもの…？なにそれ、アバウト過ぎない？」

「欲なんてそういうものよ…さ、かかってらっしゃい」

『束縛の影』は私たちに戦えと言ってきたているようだ。しかし、今までの『影』との戦いから、こちらから仕掛けると状況的に不利になることが多かった。故に私たちは攻められずに、ただにらみ合いが続いていた。

「…いいわー私がやってあげるー！」

私は震える声を何とか抑えながら、『束縛の影』に伝える。

「アリサちゃん!?!何を…!?!」

どうせ、このままにらみ合っている状態は変わらないし、逃げられもしない…なら、今ここにいないフェイトやなのはが帰ってくるまでの時間稼ぎ…やってやるわよ!

「初陣、行くよフレームアイズ…!」

第36話 折れないハート

アリサ・バニングスト”束縛の影”との戦いは一方的なものになっていた。

たとえ一級の魔導士に教えを乞うてもいざ実戦となると全く練習通りにはいかない。アリサの攻撃は”影”には一度も当たらず、アリサは全ての攻撃を喰らっていた。

「うああ!!」

今もまたアリサが蹴りをくわえられ、床に転げる。この光景を見て、はやてたちは何度も助太刀しようとしたがその度アリサが「大丈夫だから！私だけで大丈夫だから！」と制止されてしまっていた。

「こんなん…ただのリンチャ…戦いでも何でもない！」

「はやての言う通りだよ！なのに…何で…」

はやてが飛び出そうとしたのをアリサは手を前に突きだすジェスチャーで制止させた。

「心配いらぬから…！まだまだ…いけるから！」

《でもよお…流石に攻撃を受けすぎだぜ！もうやめた方が》

「るっさいわね！折るわよ！」

《ひい!?!》

「まだ大丈夫だって言ってるんだから…あんたも付き合いなさいよ…」

「まだやるのー？私流石に飽きてきたんだけど」

「やるに決まってるでしょう！私が立てる限り終わらないわ…！」

アリサはフレイムアイズの刀身を床に刺し、杖のように寄りかかって立ち上がった。

端から見れば、アリサの立ち方は限界のそれだ。しかしアリサの目は未だに諦めてはいなかった。

「なんなの…？あ、もしかして、親友の姿してるからムキになってるの？」

「…そうねえ…確かにそれもあるかも…」

「ふーん。なら親友の姿の奴に殺されなさい…本望でしょ？」

「死ぬってなったら話は別ね。私は死ぬわけにはいかないわ」
「は？なんなの？本当になんなの？ワケわかんない！」

”束縛の影”は明らかにイラついていた。余裕こそまだ十分に感じられるが、先ほどからのアリサとの問答でアリサの目的が読めないことからイラついてきたのだ。

攻撃するポーズから、膝蹴りをしようとしているのはアリサにもわかった。

《プロテクション！》

フレイルムアイズが叫ぶ。

「そんなヘボバリアで私を止められるかあ！」

「ぐっ!!」

アリサは耐えた。吹きとばされつつもなんとか膝をつくことをしなかった。しかし、次の瞬間自分は先ほどいた場所から真逆のところにいた。

アリサは柱に当たり、床に倒れ込む。

「こ、これ…最初にはやてを蹴ったときと同じ…技？」

「そうよ。ま、”影”の憑依者じゃなくなったあんたには反応なんて無理でしょうけど」

近づいてくる”束縛の影”。冷たい目をしたさすがアリサを見つめる。

「本当にわからない…自分より強い仲間がいるのにそれに頼らず、攻撃も一度も当たってないのにいつまでも諦めないで向かってくる…。アリサ…あなた一体何がしたいのっ！」

”束縛の影”が床に倒れているアリサの腹部を蹴り上げる。

「うぐっ…!!」

「アリサちゃん！」

”束縛の影”はその後も何度も何度もアリサの腹部を蹴り上げる。その度アリサは「あぐっ…」「ぐあっ…」など声にもならない声を上げていた。

それに我慢できなくなったシグナムがレヴァンティンで斬りかかろうとしたその時

「大…丈夫…大丈夫…だから…手を…出さないで…」

アリサはシグナムに出来ないよう言った。手を突き出してまで拒否したのだ。

「何を言っている!?このままでは…このままではお前が…!」

「わかってる…大丈夫…本当に…大丈夫だから…」

その証拠かというようにアリサは床に魔力弾を撃ち、自分の身体を爆風によって起き上がらせた。腹部のバリアジャケットは地肌が見え、アリサの白い肌が赤黒くなっている。

「もう!めんどくさいことするわね!!あんなにやったのにまだ仲間を頼らないなんて…」

「貴方が仲間を連れてきたなら考えてあげる」

「強がり言うもんじゃ…ない!」

“束縛の影”の姿が消え、「ない」という声が聞こえた時には真後ろにいた。

「はやっ!?ううっ!」

「貴方に見えるはずないって言ったでしょ!!」

アリサは背後からそのまま蹴られ吹き飛ばされる。そしてこれの繰り返し。

「ああ!くっ…!」

「いつになったら!諦めるのよ!!」

“束縛の影”はその諦めない姿勢に困惑していた。そしてはやくたちも頑なに助太刀を拒否するアリサに困惑していた。この場にいる誰もがアリサの行いを理解できていなかった。

はやては最初、フェイトが来るまでの時間稼ぎをしようとしてるのだと思った。ピンチであれば手助けもできると…。確かに間違っている。アリサの戦っている目的の一つにフェイトが来るまでの時間稼ぎであることは確かなのだ。はやてのモードは戦闘向きではないことが、能力やステータス変化で分かっていることだった。アリサもそれを知っていた。その反対にフェイトは完璧な戦闘向きのモードで後方支援はあまり得意ではない。

それもアリアリサはフェイトを待ち続けている。しかし、アリサが

諦めないのにはもう一つ理由があった。

「がはっ…！はあ…血を吐き出すなんて久しぶり…。」

「舐めてんの？」

「あんたがそう思うならそうなんじゃない？…舐められてる気分はどう…？」

「貴様あ!!」

“束縛の影”はアリサの挑発に乗った。アリサは目の前から消える“束縛の影”を見つつ、自身の背中にフレイムアイズの刀身を回し刀の先を左手で持ち防御の体制を取った。

そして“束縛の影”はアリサの背後に現れるが、蹴りを入れずにその場に立ち尽くす。

「アリサちゃん…防いだんか？あの攻撃を…？」

「一体何がどうなって…？」

「アリサあんた…私の能力が見えるっているの…。」

「別に何にも…？どうしたの、早く来なさいよ…！ほら！」

「はは…そうよね、まさか…この私の力が見破られるなんて…！」

“束縛の影”が消える。今度はアリサは右手の方にプロテクションを張る。“束縛の影”はまた蹴りもせず立っている。そしてその場所はアリサの右手側の方向である。

「あんたどうやって…！どうやってこの力を！」

「別に…何も無いって言うてるでしょ…！はあ…はあ…。」

ここにきて今までの攻撃を受けた疲労が一気に襲ってきた。アリサは危うく倒れそうになる。

「あんたも限界ってわけね…じゃあ今までののは偶然ってことで！」

「チャオ、アリサ！」

“束縛の影”先ほどいた位置から、アリサの眼前に現れ、かかと落としを決めようとする。アリサはもうプロテクションを張る体力が残っておらず、今度はアリサが立ち尽くしてしまっている。

「ぐっ…。」

アリサが覚悟し目を瞑った時、“束縛の影”背後から黒い影が現れた。

「何…!？」

「…ここまでだ！これ以上私の友達を傷つけさせるわけにはいかな
い…!」

モードレイジングに身を包んだフェイト・T・ハラオウンである。
この瞬間に帰ってきたのだ。

「なんか中の様子がおかしいと思ったら…」影〃が来ていたなん
て」

「フェイトちゃん！ありがとう！」

「恩に着るテスタロッサ！」

「なんで、皆はアリサを助けなかったの？」

フェイトの言葉に駆け寄ってきた三人の表情は固まった。別に好
きで手を貸さなかったわけではないが、なんとなく気まずいのだ。

「フェイト…それは私が絶対に手を出さないでって言ったからよ
…」

「えっ、なんで？相手は〃影〃なんだよ？そんな無茶なこと…」

「それが私たちにも教えてくれへんのや…」

「もう、いいわ。フェイトが来たなら…。はやて、私さつき二回〃束
縛の影〃の攻撃を防いだわよね」

「うん…確かに…」

「あれ、最初はすごいスピードで動いてるんだと思っていたの。そ
れに使っている本人が『見えないでしょ』っていうもんだからなおさ
らね…」

「ここまで言う就先ほどまで黙っていた〃束縛の影〃が叫んだ。

「あんたやっぱり私の力に気づいていたわね！」

アリサが答える。

「そのために何度も何度もあんたの攻撃を喰らったんだから…」

「それで、〃影〃の能力は…?」

「あいつ…」束縛の影〃の能力は…時間停止…時を止める能力よ」

アリサがそう言うとフェイトは困惑した。そう、時を止めるなんて
所業は不可能であるはずだからだ。かつて死者を生き返らそうとし

た自らの母プレシアが行おうとしたように、人の死、時間に干渉する魔法など存在しないはずなのだ。なのにアリサはそう断言する。

「本当に…時間停止だとしたらあたしたちどうすれば…」

ヴィータが心配そうに呟く。時間停止、使えるだけで最強の部類にはいる力。それを有しているとしたら今の管理局の魔導士たち全員でかかって勝てるのか…ヴィータはそう思っていた。しかしアリサはこう続けた。

「でもあいつの時間停止はどうかやら無限に止められる訳じゃなく、決まった時間だけ止められるっばいわ…」

「そんな事なんで…？」

「あいつが消えてから攻撃してくるまでの時間を計っていたのよ…そしたら絶対に一分を越えないのよ…毎回律義に一分以内に攻撃してくる…それってつまり一分間しか…時間を止められないってことなんじゃないの…？…どうなの…？…」束縛の影“さん”？

「ぐぬう…！…そうだ…私の力は時間停止…一分間の時間停止だ…！クソ!!」

フェイトは驚愕していた。ついさつきまで魔法の基礎と知識しかなかったはずのアリサがズタボロにされながらも相手の能力を見極めようとしていたからである。アリサを抱えていたフェイトはアリサをシグナムに渡し、笑顔を向けた。

「ありがとう…アリサ。あとは任せて！」

「頼んだわ…はあ…あ、はやて…敵の能力がわかったからこれでモードトロイエの特殊能力が使えるわね…」

「ま、まさかそのために私の手助け断ってたんか!？」

「あはは…それで怪我でもしたら大変だからね…」

「それはこっちのセリフや…！もう…無茶するんはなのはちやんとそつくりや！」

アリサはそれを聞き終わる前に気を失ってしまった。ガクンと首が倒れ、全身の力が抜けている。

“束縛の影”が恨めしそうにアリサを睨んでいる。そして恨みのこもった声で叫んだ。

「アリサアア!!」

「“束縛の影”だっけ？さ、ここからは私が相手だ。残念ながら君の能力は侮っていたアリサに見破られたけどね」

「…ふふふ…あははははは！だからといって、時間停止がそう簡単に破られるものか!!」

“束縛の影”にはまだ余裕があった。それだけ時間停止という力は強く優位に立てる能力なのだ。しかし、フェイトの顔にも全く焦りも心配もなかった。フェイトにはアリサから聞いた対時間停止の秘策があつたからだ。

「私…負けるつもりはないよ！全力全開でいかせてもらう！」

第37話 秘策と対策

「私…負けるつもりはないよ！全力全開でいかせてもらう！」
フェイトはスピードを上げ“束縛の影”に斬りかかる。フェイトの予想通り“束縛の影”が目の前から消える。時間停止を使い死角に回ったのだ。

ここでフェイトはアリサから聞いた秘策を使う。フェイトは自分の真後ろにプロテクションを張り、バルディッシュをハーケンにして構える。

「な…に…!?!」

「やっぱり、アリサの言う通りだったね…」

“束縛の影”の蹴りはプロテクションによって防がれる。アリサより強固な盾は碎かれることも吹き飛ばされることもなく、逆に“影”が跳ね返される。

「ぐああつ！なんで…私の力が見切られているんだ…?!」

「…貴方の能力を受け続けたアリサが編み出した対策のおかげだよ」

「対策？あんな奴に…そんなものを見つけられたのか…!?!」

「アリサを舐めていたからだよ…！アリサはそんなに愚かでも弱くもない！」

フェイトの言うアリサから聞いた秘策。それは時間停止解除の時に起きる僅かな風の向かった方向にプロテクションを張ったり、デバイスで防御するというもの。

アリサが攻撃を受け続けた時“束縛の影”が目の前から消えた時に僅かに風が巻き起こっているのに気づいたのだった。そして自分に向かって風がフワリとふいた時試しに背後にデバイスを回した時、“束縛の影”が攻撃を止めた。そしてその次もそうだった。フェイトもこれを使った。

「なんなのよ…そもそも私は時間が止まっている間に蹴っているはずなのに…！なんで時間停止が解除されたら蹴るところから始まっているの…?!」

「…?どういう事?あなたは時間停止中に私を蹴ったの?」

「当たり前でしょ!!時間止めてるんだから、敵に攻撃するでしょ普通!」

「言われてみれば…。でもこつちからすれば好機だ…!」

「ちい…。変な事態になつちやつたわね…。もう…!」

「バルデイツシュ!ザンバー!」

バルデイツシュをザンバーに変え、フェイトは“束縛の影”に突撃する。目の前から“束縛の影”が消える。時間停止を行ったのだ。

「どつちに風が…あれ…?窓が割られている…?」

“束縛の影”の攻撃はその後来ることはなかった。時間停止をしい窓から逃げたというのがフェイトの予測だった。

そして“束縛の影”が去ってから十分後、管理局の局員がやってきてアリサたちは事情聴取を受けることになった。

その待ち時間にフェイトとはやては“束縛の影”の能力について話し合っていた。

「アリサちゃんのおかげで時間停止を解除する事ができるようになったんやけど…これをどうやれば時間解除に持っていけるんやらか?」

「理論上はできるけど実践するには課題が多いってこと?」

「そや、時間停止解除するには時間停止している間じゃないとできないやろ?でも時間停止中は私は認識できひんし、動けない。じゃあどうやるかっていうと…」

「そこを悩んでいる…と」

「そういうことや…“影”にこの能力を使うことで逆に時間停止を発動できなくすることもできるんやけど…そうなると相手は時間停止で逃げれるから当てることはまず不可能やろなあ…」

「確かに…何か相手にも不可解なことが起きていたみたいけど…それでも強いだろうねあの力は」

「ホンマどうしよ…。にしても私の能力が相手の能力をわかっていないと使えないっていうのをアリサちゃんに教えててよかつたって思ってたわ…この話し合いもアリサちゃんの決死の分析で行えている

んやから…」

「え、そうだったの？」

「うん。“隷属”の紋章は元々“隷属の影”の能力を私が知っていたから解除できたんや。“束縛の影”にはアリサちゃんのおかげで解除できるようになったんや」

「そうなんだ…さっき私が理論はわかってるけどって言ったらんって言ってたじゃない？あの時間停止ってどうやって行っているの？」

「ああ、それはな。空間の動くもの全てを魔力で無理やり止めているんや。自らはその干渉を受けない。だから自分だけ動ける」

「動くもの全てを…」

「そう、分子レベルに至るまで全てや」

「それって私たち一分間心臓止まっているってことになるよね…？」

「せやで？」

「いやいや、私たち死んじやうじゃない？」

「それは魔力による強引な停止やから完全な停止ってわけじゃないんや。だからかすかに死なない程度に動いている」

「ここまで聞いて思ったんだけどこの能力って時間停止じゃなくな…い？なんて言うか…運動停止…？」

「それもそうやねえ…あ、疑似時間停止ってどうや？」

「それいいね！私たちが認識できないのは…突然心臓や血流を止められそうになっているからってこと…？」

「死なないようにするために身体の機能を視認ではなく血流の循環に回した影響やろな」

「なるほど…？」

（はやてーいい事思いつきましたー）

「お、なんやー？何が思いついたんや？」

フェイトとはやてが話していると“忠誠の影”が中からはやてに話しかけてきた。このはやてと“忠誠の影”の会話の中の“忠誠の影”の声はフェイトには聞こえない。もしフェイトと“不屈の影”

が同じように会話した時ははやても、不屈の影の声は聞こえない。

「何を思いついたんだろう…?」

「ああ、時間停止対策の事か!」

（そうですねーいいことを思いつきましたー。）

「どんな方法や…?」

（我々、味方に能力を使うのですー。つまり時間停止…いや疑似時間停止でしたねー。その干渉を受けないようにすればよいのですー。）

「束縛の影」と同じに状況になるってことやな!」

（そういうことですー。一度かければ向こうにはどうにもできませんのでー）

「…なるほどなあ…! それいい案や! ありがとう」忠誠の影!」

（いえいえー。私にも関係のあることですからー）

「どんな案だったのはやて?」

フェイトが話が終わった頃を見計らって、忠誠の影の案を聞く。そしてはやてはその案を説明する。

「なるほど…! それができるなら、一番現実的だ」

「そうやろー! この事情聴取が終わったら皆集めて、やろう!」

「そうしよう!」

そして、はやては管理局員に呼ばれ、事情聴取に向かった。フェイトは、前に事情聴取を受けていたアリサと少し話し、アリサは医務室にいるなのは元へ行くことにした。

フェイトははやてを待つてからなのは元に行くことにした。シグナムたちもまたフェイトと同じようにはやてを待つことにした。

そして、アリサが医務室に行くとなのはがベッドに座り、何か思いつめた目をしていた。

「なのは…どうかしたの?」

「え、いやなんでもないよ…ってアリサちゃんその傷どうしたの…!?!」

「この傷? これはさつき影と戦ってたから…」

「影?!? そんな…私何も感じなかった…。そっかだからフェイト

ちやんいきなり飛び出していったんだ…」

「まあ、体調悪そうだったし仕方ないんじゃない？」

「でも…アリサちゃんがそんなになるまで戦ってくれたのに…私はここにずっと…」

「仕方なかったって言うてるでしょ！全く…私を助けてくれたときはあんなに頼もしかったのに、なんでこんなにしおらしくなっちゃったわけ？」

「べ、別に好き好んでしおらしくなったわけじゃ…！ただ…最近変な夢を見るせいであまり寝れてなくて…」

「それで顔色悪かったのね。その夢ってどんな夢なのよ？眠れなくなるくらいの夢って…？」

「あの…その…フェイトちゃんによく似た魔導士が私の家の上についてね、私が走ってその子を止めに行こうとするんだけど間に合わなくて家が爆発する…で、いつもそこで目が覚めるの…」

「フェイトに似た魔導士？確かに変な夢ね…しかもなのは家を破壊って、穏やかじゃないわね…」

「でしょ？それで朝の三時くらいに起きたりしちやって…」

「全然寝れてなかったってわけね…それならなおさら“影”に気づかないのにも無理はないじゃない」

「でも…」

「もう撃退できたんだから、それに今度の“影”の憑依者はすずかよ？きつと今のあんたじゃ動揺してちゃんと戦えないんじゃないの？」

「すずかちゃんが!?そんな…なんで私の周りの人たちがことごとく“影”に…」

「そう言えば…そうよね。なのは、私、すずか、フェイト、はやて、皆私たちの関係者ね。それだと保安局局長だけなんで私たちと関係ない人なのかしら…？」

「確かに…不思議だね…」

アリサとなのはが話していると、なのはにフェイトから医務室に今から行くという通信が来た。

アリサとなのはは今話していたことをとりあえず考え無いことに
して、フェイトたちが来るまでの間は「束縛の影」についてなのはが
アリサに質問する時間となった…。

第38話　すずかと“欲望の影”

“束縛の影”の襲撃から二時間後、時空管理局から直接アースラス
タッフに今回の事件“束縛の影”事件の担当に任命する連絡が来た。
リンディ提督はその後の動き早かった。地球支部で海鳴市全域に
局員を巡らせ“束縛の影”を徹底的に探し出すことにした。“束縛
の影”が海鳴市にいるという情報はなかったが、“影”が襲った対象
がはやてやアリサだったことから次現れるとしたら海鳴市だと考え
たのだ。

そしてなのはたちも迎撃の任務にあたる事となった。そんな中、ア
リサは一人すずかの家に行くことにした。それは事情聴取が終わり、
一人で飲み物を飲んでいいる時、アリサの携帯にすずかからメールが来
たからだ。

アリサは勿論罫かと思ったが、もし本人ならば自分が戦った“束縛
の影”の姿は何だったのか…それを確かめるため家に行くことにし
たのだった。

アリサはすずかの家の門の前に立つ。スマホを開きメールをすず
かに送る。アリサの鼓動は早くなっていった。奥から出てくるのは
“束縛の影”なのかすずかなのか…。

「はい、結構早かったねアリサちゃん！」

「すずか…すずかなの…？」

「うん？…そうだけど…？どうかしたの？」

「ほら、なのはが乗っ取られたっていう“影”っていたでしょ。そ
の最後の一人がさつき私たちを襲ってきて、その姿がすずかの見た目
だったから…もしかして…？」

「あーそういう事…だからさっきのメールですごく驚いてたのね
…」

「う、うん…。でもその反応だと私の見間違いだったみたいね。な
のはにも伝えとかなきゃ」

「あながち間違いじゃないっていうか…。むしろ正解？」

「えっ…それって…！」

アリサは思わず後ろに飛び距離を取りフレームアイズの待機状態の宝石を付けたペンダントを握る。

「ああ！そうじゃないの！違うのアリサちゃん！私の中にはもう“影”はいないの！抜けてどっかに行っちゃったの！」

「…は？」

「ご、ごめんね？そうなるよね…。えっと…どう言ったらいいのかな…？」

「…よし、リンデイさんとこ行くわよ」

「え…」

「当たり前でしょ！すずかの話信じようが信じまいが、すずかの身体に“影”が入ったのは確かなんですしょ？それなら行くべきよ」

「そつか…アリサちゃんが言うなら…そうするよ」

すずかは一度家に戻り、準備をしてアリサとリンデイ提督のいるハラウン宅へ向かう。そしてアリサはその途中で“影”で分かっていることをすずかに伝えた。

「へえ…結局“影”全体が何を目的に行動しているかはよくわからないんだね」

「ん？各自で自分の司ってる欲を満たしているだけじゃないの？“断罪の影”は何かよくわかんないけど」

「ふうん…。でも欲を満たしたいだけならなのはちゃんを殺そうとする必要なくない？“憤怒の影”はアリサちゃんのなのはちゃんへの怒りを利用してたからわからないでもないけど他の“影”、“断罪の影”って保安局が完全に立ち上げできた時はなのはちゃんに戦いを挑もうとしてたんでしょ？」

「よ、よく知ってるわね…。まあそうらしいわね取り調べでそう言っただけ聞いてるわ。でも“隷属の影”はなのはを殺そうとなんて…」

「“隷属の影”はそもそもなのはちゃん乗っ取って内部から殺そうとしてたでしょ？」

「あれってなのはを殺すのが目的だったの？」

「“影”って人を選んで憑依するんじゃないの？」

「そんな情報聞いたことないけど…」

「ああ…これは“束縛の影”から聞いたんだっけ」

「うん？なにそれ、どういう事??」

「“束縛の影”が私から抜けてどっかに行った時教えてくれたの。“影”がこの世界に来た時、“隷属の影”、“憤怒の影”、“束縛の影”は選んで憑依したって。“断罪の影”はその場から何故か遠い世界に移動したって言ってたけど」

「…滅茶苦茶重要な情報がするんだけどそれ…」

「あはは…じゃアリンデイさんの所に着いたら“束縛の影”から聞いたこと全部話すね…」

「ええ…そうしましょ…」

アリサはすずかの口から飛び出す衝撃発言に完全に疲れ切っていた。

そして、十分ほど歩き、リンデイ提督の地球での自宅のマンションに辿り着いた。

アリサとすずかは部屋に入る。二人を連絡を受けていたクロノが出迎えてくれた。部屋の奥でなのはとフェイトとはやてが待っていた。

「すずかちゃん…」

「すずか…大丈夫なの…?」

「ありがとうフェイトちゃん。大丈夫だよ」

「すずかちゃんから“影”が抜け出したって聞いて飛んできたんだよ。一体どういう事なんや?」

「私も混乱してきたからこっちに来たのよね…さあ、説明をお願いしますか」

「うん。まず私を“束縛の影”が乗っ取ったのはなのはちゃんの“隷属の影”の事件が解決して一週間後。そのおかげで私の回復が早かったの」

「すずかちゃんの回復の速さは“影”によるものだったんだ…」

「そう。それで退院して家に帰った後、私の中から影がひとりで離れてもう一人の私になったの。それが今の“束縛の影”。そして

その時に“影”たちは人を選んで憑依しているって聞いたの」

「人を…選んで…!?!」

「私もさっき聞いた時すごい衝撃だったわ…。明確に選んだって言われたのは“隷属の影”、“憤怒の影”、“束縛の影”が選んだらしいわ」

「その三つは確実に憑依者を選んだ…」

「だから私は“影”の共通目的としてなのはちゃんの抹殺があると思っていたの…」

「それは…どうということ…?」

「“隷属の影”はわざわざなのはちゃんを選んでいることからなのはちゃんを存在から消そうとしていた。“憤怒の影”はアリサちゃんの怒りを利用してなのはちゃんを殺そうとしていた。“断罪の影”は保安局を完璧にしてからなのは数で圧倒し殺そうとしていた。そして、“束縛の影”は…理由はわからないの、でも確かになのはちゃんを殺そうとしていた。短い間だったけどあの“影”の中に入った時なのはちゃんを恨んでいるというか…嫌っているというか…そういう感情が私の中に流れ込んできたの」

「私を…恨み嫌っている…?」

「そう…。でも私に感じれたのはそこだけ。何があつてなのはちゃんを殺そうとしているのかは私にはわからなかったし、教えてくれなかった…」

「そっか…」

「なのは…」

「大丈夫だよ、フェイトちゃん。まあ“影”が私の関係者に多く憑依していた理由はわかったし。それで?…すずかちゃん、他に“束縛の影”から聞いたことは?」

なのはは表情には出していなかったが心では疑問が渦巻いていた。なぜ自分が命を狙われるのか。理由がわからない。自分が今までしてきたことになにか恨みを持たれることがあっただろうか?“隷属の影”に乗っ取られている時はあるかもしれないが、それ以前には身に覚えがない。いったい自分はどこで恨みを持ったのか…。

「あとはね、“影”は魔力を持っていないってことと…なのはちやんと“隷属の影”は相性が最悪でモードはできても使い物になるかは精神力次第って言うてた…」

「私と“隷属の影”の相性が最悪…！もしかして私のモードが極端に稼働できる時間が短いのはその所為!？」

「そうなんだ…。なのはは遠距離、“隷属の影”は近距離で戦うからかな？」

「どうなんやろなあ。そもそも戦う理由とか精神的な面もあるんじゃないかな」

「ていうかなんでそんな相性の悪い相手をわざわざ選んで憑依したのかしら?」

「すぐかからもたらされた情報で議論するなのはたち。なのはに憑依した“隷属の影”の目的。“影”たちの執拗なのはへの攻撃。

そこから議題は飛んで“不屈の影”たちの目的にまで及んだ。フェイトは最初“不屈の影”が来た目的は他の“影”を止めるためかと考えていたが、どうやらそうでもないようだと思えるようになっていた。というのは、“影”という存在は同一の人物が作ったのだが、その人物がなのはに恨みを持っていたのなら、そもそも“不屈の影”と“忠誠の影”の存在が違和感となる。さらに欲を司るというシステムだ。これは“影”たちの力の源となるエネルギーを指しているらしいが、“不屈の影”にはそのようなものが無いように思えるのだ。それに引き換え仲間の“忠誠の影”は守護欲という明確な欲を持っている。これは“不屈の影”のエネルギー源が不明であるということだ。それもあり、“不屈の影”がこの世界に来た理由に何か他の理由があるのではないかとフェイトは考えている。しかし、当の“不屈の影”はいつも“隷属の影”たちを止めるために追ってきたとしか言わないのだ。

「“影”の目的はわからずじまいだね…ごめんね皆…」

「いいんだよすずかちゃん。すずかちゃんが無事だったわかっただけでも嬉しかったんだから…」

「なのはちゃん…」

「そうだよすずか。また友達と戦わなきゃいけないのかと辛い気持ちだったけどすずかのおかげで晴れたから」

「フェイトちゃん…」

「事件の解決は私たちに任せとき！事件が終わったらまた皆でどこかに遊びに行こう！」

「はやてちゃん…」

「すずかのおかげで“断罪の影”が話さない様な情報が手に入ったんだから。すずかは私たちを信じて…ね？」

「アリサちゃん……。わかった。皆を信じて任せるね。頑張ってる！」

「「うん！」「」」

すずかがくれた情報により、“影”の明確な攻撃対象が高町なのである事がわかったため、まず管理局は高町家を保護。そしてなのもできるだけ、リンディ提督など管理局員と一緒にいることを義務付けられた。

第39話 再戦

“束縛の影” 襲撃から10時間後。午後21時37分、海鳴市上空に“束縛の影” と思しき反応を検知した。すずかからの情報で“影” は魔力を持たないとわかり、なのはとフェイトの“影” との戦でわかった“影” がいる場所の魔力反応はマイナスになるということが“束縛の影” 早期発見につながった。

その反応が見つかって十数分後にはなのはたちが既に現場に到着していた。

「どこだ…“影”…」

「ここら辺にいたんだよね、はやてちゃん」

「そうやで。この地点で間違いない…でも見当たらん。これはどういうことや？」

「どうもこうも…時間止めて奇襲狙ってんでしようよ…」

アリサの言葉で思い出すはやて。そう、疑似時止めの対策を行うのを忘れていたのだ。

「しまったー!!忘れてたー!!」

「ど、どうしたの!?!はやて」

「フェイトちゃん!あれや!疑似時止め対策のあれを忘れてたんや!」

「!そっすいえばやってない…!?!」

「何のこと?はやてちゃん」

「疑似時止め対策ってなによ…?」

はやてとフェイトは事情聴取前に話していたことを二人に話す。それを聞きなのはは半ば呆れ気味な表情をし、アリサは何でそんな大事なこと忘れるのよと言った激怒の表情をしていた。

「やってもうた…今からでもできんかな…?」

「その最中にやられるかもしれないから…だめかも」

「なのはの言う通りだよ…私もすっかり忘れてた。ごめんはやて…」

「いやフェイトちゃんは謝らんでええんやで…私だけのせいや…」

アリサが、一人ずつその力を浴びせ、他の二人は見張りをしようとして提案した。なのはは時間止められたら見張り意味くない？と意見するがやらないよりはマシというアリサの圧に押されその作戦をやることになった。

最初はフェイトからだった。

「じゃあいくで……よし、このまま……じつとしててな……」

「う、うん……」

「それにしても全然”束縛の影”来ないわね……」

「いくら何でも出てこなさすぎる気がするね」

「フェイトの強化が終わってから出てきてくれたらいいんだけどね」

「そんな都合のいい事……」

なのはとアリサが周りを見渡しているが中々”束縛の影”は姿を見せなければ攻撃もしてこない。しかし、エイミーに聞くとここに絶対いるらしい。反応が動いていないのだ。

とはいえどんなに目を凝らしてもそこに”束縛の影”の姿は見えない。そこでなのははアクセルシューターをとりあえず展開することにした。

しかし、そのアクセルシューターは展開するとすぐに消えてしまった。その後何度かアクセルシューターを展開しようとするが、すぐに消えてしまう。

「これは……どういうこと……?」

ここでなのはがあることに気づく。自分のいる場所がほんの数秒前に自分がいた場所であると。よく見ると自分だけじゃなく周りの人、つまりアリサたちも何故か前に進んだと思ったら少し下がっている。これに気づいたのはなのはだけであった。なのははこれが何なのか察することができた。恐らく”束縛の影”の仕業だと考えたのだ。

「どうしよう……記憶はそのまま残っているけど時間だけが巻き戻っているような感覚……。いや、時間停止が分子レベルで動くものを止めていることから疑似的なモノだとするならこれもまたきつと疑似的

な時間の巻き戻し…どこからこれを行っているんだ…！」

なのはは一人で周りをさつきより必死に見回す。ビルに隠れているのか、空のさらに高い位置にいるのか。なのはは動きたいが下手に動くところ束縛の影に攻撃される恐れがある。故にどこにいるのかわかってから動かなければならない。

「…探索魔法を使いたいけど…それも戻されちゃうだろうし…どうしよう」

フェイトへの強化も絶対に終わらないだろう。なのははこの状況を見る限り戻せる時間は数秒なのではないかと仮説を立てていた。ここまでなのはは数秒の巻き戻ししか確認していないからだ。時止めよりもかしら強いかもしれない能力、時間の巻き戻し。もし数秒以上戻せるならもつと戻す…自分が有利な時間まで戻す。そうなのはは考えていた。

「このままじゃ埒があかない…私に元々狙われているなら！こうする!!」

「どうしたの、なのは…!?!」

アリサがなのはの方を見た時なのはは遙か上空に上がっていた。巻き戻しの影響で少し下がったりはしているが数秒の内に何十mと進んでいるためほぼ巻き戻しは意味がなくなっている。

「なのはちゃん…何をしてるんや…!?!」

「…もしかしてこのトロイエの力がいつまでも完全に譲渡されない理由がわかったのか…！」

「まさか…なんでなのはにだけわかるってのよ！」

なのはは上空から下を見渡すと自分が先ほどいた場所から右斜め前にあるビルの屋上に束縛の影の姿があった。

「…見つけた!」束縛の影。すずかちゃんの姿…間違いない!」

なのはは急降下しビルの屋上に着陸する。

「束縛の影」ですね…。おとなしく投降すればあなたの罪も多少は軽くなります。抵抗しないでください」

「…よくきたわね…。すずかから聞いていますよ?私の目的」

「ええ、お聞きしています」

「じゃあ私がおとなしく投降すると思う？」

「するかどうかはわかりません。しかし私も理由もわからず狙われているんです。その訳だったりを聞かせてもらうために、投降して欲しいんです」

「あくまで戦いたくないってことね。私の時間の巻き戻しを見破ったのは流石と言っておくけど、時間停止の対策を忘れていたのは致命的だったわね！」

「くっ……でもアリスちゃんの教えてくれた方法があれば！」

なのはは身構える。そして目の前の“束縛の影”が消える。疑似時間停止である。なのははその消えたことを確認した瞬間背中を蹴られた感触を感じながらビルの屋上から落ちていた。

「!?」一体何が……ってそんな場合じゃない！レイジングハート！姿勢制御！」

《A I I L I G H T》

レイジングハートの姿勢制御により空中で何とか止まったなのは。上を見るがそこに“束縛の影”の姿はない。いるのは真横だった。

「!?しまった！」

「遅い!!」

蹴られる直前にプロテクションが発動したが、蹴りの衝撃で吹き飛ばされビルの外壁に直撃する。ビルの外壁が大きく崩れる。なのはの口から血が吐き出される。壁にはまった体を前に進むことで外す。なのはは既に息切れがひどくなっていた。

「強い……これが万全な疑似時間停止……こんなの……防ぎようがないじゃない……」

「前のはフェイトやアリスから聞いたのかしら？前のは私も気づかなかった力、時間の巻き戻しが発動してしまっていたのよ。それで風が起こったり、蹴ったはずなのに蹴る直前になっていたりしたわけ。でも今は巻き戻しの力もコントロールできるようになったわ！つまり今の私は無敵！貴方の言う通り防げない攻撃を繰り返せるようになったのよ！」

「そう…でも。その疑似時間停止と疑似的な時間の巻き戻しは同時発動するのは今はむしろできなくなったみたいだね…！」

「何…？…まさか!?」

“束縛の影”が背後を振り返ると、トロイエの強化を受けたアリサとフェイトがそこにいた。

「ちい…思ったより早く”忠誠”の力が付いたわね…！」

「なのは！あとは私たちに任せて！」

「あんたは早くはやてのどこ行って、トロイエに強化してもらいなさい！」

「わ…わかった！」

「行かせるかあ！」

“束縛の影”が疑似時間停止を行う。しかし、その干渉を受けなくなったフェイトとアリサが“束縛の影”のなのはへの攻撃を防ぐ。

「ぐう！私の力の干渉を受けないとは…！流石”忠誠”と言っておくわ！」

「もう貴方の優勢は絶対ではない！これ以上罪を重ねないためにも、投降を！」

「断る!!」

「ああっ！」

“束縛の影”が受け止められていた足を回し、アリサを蹴り飛ばす。フェイトは疑似時間停止が終わると同時に、後ろへ距離を取る。

「アリサ！大丈夫？」

「大丈夫…よ！オツケー！まだいける！」

“束縛の影”はアリサたちを睨みながら恨めしそうな声でこう言った。

「全く…しぶといわね…」

第40話 怨恨

「全く…しぶといわね…!」

なのはは、はやての元に辿り着きトロイエに能力を使われていた。
“束縛の影”は失った優勢は大きいものの、余裕は残っていた。それは時間の巻き戻しの能力を持つということからくるものだった。

「この事を知っていいようがいまいが…これは干渉されないなど関係ない力!」

「何を!」

フェイトが“束縛の影”に斬りかかる。その攻撃の速度はモードレイジングにより引き上げられたスピード。同じ“影”とはいえ反応できるような速度ではなかった。しかし、その攻撃は当たることはなかった。

「どういう事…!?思ったより遠い位置に“束縛”がいた…?」

「なんでフェイトの攻撃が当たらなかったの?今のは当たる間合いだったのに…!」

「これが私の力!今お前たちが対策したのは時間停止だけ!所詮一つだけ!私の力は一つだけじゃないのよお!!」

“束縛の影”は動揺していたフェイトをアリサの方向に蹴り飛ばす。アリサは受け止めきれず、フェイトごとビルを削りながら道路に激突してしまう。

「あははは!!まだ私の優勢は変わっていない様ね!数じゃ私の優勢は覆らない!それだけの力が私にはあるのよ!!」

「くっ…!何なのよ…!」“影”って今までそんな沢山特殊能力持ってたっけ…?」

「いや…“隷属”は紋章のあの能力だけだったし、“憤怒”は人の怒りをエネルギーに変換、“断罪”は魔法攻撃の反射…みんな一つだけだった…」

「じゃあ、あいつが規格外なのね…!ムカつくー!」

「どんなに悔しがったところで、私に勝てる確率は上がらないわよ?」

“束縛の影”が道路に降りてくる。その表情は完全に勝ち誇った勝者の顔だった。余裕ここに極まれりという雰囲気だった。

「なのははこの能力の正体を知っているのかしら…」

「多分…あの時飛び出したのはそういう事だろうし…なのはの強化はまだなの…!」

「なのはが来るま耐えられるかしら…?」

「別に貴方自身に強力な攻撃能力が備わっているわけじゃない!」

アリサが飛び出し、フレイムアイズを叩きつける様に、“束縛の影”に振り下ろす。

「この程度なら、力を使わずとも止められるわ…!」

掴んだ。掴んだのだ。“束縛の影”はフレイムアイズの魔力刃である刀身を掴み、その攻撃を止めた。

「そんな!」

「下がりなさい!」

“束縛の影”はそのままアリサを投げ飛ばす。アリサは歩道橋にぶつかり地面に落ち気を失ってしまった。

「アリサ…:なんて…規格外の強さ…!」

「私に勝とうなんて百年早いわよ!」

そして“束縛の影”は事件を五秒だけ巻き戻す。五秒間で少し前に移動していたフェイトが少しだけ後ろに下がってしまう。またここでフェイトの頭の間合いから離れてしまう。

「貴方の速度は私には全く意味をなさない…時間停止が意味なくなつたのは確かに痛い…でも貴方たちだけなら対応できる」

「“影”との一対一はかなり危険だ…でもなのはが来るまで耐えな
きや…!」

フェイトが斬りかかる。ハーケンの刃は少しだけ“束縛の影”に辿り着かなかつた。それは先ほどの時間の巻き戻しによる誤差だった。

“束縛の影”はハーケンが下に振り下ろされた後、フェイトの顔を横から蹴る。それをモロに受けたフェイトは勢いよく地面を転がる。フェイトは再び自分が思ったより遠い位置に“束縛の影”がいたこ

とに困惑していた。

「なん…で…！」体どんな能力なんだ…！」

「なのははすぐに見抜いたけれど…貴方はどれくらいで見抜けるのかしら？フェイト…！」

「なのははやはり…見破っていたのか…！」

フェイトはフラフラしながらも立ち上がりバルディッシュを構える。“束縛の影”はその場に動かず立っている。フェイトが少し前に歩く。しかしここで時間が五秒間巻き戻される。再び構えた時の位置に戻される。

「…！何か違和感があった様な…！」

「ふふふ…！」

気づきかけたフェイトだったがその違和感に確証をもてなかったためそのまま突撃することにした。しかしバルディッシュはザンバーに変えた。それはザンバーほどの長さの剣ならば多少の間合いの誤差は埋められると考えたからだ。

「なるほど考えたわね…！」

「これなら…！」

「しかし、足りないわ…！」

このザンバーの攻撃も“束縛の影”には当たらなかった。時間巻き戻しを突撃の直前にも行われてしまったため、ザンバーの刀身分離れてしまっていた。しかしフェイトは外れたからといって攻撃を止めず下がったザンバーを上にあげることによって“束縛の影”への攻撃とした。

しかし上げる時にも時間を巻き戻されたことにより、一拍攻撃のタイミングが遅れてしまう。

「これも当たらないのか…！」

「まだ…足りないわね！でやああ…！」

また“束縛の影”の蹴りを喰らってしまうフェイト。今回は地面を転がることはなく、踏み止まる。

「今の感覚…やはりこの違和感が“束縛”の二つ目の能力の正体…！」

「じゃあどんな力かしら？」

「…能力の詳細…。疑似時間停止という一つ目の能力から考えて疑似的な時間干渉能力だと考えていいだろう…」

「ほほう…？」

「……！もしかして、時間の巻き戻し…？それも時間停止と同じ疑似的な…！」

「おお！正解！流石”影”の憑依者！鋭いわね！」

「当たった…でも疑似的とはいえ時間を巻き戻すなんて！」

「そのまま対策も立ててみなさいよ！一流の魔導士の娘でしょう！」

“束縛の影”がフェイトに突撃してくる。その速度はそこまで速くはないが、疑似時間巻き戻しを行えるだけフェイトには劣勢である。

「この非常識なまでの脚力…！」”影”の中でもかなり強い！」

フェイトはバルディッシュの柄の部分で“束縛の影”の攻撃を防ぎながら考察する。ここまで強く、自分のことを軽くあしらうことができるであろう目の前の敵は何故直接なのはの元に行かないのか…。“影”の共通目的が高町なのはの抹殺であるという前提ではあるがここまでの“影”たちの行動を考えると恐らく“束縛の影”の目的も間違いないだろう。ということとは“束縛の影”が今行っている戦闘は…。

「考え事しながらだなんてずいぶん余裕ね！」

「全く余裕じゃないですよ…！でもあなたが私と戦っている理由に見当ついたのでここからは考え事なしで行かせてもらいます!!」

とフェイトが宣言したとほぼ同時に“束縛の影”にピンク色の魔力弾が直撃する。なのはのアクセルシューターだ。

「フェイトちゃん！ごめん、遅れた！」

「な、なのは！今格好良く宣言したところだったのに…」

「あはは、格好つかんかったなあ…ドンマイや」

“束縛の影”が魔力弾が当たったところを摩り、なのはたちを睨む。

「やはり、高町なのは…あなたは私たちにとって絶対的な障害。殺すべき敵の様ね…!」

憎しみを込めたその言葉はなのはの心に深く刺さる。なぜこうも自分が恨まれていたのか考え当た事のないのはにとつてこの言葉は何より辛いものだった。もう自分の話を聞かない絶対的な拒絶。投降なんてしない、武器を捨てたりもしない。高町なのはという存在が消えるまできつと戦い続けるのだろう。なのははそう考えていた。

「何で…何で私なの…? 私が何かしたの?」

「厳密には貴方じゃないわ…でも、それでも、私たちにとつて貴方は憎しみの対象となる!」

「そんな…理不尽すぎる!」

「はやて、理不尽な暴力なんて生きていけば必ず出会うわ」

「そうだとしても、今ここでなのはが理不尽な暴力に晒される必要はない!」

「勇ましいわねフェイト。流石“不屈”に選ばれただけあるわ…」

「“束縛の影”…私は死なないよ。絶対に。いつか死ぬとしてもそれは寿命で。その時まで私は生き続けるよ」

「いいぞ高町なのは…! そうでなくては私たちの恨みつらみは晴れない!」

高笑いする“束縛の影”。その姿を悲しい目で見つめるなのは。自分の恨まれる理由もわからず、しかし目の前の人をどう助けたらいいのかも分からない。なのははあの“影”利用しようと考えた。…練習場で倒れたあの日。シヤマルから言われ知った事。誰にも言っていない秘密。

『貴方の中に“憤怒の影”がいる』

第41話 怒りと『なのは』と並行世界

自分の中に“影”が二つもいる。そう考えただけで高町なのはは発狂しそうなほどの恐怖を感じていた。“隷属の影”一つでもコントロールが難しく暴走の危険が常に付きまとっていたのだ。それが“憤怒の影”まで入り込んでいたとなると身震いが止まらないほど怖くなる。

なぜ“影”の力で倒したはずの“憤怒の影”が自分の中にいるのかはわからない。シャマルもわからないと言っていた。

そんなわからないものが自分の中に生まれてきている。その謎のものを利用してしようとしている。自分は肝が据わっているのかそうではないのか…。なのはは再び自分を見失いかけていた。

「…はあ…はあ…なんで…まだ何もしていないのに…息が切れてきたの…?」

「だ、大丈夫?なのは」

「なのはちゃん?…何がどうしたんや…?」

「だらしないわねえ…これから私とやりあおうってのに何その体たらく?」

「ぐっ…!はあ…はあ…!」

なのはは反論をしようと思ったが口が動かない。先ほど生きると宣言した時とは全く状態が変わってしまった。何が起こっているのか自分でもわからない。練習場で倒れた時と似ているような気がする。もしかして自分の中の“憤怒の影”が悪影響を出しているのだろうか?…そんな不安がなのはを襲う。しかしその自分に何か悪影響を与えているかもしれないものをこれから使おうというのだ。不安を感じるがやらねばならない。

「フェイトちゃん…少しだけ時間稼いでくれる?その間にモードするから…はあ…」

「……………わかった…無理はしないでね…」

「よし、私が支援をするからフェイトちゃん頑張つて…」

「うん、お願いはやて」

フェイトたちは話し合いをやめ、“束縛の影”と対峙する。“束縛の影”は笑顔を絶やさずフェイトたちを見ている。不気味に感じるが“影”と戦ってきたフェイトの戦意を削ぐのには足りなかった。

「またフェイトなのね。別にいいわ…余興にはちようどいいし…」
「隷属”の仇も取れるし…ね？」

「仇…貴方たちにそんな考えがあるなんて意外ですね」

「当たり前でしょう。行動はバラバラだったけれど皆大切な仲間だったわ…同じ目的を胸に抱いた、大切なね！」

“束縛の影”から仕掛ける。フェイトも飛び出していたが、疑似時間巻き戻しにより一拍遅れてしまう。

バルディツシユのザンバーと“束縛の影”の足がぶつかる。痛みを感じないようだが“束縛の影”のズボンが焼き切れてきている。

“束縛の影”は時間巻き戻しを多用する。それはフェイトのは背後で進むなのはモードチェンジを妨害するためである。当たり前の話であるが五秒の遅延も積み重なればかなりの遅延となる。なのはが遅ればそれだけフェイトが相手をしなければならぬ時間が増える。先ほどまでの戦いで疲労が抜けていないフェイトであれば“隷属の影”の仇を取りやすくなる。“束縛の影”はそう考えていた。

「ありがとう…フェイトちゃん…！もう下がっていてもいいよ…」

フェイトの背後にある黒い球体から聞こえる声。“束縛の影”の予測より早くモードチェンジが完了したのだ。

「なのは…!?は、早かったね…！」

「うん。意外と早くできたよ…。」

なのはの言葉が紡がれるとそれに呼応するように、ボロボロとその球体は崩れていった。その中から出てきたなのは赤を基調とした黒のラインが入ったバリアジャケットに身を包んでいた。それはモードフォーレンの姿ではない。

「…なの…は…？」

「何よ…それ…」

フェイトと“束縛の影”がなのはに問う。敵同士ではあるがここ

では同じ疑問が浮かぶのも無理はない。もしこの状況を理解できる者がいたとしたらシヤマルだけである。

「これはモード…ネメシス…」

ネメシス。それは義憤。人の道から外れた己に目の前にいる敵に感じる義憤。その感情がエネルギーとなり、“憤怒の影”の力を纏うことに成功した。

「この…この雰囲気…“憤怒”…!?なんであいつはなのは貴方が倒したはず…!」

“束縛の影”が動揺する。死んだはずの仲間の力を恨んでいる相手が使っているのだから当たり前なのかもしれない。

「私もそう思っていたよ…。でもなぜか私の中にいたんだ。気付かないうちにいられていた…?そんなんじゃない。生まれたんだ。私の中で突然」

「生まれた…!?…ならばやはり…貴様は殺さねばならない…!我々の未来を奪う貴様を!!」

“束縛の影”がフェイトを無視してなのはに突っ込む。巻き戻しなど使わず純粹になのはを倒そうというのだ。

「でああああ!!」

「レイジングハート!」

《《デイバインバスター》》

「シュート!」

なのはのデイバインバスターはモードネメシスによって強化されている。モードネメシスが与える力は、怒りに関する感情エネルギーを全て魔力にして威力を底上げするというもの。一見地味ではあるが、使用者の怒りが大きければ大きいほどその威力は増大し魔力は高まる。とどまることがないのだ。ではなのははどうなのか。その怒り、義憤の大きさは途方もなく大きかった。そのほとんどが自分に対しての怒りである。かつて大切な友達を傷つけてしまった自分の弱さ。友達が“影”に乗っ取られていた時気づけなかった自分の鈍さ。死なないと決めていたのに死ぬかもしれない攻撃を実行し罪から逃れようとした自分の卑怯さ。

延々と湧き上がる自分への怒り。そしてそれに付随する“影”への怒り。自分の友達にことごとく憑依し不幸にしていく謎の存在。協力をしてくれている“影”もいる。しかしそれは少数だ。ましてや自分が使うモードの“影”たちは敵対していた“影”だ。そんなものが自分の中にあるというだけで狂いそうになる。そんな理不尽に対する怒り。

様々な怒りがなのはの心を占めていく。それは危ない兆候なのかもしれない。しかしなのはの思考は比較的クリーンであった。

目の前の“影”を倒す。それだけである。

「やっかいな……力だよ本当に！」

「“憤怒”の力が私に凄まじい力をくれる……これをそのまま行使しているのか少し不安だけど貴方を倒すためなら！」

「倒す？ 私を？ ……舐めるんじゃないわよ！ 私がお前に倒されるなんて方に一つもあり得ない!!」

デイバインバスターをスレスレのところまで避けた“束縛の影”が蹴りを連打する。そのラツシユはなのはが魔法を撃つ暇がなくなるほどである。

しかしなのはも負けてはいない。ラツシユの反動を利用して後ろに下がろうとする。

「ちよこまかとー！」

「どつちがー！」

レイジングハートと脚で打ち合いながらなのはと“束縛の影”の言い合いが始まる。

「教えてよ！ なんで私を殺そうとするの？ 私が何かをしたの？ それとも私に似た誰かが何かをしたの？」

「言う必要は無い！」

「そう頑なになるから！ 頭で考えてる計画が上手くいかないんだ！」

「言ったところで貴方に何が出来る？ 何が言える？ 何も無いでしょう！」

「言ってくれなきゃ分かんないよ！ 出来ること、あるかもしれない

！」

「何も言わないのも、優しさだと思って欲しいわね！」

「どうということ…!?何でそれが優しさになるの!」

なのはと「束縛の影」の言い合いの隙にフェイトがアリサのもとへ駆け寄る。アリサにまだ意識は戻っていない。はやてが治療魔法をかけているので傷はなくなってきたのはいる。

「はやて、アリサはまだ?」

「うん…全然起きひん…。もしかしたら打ちどころが悪かったのかも」

「そっか…。でも今はなのはが頑張ってくれているから。私も治療手伝うよ」

「ありがとうフェイトちゃん。…なのはちゃんのあのモード。あれって…」

「『憤怒』の力だって。なんでなのはの中に『憤怒』がいたのかわからないけど…とりあえず今はあれに頼るしかない…」

「そうやね…。無理せんといてな…なのはちゃん…」

はやての願いは空しく、なのはは既に無理する領域に入っていた。モードネメシスのエネルギーの元になる怒りエネルギーの欠点は怒りという感情はそう長く続かないというところだった。特になのは自分に対しての怒りではあるがこれはモードチェンジする時には十分な怒りとなるのだが、長期戦で使うエネルギーとしてはどうしても足りないのだ。

それによりなのはのネメシスによる強化が薄れてきてしまい、先ほどもまでの勢いは無くなってきてしまっていた。魔力もモードの維持のため極度に消費している。なのはの体力も「束縛の影」の蹴りのラッシュによりじわじわとではあるが削られてきている。

「ぐっ…!はあ…うう…!」

「ほらほらほら!何休もうとしてるの!まだ続くよ!!」

「なんて勢い…!このままじゃ…押し切られる…!」

「どうやら怒りが薄れてきているみたいだね…!」『憤怒』の力は貴方には相性が悪かったかしら!」

「相性…なんて…！根性でどうにか…なる！」

蹴りを受け続けていたなのはがバランスを崩した時、ちょうど攻撃をいなした形となり二人は交差し位置が入れ替わる。そして互いに距離を取った。

なのははモードを保つことが辛くなってきていた。しかしここでモードを解除してしまうと相手の攻撃について行ける自信がない。そして魔力が回復しても再び怒りを燃え上がらせるのも難しい。モードフォーレンという選択肢もあるのだが、これはシヤマルから絶対に使うなど言われてしまっているため、せめてこの言いつけだけは守りたいと彼女は考えている。

「さつき…言ってた教えない…ことが…：優しさってなんなの…？」

息も絶え絶えになのはが“束縛の影”に聞く。ラツシュを受けている間も聞いてはいたのだが何も答えてはくれなかった。なのはに事情を、恨む理由を言わない事が優しさである、目の前の彼女はそう言った。それが意味するのは自分が身近な誰かに恨まれているということだろうか？なのはは攻撃の中でそう言う考えが浮かんだ。だが、もし恨むとしたら誰がいるのか？なのははそれを知りたいのだ。知らなければ謝る事も反省することもできない。だからひたすらに聞くのだ。

「教えてくれなきゃ…わからないよ…私は誰に…：謝ればいいの…：？」

「謝る…？貴方からそんな言葉が出るなんて…根本的な何かが違うのかしらっ…」

「根本的…？？どういう事…？あなたの言い方まるで…私とは別に『高町なのは』がいるみたいなの…」

「…：…いつか…もう…隠す必要なんて元々なかったのかもしれないし…」

「！教えてくれるの…！私に何も言わないことが優しさってなる理由…！」

「そうね…でも優しさの意味を伝えるということは、貴方がなぜ

我々に命を狙われるのかという理由にもつながるのよ」

「だろうね…覚悟はしているよ…!」

なのははレイジングハートの柄をぎゅつと握る。その手は少し震えていた。まだ十歳の少女が自らの命を狙われる理由を聞くことになるのだ。無理もないのかもしれない。

そしてその話を少し離れたところでフェイトたちも聞いている。

「私たちが恨んでいる対象は『高町なのは』という存在よ。別に個性違うから恨まないとかじゃない。『高町なのは』という存在そのものを恨んでいるの」

「個性…存在そのもの…さつきから私が何人もいるみたいにな…」

「そのままよ。『高町なのは』は何人もいるわ。パラレルワールドにね」

「パラレル…ワールド…!」

なのははその言葉に聞き覚えがあった。“隷属の影”がどこから来たのか、それが確かめられた際判明した事。“影”はパラレルワールドから来ているということだ。

「じゃあ、あなたたちの恨みを買ったのは…パラレルワールドの私…?!」

「そうよ…。パラレルワールドの貴方が私たちを裏切ったのよ!」

「裏切った…パラレルワールドの私が…?!」

「そして私たちの復讐はパラレルワールド全てに生きる『高町なのは』を殲滅することで達成される!貴方もそんな復讐のターゲットつてわけよ」

「そんな事…させない…!」影”たちの侵攻はここで、この世界で止める!」

「…いい意気込みね…。でもねなのは。我々”影”を作り出したのもまた、『高町なのは』なのよ…」

「…そ…そんな…!?!」

「私たちが生まれた世界の高町なのはがその持てる技術の粋を結集し作り上げた…ミッドチルダ式自立型ユニゾンデバイス”影”シリーズ。それが私たち」

「ユニゾンデバイス…！」影“ ってデバイスだったの!?”

「元々はね。その初期モデルがこの私“束縛の影”と…」不屈の影“よ”

「“不屈”と“束縛”が…：最初に作られた…」影“。だから妙に強いんだ…この二人…」

「正確にはもう一人いるんだけど…まあいいわ。さあ終わりにするわよ…！復讐を遂げ、勝利を仲間たちの弔いとする！」

「私だって…負けない…!!お願いネメシス！レイジングハート！もう一度…力を貸して!!」

再び両者の戦いが始まる。今度はなのはは相手の間合いに入らないよう、アクセルシューターを撃ちつつ中距離を保っている。アクセルシューターの波状攻撃が“束縛の影”を足止めする形になっていた。疑似時間巻き戻しを使用すれば簡単に対処できるのだが、先ほど会話で少し情報を流しすぎたと焦っているため、その能力を使うのを忘れてしまっていた。

「ええい！…ごさかしい真似を！早さが一つ一つ違うなんて…！」

「二十個以上のシューターをコントロールできるのもネメシスのおかげだね…ありがとう、ネメシス…。」束縛“！このまま決めに行きますよ！”

「なに…!?”

「デイバイン…！」

なのはは速攻でこの勝負を終わらせる気だった。自らのネメシスが長く続きそうにないのもあるが、意識を取り戻さない友アリサが心配だったのだ。

さらにここで“束縛の影”を捕まえられることに越したことはない。故にアクセルシューターにネメシスの能力を使い。デイバインバスターはあくまで相手を無力化するための砲撃として使用する選択をした。

「バスター!!!」

ピンク色の砲撃が一直線に“束縛の影”へと向かう。これも時間巻き戻しを使えば回避できた技なのだが。やはり焦りからか、使うの

を忘れてしまっていた。

そしてデイバインバスターは一直線に駆け抜けていき爆風を起こしその攻撃の終わりを告げた。

「……っはあ……はあ……ど、どうだったかな……？」

なのはの体力は既に限界を迎えていた。モードの使用と理由のわからない謎の疲労がなのはを蝕んでいたのだ。

「これをここで見せるなんて……私少し、パニックになっていたのかしら……」

すると、デイバインバスターの射線上から右にあったビルの影から“束縛の影”が出てくる。デイバインバスターは当たらなかつたのだ。

「……そ、そんな……!?なんで……巻き戻しも使われていないのに……！」

「だからよ……。ああ……これも話すハメになっちゃったわ……自分が嫌になるわね……」

「巻き戻しを使わなかつたから……?……!まさか別の能力を使つたつて事ですか!?!」

「……そうよ。私の三個目の力、時間の加速を使ったのよ」

「時間の……加速……?」

なのはは困惑していた。時間の加速と言っても今までの能力から考えて疑似的なモノだろうと予測がつく。しかし時間を早くされた感覚は全くなかつた。しかも早くしたのならデイバインバスターも当たっているはずだと、なのははそう思っていた。

「時間の加速は今までのと違って本当に加速させているのよ、時間を。加速させているのは私の身体だけけどね」

「自分の身体の時間を早める……その加速した分だけ移動が速くできるつてことですか……?」

「……ええそういう事よ。だからあんなビルの後ろから出てきたのよ。早すぎてコントロールが難しいのよ」

「なるほど……?」

なのははなんとなくではあるが理解していた。だが本当に時間を加速させているというのがどうにもわからなかつた。今までのとは

違うとは言っていたがどういふことなのか。

「実際に加速させているってどういふことなの…？」

「言うと思う？」

「…：うん…：」

「…：なんで敵にそんなに信用を寄せているのよ…：」

「見た目が…：すずかちゃんだから…：」

「言わないわよ」

「…：そっか…：」

「こんな能力教えちゃったんだから、ここからさらに激しくいわよー！」

“束縛の影”は加速を使い距離を一気に詰める。

「うわっ…：！」

「驚いている暇なんてないわよー！」

その勢いを保ったまま回し蹴りが飛んでくる。なのはにレースカーほどのスピードで襲ってくる蹴りを回避できるはずもなく、レイジングハートが自動で発動したプロテクションで直撃は避けられたもののそのまま蹴り飛ばされフェイトたちがいる歩道橋とは逆方向にあるビルの一階の壁に激突する。蹴りの強さを証明するようにビルの窓が一階から最上階の十階まで全て割れてしまった。

「あああ…：ぐうう…：」

なのはは声にならない声を上げている。それに“束縛の影”が静かに歩いて近づいていく。

フェイトは近づこうとするが、なのはが手でそれを制止する。アリスがはやてたちに行ったように。

「なのはー…：なんでー！」

「私…：まだやれる…：やれるから…：！」

そう言うなのはのモードは蹴りのダメージにより魔力制御が乱れ解除されていた。つまり通常のバリアジャケットとなっているのである。

今のなのはに残された“束縛の影”に対抗する策は、シャマルから絶対に使うなとくぎを刺されたモードフォーレンのみ。今のなのは

ではモードネメシスになるほどの怒りが無いのだ。

「…はあ…はあ…ごめんなさい…シヤマルさん…!」

ボロボロになりながらも何とかレイジングハートを支えにして立ち上がるのは。

「まだそんな力が残っていたのね…。まあいいわもう、終わりに…」

《MODE FALLEN SET UP》

“束縛の影”の加速と同時に、なのはの身体を黒い球体が包み込む。モードチェンジまでの速度は最速で“束縛の影”の蹴りが到達する時にはすでに全身が球体に包まれていた。

そして“束縛の影”の蹴りの勢いを利用し、球体を割らせる。

「これで…!…このモードで!あなたを倒す!!」

第42話 絶望の影

「結局、私も倒す気なんじゃないか！ 投降だなんて言っておいてさあー！」

「それはあなたが戦うのを止めないからでしょう！」

「当たり前でしょう！ 貴女が死なない限り、私の戦いは終わらない！」

レイジングハート・ザンバーと蹴りの足が激突し、鏝迫り合いが起る。加速を使用され少しなのはが押され始める。

「ぐううう!!」

「もつと…もつと早く！」

「させるかあ…あああ!!」

なのはの魔力と筋力が強化される。これはモードフォーレンで防御のための魔力を攻撃に全て使用したからである。そのおかげで押し返すなのは。 “束縛の影” は加速を使うがその強化された力には中々押し返すこともできず拮抗する形になった。

「 “束縛” ！油断したな!!」

「何!? フェイトだと…!?!」

背後から接近していたフェイトがザンバーで斬りかかる。これは少し前のなのはがフェイトを制止した時に行った念話で立てた連携である。

つまり、なのはが “束縛の影” を抑える様に鏝迫り合いをしているのは罠でだったのだ。その隙に “影” 共通の弱点として挙げられる魔力探知を突き背後からモードレイジングで全速力で近づき斬り倒すという作戦である。

“束縛の影” はその作戦に完全にハマってしまい、バルディッシュザンバーで斬られ、体勢を崩した後レイジングハートのザンバーで斬り上げられた。

空に打ち上げられた “束縛の影” は抵抗するような素振りも見せず、そのまま地面に落ちる。落ちて地面に叩きつけられグチャツと言う音が鳴る。

「や、やったのかな…?」

「時間の加速も流星に不意打ちには反応できなかったみたいだからね。あ、なのは肩貸そうか?」

「大丈夫だよ…。うん、大丈夫、ちゃんと立てる」

モードフォーレンのままなのは足を地面に踏み込みしっかり立てることを確認する。

そして、目を覚ましたアリサとそのアリサを背負いながら走ってきたはやてもなのはの元に来た。

「アリサちゃん! 目覚めたんだ…よかった…」

「心配かけたわね。にしても流星なのはね…二つも能力持つてる“影”に勝っちゃうんだから」

「ああ、最終的に三つだったみたいやでアリサちゃん」

「えっ!?! うっそー…」 束縛の影” 強すぎるでしょ…」

「最初に作られた三つの“影”の内の一つみたいだったらしいし、色々実験的に能力を組み込んだんじゃないかな?」

「フェイトちゃんの言う通りかもしれないな」

四人が話していると、バインドをかけられた“束縛の影”がゆらりと立ち上がる。その足もバインドされているため、上手く立ち上がることはできていない。

その目にはまだなのはの抹殺を諦めていないことがわかる強い目力があつた。

「まだ…あんた立てるのね…敵ながら凄いわその執念…」

「うるさい…!! まだ…終わってなんか…!」

「もう諦めてください…。なのはと戦った時冷静さを失っていた貴方に元々勝ち目はなかったんですよ」

「資料見るとなのはちゃんと戦った“影”は皆冷静さを無くして負けていることが多いみたいや。貴方も結局その一人だったつちゆうわけや」

「黙れ!! そんなはずは…こんなはずじゃなかった…。決して余裕で慢心したわけじゃない…力で圧倒していたはずなのに…!! 次こそ! この場から脱出して、態勢を立て直してから!」

「束縛」…。」

なのはが呟いたその時、なのはの中から声が響いた。

『次なんてない。君はここで終了さ』束縛』』

「えっ…何この声…私の、中から？」

「何でなのはの体の中から声が…!？」

「は、はやて！」

「アリサちゃん私に言われても困る…」

「…こ、この声は…!?!?なんで…なんでよ！」

“束縛の影”の声が震えだす。そしてなのはの中から聞こえた声に四人とも戸惑い始める。そして、この声に聞き覚えがあるのはフェイトとはやてとアリサの三人であった。

「ね、ねえ…この声って…」

「うん…私も多分アリサと同じ人思い浮かべてる」

「私もや…!！」

「皆知ってるの？この声の人…？」

「私たちもよく知っているけど、なのはもよく知っている人だよ」

「だ、誰？私にはわからな…」

なのはがその続きを話すことはなかった。その時なのはの身体から黒い煙が浮き上がってきたからである。その煙はなのはの口や毛穴。耳、目、鼻という人体の穴という穴から煙が出てきたのだ。フェイトたちはその話の続きをするなんて言う場合になかった。

なのは自身にもなにが起きているのかわからなかった。いきなり自分の中から声が聞こえたと思ったら今度は煙が出てきた。しかしなのはは考えてみると少し心当たりがあった。それはシヤマルから絶対に使うなど言われていたモードフォーレンを使用したことである。なぜ、シヤマルは使うなど言ったのか。それは“隷属”の種があと少しで発芽するという状態だったからである。詳しく解析したところ、本来モードで抑制されているはずの発芽が、なのはの場合早くなっているということがわかった。発芽を早めた決定的な要因は“憤怒の影”を倒す時に使った『スターライトエクスプロージョン』である。

激しい魔力消費と身体への大きなダメージが発芽までの期間を早まらせてしまったのではないかとシヤマルは予測していた。それをなのは使ってしまったのだ。検査で分かってから一回目のモードチエンジ、それが最後の一回だったのだ。

『ああ……久しぶりに自分の意思で動くから少し思考と行動にラグがあるなあ……』

黒い煙が次第に伸びをしている人の身体の形になっていく。その形は小学生の少女、髪はツインテールにまとめられている。黒い煙が人の形を完全に作ると今度は色が付き始めた。髪の毛の色は茶色、目の色は紫、ツインテールをまとめているリボンはピンク色。着ている服は聖祥大付属小学校の女子制服。

「なの……は……」

「なんで……なのの中から……なののはが……」

「これが”束縛”が言うてたもう一人のなのはちゃん……？」

そう、高町なのはなのである。何も変わらない。どこも変わらない。先ほどもまで戦っていたなのはと全て同じなのである。

『あれ？皆ビツクリしてる……？まあそうだよね。……”束縛の影”はずいぶんやられたねえ』

「なんで！なんでアンタがここにいるのよ!!」

『しようがないよね、失敗作なんだもの……。最初から壊れてたおもちや。壊れたおもちやもういらないよね』

「答えなさいよ!!なんで！私が殺したアンタがここにいるのよ!!」

『私が作った”影”に言語機能は付けなかったから……口をパクパクさせてもわからないよ……』

「なんなのよ……！なんなのよ！私たちを追ってここまで来たっていうの？なんでよ！生きているなら放っておきなさいよ！私たちを自由……！」

『蒐集』

もう一人のなのはが地面に立ち言葉を放つ。“束縛の影”が投げた言葉は全てもう一人のなのはには届かず、蒐集を宣言される。

蒐集はかつて夜天の魔導書が闇の書と言われていた時代に行つて

いたリンカーコアから魔力を集める行為である。もう一人のなのはそれを“束縛の影”に行つたのだ。

“束縛の影”を吸い込むようにもう一人のなのはに向けて背後から風が吹き始める。“束縛の影”は必死に抵抗しようとするが、すでにフェイトたちにボロボロにされバインドまでかけられた身体ではその抵抗は意味をなさなかった。

「い、いやだ…！またアンタの中にもどるなんて！嫌だ!!嫌だ!嫌だ嫌だ嫌だ!!」

『……』

「“束縛”…!」

「フェイトちゃん!何をしようとしてるんや!」

「あんなに怯えて…何か事情があつたとしても…これは…!」

「…だめや!今行けば私たちもあの蒐集に巻き込まれてしまうかもしれないへん!」

「そんな…!助けたいのに…!」

フェイトの願いは潰える。“束縛の影”はずずかの形から段々と黒い影になり、まるで元の場所に戻るかのようにもう一人のなのは身体に吸い込まれていった。

そしてもう一人のなのはフェイトたちの方を向き、黒い煙を出したことにより倒れこんでいたなのはを見る。

「…私…なの…?パラレルワールドの…」

『……』

「ねえ…!答えてよ…!貴女は…!」

『私は高町なのは、それだけ』

「やっぱり…パラレルワールドの私なんだね…!」

「で、でもそのなのはって“束縛の影”が殺したって言ってなかった?さつき…」

アリサがなのはを抱えながら質問する。目の前の立っているなのはは先ほど“束縛の影”が殺したはずと言っていたことと“束縛の影”に対し私が作った“影”と言っていたことからほぼ“影”が作られた世界の高町なのはで間違いないだろう。

ここでアリサと同じ疑問が浮かぶ。そうその世界のなのはは“影”たちの反乱を受け殺されたはずなのだ。だがこの世界のなのはの体の中から突然現れた。アリサだけでなく他の三人もまた困惑していた。

『その疑問も、わからないでもないよ。そもそも誰にもこの計画について言っていないかったもん』

「計画…?」

『私は“影”たちが私を殺そうとしているのがわかったからこそ“隷属の影”に私の記憶と身体データを忍ばせたの。だからこうして生き返ってきたってこと』

「記憶と…身体データ…」

「じゃあ“隷属の影”は知らず知らずのうちに運搬役にされてたつてわけ…!」

『そうなるね。でもしようがないよね? 歯向かったのは“隷属の影”たちなんだから』

「今の貴女は肉体ではない魔力で構成された体だ。なぜそこまでして生き返ったのです? 肉体を捨ててまで…」

『別に好きで肉体を捨てたわけじゃないんだよ、フェイトちゃん。まあ貴方にはわからないだろうね…私の考えなんて…そもそもこの世界の魔導師に私の考え、心が理解されるわけない』

「考え…?」

「ねえ、こうやって復活するくらいには用意していたわけだからこの世界にきた目的があるわけでしょう? それがあんたの言う考えや心つてわけ?」

『はやてちゃん、アリサちゃん…この世界でも貴女たちはいるのね…当たり前か…』

「か、会話ができてない…!」

「なんなのよ! 話す気ないなら最初から話さないでよ!」

『ああごめんごめん。なんか感慨深くてね。えっとね、アリサちゃんの大体いう通りだね。あとフェイトちゃんたちの“影”返してもらうからね』

「何!?!」

「まさか蒐集を…!」

『蒐集』

はやてたちの反応より早く蒐集は始まっていた。

フェイトとはやての中から“影”が抜けていく。足元から影が伸びてパラレルワールドのなのはの方へ伸びていく。

「ぐう……!!このままじゃ…!」

「どうすればいいんや…!」

「な、なのはどうしよう!」

「私たちにはどうしようも…ない…!私の中の“隷属”の種も“憤怒の影”も黒い煙で盗まれた…!」

「なんですって…!?!じゃあフェイトたちの“影”を取られたらもうモードも使えなくなるってこと…!」

「元々私のものなんだから。借りたものはちゃんと持ち主に返さなきゃねー」

「モー…ドチェンジ…!」

『無駄だよ、フェイトちゃん。もう半分以上貴女の身体から“影”が出てる。モードは使えない』

「そんなっ…!」

(フェイトツ!この蒐集に対して私たちは何もできないわ…!創造主に呼ばれてしまったらもう…!)

「“不屈の影”…そんな…」

(だから!最後の反抗!フェイトの中に私の、“不屈”の種を残すわ!種なら内側からじゃないと奪えない!)

「…わかった…お願い!」

(よし…もう大丈夫…植えられたわ。でも気を付けてね、この種は高町なのはにあった種と違う劣化版みたいなもの…。三回までしか使えない。三回モードチェンジしたら種は自然消滅するわ)

「…それは中々キツイね…。でもありがとう…短い間しか話せなかったけど…色々と…ね…」

(そうね、きつともう話すことはできないかもしれない…。私もあ

なたと会えて憑依してよかったわ。実は“影”の憑依者の中で私たちが一番相性良かったのよ？…私も色々ありがとう…)

フェイトと“不屈の影”は最後の別れを伝えあう。そしてフェイトから“影”が抜ける。その“影”はパラレルワールドのなのはに吸い込まれ、消えていく。

次は、はやてと“忠誠の影”が会話をする。

(はやて、我々も種を残しましょー。恐らく私が作るのも回数制限があるものでしょうがー)

「え、フェイトちゃんたちそんな話してたん？それができるならそうしよう…！対抗策それしかないんやろ？」

(“不屈”とは回線をつないでいたので会話が聞こえたんですー。

…はい、種を植えました。使用回数には気を付けてくださいー)

「ありがとう…！…早いお別れやったな…ごめんな力になれなくて…」

(はやては十分力になってくれましたー。…私が戦闘向きの“影”ではなかったのでそう感じたんでしょー。私からすれば私の能力を一度でも使ってくれただけでも感謝しかないので。確かに短い関係でしたが、私にとってかけがえのない友人となりましたー。ありがとう、そしてさようなら…)

「“忠誠の影”…さよなら…！でも絶対にこの力は無駄にしない！」

はやての足元から“影”が抜ける。最後の別れを告げた時抵抗を止めたようにするりと抜けた。そして“影”はパラレルワールドのなのはのもとに返っていく。

そうして“影”は全てパラレルワールドのなのはに戻っていった。

第43話 なぜ彼女は人に純度を求めるのか

『ふう。これで回収終わり。次は…あれだあれ、危うく忘れるところだった』

「影」を取り戻したせいなのか、魔力がさつきより強く感じる…！」

『そりゃあ、あれは私の魔力で構成された物だからね。返ってきた魔力が回復するんだよ。あと“不屈の影”には私の戦闘データと魔力データを組み込んでいたから、それも魔力の増加に影響しているかもね』

「“不屈の影”には戦闘データと魔力データ…」

『そのおかげでモードレイング使って他の“影”圧倒していたんじゃない？モードレイングの効果である憑依者の全ステータス上昇は私の戦闘データと魔力データをそのままプラスしているんだよ』

「つまり、モードレイングは二人分の力を揮えるモードだったってわけね。どうりで強いと思っただわ…」

アリサとフェイトがパラレルワールドのなのはと話している間にはやてはなのはと共に前線を離脱する準備をしていた。

「大丈夫なんかなのはちゃん」

「うん、だいぶ良くなったよ。アリサちゃんの魔力も回復してきたし、このまま離脱はできそうだね」

「そうやな…。でもこのまま逃げてええんやろか…」

「もう一人の私と今戦っても勝ち目は薄いよ…エイミイさんも離脱してって言ったし」

「ならそうしよう」

なのはとはやての話し合いは終わり、離脱することに決まった。もう一人のなのはを止めるため武装局員が来ることになり、その局員がもう一人のなのはを相手している間に全員離脱という流れだ。

『…こっちに来る魔力反応多数…。そう、貴方たちは戦う気はないんだね』

「！作戦がバレてる…？」

『流石に武装局員が大量に来たらわかるよ。なるほどなるほど、武装局員のレベルはこんな感じなんだね…』

もう一人のなのは何か品定めするような呟きをして武装局員が来る方向を見つめた。その目は輝いていた。まるで欲しかったおもちやを買ってもらった子供の様に。

『戦闘する意思のない貴方たちはもういいや。帰っていいよ。戦う気ない人と戦ったところで、いい実験結果は生まないからね』

「なんですって!」

「アリサちゃん、落ち着いて!口車に乗っちゃだめだよ!」

「両方からなのは声ですごく混乱しそう…」

「ていうかもう混乱しかけてるんやけど…」

『逃げるなら早くしなよ。私だって別に襲わないわけじゃないんだ。ただ今の貴方たちと戦っても得る物が無いから早く逃げなよって言ってるの』

「くっ…。悔しいけど離脱するしかないから…早く行こう」

「う、うん…」

「覚えてなさいよ!!」

なのはたち四人は、もう一人のなのはに見つめられながらその場を離脱した。

“束縛の影”との戦いともう一人のなのはの出現など様々なことが起こり激動の夜となった。地平線から日が昇り始める。夜が明けようとしている。

背後から武装局員たちが戦っている音が聞こえる。フェイトやはやては悔しそうな顔をして背後を見ることなく離脱していった…。

そして、管理局地球支部。東京都新宿区のビルの一室に四人は集まっていた。夜が明けたことで翌日。土曜日であったため、なのは、アリサは親に連絡し安否ともう少し帰りが遅くなることを伝えた。

「なのはたち、君たちだけに任せてすまなかった。アリサは身体の方は大丈夫だったか?」

「ええ、シャマル先生に見てもらったけど異常はないそうよ!」

「そうか…それは何よりだ」

クロノは皆を同じ部屋に集め、四人が離脱した後の状況を説明した。

四人が離脱した後すぐに局員ともう一人のなのはどの戦闘が始まった。そのことはフェイトたちも音を聞いていたので理解していた。そしてその後が重要であった。

「武装局員は全滅した。生きてはいるが何人かは連れ去られたそう
だ」

「ま、まってクロノ君！私たちがここに着いてまだ十数分しかたつてないよ？いくら何でも早すぎるんじゃない？」

「なのは…。君は一度自分のことを考えてみるといい。ようはあそこにいたのは別世界の君なんだろ？となると魔導師ランクもSオーバー、とても一般の局員が太刀打ちできるとは思わない」

「クロノが予想外だったのは連れ去られたこと？」

「その通りだフェイト。どうやら向こうのなのは局員を殺さないように気を付けてはいた様なんだが…戦いが終わると選ぶ様にしてから何人かの局員を抱え連れ去っていったんだ」

「…選ぶ…」

「ねえ、クロノ君、もしかしたらもう一人のなのはちゃんが言うてた誰にも理解されない考えっていうんと関係があるんじゃないかな…」

「そんな事を奴は言っていたのか？」

「確かに言ってたわね。ホント、その考えって何なのかしらね？」

「アリサの言う通りだよ。全く目的が見えない。理解されないって前提で話してて理解されようともしてない。こっちはのはと大違いの頑固者だね…」

「フェイト…こっちなのはも大概頑固者だと思うぞ…」

「えっ」

その頃、パラレルワールドのなのはは海鳴市の月村邸の近くに来ていた。

その表情はどこか悲しそうで先ほどまでの楽しそうな表情とは真逆のものだった。

『ま…いいのかな。こっちの人間に情けなんていらなかったのかも』

しれない』

物騒なことを呟き、月村邸の門を無理やり開き中へ入る。アラートが鳴り響き警備員が続々と集まっていく。警備員は侵入者の姿に驚き顔を見合わせる。

『…だめだね。この人たちは純度が低い』

次の瞬間十人ほどいた警備員たちは全員吹き飛ばされ、壁や木にぶつかり気絶していった。

このなのはの襲撃はすぐに地球支部に伝えられた。しかし、その時支部内にいた魔導師はアリサだけであった。

「ダメだ！君だけなんて危なすぎる！」

「今なのはたちが身体検査をやっていて出動できないんでしょ？なら私が行くしか！」

「武装局員を向かわせる！」

「さつきと同じことになるだけで！すずかの安全は保障されないじゃない！」

「しかし…！」

「こんなやり取りをやっている間にもすずかが危ないの！さつき散々言われた借りも返したいし、ちようどいい機会よ！」

「……わかった。だが君も万全じゃない。すずかを救出したら速やかに避難するんだ。いいね？」

「了解！」

アリサが支部を飛び出す。昼間ではあるが、緊急時なので空を飛んでいるが、クロノたちが認識阻害の魔法を周囲に散布しておいたため、一般人の目にはアリサは認識できなくなっている。

『ん…？この魔力反応は…アリサちゃん？』

今まさにすずかに手をかけようとしていたなのはの動きが止まる。すずかは目を瞑っていたが、なのはが発したアリサという名前にハッと目が開く。

「アリサちゃん…！アリサちゃんが来るの…!？」

『ま、それより早く用を終わらせればいいんだけど…敢えてここは待ってみようかな』

「…どういう…つもりなの…?」

『面白そう…このアリサちゃんは中々の純度だからね』

「面白そうってだけで…?」

二分ほど経つと、アリサが空からやってくるのが見えた。大きな庭の中心で右手を抑えながら座り込んでいるはずかと、その前に今にもずかかの命を奪おうとしているように立つもう一人のなのは、パラルワールドなのは(以下PWなのは)が空から確認できる。それを見たアリサは加速し、二人の間に立つように着陸した。

「そこまでよ!!なのはあ!」

『来たね…アリサちゃん』

アリサを見つめるPWなのはの表情はあの武装局員が来る時に見せた嬉しそうな表情であった。

そしてずかかPWなのはが敢えてアリサを待っていたことをアリサに伝える。何か良からぬことを企んでいるのではないかと。

「私を待ってたねえ…。相変わらずこのなのははよくわからない性格してるわね」

「このなのはちゃん?」

「ああ、ずかかは知らないわよね。この目の前のなのはは別の世界のなのはなのよ」

「ええ!? そうなんだ…。私てつきりまた“影”に乗っ取られたんだと…」

「その“影”たちを作ったのがこのなのはよ」

「ええええ!」

『こつちのずかちゃんは良いリアクションをするんだね』

「私だってこんなずか初めて見たわよ」

「じゃあ今までの事件の…黒幕…?」

『別にどう見られてもいいからそう思っていたっていいよ』

「ふーん…なんかあんた、卑屈よね」

『それが?』

「別にそれがどうってわけじゃないけど…。ってそんなことあいのよー」

「凄い言葉遣い…」

「なんですかを狙ってんのよ！いきなり襲ったりして！」

『…それは言えないな。他の事なら教えてあげるけど』

「なんなの…これもあんたの言う理解されない考えの一つってわけ？」

『当たらずと雖も遠からずつてところかな。完全に違う訳じゃない』

「本当にわけわかんないわ…あんた今いくつ」

『十歳』

「私より年上なの…!?!」

『急に年齢聞いたね。でアリサちゃんはここに何しに来たの？別に私と雑談しに来たわけじゃないでしょ』

「そ、そうよ！あんたがすずかを襲っているから、すずかを助けに来たのよ！」

『そう…じゃあ戦ってみようか』

PWなのはは左手を前に出し、構えた。

第44話 星が強く輝くとき、そこに影はいる

アリサとPWなのはの戦いは動かない。アリサはクロノとの約束を守るため逃げ出すタイミングを窺っているのだが、PWなのは相手の出方を狙っているのか。それとも知らず知らずの内に罠の中に引き込んでいるのか。

「戦うなんて言っておいて、全然攻めてこないのね」

『挑発のつもりなの？ 私は中距離型の魔導師だから、これでいいんだよ』

「なにそれ、どういう…」

アリサがフレイムアイズを構えながら一步前進した時、足元からピンク色の魔力弾が三発飛んできたのだ。

間一髪アリサはフレイムアイズで切り払うことに成功し、すずかにも危険が及ぶことはなかった。

「な、何今の…？ 足元かアクセルシューターみたいのが飛んできた…？」

『あ、こっちの私もアクセルシューター使うんだ。やっぱり私だねえ…』

「今の何よ！」

『敵の攻撃の正体を敵に聞く。新しすぎる戦法だよアリサちゃん』

「わかんないだもん！ しょうがないでしょ！」

『じゃあ、足元見なよ。すぐわかるよ』

アリサが足元を見るとPWなのはの足元から影が一筋アリサの足元まで伸びていた。よく周りを見ると、PWなのはの足元から放射状に影が伸びて、まるでアリサとすずかを囲うように張り巡らされていた。

「なにこれ…結界みたいになってる…」

『上空にも張ってあるよ。アリサちゃんは私が“影”たちの製作者って忘れてない？ 私の基本戦術は影を使うの。今やってるこの影の結界は影を踏むと踏んだところとその近くの影からアクセルシューターが飛び出すようになってるから』

「なっ…！そんなの逃げれないじゃない…！」

「アリサちゃん、その間を通るようにすれば…」

「そんなの本体からの攻撃で落とされるわよ…」

『おや、中々鋭い』

「私がこの技使うならそうするからね…」

『いいね、いい目だ。その闘志、焦り、まだ持ち続ける希望…。いいねいいねいいね！その心が純度を高める！素晴らしい器になるための純度が…！』

PWなのはが恍惚な表情になる。手でアリサの頬をさする様なジェスチャーをして、名残惜しそうに手を下ろしすずかに視線を移す。

表情は変わらず恍惚なままで「いい…」と小さな声で呟き、下ろしている手を上げ、自分の右手で左手をさすり始めた。その行為は一体何を意味するのか。わからないアリサたちはただ恐怖した。

『楽しみだなあ…楽しみ…。うん、早くやろう。もう待ちきれなくなつたからさっさと終わらせるね、アリサちゃん』

「早く終わらせる？じゃあさっさと投降して、お縄になりなさい！そうすればもっと早く終わるわよ！」

『貴方のその熱さが！私の心を刺激する!!』

PWなのはが飛び出す、そしてアリサの間近で止まりその顔を殴り飛ばした。

アリサはその攻撃に咄嗟に反応できず、殴り飛ばされてしまう。さらに影の境界は解かれていないため、アリサが飛ばされ移動したところまでの影から一斉にアクセルシューターが飛び出す。PWなのはさっさと終わらすという言葉通り、この一撃でアリサは戦闘不能まで追い込まれてしまった。

「ぐっ…ああ…」

『あっさりと終わっちゃったね。私はその方が助かるからいいけど。』

「まだ…まだよ…。終わってなんか…」

「アリサちゃん…」

『やっぱりこのアリサちゃんは一番いいアリサちゃんだ！素晴らし
い…。そしてすずかちゃんも、綺麗…とても綺麗…』

PWなのはがそう言いながらすずかに近づこうとするとアリサが
PWなのはの足を掴む。すずかの方へ行かせまいとする小さな抵抗
だった。

『…意外と精神力高いんだね。でもこんな力じゃ私を止められやし
ないよ?』

「いいの…よ…。この位置にいて欲しかったの…」

『位置?』

「フレイム…アイズ!」

《おうよ!!》

アリサの掛け声と共にフレイムアイズの宝石部分が輝きだす。フ
レイムアイズがどこにいたのか?それはPWなのはの右足の下…で
ある。

PWなのはの右足の下から火柱が上がる。天をも焦がさんとする
その炎はPWなのはをたやすく飲み込んだ。

「ど…う…?」

火柱が落ち着き辺りを煙が立ち込める。アリサはその間にうつ伏
せになっている自らの身体を引きずりながらすずかの元へ行こうと
する。

「すず…か…。大丈夫…?」

「無理しないで、そこにいて!」

アリサがすずかに手を伸ばした時アリサの背中が誰かに勢いよく
踏まれる。

「ぐああああ!!」

「アリサちゃん!」

踏んでいたのはPWなのは。その姿、聖祥大付属の制服は全く汚れ
ておらず。肌も艶やか。つまり無傷なのだ。

PWなのははグリグリとアリサの背中に乗せた足を力強く動かす。
それに連動するようにアリサが呻き声を上げる。

『詰めが甘いなあ…。甘すぎるよ…。まるでマカロンみたいだ』

「あああ…！ぐうう…！すずかつ！逃げ…」

『人の話聞いてる？えい』

「ぐああああああ!!」

「もうやめてよ！なのはちゃん!!アリスちゃんが…アリスちゃんが…」

すずかがPWなのはに訴えかける。先ほどの二度目の踏み付けで大声を上げたアリスの姿にもう我慢ができなくなったのだ。せめて自分だけを、アリスだけは助けて欲しいと。

『それはできない相談かなあ。元々二人とも持つていくつもりだったしね』

「そんなんっ!？」

『散々〃影〃で考察して、魔導師同士の戦いに身を投じている友達の役に立てて、すつごく幸せって…さつきまで使用人に話してたじゃない。もう十分幸せになったでしょ？はい、幸せしゅーりよー。ここからは不幸せと理不尽でーす』

「こんな…こんな事って…」

すずかの目には絶望しか宿っていなかった。涙すら出ない極限の絶望。それがすずかを、そしてアリスを包んでいた。

自分たちはここで死ぬのだ。そう思っていた…。まさにその時。

「ダイバイン…バスターアア!!」

ピンク色の砲撃がPWなのはに向けて放たれる。

『これは…しまった…意外と粘られて時間をかなり使っていたみたいだ…。彼女が来るなんて…』

PWなのはダイバインバスターを片手のプロテクションで防ぐ一分間の砲撃を全て片手で受け止めたのだ。

そしてPWなのはの視線はアリスたちから上空に飛んでいる魔導師へ。

「なのはちゃん!」

「なの…は…?来て…くれたのね…」

『厄介な…。でも私なんだから何してくるかは予測つくよね』

「そこまでだよ、もう一人の私…!」

『あつそう。で、貴方は何しに来たの?』

「勿論、アリサちゃんとすずかちゃんを助けに来たんだよ」

『助ける?この二人を?貴方が?』

「何?何かおかしいことあつた?」

『全部おかしいよ。この二人を助ける理由つて何?』

「そんなの友達だからに決まつてる!」

『…友達…そうかあのすずかちゃんの話にはこの世界の私も入つていたんだ…。つまり、この世界の私はこの二人と友達だつたんだね…』

「どういう事?貴女はアリサちゃんと友達じゃなかつたの?」

『私に友達なんていないよ。アリサちゃんやすずかちゃんは一年生の時少しいざごぎがあつたくらい。ていうかそのいざごぎの所為で話さなくなつたんだよ』

「いざごぎつて…アリサちゃんがすずかちゃんのカチューシャ取つた…あの事?」

『へえ、こつちでもその出来事は同じなんだ。…そうだよ、その出来事』

そういうPWなのは目は辛そうな目をしていた。なのはもまたその話を聞き悲しい目をする。なのは、アリサ、すずかの三人はどんな世界でもどんな出会い方でも絶対に変わらない友情だと信じていた。しかし友情が存在しない世界があつた事を知ってしまった。

しかしなのはの心はさらに堅い助けるといふ決意を固める。

「友情が生まれない世界があつたのなら…ならなおさら助けたい!この出会つた偶然を、仲良くなれた奇跡を、私は守りたいから…!」

『…綺麗な事ばかりじゃ私には勝てない。貴方に絶望をあげる!』

PWなのはは右手の人差し指でなのはを指さし、その先からアクセルシューターを放つた。

なのはもレイジングハートを構え、アクセルシューターを放つ。

アクセルシューターは次々と放たれ、その全てが相殺されていく。

「中々…ダメージを与えられない…!」

『それは貴方が弱いから…だよ?』

その声は背後から聞こえた。

「後ろっ!？」

『遅い!』

なのはが振り向く直前、背中を中心を蹴り飛ばされてしまった。なのはは地面に落ち、落ちた所に小さなクレーターができるほどの威力であった。

『貴方の純度は…意外といいね…アリサちゃんほどではないけど。悪くない。でもね…貴方は知らない!』

「また…じゅ…純…度…」

「アリサちゃん、どうしたの?」

「すずかも聞いたで…しよ…?あの…なのはが何度…も純度って…
い言ってる…の…」

『あれ?アリサちゃんに教えてなかったっけ、純度の意味?』

クレーターからなのはが飛び出す。そしてなのはもまた純度についての質問をする。

『私には教えないよ。だって関係ない話だもん』

「え、そんなっ…!」

『ここで関係あるのはすずちゃんとアリサちゃんくらいかな?どちらにしろこの世界の私には何もいう事はないよ。敢えて言うならば邪魔しないでっただけかな?』

「なんでそんなに私を邪険にするの…?同じ人間、同一人物なら分
かり合えるはずだよ!」

『同一…人物?私と貴方が?馬鹿にしないで。全然違うよ。貴方みたいな暖かい空間にいる甘ちゃんと同じにしないで』

「甘ちゃんって…私は確かに、暖かい人たちに囲まれて幸せに暮らしているけど…自分が甘ちゃんだなんて、認めるわけにはいかないよ!暖かい場所にいたからこそ強くなっただ!」

『その強さに虫唾が走るんだよ!何も失ったことのないその強さが!!』

PWなのはがデイバインバスターのチャージを始める。急速に溜まっていく魔力。なのはも急いでデイバインバスターのチャージを

始める。

「失わないために…私は強くなったんだ…！ただ人の命を脅かす貴女に負けやしない！」

『私のこと何も知らないくせに!!』

二人のデイベインバスターのチャージが同時に完了する。後は放つのみだ。

『「ここで…決める！」』

同時に放たれたデイベインバスター。その威力は互角。どちらも引かずぶつかり合う。

少しPWなのはが進むかと思っただけなのだが盛り返し、なのはが進むかと思っただけPWなのが盛り返す。そのような状態になっていた。

「ぐっ！やっぱり互角か…！」

『互角…ちい…魔力量はこっちが上のはずなのに…！』

互いにどう決着をつけるか考える。このまま爆発させてその隙を突くか、別の方法を取るか。

なのはが取ったのは「そのまま前へ進む」だった。そしてゼロ距離からのアクセルシューターを当てるといいう作戦だ。

『私の勝ちだね』

進もうとしたなのはの動きは急に止まった。その理由はなのはの腹部から伸びる影であった。なのはの腹部に影が突き刺さっているのだ。なのは自身が“隷属の影”に乗っ取られていた時にシグナムとヴィータに行った攻撃と全く同じであった。

「ああああ…ああ…」

『「アリサちゃんもそうだけど私が”影”を作ったんだからさ…影を使った攻撃くらい予想しておきなよ』

「しまった…あ…！」

背中から刺さった影がスルリと抜け、膝から崩れ落ちるなのは。彼女の意識はもう無い。うつ伏せに倒れ身体の下から血液が地面に染み込みながら広がっていく。

高町なのはは敗北したのだ。その光景はさすがとアリサに深い絶望を与えることになり、すずかは受け止めきれず気絶してしまう。ア

リサはキツとPWなのはを睨みつけている。

「よく…も…よくも…なの…はを…！」

『さ、行こうか。アリサちゃん。あとすずかちゃん…は気絶してるのか。まあ抱えられるでしょ』

PWなのははアリサとすずかを抱え、空へ飛び立っていった。その時アリサには影で目と耳を隠して連れ去っていった。

地上には静寂が返ってきた。あれだけの戦闘を行った月村邸には気絶した月村家の関係者と意識だ戻らないままなのはだけが残った。

第45話 夢



どこか見覚えがある街並み。少し歩くと住宅街。

「(っ)は…(っ)っ？」

眩くも誰も答えてはくれない。

寂しくても誰も慰めてはくれない。

寒くても誰も温めてはくれない。

「誰もいない…っ？」

また少し見覚えのある住宅街を進みひとつのそこそこ大きな家を見つけた。

「私の家だ…」

そうそこは『高町なのは』の家。今いる位置は家から数百メートル離れているのだが、本来ここまで聞こえてこないはずの家族が話して笑う声が聞こえる。

「お母さんたちの声…」

と呟いた時、『高町なのは』の家の上空に一人の少女が飛んでいるのを見つける。

「あれは誰？」

飛んでいる少女は長い金髪を左右対称に黒いリボンでまとめており、瞳は赤かった。

「フェイトちゃん？いや、似てるだけだ…フェイトちゃんじゃない…」

そのフェイトに似た少女は口をパクパクと動かしている。どうやらこちらに何か話しているようだ。しかし、何も聞こえては来ない。

「なんて言ってるの？貴女は…」

するとその少女はいつの間にか手に持っていたデバイスと思しき杖を下に向けた。その先にあるのは『高町なのは』の家。

「えっ…ま、まさか…!？」

思わず駆け出していた。しかし中々家までたどり着けない。いつもより早く走っているはずなのに、その距離は縮まらない。

走る心は恐怖に染まっていた。何が起こっているかわからない恐怖。どこから出てきているのかわからない後悔という恐怖。それらが走っている自分の身体を支配していくのがわかった。

デバイスの先に光が集まっていく。大声を出してそれを止めさせようとする。どうにか止めて欲しいと。

「やだっ……！止めて！お願い！！止めてえ！！」

その声も虚しく、光は放たれる。その光は『高町なのは』の家を包み、焼いた。

木造の家からは火の手が上がる。ようやく、家の前まにたどり着く。

上にいた少女が背後に着地し、耳元で何かを囁く。しかし、それもまたパクパクと口を動かしているようにしか見えぬ何を言っているのかわからない。

「そ、そんな事より皆は……！」

背後に向けていた視線を目の前の燃えている自分の家に向ける。

まず目に入ったのは人の肉体が入ったジーンズ。黒いベルトが巻かれている。しかし上半身はどこにも見当たらない。

「あれって……お兄ちゃんの……」

次に目に入ったのは先ほどのモノとは逆の下半身の見当たらない女性の上半身だった。黒い髪を三つ編みにしてそれを赤いリボンで縛っている。

「あれは……お姉ちゃん……」

最後に目に入ったのは、肩を抱え合っている人間とそれに寄り添っている人間の真つ黒に焦げたモノであった。

「あ、あれはお父さんと……お母さ……ん……？」

膝から崩れ落ちる。目からは止めどなく涙が溢れる。

「うああ……ああ……いや……だ……。いやああ……！！」

狂ったように声を上げ、地面に突っ伏してしまう。目の前にある遺体は自分の家族なのだ。いや、正しくは家族だったのだ。もう声も出さぬ、抱きしめもしてくれなくなってしまった家族だったモノ。

「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だああ……！！」

再び大きな声を上げる。

その叫びにも誰も答えない。返さない。

「…てやる…」

次に発したのは小さな呟き。

「…殺してやる…殺して…やる！」

その目には確かな殺意と覚悟が宿っていた。しかしそこには希望は無かった。あるのは絶望と理不尽に対する怒りだけであった。

そして涙を拭うため、目を閉じる。

◆◆◆

無意識に目を拭い、目を開く。するとそこに広がっていた景色は医務室の天井だった。

「私…寝てた…あれは…夢…。また…あの夢見たんだ…あの悲しい夢…もしかしてあの夢って…」

遠くから管理局員の慌ただしい声が聞こえる。

近にある結界内で戦闘が行われているということは分かった。なのはも参加しようとして身体を起き上がらせると、腹部にあつたはずの影に刺された傷が無くなっていることに気づいた。

「シャマルさんがやってくれたのかな…あ、そんな事より早く行かなきゃ！」

なのははベッドから急いで降りて、医務室の外へ駆け出す。

局員に何が起こっているのか聞こうとした時、モニターにピンク色の閃光がフェイトたちを襲っているのが目に入った。

PWなのはとフェイトたちが闘っているのだ。なおさら助太刀に行かない訳にはいかない。するとエイミーが話しかけてきた。

「あ、なのはちゃん。目が覚めたんだね。もう歩いて大丈夫なの？」

「はい！もう何にも異常なしです！」

「そ、そっか…」

「？あ、それよりエイミーさん！フェイトちゃんたちが闘っている場所を教えてください！」

「えっ！助太刀に行こうとしているの!?無茶だよ、なのはちゃんこの三日間ずっと寝てたんだよ？今は何ともないようだけど怪我也も大き

かったし…」

「私三日も寝てたんですか!?!」

「うん…何かにうなされてる様子もあつたし、今はやめた方が…」

「それでも…行かなきゃ…! 私はアリサちゃんたちを助けられなかった。だからフェイトちゃんたちを助けに行つて…」

「そんなに気負わなくても…」

「そういうんじゃないんです! フェイトちゃんを助けるのもそんなんですけど…もう一人の私、高町なのはを救えるのは…私だけなんです!」

「どういうこと…?なんで救えるのがなのはちゃんだけなの?」

「最近いつも見る夢があるんです。さつきも見ました。わかつたんです。それがもう一人の私の過去だつて…」

「…その過去を理解できているのがなのはちゃんだけだから救えるのは自分だけっていうの?」

「はい」

「…本当は止めるべきなんだろうけど…。その話を信じるなら、行かせた方がいいんだろうね…。今クロノ君もはやてちゃんもシグナムさんもやられて、戦つてるのフェイトちゃんだけだし…」

「そんなに、危機迫つていたんですか!?!」

「もう一人のなのはちゃん、滅茶苦茶強いんだよ…。それに何か怒っているみたいで…」

「じゃあ、急いで行きます!」

なのはは駆け出した。心に決めた救いの決意を強く握りしめ。

まさにその時、PWなのが引き起こした事態は既に最終局面に近くなつてきていた。

第46話 搜索と創作

時間はなのはが目を覚ました日から三日遡る…。

それは月村邸で起こったなのはとPWなのはの戦いから一時間後。時空管理局地球支部の面々により、アリサとすずかの搜索が行われていた。

この時のなのはは集中治療室に運ばれ今だ出てきていない。

クロノはアリサとなのはを一人で行かせたことの自責の念からくる後悔で搜索を急がせ現場にあまりいい空気を出していなかった。

「クロノ。落ち着いて…そんなに焦ってたら見つかるものも見つからないよ」

「フェイト…しかし…」

「私もそう思うよ？こういう時こそ、落ち着くもんや」

「はやても…僕がもつとしっかりしていればこんなことにはならなかったんだ…だから！」

「だから、落ち着くの！」

フェイトに強く言われたクロノはグツと苦虫を噛み潰したような顔をし、椅子に座り俯いてしまった。

今のクロノはメンタル的に万全とはいいがたい状況だった。フェイトも万全とはいかない状態だが、クロノを見ているとそうも言えない。

「クロノ、もしアリサたちの居場所がわかった時は私に教えてね。はやてたちと一緒に助けに行くから」

「…お前たちは影から種を貰っていたんだったな」

「うん。回数制限付きだけどね…」

「ありがたいことや…」

「それでも、あのなのはには多少戦えるだろう…。まさかこちらのなのはまでやられるとは…正直油断していた…」

クロノは俯きながら、手を強く握り話す。そう、なのはが戦っていたあの時。管理局側の誰もがなのはの勝利を疑わなかった。多少のピンチもあったが解析によるPWなのはの魔力消費はなのはより酷

く、計算では影による攻撃は使えないはずだったのである。故にあのままなのは突撃作戦が成功していれば確実に勝っていたはずだったのだ。

しかしどこからか出現した影。その影によりなのはは敗れ、アリサたちが誘拐されてしまった。

「あの影はもしかして、パラレルワールドのなのはの残存魔力とは関係なく使えるんじゃないかな…?」

「つまり何か条件を満たすと起動する…という事か?」

「うん…。だつてそうでもないと説明がつかないよ!あの時の…なのは戦とアリサ戦の共通点は何かないの…?」

「……。っ!もしかして…光…か?」

「え、光?」

「まずアリサ戦だ。アリサの時は空に太陽があつて、パラレルワールドのなのはは月村邸の庭の何も光を遮ることのない中心にいた…つまりアリサやすずか、そして術者自身が光に照らされ影を作っていたんだ。そしてなのは戦。あの時は互いに砲撃魔法を撃っていたんだ、地面に影ぐらいで来ていただろう…」

「光に影つてそんな単純な…」

「いや、奴は自分が影を作ったことになりの自身を持っているよ。うだった。そんなに自信があるなら、いかなる状況でも、たとえ魔力が残っていなくても使えるようにしているだろう…」

「もし、光が条件だとしたら…対策はかなり大変になるで。魔法を使うてたら光なんてどうしたつて出てまう…影なんて作り放題や」

「確かに…防ぎようがない…」

「なら影に注意して戦うしかない」

クロノの強気な作戦にフェイトは最初意見しようと考えたが、よく考えるとそうするしかないのかもしれないと思い、その意見を押し込めた。はやても領き同意の意を示す。

その頃、PWなのはが潜伏場所ではアリサとすずかが椅子に縛り付けられていた。

潜伏場所の雰囲気はというと、ジメジメした空気が漂う廃墟といった感じだ。壁と天井にはツタが這っており、恐らく出入り口であろう鉄の扉は全体的に錆びついている。虫などがいるようには見えない。変なところで清潔感が見えてくる。

『二人とも寝てるのかな？それなら都合がいいけど。今の私殺る気満々って感じだし！』

PWなのはは腕を天井に向けて振り上げ、伸びの姿勢をした。

そして部屋の端にある机に向かう。その机の上には注射器とナイフが置いてある。そのナイフは所謂果物ナイフと呼ばれるもの。その刃先には乾いた血液のようなものが付着している。

『どれにしようかなー。どっちもいいよね…って注射用の薬ないや。じゃあナイフに決定かな。しようがないね』

恐ろしい独り言を呟いている時、真逆の端にある椅子に縛られているアリサが目覚めます。

「……は……？私……パラレルワールドのなのはに負けて……その後……」

『私に連れ去られて、ここに来たんだよ？アリサちゃん』

「!?なのはっ……私たちを……どうするつもりなの……あれ？怪我が無くなってる……」

『私が治してあげたんだよ。怪我が長引くせいで純度を落とされたらかなわないからね』

「また純度って言った。ねえ、その純度って何？」

『そういえば教えるって言ったのに教えてなかったね。いいよ教えてあげる』

PWなのははもう一つ椅子を部屋の奥から持つてきてアリサの前に置き、そこに座りアリサの目を見つめながら話し始めた。

『純度って言うのはね、その人がどれだけ欲深いかってことを示すものだよ。例えばすずかちゃん。彼女は誰かの役に立ちたい、友達に頼られたいっていう承認欲が強い。あそこにいた誰よりも……。そ

れが純度が高いって事』

「欲深さ…その純度が高いとあんたにどんないい事があるのよ。今聞いたことだけじゃ直接あんたに得する事なんてないじゃない」

『私に得すること？それはあ…どうしよ教えようかな…』

「なつ、ここまで教えといて一番肝心の部分を黙る気！」

『一番肝心な部分だからだよ？』

「ぐぬぬ…」

アリサがPWなのはを睨んでいると、彼女の聖祥大付属の制服のポケットに木製の持ち手が飛び出ている事に気づく。それが何なのか、その持ち手に付いている赤い色で察しがついた。

「そのポケットから出てる持ち手ってまさかナイフとか刃物の持ち手じゃないわよね…？」

『え、急にどうしたの？ポケットに入れているのは果物ナイフだけど…それがどうかしたの？』

「それを使ってどうする気なの？まさか私たちに果物振舞うわけでもないでしょ…」

『あーそういう事。自分たちが殺されるかもしれないから、刃物が気になっちゃうんだね。でも心配しないで、殺す事は一番純度を下げてしまうからしないよ』

「そ、そう…本当に純度気にするわね…」

アリサは殺さないのならどうしてここに集めたのか、先に連れ去った局員たちはどうなっているのか気になったが聞くことはできなかった。

なぜなら急にPWなのはが椅子から立ち上がり、部屋の外へ行ってしまったからだ。何か気づいたことがあるように出ていった様子であった。

「なんなのよ…慌ただしいわね…」

アリサはこの隙にすずかを連れて逃げようかと考えたが、PWなのはの影の事を思い出し逃げ出すことを止めた。

素直にフェイトたちが助けに来てくれる事を待つのだ。

数分後、PWなのはが部屋に戻ってきた。錆びついた扉はギイギイ

と大きな音をたてながら開く。その大きな音に紛れて一瞬悲鳴のよ
うな声を聞いたアリサ。自分の前を通るPWなのはに話しかける。
さっきの悲鳴みたいのは何かと。

『悲鳴？そんなの聞こえたの？多分、局員の声だよ。アリサちゃん
たちとは別室に入れてたからね』

局員の悲鳴。その局員にいったい何が起こったというのか。アリ
サは頼れるものがない今、ただこれから自分に来るであろう恐怖に
慄いていた。

『ふんふーん、今日は何の日ー』

PWなのは鼻歌を歌いながら、モニターを表示し、キーボードで
何かを打ち込んでいる。アリサのいる場所からではよく見えず、すぐ
にモニターは閉じてしまった。

「何してたのよ、今」

『今？ああ、なんかこの施設の周りに管理局員が飛んでいるみたい
だったからさ…確認してたの』

「管理局が探しに来ている！じゃあ助けてもらえるかも…！」

『いやだなあ、アリサちゃん。管理局がこんなところまで探しに来
てるってわかったなら早めに目的を終わらせるのが…普通でしょ？』

「くっ…それもそうよね…。なら早くあんたの目的を教えてよ
！」

アリサは身体を思い切り前に突き出し、縛られている椅子をガタガ
タと揺らしながら訴えた。PWなのは少し考え、怪しい笑みを浮か
べながら『そろそろいいかな…うん話してもいいや』と言った。

「ついに言う気になったのね…！」

『うん、だって今しか話す機会ないと思うし』

アリサは息を？む。その相手の威圧的でありながらも優しさに満
ちた声が心を飲み込んでいくような気持ちに襲われたからだ。ふと
すずかの方を見る。まだ眠っている。起こした方がいいのか、聞かせ
ない方がいいのか。迷っているとPWなのは自分の目的を話し出
す。

「ちよ、ちよっと。まだすずかが起きてないじゃない！」

『大丈夫だよ、寝てるふりしてるだけで本当はアリサちゃんが起きるより前から目が覚めてたみたいだし』

「え、そうなの？」

「バレてたんだね…」

『今の貴方たちの覚醒状態はこちらが把握してるからね。バレないって考えが甘いんだよ』

「そっか…じゃあ、聞かせて欲しいな…もう一人のなのはちゃんの目的」

『いいよ、話してあげる。私の今の目的は自分の身体を作ること、私の世界で無くした身体を取り戻そうとしてるの』

「貴女の身体…？もしかして私たちや局員の人を攫ったのって…」

『そうだよ、すずかちゃん。貴方たちを全員まとめて私の身体の材料にするの。今の私は幽霊みたいなものだからね…。魔力で構成されているこの身体を肉体にダウンロードすることで私は身体を取り戻すことができる』

「そんなふざけた事…！させるわけないでしょ！」

『どうやって防ぐ気なの？アリサちゃん縛られてるんだよ。デバイスは消しといたし、体の魔法石も摘出したし、貴方にはもう抵抗する手立てはないんだよ？』

「なっ…！？魔法石を…摘出…。デバイスを…消した？」

『そ、フレイムアイズはもうこの世にいないし。貴方の体にあった魔法石は私の身体を作るための軸になってもらってるの』

「そんな…フレイムアイズ…が…」

『あれ？そんなにショックだった？しまったなあ…純度が落ちちやうよ』

PWなのはが少し残念そうに呟く。その言葉に思わず激昂しそうになったアリサはその怒りを抑え、再び質問をする。

「…：私たちをあなたの身体にするって言うけど…：どうやってそんなことするのよ…：」

『やり方？そんなの粘土をこねるみたいに、肉塊にした貴方たちをこねて魔力で私の身体の形に整えて…：って感じでやるんだよ』

「に、肉塊…!?!」

「酷い…」

二人は思わず顔をしかめてしまう。しかし、その未来はすぐそこま
で迫っているのだ。

しかし、ここでアリサは疑問が浮かんだ。先ほど、PWなのはが自
分たちを殺さないと

言っていたからだ。肉塊という事は自分たちは死んでいるという
事になるのではないかという疑問だ。

『肉塊にするとき、貴方たちは死なないんだよ、生きたまま私の身体
になるの』

「意識は…?」

『あるよ?』

それを聞いた時彼女は唾然とした。殺さず肉塊にする。痛みも意
識も残ったまま。それは悪魔の所業だと感じた。それをさも当然の
様に行おうとする目の前の相手に対して悪魔という言葉がここまで
似合うものかとどうでも良い事まで考えてしまうほど恐怖を感じ始
めた。

『さ、やろうか?』

PWなのはの手には果物ナイフが握られていた。

殺さないという事はその刃物が何をしようというのか、アリサと
すずかにはわからなかった。ただ、一つ心の底から出た言葉。

「誰か……助けて……!」

すずかの言葉は悲しく響いた。アリサも唇を噛みしめ、何もできな
い自分を心の中で責めるだけだった。

『じゃ、もう一度寝ててもらおうよ。さよーならー』

高く振り上げられたナイフの持ち手は勢いよくアリサの脳天に振
り下ろされる。すずかは思わず目を瞑る。

その後、部屋にはドカツという鈍い音が二回響いた。

第47話 少女の目的

なのはが目覚める三日前。月村邸の戦いから三時間後。遂に一人の局員からの報告が入る。

PWなのはの潜伏先がわかったのだ。

「クロノ！」

「ああ、わかっている。行くのは僕とフェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、ザフィーラだ。局員は既に現場に待機している！」

「了解や！行くで、皆！」

「了解しました、主はやて。」

「ああ…アリサたちを助けんだ！」

六人は早速地球支部を飛びだし、潜伏先へ急いだ。アリサたちが無事かどうかは確認されていない。つまり時間は限られているのだ。

十数分後、潜伏先の海鳴市外の廃墟が立ち並ぶ街の上空に到着する。すると地上から報告を行った局員がクロノの元に来る。

その局員によると、この街の中心部にある一番高いビルの最上階で、PWなのはがアリサたちを部屋の中に連れて入っていくのが見つけられたらしい。

そして、PWなのはが部屋の外に飛びだし、数人の局員を撃退し、また戻ったところが確認された。

「じゃあ、ここにいるのはほぼ間違いなことだね…！」

「そうやね…」

「主、ここはテストロッサと私、ヴィータを突撃させましょう」

「僕はどうするんだ」

「パラレルワールドのなのはが出てきたところを主と共に攻撃し、捕まえていただきたい」

「…成程…時間がない。それでいくか。あまり考えれた作戦とは言い難いがな」

「しようがねえさ、作戦立案はシグナムの役回りじゃないもんな」

シグナムがヴィータの頭に拳骨を加えた後、フェイト、シグナム、ヴィータの三人がすぐさまビルの最上階へ突撃した。もちろん影を

警戒しつた。

「どこもかしこも明るいな…」

ビル内を飛んで移動しながら、ヴィータが呟く。

「これこそ奴にとつての一番の罠となるんだろう…影、厄介なものだな」

「そうですね…。あ、この扉の部屋が局員の人が言っていた、アリサたちが連れられた部屋ですよ」

三人は錆びついた部屋の前に降り立つ。明らかに開けると同時に攻撃されそうだが、ここはもうためらっている場合ではないことから、ヴィータが扉を破壊し、その流れで残りの二人が部屋に突撃する段取りとなった。

「行くぜ…！ラーケテンシユラク！」

ヴィータのアイゼンが扉を軽々とぶち抜く。そしてフェイトちシグナムが飛び込む。

そして、デバイスを構え部屋の中を確認する。部屋に仕切りはなく、入り口から全体が見渡せるレイアウトになっていた。

「誰もいない…!?!」

「嘘だろ…移動してたってのか…!?!」

「さて、二人とも。この部屋の端にある血痕。まだ新しいものだ」

「新しい血痕…つまりこの部屋を出てそんなに時間はたっていないと…?」

「ああ、そう考えられる。もしかしたらこのビルの別の部屋かもしれないな」

「探そうぜ。クロノには移動しながら報告しよう」

「うん！」

三人の報告を聞いたクロノにより、ビルの中の魔力反応を調べることになった。そして、先ほど突入した部屋から五部屋分離れた部屋に強力な魔力反応が出たのだ。

「なんと、まさか今から確認しようとした部屋だったとはな…」

とシグナムが呟くと部屋の奥から『おいでよ。面白いものを見せてあげる』というPWなのはの誘いがきた。

その誘いを注意しながら、部屋に入るとそこには巨大な肉塊が部屋の中心に鎮座している。そしてその肉塊の前にアリサとすずかが横たわって並んでいる。

「こ、これは…!？」

「趣味わりーな…!なんだよ、これ!」

『これから私の肉体になる素材だよ。ここにこの二人を入れれば完成なんだ!』

「させると思うか？」

『知らないよ。私がやるって言ってるんだから、やるんだよ』

「なんて頑固な…!…私が相手する!」

「テスタロツサ、手筈通りに頼むぞ」

フェイトはバルディッシュをハーケンにして、PWなのはに突撃する。ハーケンの刃先がPWなのはに到達した時、その足元から影が伸びその刃先をくるむ様にして止めた。

「堅い…!?!動かない…!!」

『私の影、強いんだよ』

「そっか…でも私とバルディッシュも…強いから…!」

ハーケンの魔力刃を自分の方へ思い切り引く。その時魔力刃の出力を一気に上げること、纏わりついてた影を切り裂いた。影は地面に落ち、溶ける様に消えた。

再びハーケンで斬りかかる。フェイトの背後にはその腹部を突き刺そうとする影が迫っていた。この部屋に窓も蛍光灯もなく、一見光源はないように思えるがフェイトのハーケンが光源となり、影を発動する条件を満たしているのだ。

「私気づかないでも思ったの?」

『何!?!』

フェイトは背後から迫る影を横に移動することで避け、PWなのはの右腕を斬る。

『ああ!!うああ…!ぐうう…まさか…私が怪我をするとは…』

「油断してたね。このまま押し切らせてもらおう!」

ハーケンがもう一度振り下ろされる。無くなった右腕の方向から

足を両足を切り落とすつもりなのだ。

『殺意に満ちた攻撃……いい殺意だよ！フェイトちゃん！』

PWなのはは魔力で構成されている足を魔力に戻し消滅させ、斬撃を回避した。その勢いでフェイトはその場で一回転してしまう。

背後を見せてしまったフェイト。その背中にPWなのはの左手による手刀が迫る。

「早い!？」

『もらったあー!』

フェイトはギリギリで回避を試みるが、直撃は避けることができたもののマントが横に半分切り落とされてしまった。フェイトはそのマントを切り離し、PWなのはの目の前に投げ、目くらましを行う。

『こんな小細工、私には通用しない!』

「どう…対処する気なんだ…」

魔力から再び足の形になったPWなのはの足から影が伸び、マントの下からフェイト目がけて突進をしてくる。PWなのは本人はそのマントを左手で払いのけ、フェイトの方を見る。

その目は勝ち誇った余裕の目であった。

『右手の修復も完了したし、戦いは振出し。最初からだねえ…』

フェイトは高速移動で何とか避けており、その言葉に返答す余裕はなかった。肉塊の方へは行かず、ずっと扉の反対方向で避け続けるフェイト。PWなのははそれに違和感を感じ始めた。フェイトは明らかに魔法で防御をするなどといった行動を意図的にせず、危険度の高い回避行動のみを行っているのだ。

『…まさか…何かの作戦…? 一体…』

PWなのはがふと視線をフェイトから部屋中央にある肉塊側へ移動させた時の事だった。彼女は気付いてしまったのだ。そう、肉塊前にあつたはずのアリサとすずかが何処にもいない事を。さらには肉塊に押し込んでいた魔法石も無くなっている事を。

『これはどういう…!?…! シグナムとヴィータもいない! あいつ等か!!』

「気づいた時にはもう遅い!!」

フェイトはようやく出てきた余裕の合間に叫び、影をザンバーにしていたバルディッシュで追いかけてきた影を切り落とした。切り落とされた影は根元から消えていった。

『どうりであの二人がなんの支援もしてこないわけだよ…。最初から貴方が困だったわけだね、フェイトちゃん』

「そういう事。…私の事はこっちのなのと同じ呼び方なのに、シグナムたちは違うんだね」

『?あんな虚像にどんな敬意が必要なの?あれは夜天の書の機能で主にもたらされるただのシステムの一つに過ぎないんだよ?あ、もしかしてこっちだと元々人だったとか?それなら納得』

「シグナムたちだって人だよ!呼吸もするし、食事もする、感情だってある!人と同じように生活しているんだ!」

『知らないよ…こっちのヴォルケンリッターの事情なんて…』

「そっちのヴォルケンリッターだってそうだよ!」

『こっちの世界の事なんて、何も知らないくせによく言うよ…』

PWなのはが左手を前に突き出し、手のひらをフェイトの方に向ける。

デイバインバスターの準備だ。PWなのは何も言わずに、魔力の収束を始めた。

「!砲撃魔法…!デバイスも介さず使うなんて…!バルディッシュ!」

《Yes sir MODE RAGING Start Up

》

フェイトは一度目のモードレイジングになった。これでデイバインバスターを回避しようとしているのだ。

『モード…!?… 不屈!め種を植えてたな。まあいいや、もう避けさせやしないよ!』

チャージが終了し、放たれるピンク色の一閃。そのデイバインバスターは部屋の半分。フェイトの全方向を包むほど太い砲撃であった。

「なんて、無茶苦茶な…!」

フェイトは回避できないとわかった時点で、プロテクションを発動

し砲撃を受け止めることにした。だが、これはPWなのは影が背後からくる可能性があるためかなり危険性の高い選択である。

案の定、背後からの影の攻撃が来る。フェイトは背後にもプロテクションを張り、なんとか耐えていたが、砲撃が終わりそうになってきた時、モードレイジングが解け始めてしまったのだ。これは元々不完全な種でモードを使ったことによる副作用ともいえる症状である。

《Time Out》

バルディッシュの無機質な音声が終わりを告げる。モードレイジングは完全に解除されてしまった。

「くっ…こんなに早く解除されてしまうなんて！」

『魔力の消費が激しくなったからだよ。デイバインバスターと影、どっちも防いでたしね』

「流石開発者。『影』の能力の事はすぐわかるんだね…」

『そりゃあね…。にしても酷いことするね。私からあの二人を盗るなんて』

「元々あの二人は望んでここに来たわけじゃないでしょう！」

『まあね。でも私は、悲しいよ…これじゃ、私身体が取り戻せないよ』

「本当の身体でもないのに取り戻すって…なんか変な気もするけど…。もう止めよう？これ以上戦う必要なんてないよ。きっと私たちは貴女の力になれる…」

『そんなわけないでしょ。私の事は私にかわからない。私の気持ちなんて何も知らないくせにわかってもないくせに…』

「確かにそうかもしれないけど…。ちゃんと話合えば！」

『…癪だけど、あれを使うか？…でも…いや……しようがないのかな…。くそっ…！』

「何をブツブツと…？私の話聞いてる？」

フェイトが聞くと、PWなのは急に部屋から飛び出し、どこかへ行ってしまった。フェイトが目で追った時、見えたPWなのはが行った方向がビルの出入り口ではない事から、外へ出たわけではないとフェイトは考えた。

であるならば、一体どこへ行ってしまったのか。フェイトはエイミイに通信で魔力反応の位置を聞く。すると、今いるビルの地下に反応があるという事がわかった。

フェイトは、クロノたちに肉塊となった局員たちの保護を頼み、地下へ向かう。

「いくら何でも地下に行くには早すぎる…。つまり、地下には魔力を持った何かがいるという事なのかな？でも、あのなのはの事だから転移魔法とか使えそうだな…」

フェイトが床を抜きながら、地下へ向かっているとPWなのはの後姿を捉えた。

しかし、距離は詰まらず大声で制止するように告げながら追うという形になってしまった。

「地下に何かあるっていうの…？」

と言うとPWなのはが後ろ、つまりフェイトの方を振り向き次のように言った。

『私についてきてもいいことないよ？特にここからは』

『どういう事？この先に何かあるっていうの？』

『見たきやあ見ればいいけど…。きつと気分悪くなるよ』

「一体何が…。肉塊よりも酷いのかな…」

フェイトはPWなのはの後について行き、地下の部屋の扉の前に降りた。地下室の扉は他の部屋の鉄の扉と違って木の扉であった。

明らかに異様な雰囲気な扉の向こう側から伝わってくる。

そして、開けられる扉。静かに、重々しく開かれる扉の向こうには凍り付いた人間が転がっていた。

「人…!?なんで、こんなところに…!」

『死体を置いておくのにこの地下の温度は丁度よかつたんだよ』

「死…体…?まさか、その人死んでるの…?」

『そうだよ。このクズは私の世界で一年前に死んでいる人間なんだよ』

「死んだ人を氷漬けに…。なんて…なんてことを…」

するとPWなのはの目がキツと鋭くなり、フェイトを睨みつける。

『そんな事を言えるのは私の事を理解していないからだよ！やっぱり貴方と話し合うなんてできないね！私の事何も知らない貴方とは！』

「そんなっ！」

PWなのはフェイトの足元に魔方陣を作り、転移魔法でフェイトをビルの外へ追い出した。

そして、その部屋にはPWなのはと氷漬けの死体のみとなった。

氷漬けの死体の特徴は金髪で二つ結びの小学生程の少女である。閉じられた瞼の間からうつすらと見える瞳の色は赤色、来ている服は黒いレオタードのようなもの。まるでフェイトの様な少女であった。

『見るたび吐き気がする。…本当に嫌なんだ、癪なんてもんじやない。私にとつて最大級の屈辱だよ』

氷が解け、中の死体が床に落ちる。そして、あの局員たちの様に段々と肉塊になっていく。まるで粘土の様にされた肉体は少しづつ高町なのはの姿へと変わっていく。変化していく時の音はグチャグチャととても聞いていられない様な醜く汚い音をたてていた。

5分後、完全に高町なのはになった肉体に、魔力体であるPWなのはが憑依するように、一体化する。

「……出来タ。これで私は肉体に戻ったんだ…。あれ？声に変なノイズが入ってるナ」

PWなのはは喉に手を当てて発声を確かめるが、必ず言葉の最期にノイズが入るようになっていた。

「やっぱり、人間一人じゃ私の復活には足りなかったのかナ」

微妙な顔をしながら、PWなのはは地下室から外へ出た。その足取りは肉体と精神を馴染ませるようなものだった。

その頃、外へ追い出されていたフェイトはシグナムたちと合流し、ビルを局員と共に奉仕する準備をしていた。

「テストロッサ、その死体は誰なのか知っているのか？」

「いや、知らない人だった。…私に似ているようにも思えたけど、あのなのはの私への態度を見るに、私とは別人と考えた方がいい」

「死体の人間の事をクスって言うくらいだからすげー恨んでんだろ

うな」

「そう、だから違う人。私によく似た別人だっと思ったの」

三人が話していると、クロノから通信が入る。PWなのはらしき人影がビルから出てきたというものだ。

「出てきたか……!」

「行きましょう。あのなのはを止めるために!」

「おう!」

三人はクロノの元へ飛んでいく。

そして三人が合流地点に辿り着いた時、目の前に広がっていたのは多くの局員とザフィーラが地に落ち、クロノとはやてがボロボロのバリアジャケットでPWなのはと対峙している光景だった。

「これは一体…何が起こったというのだ…!?!」

「クロノ! はやて!」

「三人とも来たんだネ…。さア、遊ぼうヨ」

「みんなに何をしたの…!」

「別ニ? 変なことはしてないヨ。私はただビルから出てきただけだヨ」

「出るだけでこんなになるかよ! ふざけんな!」

「ヴィータは賑やかだねエ。でもクロノ君たちからすればただ出てきただけなんだヨ?」

「主、どういう事なのか説明を…」

「もう一人のなのはちゃんの姿が見えたと思ったら、こんな状況になつてたんや…。皆瞬きしたらやられとつた…」

「本当に…でてきただけで…こんなことに…?」

「さ、私が嘘をついていない事がわかったところデ…レイジングハート、お願い」

《Stand By Ready Set Up》

レイジングハートの合図と同時に、PWなのはの身体をピンク色の魔力光が包む。そして中からバリアジャケットを身に着けた姿を現す。

「レイジングハートも、なのはのバリアジャケットと全く同じ…」

「そりゃあ、私なのはだもノ」

PWなのはは視線をフェイトからヴィータに移す。そして次の瞬間、ヴィータは近くにあった別のビルの壁に激突していた。

「なっ…」

「ヴィータア！」

シグナムが叫ぶ。しかしヴィータはあまりに突然の事で動揺して返事ができなかった。

「ふふ…今の私は少し機嫌が悪いんだ。特に私の身体を取り戻す邪魔をしヴィータとシグナムには痛い目に遭ってもらわないと気が済まい…」

「なんだよそれ…！せこいぞ！あたしに何したんだ！」

「時間を止めて、殴り飛ばしたノ。それだけだヨ」

「時間を止めた…？まるで『束縛の影』じゃあねえか！」

「その『束縛の影』は私の能力の試作品。私自身が時を止めるようになるためのデータ収集用のデバイスだったんだけど…あれは結局失敗作で全然止められなかった。それでも私はその少ない時止めの情報とデータを解析し、『束縛』を身体に戻して完成させたんだ。本当の時間停止ヲ…！」

「本当の時間停止…そんなのどうやって勝てば…」

ヴィータが呟いた時、はやてが思い出す。自らのモードトロイエを使えば戦えるようになるのではないかと。

「モードトロイエなら、その時間停止にも対抗できるはずや！」

「そうか…！それでいこうはやて。ヴィータとシグナムに能力を早く！」

「わかった！」

「無駄だヨ」

フェイトとはやてに告げるPWなのは。

「『忠誠』の力はその無効にする能力の詳細。つまり仕組みを知らないとその効力を持たないんだヨ。そして、この時間停止に仕組みなんてない。ただ時間を止めるだけ。それだけなんだ」

「仕組みがない!?じゃあ貴女はどうやってその魔法を作ったの?ど

んな魔法にも仕組みや理論、計算があるんだ！それらが無いなんておかしい！」

「フェイトちゃん…。貴方は知っているはずだよ？身近な人で理論も何も無いところから魔法を創り上げる能力を持っていた人ヲ…」

「なにもない所から…？…！…！なの…は…？？」

「そう、高町なのは。この世界の私。ま、あれは私が中にいたから使えたんだけどネ」

「なのはちゃんの中…つまり種の中に貴女がいたから使えた力ってことなんか…」

「そういう事。そしてこの魔法を創る力に必要なのは創造力とより明確な感覚とイメージ。そのための『束縛』ってわけ」

「データ収集ってそういう事だったんか…！」

「じゃあ時間を止める感覚さえわかれば、上限なしの完全な時間停止が使える様になるという事か…。強すぎる…！」

シグナムたちが驚いていると、気持ちが悪く落ち着いたヴィータが、再び空を飛び元居た場所へ戻ってきた。

「人が動揺してる時に重要な話してんじゃねえよ…！」

「いいのいいノ。ヴィータはここで退場だから」

「くるか…！」

ヴィータはグラブファイゼンを構えるが、構えた次の瞬間シグナムの方向に蹴り飛ばされてしまった。シグナムとヴィータはぶつかり、そのまま地面へ落下し、大きなクレーターを作るほどの勢いで地面にぶつかる。

「一瞬で…二人が…！」

「時間停止に対策ができないならどうやって勝てばええんや…！」

「時間停止は楽でいいねエー。さくさく倒セル」

「まるでゲームみたいに！許さないぞ！」

「許さないなら…どうする気？」

「貴女を…なのはちゃんを止めるんや！」

はやてが夜天の書を開き、魔法を使用しようとする。フェイトも同時にバルディッシュを構え、周りにフォトンランサーを展開する。

「おおー、面白いネ。時止めないで対応してあげるヨ」

「完全に舐められてる…！」

「しょうがないよ。完全に向こうが優勢なんだから…！クロノが治癒を受けている時間くらい稼がなきゃ…」

二人の魔法が放たれる。はやてはミストルティン、フェイトはフォトンランサーフアランクスソフトだ。PWなのははその魔法たちにプロテクションなどの防御魔法の体制を取ることではない。その代わりに影がその身を守った。ミストルティンに当たって石化した影はフォトンランサーによつて碎けるが、PWなのはにダメージは与えることはできなかつた。

碎け、飛び散る石の破片から見えるその顔はまるで無力な二人をあざ笑うかような、不気味な笑みだつた。

「多少の誤算はあつたけれど、私の計画は問題なく進みそうだね。嬉しいなあ」

「そんな…！ノーモーションからの影は警戒していたはずなのに…！」

「いつの間にかなのはちゃんの身体を包んで防がれてしもうた…！時間は止めないって言っていたのになんで気づけなかつたんや…？」

「いい反応してくれたから教えてあげル。なんでいつの間にか影が私を包んでいたかというと、私が肉体を手に入れたことでパワーアップし速度が上がったからだヨ」

「パワーアップして速度が上がつた…！たつたそれだけであれだけの違いが出るものなの…？」

「圧倒的すぎる…！こんなどうやって…！」

あまりの強さに絶望を感じる二人。もしクロノが戻ってきててもこの差は埋まらないだろう。それほどの差がここにはあるのだ。PWなのはの余裕の態度は変わらず、空を飛び続けている。ビルの屋上に降りているフェイトとはやてはそれを見上げている。

「来ないノ？こつちから言つてもいいんだけど…！それだとすぐ終わりすぎちゃうなあ」

「完全に下に見られている…。本当だからしょうがないけど…」

「モードを使つても向こうの方が『影』の事をよく知っているせいで、モードが解除されるほどの砲撃をくらわされてすぐに解除されるのが見えているから…まだ使わんほうがええんやろな…」

二人とPWなのはの睨み合いが続く。PWなのはは時々、影で牽制をしてきたが、二人は協力し、何とか凌いでいた。

「どうする…！どうやって！」

「近づぐこともできひん…」

「…面白い事考えタ。これは良いゲームダ」

PWなのはが笑みを浮かべ呟く。フェイトとはやてを見比べるしぐさを行う。

「な、なに…？」

「急に攻撃を止めてどうしたんや…？」

そして、フェイトを指差す。

「貴方に決めタ」

そう言うと、フェイトとPWなのはがその場から消えてしまった。

「…は？な、何が起こっているんや…？二人がいなくなった…!？」

はやてが周りを見て、二人を探す。エリアサーチも行い周囲を調べる。しかし、どこにも二人は存在しない。一瞬でフェイトとPWなのはは忽然と姿を消してしまったのだ。

はやては、とりあえずクロノの所へ移動し、この事態を報告することにした。

———なのはが目覚めるまであと、2日と3時間。

第48話 時と次元の狭間の戦い

高町なのはが目覚めるまであと2日。

フェイトはPWなの是由って異空間に連れ去られており、そこで既に三時間以上の時間が過ぎていた。

そこでは休むことを許されず、ただ延々と戦わされ続けていた。

「はあ…はあ…どこを見ても真っ暗な場所だなあ…。どこまでこの空間は続いているんだろう…」

「ほー！何してるの？私と戦って満足させないとここからでれないヨー！」

「わかってる！せめて、ここはどこか教えて…？このどこまでも続く暗闇しかない空間。そしてなぜか自分と貴女だけはハッキリと視認できる…」

「そんなに気になる？じゃあ、本気になってもらうために教えるヨ。

ここは私が作った空間、時間と時間の間、次元と次元の間、世界と世界の間、そんな空間を構成するもの全ての間なんだ。そこに私と貴方を閉じ込めたノ」

「空間を構成するものの間…。ここが…」

「外からはここの存在は感知できなず、介入もできない…。貴方が出るには私の意思が必要って事」

「どうやら、本当に猶予はないみたいだね…。このままじゃ私は永遠にこの世界にいることになってしまう」

「集中できるようになつタ？」

「うん。おかげでね…！」

フェイトは手に持つバルディッシュを強く握り、ここから出るための戦う覚悟を決める。しかし、今だにPWなのはを打倒する策を思いついてはいない。一度腕を斬れた時は向こうが油断していたというのが大きかったのだろう。それ以降の攻撃では全くと言っていいほど攻撃が当たらない。時止めや影の攻撃はPWなのは自身が面白くするためにいざという時まで使わないと言い、使用してこない。それでも攻撃が全然当たらないのだから、このPWなのはとフェイトの間

にはどれほどの実力差があるのだろうか。

「でああ!!」

バルディッシュを思い切り振り下ろし、PWなのはの脳天を狙う。それに対してPWなのはは、プロテクションを斜めに張り、その攻撃をいなす形で防いだ。いなされた事でバルディッシュを振り下ろす勢いでバランスを崩してしまったフェイト。

PWなのはからの手刀を手でつかむことで防ぐ。

「流石、フェイトちゃん…。早いねエ」

「そつちこそ…!なのはのスピードとは思えないくらい早い…!」

「経験が違うんだヨ。あの子と私とでハ!」

「同じ人でしょう!」

「違う!断じてあんな奴と同じ人であるものカ!!」

PWなのはがフェイトの手を振り払い、アクセルシューターを放つ。一つ一つの速度が違う弾がフェイトに迫ってくる。

「フォトンランサーでも対処は難しい…か…!」

早い球にはプロテクションを使って防ぎ、背後からくる遅い球はバルディッシュで撃ち落とし防いだ。

しかし、その弾たちに気を取られていたのか前から迫るPWなのは気づけなかった。

「でえやアア!!」

「なに?!うああ!!」

PWなのはの蹴りはフェイトの左頬を直撃し、暗闇に包まれた空間の下へ落下させた。地面が無いため、その勢いはそのままで止まることが無かった。

「ううう…。はっ…。これ以上は危ない!」

フェイトは目を開き、下になっていた頭から前転する形で一回転し体勢を立て直した。

「はあ…本当に大変だ…。どうやればあのなのはを満足させられるんだ…?力を見せればいいの?でもこれはなんか違う気がするんだよね…」

「いやー。意外と頑張っているねーフェイトちゃん。さすがに今の

は勝てたと思っただけどナー」

フェイトの頭上からPWなのはがニヤニヤと笑みを浮かべながら降りてきた。

満足という言葉は今のPWなのはにはピッタリなのだが、フェイトを空間から出していいことからまだ満足はしていないようだ。

「ほら、早く。戦闘に戻るヨ」

「まだ…やるんだね」

「勿論。ゼーぜん満足できてないヨ！」

言葉を発するのを終わると同時に再び、アクセルシューターを撃ちだす。しかも今度はデイバインバスターのおまけ付きである。

「今度のデイバインバスターは追尾機能付きだヨ！さア！どうやって凌ぐノ！」

「どうするかって…？やることは一つ！真正面から受け止める!!」

フェイトのとった行動は砲撃魔法をデイバインバスターにぶつけるといったものだった。アクセルシューター達すら飲み込む大きな砲撃で。

「威力も互角…!?凄いな。流石フェイトちゃダ…。でもこつちだつて負けちゃいなイ！」

アクセルシューターは飲み込まれたものの、デイバインバスターはぶつかつたまま鏝迫り合いの如く競り合っていた。

金色の砲撃に魔力を回しているため、この瞬間には他の魔法が使えなくなっているフェイトに、PWなのはは影を差し向けた。今まで避けられてきたがこの瞬間であれば当たってしまう。

「ぐっ…!!でも、ここは耐える！我慢する!!」

「へエ…！面白いことするネ」

右脇腹に影の鋭い先端が突き刺さっている。血が滲み、影を伝い下へ滴り落ちている。フェイトはそこからくる痛みをひたすら我慢している。砲撃魔法を止めないために。

「はあああ!!」

「ム…。意外と押されているナ…」

デイバインバスターが段々とPWなのはの方に後退し始める。

フエイトの砲撃の威力の方が強くなってきているのだ。

「でもこれは長くは続かないネ。魔力消費しすぎだヨ！」

PWなのはがディバインバスターに魔力を集中させ、その威力を増大させた。

これにより、押されていたディバインバスターは盛り返し互角の戦いに戻った。

「ぐうう…！まだこんなに魔力が残っていたなんて…！でも負けるわけにはああ!!」

フエイトもまた力を入れる。しかし、砲撃魔法は押し返すことはない。完全に互角になるようにPWなのはが調整しているのだ。

さらに、この瞬間異空間の外。現実時間で24時間が経過したのだった。つまり、高町なのはが起きるまで残り一日。

「あああ!!」

「…相殺…。まさかこんな終わらせ方をするなんて」

フエイトはどうかにか、ディバインバスターを相殺に持ち込んだが影によるダメージが大きく。すぐに次に攻撃へ切り替えることができなかった。

「意外と撃っていた時に刺し続けていた影がいい効果を出したみたいだネ」

「やっぱり影は強い…。我慢していたけど、血が止まらない。これは本当に危険な状況になってきた…」

「ふふふ…外だとまだここに入る手段が見つからなくてアタフタしてるみたいだヨ？もう少し私戦えそうだな」

「くっ…！増援は期待できないか…。あとどれくらい戦えるんだ私…」

フエイトは右脇腹を手で押さえ、息を切らしながらPWなのはを見つめる。まだ痛みによって攻撃に行動を移せないでいる。

「ちっ…。ちよつとやりすぎたみたいだね。そこまでのダメージを負わせるつもりはなかったんだけどナ…」

「じゃあ、治癒魔法とか使えないの？使ってくれたらまだ戦えるよ？」

「使えるけど使わないヨ。貴方も私の計画で死んでもらわなきゃいけない人の一人だからネ」

「私も…!? 貴女はそんなに人を殺して、遺体を集めて何をしようというの?」

「私が遺体を集める理由? ああ、そういえば言っただけ。私の家族はね、殺されたノ。どこから来た知らない魔導師にネ。そして、その家族を蘇らせるためにこの世界の人間の死体を集めてたんダ」

「殺された人を…生き返させるだつて…? そんな事できるはずがない!」

「できるんだヨ。私にはそれだけの技術と力がある!」

「そんな…」

「私だつて向こうの世界で殺されたけどこうやって生き返れたんだカラ」

「それは貴女が、そうなるように計画していたんでしょ!」

「そういう風私を見るんなら…貴方は私のための贄となる人物だね」

「そういうPWなのは目は寂しそうで、悲しい目をしていた。」

「そんな…」

「わかってたけどネ。貴方はそういう人だつて。だから、この世界に引きずり込んだんだカラ」

「この世界に連れ込むと何が…?」

「この世界と外の世界の時間の進む速さは違うんだ。だから、ここで悠長に戦っていると、外で何十年、何千年も経ってしまうかもしれないということサ」

「…なんだつて!? いやあ、今外の世界で一体どれくらいの時間が…」
フェイトの顔色がみるみる青くなる。実際には全く変わらない時間軸にあるのだが、フェイトに早く戦う気になってもらうために、PWなのは嘘をついたのだ。

その思惑通り、フェイトは右脇腹の傷に当てていた手を離し、バルデイツシュを構える。そして、PWなのは睨みつけた。

影もまた、フェイトにその鋭い切っ先を向けている。

「もう、休んでいる暇はなさそうだね…」

「そもそも、最初からそんなものなかったんだヨ」

PWなのは顔は想像通りに事が進んだことからの笑みで溢れていた。

なのは目覚めるまで、あと22時間。

フェイトは気付いていない、段々と異世界の暗闇に星の光の様なもの、きらきらと輝きだしているのことに。そしてそれが何を意味しているのかを。

第49話 星光VS星光、覚悟の戦い

キラキラと何もなかった空間に光が発生し始める。PWなのは未だに余裕の姿勢を崩さない。フェイトは狭間の空間で5時間、外の世界で27時間戦闘している影響で、疲労がたまり、コンディションは最悪になってきていた。

「早く、続きやろうヨ」

PWなのはが攻撃を中断しているフェイトを急かす。自らの“影”を動かすことなく、ただボーっと待っている。

「何で…貴女も来ないの…?」

「いつも私から攻撃してたら面白くないでしょう? 私は楽しみたいノ! 楽しんで貴方を殺すノ」

「全く…! まだそんな事を!」

フェイトは重い体に鞭を打ち、バルディツシュを構える。フェイトはPWなのはが影を使ってこなくなったことに気づいた。フェイトは予測で、楽しみたいと言っているPWなのはの考えから、圧倒的に自分を倒す手段は使わないようにしているのだろうと仮説を立てた。

「ザンバー使うのも飽きちゃったなア…。よし、今度はこの手で戦おうト」

「突然何を言い出すのかと思ったら…。手…? アルフみたいに戦うってことかな…」

「そゆントー!」

「こっちの方がリーチがある…! なんで拳でなんか…」

「私の方が、早いかラ」

フェイトが瞬きをしたとき遠くにいたはずの敵は、目の前に来ていた。

「なっ!」

「でやあアアアア!!」

PWなのはの拳がフェイトの頬を抉る。フェイトは勢いよく殴り飛ばされてしまった。

「ぐうう…!! 早い…? 今のは早いですむ話なの?」

何とか勢いを殺し、体勢を立て直すと先ほどの攻撃について考え始めた。

「あれって、あののはがビルから出た時にやった技と同じなのかな…？」

「ご明察ウー。簡単に言えば時間を止めテ、目の前に移動したんだヨ！」

「じゃあ何で…そのまま殺したりしなかったの？私はともかくクロノたちを…」

「そんなノ…つまらないでしょ？貴方って旅行に行ったらホテルで部屋から出ずに、観光地も見ずに最終日迎える人？」

「りよ、旅行…？貴女はそんな感覚でこの世界に来て人を殺しに来たの…？」

「旅行だヨ。海外旅行。そこで材料である人を調達して、自分の国に戻って調理する予定だったノ」

「そんな、人の命を軽く考えているなんて…！」

「私の家族は軽く殺されたんだヨ。…やっぱり私の気持ちを理解できないみたいだネ」

「大切な人が居なくなる辛さはわかる。よく理解できるよ…。でもその人たちを生き返らせようとするのは絶対に間違っている！」

「間違っているとか力…正しいとか力…そういう話じゃないんだヨ!!」

PWなのはが声を荒げて手のひらを上に掲げ、巨大なアクセルシューターを作り出す。その生成速度は異常であり、そこでフェイトは自身の周りの空間に星の光の様なものが光始めていることに気づいた。

「なに…これ…？この空間に星の光なんてあるわけないのに…」

「これは今までの戦いで私と貴方が消費して空気中に散らばった魔力残滓が放っている光だヨ！私はこの空間の魔力残滓を自身の魔法生成の時に使うことができるノ！」

「その直径5メートルほどのアクセルシューターをものの二秒ほどで作り上げられたのはそれが理由ってことか…！」

「気づくのが遅かったネ。もう…私の勝ちダ！あははハ！」

「ぐっ！体は動くけど…大きすぎて避けきれない…！……ここまです…かな…？」

PWなのはがその掲げていた手を下ろそうとしたその時、PWなのはの巨大アクセルシューターは塵の様に消えていった。それはまるで何かに撃ち抜かれ消滅したともいえる消え方だった。

「…えっ…？」

「何者ッー」

PWなのはが気配がする方向を振り向くと、そこには真っ白なバリアジャケットに身を包み、シューティングモードのレイジングハートを携えた、高町なのはの姿があった。

「やっど…やっど間に合った…。もう…終わりにしよう？もう一人の私」

「？何？何のことを話しているの？」

なのはが空間に手をかざすとフェイトの目の前に、外の世界に通じる穴が開いた。

「これは…!？」

なのはは笑顔で、「フェイトちゃんはお疲れ様。そこから出られるから早く医務室に行ってて？」と告げた。フェイトはそれに頷き、多少の疑問は残るものの、今自分がそこに残ったところで何もできないだろうと悟った彼女はなのはの開けた穴から、脱出をした。

「ねエ。人の話聞いてル？」

「貴女がそれを言う？」

フェイトが脱出したのを確認し、なのははもう一度レイジングハートからアクセルシューターをPWなのはに放つ。

「早いッ…!？」

PWなのはは、とっさに回避とプロテクションを使い、全ての弾、計10発を防いだ。

「何でこんなに生成が早いノ…？」

「今さっき、自分でフェイトちゃんに説明していたでしょ？私は貴女。貴女は私。貴女ができることは私にもできるんだよ」

「まさか…この空間の魔力残滓を使ったの…!？」

「そう。そして、この空間に入ってこれたのも、フェイトちゃんを脱出させられたのも、私が「なのは」だから」

「そ、そんなナ…。たったそれだけの理由デ…?」

「理由はそれで十分なんだよ…。私と貴女は経験した事が少し違うだけの同じ人なんだから…」

なのはは少し悲しそうな表情をしながら、レイジングハートを構えた。

「…同じ人なら…私の悲しみも理解できてるでモ?」

「そうだね…。私ね、最近悪夢をよく見るんだ。私の家にそっくりな家が知らない魔導師に攻撃されて、家族にそっくりな人たちが死んでしまう…そんな夢」

「それハ…!?!」

「その反応…。やっぱり私が見ていた夢は貴女の過去だったんだね…」

「何デ、私の過去を貴方が見るなんてこと…。まさか、この世界に私 came 来たことによつて、共鳴に等しい現象が起きてしまったってことなの…?」

「いいね、頭の回転が速い。私も大体同じ意見だよ」

「大体ってどういう事なの?」

「私はね、私と貴女の共鳴って言うのもあるけど…貴女が心の奥底では助けを求めているからじゃないかなって…そう思ったんだ」

「助け?何を言っているの?そんな事…あるわけないでしょう!!」

PWなのはは一気に、魔力残滓をかき集め、ディバインバスターを放った。だがその攻撃はなのはには届かなかった。なのははその砲撃を軽々と回避し再び、アクセルシューターをその背中にぶつけた。

「そんなナ…馬鹿ナ…!?!」

PWなのはの背中から黒い煙が上がり、空間の下の方へ下降していく。

「…助けるよ…。貴女…いや、もう一人の私を!!」

「何ヲ…。私が貴方に助けてもらおう事なんてない!」

PWなのはは手のひらを前に突き出し、「時よ止まれ!」と叫んだ。

今まで言わなかったのに、なぜ叫んだのか。それはそれだけ焦りが強くなっているという事の表れなのだ。

数分前までフェイトと戦っていた時の余裕さは完全に消え去っていた。何を焦っているのか、それはきつと彼女の過去をなのはが知ったことにあるのだろう。

「時間を止めるのも…もう、無駄なの…無駄無駄…」

なのはがレイジングハートをPWなのはの方に向けると、PWなのはが時間を止めたはずなのに、なのはが動くことができています。

「そんナ…！何故!？」

「最初に言ったよ？私と貴女は同じ人。貴女にできることは私にもできるんだ」

「時間停止を相殺したってこと!?!そんナ！」

PWなのはは悔しそうに、顔を歪める。しかし、実は、なのはは言っていることは少し違うのだ。なのははPWなのはの使う魔法がすべて使えるわけではない。例えば「影」。これはPWなのはが研究に研究を重ねて作り上げた完全オリジナルの魔法なため、この世界のなのはは使用できない。そして、魔法を創りだす魔法もまた、PWなのはは使えない。これはなのはが想像力が足りないのではなく、これもPWなのはが研究の末に編み出した魔法であるため、なのはは感覚はわかっていても、理屈や計算がわかっていないため、使用できないのだ。

では何故、時間停止、空間への侵入、フェイトを脱出させるための穴の生成ができたのか。それはなのはとPWなのはが同一人物であるという事が最大の理由なのであるが、さらに、PWなのはが一定期間なのはの中にいたことが要因でもある。「白騎士事件」の時、なのはは魔法を創造する魔法を多用した。そして、それがアウトではあるが魔法を創る感覚を身に着けたのだ。魔法を創る感覚を身に着けたといっても前述のとおり、生み出すことはできない。なのはができるのはPWなのはが「自分を対象にして使った魔法を自らが使う」という事だけだ。それを使い、時間停止を相殺し、先ほどの様に動くことができているという訳である。では、空間に入る、脱出用の穴は

どのように生成したのか。これは元々、〃隷属の影〃が、管理局からの追跡を振り払うために使用していた空間移動技法であったため、その時中にいた、どちらのなのはも、そのやり方を理解し、実践できたのだ。脱出用の穴も、〃隷属の影〃がシグナムとヴィータを手下にしていた時に二人を外に出す時使った方法なのである。なのははそれを思い出したため、それが行えたのだ。

「時間停止が意味をなさないなら…。〃影〃を使うのミ!!」

PWなのはは影伸ばし、なのはを貫こうとする。即座にプロテクションを出し、その突進を受け止めるのは。魔力残滓を利用して、そのため、そのプロテクションは堅く、フェイトを苦しめた、〃影〃の突進でさえも貫くことはできなかった。

「ぐう…。自分のために作ったシステムで苦戦するなんて…!!」

魔力残滓の利用は魔法における技能の一つ収束を応用することでこの世界では行える。故になのはも問題なく、それを使えるのだ。ただ、何故なんの疑問もなく使えるのか。それはなのはが夢として、彼女の過去を見た時、そのことだけ、頭の中に情報として入ってきたのだ。

「お話をしよう？戦うだけじゃ、何も伝わらないし何も解決しないよ」

「うるさい！お前に何がわかる…。！ただ、夢で私の過去を知っただけのお前ガ!!」

「…そうだね。私は貴女を理解しているつもりなの。…でもきつと根本的なところで理解しあえていないような気がするっていうのも本当…。それが何なのかは今はわからない。だからこそお話をして、ちゃんとお互いの考えを言い合うべきなんだ!」

「所詮、貴方も他の奴らと変わらな。私の悲しみモ！辛さモ！痛みモ！苦しみモ！何も理解できズ！わからズ！ただ、外かラ、外野かラ、同情の視線を向けてくるだけッ!」

「傷ついている人にできる事って意外と限られてる。その中で、同情という選択肢を選んだだけなんだ！その周囲の人が悪く言われるようなことはない!」

なのははレイジングハートを、PWなのはは拳をぶつけ合った。それを何度も何度も続ける二人。

お互いに攻撃する時の威力が同じなため、中々決着がつかない。

「クソツッ！クソツッ!!何なノ！なんデ、倒せなイ!!」

「くっ……！中々優位に立てない……！」

「おヤ……？同じ人物というのハ、そっちにも決まり手が出ないみたいだネ……！」

「そっちだつて!!」

「魔力残光はまだまだあるンダ！貴方にも恩恵はあるガ、上手く使えば私にだつて勝機はアル！」

「それは私だつてそうだよ！」

PWなのはは一度距離を取り、デイバインバスターをなのははに向かって拳から一直線に放った。同時に「影」も放つ。「影」は突進ではなく、四肢の拘束を目的にしたものだった。

「回避してもいいけど……！私は真正面から受け止める!!」

なのははもまた、デイバインバスターをレイジングハートから放つ。拘束しようと迫った「影」なのはのデイバインバスターの火力に耐え切れず、消滅してしまった。

そして、二人のデイバインバスターはぶつかり合い、競り合いを始めた。お互いに、魔力残光を使い砲撃しているため、その威力が衰えることが全くない。

「ぐうう……ッ!!」

「だあああああああ!!」

なのはが気合を入れて威力を高める。ぶつかり合っている面が動く。PWなのはが押され始めた。

PWなのはも気合を入れ、押し返そうと試みるが、中々それを戻すことができない。

「これハ……このままじゃやられル……！」

「押しっ……切る……!!」

「させるものかアア！」

PWなのははデイバインバスターを強制的に爆発させて、デイバイ

ンバスターの直撃を防いだ。煙が立ち込め、周囲の状況がわからなくなる。

「はア…はア…。まさかこんな事をする事になるなんて…。この世界の私…倒せるときに倒しておくべきだった…」

煙が晴れてきた。PWなのは目の前には人影、そうなのはである。全く動かず、その場で佇んでいた。

「今の私はそうそう負けないよ。だって、今の私の気持ちを伝えるまでは…絶対に！」

「いらナイイ…貴方に言われることなんて…何モ!!」

「そうやって自分の中に閉じこもって、過去しか見ないで、何になるの？貴女はまるで、闇の書と呼ばれていた時のリインフォースさんみたいだよ？」

「リイン…フォース…？誰それ。私の知らない人の話されても分からないヨ」

「知らない…？それって、そっちの世界には闇の書事件はなかったって事…？」

「闇の書事件はあったけど、闇の書は私の管理権を強制的に移動させて、解決したから、そんな人聞いたことが無いネ」

「な…なんて解決法…。そんな方法があったなんて…」

「私にできない事はナイ！『影』もあつたシ…そうダ…私にできない事なんてないんだ！私は無敵なんだ…!!」

「『影』を作り出し、私が体験した事件を全く違う方法で解決した世界の私だったんだ…」

「だからどうしたっていうノ？私の世界とこの世界の相違点を何個見つけようト…私が勝つことにハ…変わらない！アクセルスマツシュ!!」

PWなのはは叫んだ後、拳に魔力を込め、なのはの腹部に殴りかかった。なのははその攻撃を直撃してしまったため、飛ばされはしなかったものの、大きなダメージを負うことになった。

「しまっ…たっ…！ぐうっ…！」

なのはは殴られた位置に手を当て、顔を歪めた。

「ふふフ…。何か強くなったわけではないんだネ…。この空間の特性を利用して、上手い事立ちまわってそう見える様にしていただけだったんだネ…」

「確かにそうだけど…。今みたいに少し油断しなければ、全然さっきまで見たいに優位に戦えるよ」

なのは再び、アクセルシューターをチャージする。ただ、そのシューターは数発のものではなく、一発の弾だけであった。

「何それ。舐めてるノ？」

「別にそんなことないよ？ただ、ちゃんと話せる状況を作るために必要なことだから…」

「本当ニ、さっきから何を言っているのか訳が分からない！勝手に頭の中で判断して！貴方こそ何も言わないじゃない！」

「…そうだね。じゃあ言うけど、私がこの空間に来た目的は貴女を助けるためと、今まで起こった事の真相を聞きたいの」

なのは話し終わると同時に、アクセルシューターのチャージが十分な量に達した。

「今までの出来事の真相ウ…。『影』のしたことネ。それとこの攻撃に何の関係があるノ？」

「この攻撃は私の貴女に対する決意と覚悟を感じてもらうための！爆撃！」

「爆撃ツ!?!」

大きく膨らんだアクセルシューターはなのはとPWなのはの身体より二回り以上大きく膨らんでいる。そしてそれは、なのはがそのアクセルシューターをPWなのはとの間にゆつくりと移動させる。

「逃げるって選択も私にはあるんだヨ？そんな速度で近づけても…」

PWなのはが続きを話す前になのはが声を出した。

「逃げられないよ。まるで一つの惑星の様な大きさの魔力弾なんだ。この空間がいかにも今から逃げられる距離なんて爆風で飲み込まれる…。私の覚悟…見てもらうよ…?」

「ク…狂っているル…いくら覚悟を見せるためとはいえ自らも爆風

に巻き込まれるような攻撃をしてくるなん

次の言葉が紡がれるより先に、アクセルシューターは爆発を起こした。激しい爆風と熱が周囲を襲う。その爆発は空間を揺らし、その外にいるフェイトたちにも揺れが感じられるほどの威力であった。

第50話 もう一つの目的、もう一人のなのは

なのはの起こした爆発から数秒後、外の世界ではまた別の異変が起きていた。突如として海鳴市上空にもう一つの海鳴市が逆さまの状態で出現したのだ。

その海鳴市は地上の海鳴市と何もかもが同じに見えるが、何かが違うという違和感を感じさせる風景だった。そもそも、空に同じような街があるという点で既に異常な事なのだが、この事に気づいたのは、フェイトたち管理局のメンバーだけであり、まだ一般人に気づいた人はいない様であった。

「この空はいつたい…?」

フェイトが呟く。はやても空を見上げ、あることに気づく。

「あ、あの家…私の家や…。あつ！今、私にそっくりな子が家に入ってた…」

そう、その街には普通に人が生活していたのだ。しかし、どうやら向こうの人間もまた、この様な事態に気づいていない様だった。

「これはさっきの地震の影響なの？ 蜃気楼ではなさそうだけど…」
フェイトの呟きにクロノが反応する。

「さっきのも地震だったのか？ まるで空間自体が振動したような感じだったけど…」

「言われてみれば…。もしかして、なのはが何かしたのかな？」

「そういえばなのはちゃんは、ここに急にきて急にいなくなっただんなあ…。何か作戦があつての事なんやろうと思つてたけど…」

「クロノ、どうにかして中の状況は見れないの？」

「それだが、君が中にいた三日間に様々な方法を試したが駄目だったんだ。どうにもその空間は特殊なものらしいな…」

「なのはちゃんは何でその空間に自ら入れたんやろ…というか、どうやってその中の状況を見れたんやろか…」

なのはがここに来る前に、エイミイと話した時に見たモニターの映像。あれは、なのはがPWなのはと共鳴という状態に陥っていたため、なのはにだけ見えた映像なのだ。

エイミイの言っていた怒っているというのは、ビル内での戦闘の事を言っていたのだ。

「なのも心配だけど…この空の事も調べなきゃ…だよね…」

「ああ、そうだな…。ええい！やることが多いのに…確かな情報が全くないのはどういう事なんだ！一体、何が起こっているんだ…！」

「なのはちゃん…頑張つてな…私たちも頑張るからな…」

はやては、祈るように呟いた。

「うぐう…ああア…。こんな自爆の様な攻撃にやられるなんて…！」

痛イ…痛イ…！あの子、非殺傷設定解除してたのねツ…！」

PWなのはは巨大アクセルシューターが起こした爆発により、外傷はないが打撲したような内側からの痛みに苛まれていた。

「はあ…はあ…。これで、お話しできる状況になったかな…？」

「話合いでできる状況…むしろ壊してるように見えるんだけど…？」

「そんなことないよ！ほら！今だって戦闘を止めて、お互いに話せてるじゃない！」

「…それが何？さつきだったテ、そんな瞬間あったでしヨ」

「落ち着いてはなかったでしよ！」

「そうだね」

PWなのはは身体中の痛みが引いていくのを感じつつ、再び戦闘に入る準備をしていた。周囲の魔力残滓は、先ほどのアクセルシューターによつてかなり消費されてしまったが、それでもまるで宇宙にいるかのような錯覚を覚える不思議な景色なのは変わらなかった。

「貴女の目的…それは家族と過ぐすはずだった時間を取り戻すこと…そうでしょ？」

「…それだけじゃない…」

「えっ」

「私ハ…家族を取り戻シ、世界を書き換えル…！私の家族を殺したあの世界を新しいものにしテ、不要な人間を消ス。それが私の目的」

「世界を…書き換える!? 不要な人間を消すって…まさか貴女が恨んでいたのは、あの家族を殺した魔導師だけじゃなくて、世界そのものだったの…!?」

「あの魔導士を産んだ次元世界が存在する世界なんて要らないんだ!」

「貴女の世界にだってたくさんの人が住んでいるはずなのに、世界を書き換えるなんて…そんな権利誰にもない!」

「私にはあるんだ…どの並行世界の私にもない…世界を創りかえる権利ガ!ただ一人!!」

「どんなに辛い経験をしたとしても、どんなに悲しい思いをしても…そんな権利は誰にも与えられない! 貴女にも…私にも!」

「所詮…私と貴方ハ…分かり合えない!」

「そんな事…」

「そういえば外の世界はどうなっているのかな? そろそろ私の世界との融合が始まるころだけド」

「えっ…何…どういう事…!」

なのはは動揺した。先ほどまでの話の流れを切り、PWなのはが突然外の世界の事を言い出したのだ。

「さっき言ったでしヨ? 私の目的は世界を書き換えるつテ」

「世界を書き換えるって自分の世界と別の世界を融合することを言っていたの…!」

「そウ…。そしテ、その融合する時新世界に不要な人間ハ、存在事消えるんだヨ!」

なのはは思わず、外の世界に行こうとするがPWなのはによって制止される。

「今行ったところで貴方にできる事なんてないヨ…? それより、私と戦う覚悟を見せてくれたんでしヨウ。戦おうヨ、もつト…もつとさア!」

PWなのはは拳にピンク色の魔力を籠めてなのはの頬に叩きつける。そして、その勢いで自分事次元移動を行った。

なのはからすれば殴られて気づいたら周りの景色が変わってし

まっているのだ。

「なっ…!?急に…どうして…?」

「ここはミッドチルダ。フェイトちゃんや、クロノ君の生まれた世界だよ」

「そうなんだ…。いや、だから何でここに移動したの?っていうかこの世界は魔法が常識的な世界なはず…。勝手な次元移動はものすごく、まずいのでは…?」

「そうだね。違法だよ」

「ええええ!?じゃあ早く戻らないと!」

「ここに来たのは貴方に外を見せるためだよ」

「…外…?あつ、さっき言ってた世界の融合!もしかして、ここも?」

なのはが恐る恐る空を見上げると、そこには周りの景色をそっくりそのまま映している様な光景が広がっていた。高層ビルの真上には全く同じ見た目の高層ビル、個人の家は全く同じ見た目同じ庭面積、住人が同時に庭へでてきたと思ったら、そっくりそのまま同じ人。そしてその同じ見た目の人はお互いに違う事を行っていた。地上にいる人は庭の花の水やり、上空にいる人はそのまま庭を通り、買い物に行ったようだ。

つまり、このことは上空に見える世界は蜃気楼の様に映し出されているというわけではなく、全く別のよく似た世界が接近してきているという事を意味していた。

「なんでここも融合を…?」

「私から家族を奪ったあいつの生まれ故郷もここだから…。ここも選別の対象になったんだ」

「あの金髪の子もここで…これを見てわかったよ。やっぱり、間違ってる。一個人が世界の人々の人生を選定するなんて…間違ってるよ!」

「それが、所詮何も失う事無く生きてきた貴方の視界の限界だよ」

「失う事がそんなに人を成長させるの?そんなに視界を広げる事なの?確かに何か失う事で考え方や人生観が変わることもあるかもし

れない。だとしても……！失わない強さもあるはずだよ！！失う事無く
：成長する……私は、守り抜く……守り抜いて見せる……！！」

「甘イ……甘すぎるヨ！何も失う事無く、誰かヲ……何かヲ……守れると
思っているノ！」

二人のなのはお互いの意見をぶつけた後に、お互いの魔力を籠めた拳をぶつけた。そして、そのぶつかり合った瞬間に、PWなのはによって再び次元移動の魔法が使用される。

二人は元の地球へと帰還した。帰還した場所はあの魔力残光が星の様に輝く世界ではなく、フェイトたちがいる廃ビル街の上空であった。

管理局の局員やクロノたちはその突然の出現に驚愕した。フェイトとはやても、その拳をぶつけ合う二人の姿を驚いたような目で見ていた。

「なんでなのはが徒手空拳を……」

「それもそうなんやけど、さつきミッドチルダに居たはずなのに、すごい速度で海鳴に来とる。まるで『隷属の影』が行っていた次元移動みたいやつて思わん……?」

「え、さつきまでミッドチルダに居たの?」

「らしいよ。クロノ君が報告を受けてた」

「確かに、『隷属の影』みたいだ……。多分転移を行っているのもう一人のなのはだと思うんだけど、『隷属の影』はあの子が出てくる前に倒して、種もなのはがモードを使うことでその発芽を止めていたはずなのに、なんで『隷属の影』のような力をもう一人のなのはが使えるんだろう」

「そうやね。でも確かもう一人のなのはちゃんはその『隷属の影』の種から出てきたって言うてたよね?だから似たようなことができるとってことなのかもしれへんよ?」

「そっか……。いずれにせよ、私たちが今すべきことは上空の町が完全に落ちてこないようにすること……。色々もう一人のなのはに対しての疑問はあるけど……今はなのはに任せるしかないんだね……」

「心配なんはわかるけど、私たちがやるべきことをやることで、なの

はちゃんが思う存分、お話しできると思うし、今出た疑問の答えも出ると思うんよ」

「そうだね、じゃあ行こう。私たちのやるべきことをしに…」

「うんー」

フェイトとはやては、頭上にいるのはに気を付けながら、もう一つの迫ってくる海鳴市を食い止めに向かった。

その頃なのはは、レイジングハートを待機状態にしながら戦っていた。遠距離攻撃に移ることはできなくなかったが、PWなのはの近接攻撃に対しては撃つ準備をするより、同じように拳を使った攻撃の方が早く反応できるため、待機状態のまま、戦っているのだ。

「ほラー…この空を見てご覧！もう少しでこの世界と私のいた世界が融合シ、新たな世界が生まれル！そしてそこに私の殺された家族を復活させれば…もう一度…あの当たり前の日々が取り戻セル…！帰ってくる…!!」

PWなのはが、拳をなのはに何度も振り下ろしながら叫ぶ。その表情はかつてのプレシア・テスタロッサを見ている様な狂気に満ちたものであった。

「何も戻ってこないよ！何も！それに、亡くなった人は戻ってこない…どんなに想っても…どんなに魔法を研究しても…!!」

「私は復活したヨ。生き返ったんだ！つまり、私が証拠！私の存在が証明するノー！」

「貴女は死ぬとわかっていて、それに対策、準備していたから復活できたんでしょ？お母さんたちの生きていた時のデータはどうするの？今あるの？記憶のデータは？」

「ふふフ…。この世界にも同じ人が生きていますよ？ここの世界の人でもデータは取れるんだヨ…！」

「なっ…私の家族からデータを取る気なの!？」

「当たり前でしょ？まあ貴方も融合の影響で消えるんだから気にすることなんてないヨ」

「そんな事させないよ！私も消えるつもりはないしね。私たちの世界も助けるし、貴女の世界も助ける！」

「本当に甘いネ…。助けるって思えば何でもできるとでも思ってるノ！」

なのはは叫びながら殴ってきたPWなのはの拳を受け止め、握りながら、自らを睨みつける目を真つすぐ見つめ、その心を再び告げた。

「そんな事思っていないよ。貴女だってわかってているはずだよ、生きている間に起きる出来事なんてこんなハズじゃなかった事ばかりなんだって。だから、楽しい事、嬉しかった事、寂しかった事：色々な出来事が思い出になって、いつしかこんなハズじゃなかった事を忘れるくらいの出来事を体験するんだ…！私は助ける…世界を救う。どちらの世界も誰かのかけがえのない世界のはずだから…。そして貴女も…。今の貴女も救う！どんなに今が辛くても、いつか必ず幸せだと思ふ時が来るから…！」

「ありきたりな言葉だね。大切な人を失った悲しみと大切な人を取り戻したいという気持ちハ、同じ体験をした人じゃないとわからない…。だから私と貴方は同一人物だとしてモ、分かり合えないんだ！」PWなのはの拳に纏っていた魔力が強くなる。握っていたなのはの左手から血が流れ始める。しかし、なのははその手を離そうとしない。むしろその拳をさらに強い力で握りしめる。

「分かり合えないって、諦めてしまったら…何も始まらない！私は貴女の心根を信じてる！きつと、私たちはわかりあえる…。人は一人だなんて事あり得ないんだから…！」

「……手、離してヨ。貴方は一人じゃない…でも私は一人だ。元の世界で私の居場所は家族がいるあの家しかなかつタ…！」

「アリサちゃんやすずかちゃんは…？」

「あア…貴方にも言ったはずだよ？私はその二人とは友達になつてないんだよ。月村さんとバニングスさんが、私をいじめてたからネ」

「そんな…あの二人がそんなことするわけ…!？」

「この世界の二人はそうだろうけど、世界が違えば性格さえ変わる人もいるってことだよ」

なのははそのことに驚き思わず手を離してしまった。そして段々と月村邸で聞いたことを思い出してきた。そして今思ふ事は、その時

に聞いたことと同じである。確かに初めの印象や出会い方はよくなかったかもしれない、だがしかし自分たちはどんな事があっても結局友達になれただろうと思っていたのだ。その心はなのとも同じであったのだ。しかし、そうならなかった世界がある。そしてその目の前にいる、人類を選定しようとしているもう一人の自分は友達になれなかった世界の自分だという。

動揺した瞳で自らの手のひらを見る。血だらけになっている。手の皮もボロボロで見るに堪えない状態だ。

PWなのははなのからスーツと離れていく、しかしその視線は決してなのからは離れない。

「あれレ? そんなにショックだった? そんなに自分たちの友情は絶対だと思っていたノ? 不思議だね: 友情なんてものこの世界で特に不安定デ、信頼できないものだというの二:」

PWなのはがそう呟くと、先ほどまで驚愕に染まっていたなののは表情が見る見るうちに、元に戻っていった。

「: 友情が不安定なものっていうのには同意だよ。確かに揺らぎやすい物だと思う:。でも信頼できないなんてことは無い!」

なのはは強い目つきと声で反論した。急な変化にPWなののはも少々たじろいだだが、PWなののはもその意見を突き通そうという意思を感じるまなざしは変わらぬままだった。

「きつとこのまま話しててモ、何も変わらない:。貴方と話すことは時間の無駄だったネ」

「そんな: : ーまだ話は終わってないよ!」

「すぐ終わらせるヨ、全力: 全開!!」

PWなのはが手のひらをなののはの方に向けて、全力全開と呟くと魔力の収束が始まった。スターライト・ブレイカーの準備である。

「これで終わりだよ:。見せてあげル、私の全力全開。デイバインバスターのバリエーション: : ー!」

「: : っ!? スターライト: : ーブレイカー: : ー!」

なののはも、とっさにレイジングハートをバスターモードにして、スターライト・ブレイカーの準備を始めるが、やはりPWなののはの

チャージの方が早く進んでしまう。

「おっと、ここでまた攻め合いするのは魔力を余計に消費しちゃうから、それ止めさせてもらうネ」

PWなのは足から「影」が伸びる。「影」はなのはの手足を縛るのではなく、槍の如く腹部に迫ってきた。なのはは、対抗すべく魔力収束を行って、特殊空間内に居た時にはしていた「影」の警戒を解いてしまっていた。故に、その鋭く尖った「影」はなのはのみぞおちにブスリと刺さった。

「ぐっ……油断した……っ!？」

「影」が刺さっているところからも微量に血が流れ始める。バスターモードでチャージを行っていたレイジングハートはここから一度離脱し、体勢を立て直した方がいいと促す。しかし、なのはは体勢を崩さず、「影」が刺さったまま、スターライト・ブレイカーのチャージを止めない。

「これで終わるわけにはいかない……っ……!？」

「本当にしつこいネ。まあこの魔法で終わらせてあげるヨ。そして世界の融合が終わるまで眠らせてあげるヨ。目が覚める時にはもう貴方はもう消えてしまっているかもしれないけどネ」

そして、PWなのはのチャージが完了した。

◆◆◆◆◆

今日は本当は学校の日だった。だけど、とある事情で私の小学校はしばらく休校となってしまうていた。

それでも、昨日とかは友達と家でゲームしたりと特に暇な感じはしていなかった。しかし、今日は違った。空に私の住んでいる町が逆さまになって、突如として現れたのだ。自分の部屋の窓からしばらく空を見ていて、わかったのは空に映っている町で歩いている人と地上で歩いている人は同じ見た目だけ違う人ということ。

「なんなのかしら、あれ」

興味がわかないと言ったら嘘になるけれど、すぐく気になるかって言われたらそこまででもないって言うのが本音。さて、今日は何をして遊ぼうか。そんな事を考えながら、部屋の中に戻っていった。

すると、私の携帯に電話がかかってきた。相手はさすがのようだ。どうかしたのかな？昨日遊んでたゲームのストーリーでも気になったのかしら。などと思いつつ電話に出た。

「もしもし？どうしたの？さすが、急に電話なんかしてきて」

「アリサちゃん…。空見た？」

「空？ああ、見たわよ？それがどうかしたの？」

この様子だと、さすがはあの空の現象に怯えているようだ。

「…と、とりあえず、私の家に来てくれる？できれば早く来て欲しいんだけど…」

「え？は、はあ…。別にいいけど…」

私は電話を切り、すぐさま出かける支度を済ませ、鮫島に車を出させた。

すぐにさすがの家に着き、さすがと合流する。

「どうしたのよ、急に来て欲しいだなんて」

私がずかと一緒に彼女の部屋に向かう途中で、そうずかに話しかけた。ずかはずかながら答えた。

「高町なのはちゃん…覚えてるでしょ…？」

「お、覚えてるけど…」

高町なのは、私が小学校でいじめていた少女の名前。そして、今学校が休校状態になっている出来事の関係者。

「全然学校に来なくなってたけど…高町がどうかしたの？」

「実は…あの子、亡くなってたんだって」

「は？…そんなの誰が言ったの？」

「今私の部屋に来てる子。フェイトちゃんって言うんだけど」

ずかの話では、そのフェイトという少女は、なのはの友人らしく、一週間ほど前に高町なのはの自宅の一室で血を流し倒れているのを見つけたらしい。それが殺人なのか事故なのかはわからないという。

しかし、疑問なのはその友人が、いじめていた私を呼ぶだなんてどんな事情なのだろうか？もしかして私が原因だとも思われているのだろうか？もしそうなら、正直誤解と言わざるを得ない。今私たちは小学六年生だが、私が高町なのはをいじめていたのは小学一年生か

ら、二年生の一学期までなのだ。確かに、私が原因で不登校に一時期なっていたが、二年生の三学期から、また通い始めていた。そして、それ以降話しかけることもなく関わる事もなく、四年生までずっと同じクラスだった。五年生からはクラスも変わり本当に関係性は消えていたのだ。

そして、すずかの部屋に着く。そのドアの向こうから、話し声が聞こえた。どうやら来ているのはフェイトという人だけではないらしい。

「フェイトちゃん。呼んできたよ」

「早かったね。丁度はやとも情報の交換が終わったところだった」

「初めまして…。っていうかまた知らない人の名前出てきたわね…」

「君がアリサ・バニングスだね。もう聞いたかもしれないけど、私はフェイト・テストロツサ・ハラオウン。時空管理局の嘱託魔導師です」

「時空管理局…？何それ」

「端的に言えば、次元世界の治安を守る組織です。この世界には魔法という技術が無いから聞いたことのないのは仕方ないことです」

「魔法って…急になんか胡散臭い話になってきたわね…」

「でもね、アリサちゃん。この人本当に魔法が使えるんだよ」

「すずかまで何を…」

「さつき部屋の外でフェイトちゃんが誰かと話している声聞こえたでしょ？あれは携帯電話とかじゃなくて、魔法で通信していたの。見せてもらったの、本当に魔法だった…」

「…仮にその管理局？っていう所の魔導師さんが本当だとしても、私とすずかに何の用なの？」

「今の空、君もわかっていると思うけど、海鳴市が逆さまの状態が出てきているんだ」

「ええ、それはわかっているけど」

「あれは蜃気楼的な、幻ではないんだ。本当にあそこにもう一つの

海鳴市があるんだ。そしてそれは刻一刻とこの街と近づいてきている」

「あそこにもう一つ海鳴がある…？そしてそれが近づいてきてるって、それが一体私たちにどんな関係があるっていうの？」

「今この街全体に、なのはの魔力が薄くではあるけれど漂っている。もういないはずなのはの魔力が…。それで、なのはと同じ学校で、少し関係がある君たちを呼んだんだ」

「私たちが関係って…私もアリサちゃんもほとんど話したこともないんだけど」

「私なんて、あの子いじめてたのよ？一、二年生くらいしかかわったことはないし、それ以降は一度も話したことないんだけど」

それを聞いたフェイトという少女は、目を丸くして驚いた様子だった。私のいじめの件を知らないのだとするなら、そもそも何で私たちが関係あると思ったのだろう。

「い、いじめてた？あのなのはを…？凄いな君たち…」

「…あのなのは？それが何なのかは聞かないでおくけど、とりあえず私たちが高町と関係あると思った理由を教えてください。」

「あ、私もそれは気になる」

私とすずかがそれを聞くと、フェイトは少し考えてから、口を開いた。

「よくわからないけど、頭の中にそんなイメージが出たんだ。なのはと君たちが一緒にいるイメージが浮かんで…それで、呼んだんだ…」

「じゃあ、何か確信があったわけじゃないのね…。なにそれ、そんなふざけた理由で呼びつけるなんて…」

と私が言ったところでフェイトの背後に大きなモニターの様なものが出てきた。

それは少し、砂嵐の様なものが出てはいるが、どこかで見たことがある部屋が映っていた。そして、その部屋の中に立っている人物もまた、見たことのある人物だった。

その人物は砂嵐が収まり始めると、言葉を紡ぎ始めた。

《私の名前はフェイト・テストロッサ・ハラウン。今、貴女たち
と私たちの世界は消えようとしている!》

第51話 救済のA／決意のA

《私の名前はフェイト・テストロッサ・ハラオウン。今、貴女たちの世界と私たちの世界は消えようとしている!》

目の前の砂嵐が少し出てきてしまっているモニターらしきものに出てきた人物は、これまた目の前にいる少女と同じ名前を名乗った。見た目もよく似ている。

「な、なんで…私が通信してきているの…?これは一体…?」

「双子のお姉さんとか?」

「そんな人いないけど…」

《私は貴女たちの世界とは別の世界のフェイトです。もしかしたら、そちらの空にも海鳴市が出てきているのではないですか?》

「確かに、出てきているわね…」

《時間が無いので、結論から言うところらの世界のなのはが二つの世界を融合させようとしているの》

「高町さんは死んだんじゃないの?こっちのフェイトさん」

私は質問した。

「確かに遺体を確認したんだけど…」

《肉体的にはそちらの世界で死んだんだけど、肉体のデータ、記憶のデータ、リンカーコア等魔導関連のデータを記録して、私の住む世界に入り込んだんだ。いくなれば魔力構成体になって復活したんだ。そして、この世界で肉体を自ら創り、今まさに世界を融合させて、自分の思う世界を創ろうとしている…!》

「自分の生きている時の記録だけ持って別世界に行ってたってこと?…つたく、さつきから初めて聞く言葉だらけで訳が分からないわよ…」

「私も…ただでさえ魔法で頭がびっくりしてたのに…」

《そっちのアリサたちは魔法の事、今聞いたところだったの?私たちと違いがあるんだな…って、アリサどうしたの!?《うっさい!言いたいことあるからちよつと出させてもらおうわよ!!》あ、はい…

》

「私!?!…まあこの通信があのもう一つの海鳴から来てるなら、ありえない話なのかしら…」

《あり得る、あり得ないなんて話はどうでもいいのよ! 私が言いたいの、今すぐなのは友達になりなさい! すぐか! アンタもよ!!》
「なにそれ? なんでもならなきやいけないの…?」

「それに、今すぐって…急すぎるよ」

《私とアンタたちは並行世界、つまり別の選択肢を選んだ世界同士なのよ。つまり何もかもが違う世界じゃない。私とこっちのわずか、なのはと友達になる選択をしたの。ただそっちはしなかった。それだけなのよ、最初の違いは。ただ、違った結果の未来がなのはの死んだそっちの世界というだけ》

「もつと簡潔に話してくれる?」

《なんか、自分だけども力つくわね…。とりあえず、端的に言えば貴女たちとそっちの世界出身のなのはは友達になれる確率はゼロじゃないのよ。》

「私と貴方は違うわよ…。今更友達になんてなれないわ…」

《タイミングなんて問題じゃないわ! 根本的に同じ人間でしょ! 私を信じなさいよ!》

「私はいじめてたのよ? むしろ聞きたいんだけど、自分をいじめてた奴に急に友達になりたいって言われて友達になろうと思う?」

《今、アンタたちの世界のなのはに必要なのは一人じゃないと思わせる事。そっちのなのは、友達がいないまま家族が誰もいなくなつたことによる孤独感、復讐を終えてその先が見えない虚無感、そして“影”を生み出せてしまった事からくる全能感でいっぱいになってしまっている…。全能感はきつとこっちのなのはが何とかしてくれるだろうけど、他の虚無感と孤独感は私たちにも完全な解決は難しいわ。だからこそ、本来の世界の住人で、なのはと本当の友達になれるであろうアンタたちにこうして通信しているの》

「ちよ、ちよと待って! そっちの世界のアリサさん! 私は、なのはに友達って言われたんだけど…: そうやって助けてもらったんだけど…」
私たちの世界のフェイトが割って入る。そういえば、自分である子

の友達とか言っていたな…。

《それに関しては気の毒だけど…そっちのなのは孤独感を紛らすだけの存在になっていたんじゃないかしら？死ぬことで並行世界に行く計画を立てる精神状態の中で、完全に信頼する友人をつくるとは思えないのよ…》

「そ…そんな…いや…そんなはずは…そうだ…まだこれは推測なんだ…！まだ、本当かは決まっていらないんだ…！」

「ま、正直私ももう一人の私の考え通りだと思うけどね。どんな出会い方したかはわからないけど、死ぬ事を考え直させられなかったし…」

《とりあえず、最終的にはそっちのフェイトにも友達になつてもらうからいいのよ。今友達だろうとそうでなからうと》

「…ねえ、私？アリサ？どっちでもいいか。まあとにかく、なんでそんなに焦ってるの？」

《焦ってる？なんでそう思うの？》

「だって、最初今すぐ友達になれって言ってたじゃない。そこから滅茶苦茶私の事を説得しようとしてくるじゃない。」

《さっき、なのは同士が話している内容がこっちにも伝えられたのよ。アンタたちの世界のなのは、世界を融合する時、不要な人間はその存在ごと消すってね。そしてその対象は明らかにしてない。そして、その消される人間はもう一人のなのが選ぶことができそうなことを言っていた…。つまり、アンタたちも消えるかもしれないのよ》

「私たちが消える…!？」

《そっちのなのはにとつて世界に大切なのは失われた家族とその時間を取り戻す事。それ以外の事は家族との時間の障害となるもの以外は幸せの付随物でしかない…それこそ、いじめてたアンタたちや、家族の死を止められたかもしれないのに止められなかった管理局、友達になり切れなかったフェイト、はやて、ヴォルケンリッターは優先順位はかなり低いでしょうね》

「待つてよ、じゃあ今友達になりたいって言っても、ただの命乞いに思

われるじゃない！」

《別にいいじゃない。命乞いでもなんでも、友達になるためのきつかけを作るのよ！》

「で、でも…」

「アリサちゃん…アリサちゃん前に高町さんに話しかけようとしたことがあったよね…？あの時は何で話そうと思ったの？今こんなに、迷っているのに」

《そんな事があったの？》

「あ、あれは…。四年生の時に、あの子がしばらく来なかったと思つたら、すごくどよんとした様子で学校に来るものだから…、急に心配になつちやつて…話しかけようと思つたのよ…」

《それで？話しかけたの？》

「いや。話しかけてはないわ。だって、あまりにも殺意って言うか、圧というか…とにかく話しかけづらい雰囲気で、近づくこともできなかった…」

「そうだったんだ…」

《じゃあ、リベンジね。今度こそ話しかけましょ！》

「リベンジって…あの子が私の話を聞いてくれるとは思えない…」

「アリサさん。私もなのはと話したい。だから協力するよ。お互い、なのはと一度話そう？」

「フェイト…。アンタは一応友達って言われてたのに、もしかしたらそう思われてなかったのかもしれないのよね…そっちの方が辛い…わよね…」

《通信はどうやってするのフェイト？あ、こっちのフェイトね》

《こっちで、もう一人のなのはにつなげる様にするよ》

「どうするの？アリサちゃん…」

「でも…それでも…」

私は確かに一度あの子を心配して、声をかけようとした。でも、それでも…友達になることで何が変わるの？あの子が違う世界とこの世界をくつつけようとしている。それを私が友達になることで止める事なんてできるの？

《まだ…迷ってるの？そろそろ通信がつながるわよ》

「待つてよ…そもそも、消えるかもしれないのは私たちだけじゃない！貴方もでしょ？それなら、貴方が話してもいいじゃない！何も私がしなくても…！」

「アリサさん…」

「アリサちゃん…」

《…っ!!もう、いいわ！なんでアンタに頼んだか教えてあげる!!今、もう一人のなのはと戦っているのは私たちの世界のなのはなの！こうやって話している間にも命を懸けて戦っているの！そして、それは自分のためじゃなく、誰かのため…今消えるかもしれない顔も知らない誰かのために！私はね、それが納得できないのよ！なんで、あの子が知らない奴のために、自分じゃない誰かのために命を懸けなきゃならないのよ!!たとえそれが私のためであつてもそう思うわ!だつて、あの子の命はあの子だけのものなんだから!でもずっと悩んでたなのはによくできた、やりたいことだから…!納得するしかないじゃない!…今じゃ、魔法関連の仕事をするようになったから、フェイトやはやて、ヴィータとかシグナムさんと一緒にいる時間の方が増えていくけどね…私は…私となのは…そしてすずかはね…!その人たちよりずっと前から、友達なのよ!親友なの!だから、私たちの方がなのはの事を理解してるなんて言わないけど、それでも…家族以外で誰より近くに、一緒にいたのは私たちなのよ!だからこそ…あの子を守りたいの…魔法とか、特別な力が無くても…っ!私の命はどうでもいいのよ!存在だつて無くなつたつてかまわない!…今、どうやったら助けられるのか…力を貸せるのか…?この瞬間に、力を貸せるのは貴女だけなの…!私の声が届くのは私の世界のなのだけ…つまり、もう一人のなのはの心に声を届かせることができるのは貴女だけなの…もう一人の私…。だつてそうでしょ?もし私が声を届かせても、その後、元の世界に私はいない、それじゃ結局何も変わらない…。もし救われても環境は何も変わらない。そっちの世界にもフェイトやはやてはいるかもしれない…それでも、魔法の事関係なく!そばにいてあげられる存在が必要…そう思うの…。だから…お願い…

！力を…かして…っ！》

…魔法とかそういう事関係ない所にいる、友達…。私になれるのかな…。なる資格があるのかな…。でも、そんな事を考えるより…動いた方がきつといいの…かも…。

「…わかった…。とりあえず、友達になるとかそういうんじゃないで、話をしてみる。まず、そこから…」

《…！ありがとう！》

◆◇◆◇◆◇

次の瞬間、戦闘が起こっている世界のアリサが映っている通信画面がピンク色に染まった。

PWなのはのスターライトブレイカーが放たれたのだ。

第52話 輝くは桜金の如く

地響きが聞こえる。空気が震える。ピンク色の光が迫ってくる。

自分の胸には黒い「影」が刺さっている。じわりじわりと痛みが広がってくる。

相手と同じ魔法を自分も使おうとしている。なのに、出てこない。心がまるで死んでしまったかのように。ここまで相手を説得しようとしていたのに、このままじゃ、こんなところで終わってしまう。ただ、「影」が刺さっているだけなのに。それだけなのに。魔法が使えない。

あと一度きりでもいい、この一発だけでもいい。魔法を。あの目の前にいる自分と同じ顔をした彼女を救うことのできる一撃を。スターライトブレイカーを…。

『どうやら、力が欲しい状況みたいだな。元宿主?』

私の頭に響いたのは、聞いたことのある不快な声だった。

『無視をするなよ。我はせつかくお前のためにこの身体に戻って来というのに』

どういう事か…、確か「影」の殆どはもう一人の私、パラレルワールドの高町なのによつて吸収されてしまったはずなのに、なんで私の身体の中にいるのだろうか。そもそも、今話している「隷属の影」はフェイトちゃんが完全に倒してくれていたはずなのに…。

『ここに来た方法は、まあ、今お前に刺さっている「影」を経由してやって来た。そして、なんでこうして、生きている?かというと、「影」は「影」でしか倒せないからだ。たとえ体の中に潜んでいても発現させなければ意味がない。故に我は今もこうして存在している。そして、お前の側に着いた方が面白そうだと思うのだ』

「影」は「影」でしか倒せない…。つまり、フェイトちゃんがある時「影」が潜伏していたとしても、その力を使える状況じゃなかったから倒しきれてなかったって事なのかな…?

ていうか、私に着いた方が面白そうって…?

『面白そう、その言葉の通りだ。我が、我らが倒したかった者は今日

の前にいる「高町なのは」だ。それを奴の身体の中にいる全「影」と話し合い決定した。確かに当初はお前を含む「なのは」を全員並行世界から消そうとしていた。しかし、本当に我々が思っていたことを見つめ直したというわけだ。そうしたら、お前の声が外から聞こえてきた。そして思い出したのだ。我らの本当の目的を』

貴方たちの本当の目的って…？

『我々は異世界に行くことができるという事がわかってからおかしくなってしまうた…。しかし、そう、我々の目的は自分の自由ではない。「高町なのは」の自由を取り戻そうとしていたのだ…。今の奴を縛ってしまっているモノから解き放つために』

もう一人の私の自由…。もし、本当にそれを思っていたとして、私と何をするつもりなの…？このままだと、多分だけどジリ貧で負けると思うんだけど。

『ふはは！随分弱気じゃないか！まあ、あれだけ負け続けたらそうなるか…。しかし、方法はある。それはお前自身のモードを創るのだよ。』

私自身のモードを創る…？モードフォーレンじゃなくて？でも、どうやって？モードって「影」が必要で、その「影」も、もう一人の私が研究に研究を重ねて、作り出したものなんですよ？どうやってモードなんて…。

『我をベースにするのだよ。つまり、我を利用しモードを創れ。それにモードフォーレンじゃ奴には手も足も出ない』

じゃ、じゃあモードを創るとして、そんな事したら貴方はどうなるの？

『我は消えるかもしれぬ。しかし、またそれも良い。運命として受け入れよう』

そんな…!?なんでそんな軽く受け入れちゃうの？おかしくなつたって言ってたけど、あれだけ必死に自由を手に入れようとしていたのに…。

『我は一度死んだようなものだろう？フェイトによって完膚なきまでに叩きのめされて、「影」の力が無く完全に倒されなかったとして

も、私は確かにあの時死んでも同然だった。故に自らの死くらい受け入れよう。別に自暴自棄になっていているわけではないぞ？ただ、今そう思うから、私の心に従い動き、発言しているのだ』

…そんなこと言われたら断りづらいよ…。

『そう言うなら、我を使いモードを創れ。お前自身の最強のモードを！』

わかった…やるよ！私自身の、私だけのモード！

—NANOHA SIDE OUT—

PWなのはスターライトブレイカーがなのはに迫る。PWなのは自らの勝ちを確信した。腹部に「影」を差し動けなくさせ、真正面からブレイカーを撃ち、それも回避不能の距離まで迫った。もう、これで終わる。PWなのはは確信していた。

しかし、事態は急変した。収束していたなのはのスターライトブレイカーと放たれていたPWなのはのスターライトブレイカーが急に融合を始めたのである。そして、それはなのはの身体に吸い込まれていった。まるで「影」を吸収したPWなのはのように…。

「一体なにガ…？」

そして、なのはの身体から「影」が抜けてしまう。

「何!? 抜けないように返しまで付けていたはずなのニ、傷一つないなんてどういウ…」

PWなのはの次の言葉は出なかった。なぜならばなのはの身体が黒い球体に包まれたからである。そして、その球体は色を変え桜色となった。

「マ、まさカ…!? いやでもどうなっテ…」

PWなのはに結論が出る前に、結果が向こうからやってきた。

桜色の球体が割れ、内側には桜色のバリアジャケットに身を包み金色のオーラを纏った、「高町なのは」の姿があった。

「その姿は一体…？」

「これはモード。私が作ったモードだよ」

「なん…だと…!? そんな馬鹿ナ！モードは「影」がないと作れないシ、貴方にはそれを作るための知識なんてないはず！」

「確かに、私にはそんな知識はなかったよ。でも『影』は貴女がくれたでしょう？ 私のお腹に刺していた『影』、あれをもらったよ」

その話を聞き、PWなのは驚愕した表情で動きを止めてしまった。口をパクパクさせて、声すら上げることすらできなくなってしまうていた。まるで鯉の如く、目を丸くし口を動かしている。

それもそうだろう。自らの最高の発明であり、最強の武器でもある『影』を奪われたと言われたのだから。

足元に伸びる『影』を見る。動かす。PWなのは気づく、奪われていないのではないかと。

「どういうこと？ すべて奪ったというわけではなく一部を奪ったというノ…？ 一部…ツ!? 身体から『隷属の影』が感じられない…!?」

そして、PWなのはその顔を上げ、なのはを見る。その顔は真顔でなければ、笑顔でもない表情を浮かべ、とても奇妙な雰囲気醸し出していた。

「そうだよ。『隷属』が私に力を貸してくれたんだ」

「奴が力ヲ…？ 裏切ったのかッ！」

「違…。いや、貴女から見たらそうなるのかな？ でも、目的は裏切る事じゃないよ。あなたを助けるためなんだよ。『隷属』がそう言ったんだ」

「私を助けれ…？ 誰がそんなことを頼んだノ！ 『影』の協力を得たからっていい気になるんじゃない！」

アクセルシューターをなのはに向かって放つ。その光弾は真つすぐになのはにぶつかり、薄黒い桜色の魔力光が散っていく。

しかし、その攻撃はなのはに全くダメージを与えていなかった。なのはの纏う金色のオーラとあふれ出る魔力がそのダメージを無効化しているのだ。

「今度はごっちの番だよ！」

そう叫ぶと、なのはは一直線にPWなのはに突っ込み、その体を掴んだ。そして、次に行ったのは、PWなのはが行った様な次元移動を開始した。通常のなのはではそもそも行うことができず、身体に大きな負担がかかる技だが、このモード状態であれば次元移動が可能にな

り、身体への負担もほぼゼロに抑えることができる。

なのはが最初に移動したのはミッドチルダ上空。先ほど移動させられた場所に自ら行ったのだ。

「ええイー・何なの、こんなところに連れてきてー！」

「ほら、空を見てごらん。貴女の世界が落ちてきていないでしょ？」
そう、つい先ほどまで海鳴市同様に世界の同化が進んでいたはずなのだが、空に見える町は動かず、落ちてきてはいなかった。

「私が生きていてる限りこれ以上の同化は進まない。私という存在が同化を止めているの」

「存在方：同化を止めているル？そんな事がありえるノ…？」

「今そうなっているんだから、あり得るんだよ。さ、次の世界に行こうか」

「させるかッ!!」

PWなのはは、もう一度次元移動をしようとするなのはを拳で直接殴り飛ばした。魔力を使わない攻撃なら効くのではないかと考え、実行したのだ。

飛ばされたなのはは、ミッドチルダの地面に墜落し、大きなクレーターを作った。土煙が立ち込めなのはの姿はすぐには確認できなかった。

「効いたのかナ…？」

PWなのはがそう呟くと、土煙が渦を巻き始めた。

「何!?! いったい何ガ…！」

そして、渦の中心から目にも止まらぬ速さでなのはが突進してきたのだ。あまりの速さにPWなのはは反応できず、腕を掴まれ次元移動をさせられた。

「ぐううウ…！何なのヨ！本当…！何がしたいの!!」

「こうやって、いろいろな世界を見て行ったら、世界観変わるかなって思ってたさ」

「はア？私の考えが変わるのを狙っているという事？残念だけど、そんなのは永遠にないヨ！」

PWなのはは次元移動の最中に、なのはの腕を振り払い蹴りをなの

はの横腹に与えようとした。

しかし、なのははその攻撃をよけ、カウンターとして魔力弾を放った。その魔力弾はPWなのはに命中し、大きくのけ反り動きが止まってしまうた。

「しようがない。じゃあ元の世界に戻ろうか。とはいっても貴女には別世界だけど」

なのはは再びPWなのはの手を掴み、次元移動を再開し海鳴市上空に戻ってきた。そして、PWなのはの手を放し、少し距離を置いた。

PWなのははフワフワと浮きながらも、少しづつ冷静になつていき、意識もはつきりと戻ってきた。

「はア…はア…。今気づいたけど貴方無傷なんだネ…。一応殴り飛ばしたはずなんだけどなア。全ク、理不尽の塊みたいなモードだヨ」

「影」つていう無敵の魔法を創り出しておいて、今さら何を。…ねえ、やっぱりもうやめようよ。これ以上戦うのは無意味だって私は思うんだけど」

なのはがそう言うと、PWなのはの表情は怒りや悲しみの混ざった様なものになり、左手に魔力を込め始める。

「意味なんていらなんだヨ。…最初から意味なんて必要としていない。私は過去を取り戻そうとしているんじゃない、未来を取り戻そうとしているんだ！だから意味なんていらナイ！」

「ど、どういう事…？未来を取り戻すから意味なんていらナイって…わけがわからないよ」

「わからないなら…いや説明してあげるヨ。そもそも未来つていうのはここから続く時間の先の事を指す言葉。そして過去は既に過ぎた時間や出来事を指す言葉…。人はただ何も考えなくても未来には否が応でも進んでいく。しかし、過去はもう戻る事の出来ないも。もし、過去に戻りたいと思つたのだとしたら、そこには意味が存在する。過去を想う時人は必ず無意識でも意味を持つているものなんだヨ。だけど未来はどう？未来は向こうからやってくるも、意味がなくても気づいたら立っているんだ。未来という時間ニ…」

「で、でも目標や夢を持って生きれば意味を持って未来に進んでい

ると言えるんじゃないの?」

「それは意味を持つているんじゃないノ、意味を持たせているノ。同じように聞こえるけど、全くの別の事なんだヨ。…だから私は未来を取り戻すことに意味はいらす持たせる必要もないと言っているんだ」

「…意味もなく、家族を取り戻そうとしているの?」

「取り戻すことデ、意味を持たせることができるようになるノ。貴方が言ったように、人は未来に様々な意味付けを行ウ。でもその意味付けは強い意志が無いとできないノ。夢破れて絶望したなんて話、よく聞くでしょう?強い意志があれば未来に意味付けをできる、そしてそこに強大な力があれば今度は未来に付けた意味を現実のものにすることができル!」

「な、なんて滅茶苦茶な理屈…。それに、結局意味を付けているじゃない!言っている事矛盾だらけだよ!」

「私が要らないと言った意味ハ、今すぐには必要ないという事だヨ。私の未来を取り戻すという行動には意味は必要ないノ。そこから先、取り戻してからの時間には意味が必要なノ」

「…だとしても、貴女がそう考えるのだとしても…!貴女がやろうとしている事は、未来を取り戻すことにならないし、厳しいことを言うようだけど、現在を見れない人が未来を取り戻せるだなんて思わない事だね」

そう言うとなのは手のひらをPWなのはに向けた。少し空気が振動し、PWなのは左手に溜めていた魔力が霧散していく。

いったい何が起きたのか、PWなのはにはわからなかった。理解の範疇を超えた現象に混乱の連続だった。

「もう、貴女に魔法は使わせない…。戦うとしても、拳闘士になるね」

「くツ…!どうしてそこまでのモードを創ったノ…?」

「どうして?私はただ、貴女を助けたたって人がいたからその人に力を貸すためにこのモードを創っただけだよ。私も、その助けたいと思った人の一人だけだね」

PWなのはもう一度魔力を溜め始める。しかし、それもなのはが手をかざすだけで、散り散りになっていった。

「マ、まさか…：空気の振動で魔力を霧散させているノ？そんな事が可能なノ…？」

「できているんだから、可能なんだよ」

「科学をバカにしているノ!? 空気振動なんかで魔力が霧散するなんて聞いたことない！」

「貴女だつて考えた通りの魔法が使えるっていう魔法が使えるじゃない。あれつて、原理とか仕組みとかがあり得なくても作れるんですよ？」

「タ、確かにそうだけド…」

そして、PWなのは拳を振りかぶり、勢い良く攻撃するも、なのはにその手を掴まれてしまった。掴んだまま振り回され、近くにあったビルに思い切りぶつけ、地響きのような音が周囲に鳴り響く。

「がはッ…：うあああア…。何でこんなニ…：差があるノ…！…！ついでさつきまでこんな事無かつたのニ！」

PWなのはがビルの外壁から抜け出そうとすると、なのはが魔法陣を展開し、叫んだ。

「縛れ!! 鋼の軛!!」

するとPWなのはの周囲から、桜色の柱が伸び、PWなのはの腕を貫き、その動きを止めた。

「ナ…：にイ…：!? この魔法はザファイラの物のはズ…：！」

動けなくなつたPWなのはの前になのはが降りてくる。いつまでも止めどめなく溢れ出る魔力のオーラがなのはに威圧感を与えていた。

「ごめんね、ちよつとフェイトちゃんたちから通信が来て、貴女と話してほしい人がいるつて言うから拘束させてもらったよ」

「それでもこんなに強引に止めるものかナ…」

そうして、PWなのはの目の前に通信画面が表示される。そこには、PWなのはの世界のアリサ・バニングスが映っていた。

画面のアリサの目は決意をしている様だが怯えている様でもあつ

た。

『…久しぶりね…。高町…いや、なのは』

「急に馴れ馴れしヨ。失礼だとか思わないノ？デ？何の用なノ。私の計画を邪魔する奴らに加担してまで話したい事なんでしょ」

『単刀直入に言うわよ。私と友達になりましょう』

自らの止まった時間動かすため、もう一度今をやり直すためのPWアリサによる説得が始まった。

「…急に何を言うかと思えば…。何、死ぬかもしれないから命乞いでもしに来たノ？」

『そういうんじゃないわ。ただ、今すぐじゃなくてもいいけど友達になって欲しいって思ったから、伝える手伝いをそっちの世界の人達にしてもらったの』

「命乞いでなければ、ただ友達になりたい？何を考えているノ、こんな状況デ」

「こんな状況だからよ」

PWアリサは震える声をどうにか抑えながら話した。かつて自分が行つたいじめや嫌がらせの謝罪だったり、PWなのはが落ち込んでいた時、声をかけようとしたがいじめの事もありできなかった事や、今この世界にいるPWなのはの知り合い全員が帰りを待つており、もう一度一からやり直し、本当の友達になりたがつているという事を。まさか、ここまで話せると思っていなかったPWアリサは、心の中で今ある異常な状態がここまで自分を動かさせるという事に驚いていた。

『とまあ…こんな感じかな…。今の私の気持ちは心の底から思えているかは私自身にもわからない。でも、友達になりたいんだ…』

「……」

PWなのはは沈黙していた。腕が肩より上になっている影響で顔が俯くようになってしまっているため、表情を窺うことはできないが、肩を小刻みに震わせているのがわかった。

なのはは感動や改心からくる震えかと見ていたが、顔を上げたPWなのはの笑顔からそうではない事がすぐにわかった。

「よくそんな白々しい事が言えたネ！まあ言いたいことはわかったヨ。しかし、その話は受け入れられない。私は何故こうやって並行世界に来ていると思ってるノ？そもそも、私は貴方たちに興味はないシ、今や管理局には恨みすら感じない。今私が恨んで復讐の対象としているのハ、私の家族が死ぬ運命を良しとしたあの世界ト、あの忌々しい魔導師を生んだミッドチルダの二つだヨ。そして、この世界にはその復讐と家族を蘇らせるための肥やしになってもらウ!!」

PWなのはは、無理やり腕に刺さっている軛を破壊し拘束から逃れ、空高く飛び上がった。

そして、下にいるのはや通信画面に映るPWアリサを見下すような視線を向けながら腕の傷を癒した。

「交渉？は決裂だヨ。もう貴方と話す事はないヨ。バニングスさん」

PWアリサは、苦々しい表情を見せ、誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いた。

『…やっぱり…ダメだったじゃない…』

その時、再びPWなのはは拘束された。しかし、今度は軛ではない。桜色の鎖である。彼女の身体をきつく締めあげる鎖を出したのはやはり、なのはであった。

「ダメじゃないよ…。全然ダメじゃない。こうやって口にする事としないのじゃ大きな違いがあるから。大丈夫、きつと貴方は…並行世界のアリサちゃんや他の人達も、あの子の友達になれるよ…」

『そう…かな…？だって話す事無いって…』

「沢山話す事が友達ってわけじゃないでしょ？心配しないでいいよ、私があの子を直接助けるから。その後、心を助けるのは貴方たちの役目になっちゃうけど…大丈夫だよね？」

『心を助ける…そうね…任せなさい！』

「流石！どの世界でもアリサちゃんはアリサちゃんだね！…じゃあ、もう一人の私…貴女が望む決着の付け方で勝負しよう…!」

鎖を引きちぎったPWなのははゆっくり近づいてくるのを睨みながら、拳を強く握りしめた。

「全力全開、手加減なしの真剣勝負で決着を付けようカ…。貴方も好きでしょ？そういうノ」

同じ高度まで昇って来たなのは少し笑っている様な表情で、ボクサーのファイティングポーズの様な姿勢をとった。

「別に戦うことが好きじゃやないよ。そうしないといけなからそうするだけ。戦わなくていいならそれに越したことは無いからね。」

「私は好きだよ。だって一番誰が正しいか決めるのにわかりやすいからネ」

「いい事教えてあげる。暴力を互いに使う戦いはどっちも正しくてどっちも間違っているのが基本だよ」

二人のなのが同時に突進し、その拳がぶつかり合う。

最後の戦いが幕を開ける。

第53話 桜金が導く未来

「でやああああ!!」

「やああああア!!!」

二人のなのはの拳がぶつかり合う。お互いの気持ちもまた、ぶつかる。

PWなのはを絶望から救いたいと考えているなのは。なのはを倒し、自らの世界と今いる世界の融合を完遂し自分の望みを叶えるため戦うPWなのは。

「本当に忌々しいモードだね!こっちの攻撃が全く効かないなんてさア!!」

PWなのはの放った拳は、なのはに捕まれてしまう。そして、そこから背負い投げの様な形で近くにあったビル目がけて投げられてしまう。

「これでもまだ続けるつもりなの?」

崩れたビルの外壁からPWなのはが砂煙をたてながら飛び立つ。その表情はまだこの戦いに諦めていない様子が伝わって来た。

「…そこまで…世界を恨めるものなの…?確かに家族が居なくなるのは、殺されるのは辛いけれど…。犯人に復讐を果たしてもなお燃え続けているその感情は…いったいどこから来るの?」

「黙れええエー!お前もいずれ出会えうだろうさア!心の底から憎いと思う人間ト!!そして恨むサ!そんな人物と巡り合わせた世界とその運命ヲ!!!」

なのははその鬼の様な形相で叫ぶ自分と同じ顔をした少女の言葉の意味を自らの中で考えた。

世界を恨むほどの憎しみとの出会いというものを。

—NANOHA SIDE—

いったい、長い人生の中で世界を…人を一度も憎まず、憎まれず過ごせる人ってどのくらいいるんだろう…あの子の言う通り、今の私には居なくてもきつといつかできるのだろう。誰だつてそう…性格が合わなかったり、意見が合わなかったり、きつかけはきつと様々。

だけど、それで世界を恨んで、憎いからって命まで奪って…それで本当に憎しみや恨みって終わったり消えたりするのかな…？私は何か違う気がする。だって、人が生きていく間に会おうのはそんな人たちばかりじゃないと思うから。

お母さん…お父さん…お兄ちゃん…お姉ちゃん…アリサちゃん…すずかちゃん…ユーノ君…フェイトちゃん…はやてちゃん…ヴィーたちちゃん…シグナムさん…ザフィーラさん…シヤマル先生…リインフォースさん…ツヴァイ…リンデイさん…クロノ君…エイミイさん…魔法を手に入れる後も後も変わらず一緒に居てくれる人がいた。その人たちは恨むとかそんなんじゃない、むしろ感謝したい人たちだ。…そっか、私には居たんだ…家族以外で家族の様に私を支えてくれる人が。向こうの私にもいたかもしれない、でもきつと気づかなかったり、見ないふりをしていたのかもしれない…。かく言う私だって、そんな状況をどこかそれを俯瞰する様な目線で見ていた。どこか心に穴が開いているようでもあった。でも今、パラレルワールドの私と出会って、戦って気づいた。恵まれてる故のとかそういう事じゃない、私を感じている心の穴。

家族はどんな危険からも守ってくれた。私が危ないことをしようとしている時はお兄ちゃんやお父さんが心から心配してくれた。お母さんやお姉ちゃんも心配もしていたけど信頼もしていてくれた。昔、お父さんの命が危なくなった時…家族皆でその危機を越えようとしていた。その時、私は何もできなかった。家で皆の帰りを待つだけ…。だからこそ、私はきつと誰かの支えになろうとしたんだ…すずかちゃんをからかっていたアリサちゃんを止めたのも、ジユエルシードを集めているフェイトちゃんとお母さん、プレシアさんを止めようとしたのも…闇の書の闇に囚われたヴィーたちやんたちはやてちゃんたちを助けたのも…みんなみんな…私が誰かの支えに…力になろうとしてやったことだった…。

そうだ…私は、誰かの力になりたかった！誰かの涙を見たりするのは嫌…！リインフォースさんの時のように、悲しい出来事を悲しいまま終わらせたくない…だからもつともつと強くなりたかった。そ

うあの夜空に誓ったんだ…。

きつと…目の前にいるパラレルワールドの私もきつと…そうだったはずなんだ。私と同じだったはずなんだ…。だけど魔法を手に入る前も後も家族の様に寄り添ってくれる人が居なくて…帰りを待つてくれる人も居なくなつて…そんな彼女を動かしたのは純粹な憎しみ…。全うな恨み。

全く同じ状況に私が置かれたとして、彼女の様にならないで済むだろうか…自信はない。

でも、それでも…それが他の世界に迷惑をかけていい理由にはならない。自分の大切な人を蘇らすために誰かを殺していいなんてはずはない。

そっか…この状況、プレシアさんの時とそっくりなんだ。この場に立っているのがクロノ君じゃないだけで…家族を蘇らせようとしている魔導師の事件…。あの時、私には力がなくて何もできなかった…プレシアさんとフェイトちゃんの両方を救うことができなかった…だったら、今私がすべきことはたった一つだ。もう一人の私とその世界の両方を救う。できる、私ならできる！

彼女の言う憎しみを抱く人と出会うとしても、いつか世界を恨むことになったとしても、私は全力でぶつかってみるよ。もちろん、もう一人の私とは違う方法でね…。

「やああああああア!!」

「無駄だよ」

私は飛んできた拳を正面から、掴む。

「…貴方何で泣いているノ…!?!」

「…だつて…貴方に私は何もできてない…いや、できなかつた…!もつと早く出会えていれば…!…貴女をもつと早く救っていたつ…!」

「ふぎけないデ！何が何もできないだヨ！いつ出会つていてモ…何も変わらない！私はきつと同じ道を歩ム…!あの魔導師を殺シ、貴方と戦つていタ!!」

「…そうだね。そして、私も貴方を止めていただろうね…」

「そうヨ、そして、涙を流される覚えなんてものもない。同情なんていらない……！貴女に理解される事なんてない！」

「理解できるよ！私と貴方は同じ人！歩む歴史が少しだけ違っただけの……同じ人だもの！」

「違ウ！何も同じじゃない……！どんな歴史を歩もうと、幸せに包まれている貴方が私と同じなんテ！」

「貴方は私には過去を懐かしんでいるわけじゃないって言っていたけれど……本当に過去を懐かしんでいない人が、家族を生き返らそうとするの？きつと、貴方は未来を創ろうとなんてしていない、過去に囚われたんだ……！」

「戯れ言ヲ……！」

「戯れ言でもいいから聞いて欲しいの……私の話……！」

「私は家族ヲ……未来を取り戻ス！もう……止められナイ！」

「止めるよ……！貴女も、貴女の涙も……！」

「涙……？……ツ！？な、何で私は涙を……！」

「心のどこかで救って欲しいって願っているんだ……だから涙が流れる……心が傷ついて痛いんだ！」

「わかったような事を……！」

もう一人の私が殴りかかってくる。その拳には魔力がこもっている。私もその拳に当てるよう魔力のこもった拳を突きだす。

ぶつかり合った時爆発を起こす。そしてその時私の中にどうしようもない悲しみが流れ込んできた。これきつと彼女の悲しみ。

「貴方の悲しみが……拳を通じて伝わってくる……！どうしようもない……やるせない悲しみが……やっぱり過去に囚われてしまった自分を救ってほしいって、心の底では思っているんだよ！」

「うるさあい!!黙れエ!!黙レエエ!!」

涙を流しながらもう一人の私は拳を振るう。私も涙を流しながらそれを払う。そしてカウンターを入れる。

「ぐツ……！」

「悲しいんだ……貴方とぶつかり合う度……私の中に貴方の悲しみが……絶望が流れ込んでくる……！」

「それなラ！そこまで私に同情できるなラ！本当にそうならわかつているはずだヨ！私が何でもまで必死にこの計画を続けようとするの力！私の家族を失つてからの日々の辛さガ！」

もう一人の私が何度も拳を叩きつけてくる。それは冷静なものではない。ただ感情のままに振るわれている、とても乱暴な攻撃……。きつと彼女はそれだけ追い詰められているという事なんだろう……。

「わかる……わかるよ……。でも、それでも！誰かを殺していい理由になんてならない！貴女が殺そうとしてる誰かもまた！誰かの大切な家族なんだから！」

「だからどうしたっていうノ！！私だけが何で……！家族を失い、未来に絶望しなきゃいけないの……！この絶望は復讐を遂げたとしても消えなかった……ずっとずっと、心を蝕んでいった……！じゃあ、恨むしかないじゃない！世界を！こんな運命を私に押し付けた世界を！」

「なら……そこまで傷ついていた貴女なら……一番理解できたはずじゃない……！大切な人を……家族を失う辛さや……悲しみを……！」

「じゃあ……じゃあなんで私の家族は……私の家族だけガ！死ななければならなかったノ！不公平だ……皆ばかり……何も失わず生きて行こうだなんテ！」

「違う！人は生きる限り、何も失わないなんてことは無い！いつも何かを選び捨てていく。……確かに、生きていく事は不公平や理不尽の連続だと思うよ……でも、どんなことがあっても私たちは生きていかなきゃならないんだ……。だとしても……だとしても！！と心を鼓舞して!!!そして、決して誰かを犠牲にして死んだ人を蘇らすことが死んでいった人たちへの報いになるわけじゃない！辛いことがあつても前を向いて、何が何でも生きていかなきゃいけないんだ！」

「辛すぎるじゃない……そんなノ……！」

「挑むことだけが生きるという事ならそうかもしれない……。でも生きるという事は逃げてもいいんだ。貴女が大切に思っている家族との思い出を懐かしむ様に。挑み、逃げる、それが人生なんじゃないかな……？それに、貴女が家族といた、その時間は確かにあつたんでしょ！それを忘れろなんて言わない、言うはずがない。でもそんな時間を

貴女はこれから、家族以外の人と築いていくんだ！」

「家族といた時の様な時間を…別の人と…？無理だよ…そんなノ…」

「逃げることも人生だって言ったけど、最初から逃げてしまったら何にも始まらないよ！今は貴女が止めた歩みをもう一步前に進めるだけで、始まるんだ！何もかもが！」

「そんな綺麗事…！何とでも言えるじゃない！」

「綺麗事だとしても…いやだからこそ、本当の事にしていくんだよ！」

「…ぐっ…私は…私はッ…！」

あれ、段々あの子の言葉からノイズが消えてきている。…もしかして、それが彼女の心の変化によるものだとするなら…！

「もう…絶望することを恐れる必要なんてないんだ！貴女が迷った時、私は手を差し伸べるよ。私だけじゃない。この世界の人、貴女の世界の人、皆が手を差し伸べてくれる」

「…いつか裏切られるかもしれない…私がやって来たように…」

「じゃあ、その時は貴女がその人に手を差し伸べるんだ」

「裏切った人に…？」

「うん！だってどんな事情があつたかもわからないのに責められないでしょ？」

「どんな事情があつても…裏切られたら手を差し伸べられる自信はないよ…」

「じゃあ、お話を聞くだけでもいいと思うよ。こうやって今私がしているみたいにね…」

「ははっ……やっぱりと貴方は違う…」

そう笑う彼女の表情は今までの憎しみに染まった顔じゃなかった。なにか気づいたような、前向きになった様な顔をしている。

「えっ…？」

「こうやって話しているだけで分かる…。貴方は私と違って優しく、強い…」

「本当の強さってなんだと思う…？」

「本当の強さ…?」

「私はね…貴女みたいに誰かのためだけじゃなく、自分のためにも動けることだと思うんだ」

「よく聞くのは、自分のためじゃなくて人のためだけド…逆なんだね…」

「だって、人のため人のためって言って、自分の事が疎かになってしまふなら、きつとその人は他人の前に自分に気を配るべきだって思うから。でも他人にも自分にも気を配って何かできる人は本当の意味で強く素晴らしい人だって…そう思うんだ」

「じゃあ、貴方の事だね」

「いや、私はまだだよ…。きつと近い将来そうなれると信じて努力はしているけどね」

「…私もそうなれたら…どんなに良かったか…。…ねえ、最後にいい?」

「最後?」

「うん、最後をお願いしていい?」

「う、うん…。いいけど…。何?」

「全力…全開。手加減なしの砲撃対決をやって欲しいの。勿論影も使わない。純粹な砲撃対決」

「…わかった。それで貴女が満足するなら…」

「少しだけ、貴方の言葉を信じてみるよ。一步前に進むためニ…私なりの区切りが欲しいんだ…」

—NANOHA SIDE OUT—

PWなのはの言葉になのはは頷く。

そして、二人は今一度距離を取る。この距離は一人の少女が、復讐と過去に囚われていた自分との決別し、もう一度本当の意味で、未来に生きる歩み始めるための距離である。

なのはが両手を前に突き出し、収束を始める。PWなのはもまた同じように始める。金色に縁どられたピンク色の光がなのはに集まってく。黒に縁どられたピンク色の光がPWなのはに集まってく。両者に同じように集まってく魔力。

それを各管理次元世界の人々やフェイトたち、パラレルワールドのフェイトたちが見守っていた。この時、誰もがなのはに希望を託していた。しかし、PWアリサの時の通信がつながっていたままになっていた事で思わず、PWなのはの心の叫びを聞いた世界中の人々がなんと、PWなのはにも自分たちの希望を託したのだ。恨みではなく、希望を。本当に、なのはの言った通り、色々な人々が手を差し伸べてくれたのだった。

「さあ……行くよ！」

「うん……。これで私はもう一度歩むんだ……。それくらいの贅沢……いいよね……？」

二人が突き出していた手を左手だけ引き、思い切り左手を前に出しながら魔法の名前を叫ぶ。明日へと進むための道標となる星の光。

「スターライト！ブレイカーアアアア！！！！」

二つの閃光は、ぶつかり互いに混ざり合うように中心部に渦巻きながら球体を作っていく、キラキラとした粒子になり散った。

爆発は起こらなかったのだ。まるで、PWなのはの新たな人生の門出を祝うかのように、スターライトブレイカーは夜空に煌めく光となった。

「こんな事になるなんて……。本当だ、人生何が起きるかわからないもんだなあ……」

PWなのははしみじみとその散り行く光を見つめていた。なのははその姿を見て微笑んでいた。それは短いがとてもやさしい時間であった。

その後、PWなのはとなのはは地上へ戻り、フェイトたちと合流した。

この時、一連の事件はひとまずの終結を迎えたのである。

「全く……どの世界のなのはは無理をするんだね。こつちの気も知らないで」

フェイトがため息交じりにぼやく。それにはやても同調し、微笑んでいた。

「談笑しているところ済まないんだが、パラレルワールドの方のな

のはは、このまま取り調べに協力してもらおうぞ」

「クロノ君…それってやっぱりもう一人の私は罪に問われるのかな…?」

クロノは少し考え口を開いた。

「魔導師殺しに関してはこちらの世界の事じゃないから関係ないだろうけど、『影』の一連の事件や、今回の世界を融合の件はこちらの世界で行っているからなあ…無罪は難しいだろうな…」

クロノの言葉に、その場に居たなのはやはやて、フェイトの表情は暗くなる。そして、通信しているままのPWアリサもまた、寂しそうな表情をする。

『なのは…帰ってこれないんですか…?』

PWアリサがクロノに聞く。

「帰れないことは無いだろうけど…かなり長い時間拘束はされてしまっただろうね」

『そんな…』

「…バニングスさん、心配してくれてありがとうね。でも私なら大丈夫だから。ちゃんと償ってから帰るよ」

PWなのはがPWアリサに声をかける。戦闘中に交わした会話とは違う互いを思いやっている会話。それを聞いていたフェイトはPWなのはに一つだけ提案をした。

「あの時の返事をしてあげなよ。友達になりたいって言われたんでしょ?」

しかし、PWなのはは、少し寂しそうに、「私、友達の作り方とか知らないから…どうやったら友達になれるのかわからない…」と答えた。

その答えに、フェイトは一度なのはの方を向き、笑顔で友達の作り方を教えた。

「ふふっ。友達になるのはね、とても簡単なんだ。名前を呼んであげて、それだけでいいの」

「名前で…?…あ、アリサさん…!」

『ひゃ、あああはい!』

「私と…友達になってくれますか…？貴方を殺そうとした私と…」
『うん…！もちろんよ!!それに、私今死んでないし、全然気にする事無いわ!』

そうして、PWの二人は、迎いの転移魔法の準備ができるまでの間、ずっと話し込んでいた。ようやく、二人は友達になれたのだ。

「…転移魔法の準備ができた。さあ、行こう」
クロノが、PWなのはを連れて魔方陣まで行く。

「そうだ。多分世界の融合はゆつくり元に戻っていく筈だから、今はそこまで気にしなくていいと思うよ」

「うん…わかった。…またね!もう一人の私…いや、ナノハちゃん!!」

「いつか、また会おうね…ナノハ!」

『私も、待ってるから!なのは!』

なのは、フェイトPWアリサに続いて、はやてやヴォルケンリッター、こちらの世界のアリサとすずか、向こうの世界のすずかとフェイトなどから、完全に転移されるまで別れの挨拶と、再開の誓いをされ、一時の別れとなった。

—ANOTHER NANOHA SIDE—

今私は時空管理局航行艦アースラの中に居る。自分の世界の時は片手で数えるくらいしか来てなかったけど、内装が変わらないという事はわかる。パラレルワールドと言っても、大きくは変わらないんだなという事がありありと実感できた。

…今になってこんな事を思うとは思っていなかったけど、この世界を壊さなくてよかった…。私は今そう思っている。

私はこの世界の私の言っていた通り、過去に執着していたのかもしれない。それは悪い事ではないんだろうけど、あまりにも執着しすぎると今回の私みたいなことになってしまう。そうなってしまったら何も言い逃れできない、悪い事だ。

家族は今だって大切だし、あの魔導師も今だって憎い。でも、それでも、どうにか前に進まなきゃいけない。辛い事ばかりだったけど、きつとこれからも辛い事は絶えないと思うけど、今の私にはアリサさ

んや、こつちの世界の人達という友達ができた。それだけで何かとても心強く思える。

ずっと友達のふりをして、私の世界のフェイトさんや、はやてさんを利用していただけれど、もっと早くに本当の友達になれていたのかな…？

…あの二人にも悪い事しちゃったな…。もし帰れたら、ちゃんと言わなきゃね。そして、本当の友達にしてもらうんだ。…許してくれるだろうか、こんな私を…。

…今こんな事考えている暇じゃない。償う事を考えなきゃ！

「大丈夫か？何か考えこんでしまっているが」

クロノ執務官が話しかける。私は「すいません。大丈夫です」と答え、取り調べ室…ではなく食堂の椅子に座った。

「何で食堂…？」

「君も僕も、食事が済んでいないだろう？」

執務官は優しい人なんだなあ…。

「あ、ありがとうございます…」

「…食べるものとして来るよ。少し待っててくれ」

そう言う執務官は、部屋の奥にあるカウンターまで走っていった。

今なら逃げれるのだろうかとも思ったが、両手に手錠、出入り口には武装局員。満身創痍の私にはとても突破できないだろう。ここは素直に、食事を待つ。元々逃げるつもりなんてないのだけれど。

「お待たせ、食事は種類しかないので、我慢してください」

そう言っただけで差し出された食事は、普通にお腹がいっぱいになりそうな料理たちだった。ここに不満など出るはずもない。

ありがたく食べさせていただきこう。

「我慢だなんて、こんな立派なものをいただけるんですから、不満なんてありません。いただきます」

手を合わせ、食事を始める。思った通り美味しいご飯だ。

食べている時に気づく、私は今逮捕という形なのだろうか？個人的にはそうではないかと思っていたが、執務官からは逮捕という言葉は

聞いていない。…今の自分の境遇は何なのだろうか…？

「すみません…。食事中に質問なんて行儀が悪いんですが、私は今逮捕されているという事でよろしいのでしょうか？」

「うん？あー、確かに逮捕するとは言ってなかったな…。一応そうしておいたほうがいいのは確かなんだが…。『影』たちと君との関係性がはつきりしていないからな、今は参考人という形で拘束させていただいている」

なるほど。確かに私は自分で『影』の制作者だとは言ったけどあれは魔力反応がない物質で、管理局も詳しくわからないんだ。

「理解しました。『影』の事など、しっかりと、説明させていただきま

す」

「ああ、そうしてくれると助かる」
また、食事に戻る。しばらくすると、一人の局員が、執務官に話しかけてきた。

「どうやら、外から私と執務官宛てに通信が来たらしい。…執務官はわかるけれど、私にも…？何とも不思議な話だ。」

「んー…。よし分かった。繋いでくれ」
執務官が指示すると、すぐに目の前に通信用のウィンドウが表示される。

通信先の名前を見ると、拘置所から来ているようだ。この世界の拘置所に私の知り合いなんていないと思うのだが…。

『やあ、初めまして。そちらのお嬢さんは久しぶりだね』

画面に出てきたのは、特に見た事の無い男性だった。久しぶり、というところの世界の私の知り合いなのだろうか…？しかし、私もこの男にどこか懐かしさを感じている。

私の世界で似た人と会ったことがあったのだろうか…？

「君は…時空保安局の局長だった…」

『そう！正式には『断罪の影』さ！クロノ執務官は初めましてだが、その高町なのは君は私を知っているだろう？ねえ、マスター』

『断罪の影』!?そ、そうか。だからこの男に懐かしさを感じていたのか。

「すべての『影』は私が吸収したと思っていたのに…何で貴方がそこに居るの?」

「次元が遠すぎてね。貴方の蒐集の範囲から外れてしまったのですよ」

そう言うことだったのか。それにしても、何で通信なんか…?

「それで? 君はボク達に何の用なんだ? それを言うためだけに通信をしてきたわけじゃないだろうか?」

『もちろん。…話は単純さ。私の中から『影』の反応が消えて、マスターがそこに居るという事は、全ての事件が終了したという事だ。そして、ここまでの一連の事件の首謀者を明かそうと思っていたんだが…』

…? それは私だろう。首謀者という仰々しい言い方をしなくても、それは間違いなく私の事だ。自分でもそう思っている。

『私なんだ。私こそが、この一連の事件の黒幕!』というわけなんだ。マスターは、私の意のままに動いていただけで彼女に罪の全面があるわけじゃない』

「なんだと?! それはどういうことだ…?! そもそも君たちは、彼女が魔術師を殺すために作られたユニゾンデバイスなんだろ? それは何で…! まさか… 『断罪の影』…君はこの子をかばおうとしているのか…?」

『そんなんじゃないやあない。そもそも私はマスターを殺してるんだ。かばう義理は無い。しかし、事件の黒幕というのは本当さ。まあ、マスターも気づいていなかったと思うけどねえ』

『断罪の影』が黒幕…?! 私が知らない間に奴に操られていたというの…? 一体いつから…?』

『ふふふ。その様子じゃ本当に気づいていなかったようだね。そもそも『影』で最初に作られたのは三体。不屈、束縛、そしてこの私断罪だ。そして、自我というのを持ち始めたのは私が一番最初だった。タイミングとしては彼女が復讐を完遂しようというところだった。そこで私は自分の存在がなんなのか気になった。まあ生きる者なら一度は考えるであろうアイデンティティの存在を探したのだ。ここ

で私の名前をもう一度考えて欲しい。『断罪』だ。そう、罪を裁く事を指す言葉だ。私の能力は前にカリスマみたいなることを言ったかもしれないが、それは端的に説明しただけだ。正確には私が裁く裁判官の様な立場となる事でことで対象に私の言葉がすべて正しい様に聞こえる様にさせるというわけだ。つまり私の能力の正しい認識は、洗脳に近いのかもしれない。そして、私はこの能力を自覚した時気づいたのだよ。これはきつと、自分の復讐心をマスターが忘れないようにするために作った能力だと。…まあ、あくまで自分勝手な解釈だけどね。そして私はマスターに言ったわけさ『貴方の復讐はまだ終わっていない』ってね。それからさ、マスターが他の『影』を作って、家族の蘇生を計画し始めたのは』

そんな…。言われてみれば、『断罪の影』にそんな事を言われた記憶はある。しかし、そこからの私の行動が、思考が…全て自らが作った『影』の能力下だったなんて…。

じゃあ、あの世界への憎しみや運命への恨みは…全て…偽りだったの…？復讐を終わらせないための、対象として私が勝手に作り上げただけだったって…？

「つまり、一連の事件の発端を作ったのは自分という意味で、君が黒幕という事なのか？」

『そういうことだ。私が何も言わなくても似たようなことを行っていたかもしれない。しかし、実際は私がマスターを洗脳したことで起きてしまった事件だ。…まさか、私の能力が破られる時が来るとは思っていなかったがね。この世界の高町なのはは化け物か何かかい？』

「どの世界のなのも、ただの一人の女の子だ！ふざけたことを言うんじゃない！」

『ああ、気に障ったのならすまなかった。そんなつもりではなかったのだ。』

「じゃあ、私の罪は…」

『マスターが自らの意思で行ったのは魔術師殺しだけさ。後は私の洗脳下で行った。それが全てさ、マスター』

「そんな…」

「…それが本当なら、彼女は这个世界で裁けないぞ…!」

『しいて言うなら、私を生み出したことくらいですかね?よかったですね、罪軽くなって』

…それでいいのだろうか?確かにそれを受けいれたら多少罪は軽くなるのかもしれない…でも…本当にそれでいいのだろうか…?

「そうだったとしても、それが全てだとしても…私はちゃんと償いたい…。自分がこの世界で行った事を…」

『それだと、もう貴方は自分の世界に帰れませんけど。それでもいいのですか?』

「えっ…それは本当なの…?」

『そりゃあねえ…。『影』を使つての民間人への暴行、無断次元渡航、武装職員の殺害など…罪状は沢山ありますから』

「もう…会えないの…?」

「さて!『断罪の影』、君はもう話すな!!これ以上ナノハの心をかき乱すのはやめてもらう!!」

「執務官…」

「確かに、君がここまでの事件の責任を取るといふのはかなり重い罪なるだろう。…しかし、君が洗脳下に居たというのはかなり重要な事なんだ。君が罪を償いたいと考えていても、君が感じるべき責任じゃないかもしれないのだから。だから、君と『断罪の影』の話をしっかり聞いて、君が償う罪だけを整理しよう…?」

執務官は私の肩を掴み、必死に語りかけてくれた。…さつきまでの強い絶望感は無くなった。そうか、私が償わなきゃいけない罪とそうじゃないものがあるのか…。無理して全てを背負わなくてもいいんだ…。

「すみません…。取り乱してしまつて…」

「いや、こつちもちゃんとフォローできなくて申し訳ない…。『断罪の影』!君はまた、取り調べが始まるが、構わないな!」

『ええ、もちろん。…マスター、私は本当にあなたを追い詰めたかつたわけじゃない。せめて、本当のことを言つて一緒に背負おうと思つ

たんですよ…罪を。だって、私と貴方は、親子の様な関係…まさしく、家族じゃ…ありませんか…』

そう言う通信は切れた。面会時間が終わったのだ。

そうか…私と『影』たちが家族…。考えてもみなかった。そうか、既に居たんだ…私の新しい家族…。何で…気づかなかつたんだろう…。

—SIDE OUT—

そうして、PWなのはは、『断罪の影』は地球で起きた事件と、保安局の事件の罪の取り調べを行うこととなった。罪の割合としては『断罪の影』が7割、PWなのはが3割というもので、裁判が行われることとなった。

その裁判は事件終結から一年後、『断罪の影』は終身刑。PWなのはは保護観察処分という形で判決が下された。判決の翌日に『断罪の影』はPWによって、寿命のシステムを組み込まれ、あと百五十年の寿命となった。彼はその後、第九無人世界グリューエンの軌道拘置所に収監されることになった。

PWなのはは、流星にすぐに自らの世界に帰れるということは無く、囑託魔導師という道もあったが、それも断念。故に彼女が行ったのは自らの魔術知識や技術の提供であった。理論上できるが、個人で作れるコストではないため諦めたりした電磁式カードリッジシステムなどの技術が一年かけて、管理局の技術部に伝えられた。

世界融合の影響は二年経っても確認されてはいないが、未だに空に異世界が見えている現状は変わっておらず、一応少しずつ離れている。しているのは確かであることが、PWなのによっては証明されている。そして、さらに時間が経ち半年後、PWなのはは自らの世界に変えることが許可された。

帰る日には、なのは、フェイト、はやて、ヴォルケンリッター、クロノ、アリサ、すずかなどが見送りに訪れ晴れやかな別れの日となった。

最終話 NANOHAアフター

新暦0077年。私ティアナ・ランスターは、一件の事件報告書を読んでいた。

その事件は、「欲望の影」事件という名称で登録されていた。何故私が、十年以上前の事件の報告書を読んでいたかという点、そんな事件の名前を聞いたこともなかったからというのが大きい。

別に管理局員だから今まで起こった事件をすべて把握しているというわけではないのだが、こんな特徴的な事件を聞いたこともないなんて…正直信じられない。

しかも、パラレルワールド？が存在しているとは…。そんな事件ながらもっと有名なはずなのに…しかもこれはあの高町なのはさんや、フェイト・T・ハラオウンさん、八神はやてさんが関わった事件、全く聞いたことがないなんて何かおかしい気がしてしまった。

明日にでもフェイトさんに聞こうかしら…。

「あれ？ティアナ？まだなんか仕事していたの？」

噂をすれば、フェイトさんだ。

「いや、仕事ではなくてですね…聞いた事の無い事件の資料を読んで…」

「聞いたことのない事件？見せて…」

その時のフェイトさんの顔を私はきつとこれからも忘れないだろう。いつも優しく微笑んでいるフェイトさんがその一瞬だけ、鬼の形相と言っても過言ではない表情をしたのだ。

「これ、まだ残っていたんだ…」

「えっ…」

そうフェイトさんは眩くと、その事件の資料を全て削除してしまった。

「な、なにをしているんですか！いいんですか…!？」

「いいの。これは知っちゃいけない事件なんだから。ティアナも今日見た事件の内容はすべて忘れること。いいね？」

フェイトさんが私の目をじっと見て言ってくる。

「は、はい…」

フェイトさんはそのままその場を去っていた。私のコンピュータの画面には削除完了の文字が赤字で表示されている。

一体何故なんだろうか…。あのフェイトさんの態度は一体…？

色々考えながら、廊下を歩いていたら今度はなのはさんと出会った。

「あれ？どうしたのティアナ。そんなに思いつめた顔して」

「なのはさん…。あ、あの、教えて欲しい事があるんです！」

「ん？私が知ってる事なら教えられるけど…」

「『欲望の影』 事件の事です！」

「…ティアナ、それぞれで聞いたの？」

なのはさんも、どこかキツとした表情になった。

「さつき、事件の資料の中にあつて、それを読みました…」

「まだ残っていたんだね…」

「その…資料自体はもうフェイトさんに消されちゃつて…」

「…フェイトちゃんは何か言つてた？」

「知っちゃいけない事件と…言っていました…」

「でも気になっちゃつた？」

「…はい…」

「そつか…。じゃあしようがないよね。うん、ティアナなら大丈夫でしょ、教えてあげる」

「えっ、いいんですか…？」

「もう、ティアナが聞いてきたんでしょ？あ、でも誰にも教えちゃだめだよ、私が教えた事の内容」

「も、もちろんです!!」

そして、私たちは他に誰も来ないような部屋に移り、『欲望の影』事件について教えてもらうことになった。

「それで、ティアナは何が気になったのかな。一応全容は読んで知っているわけでしょ？」

「そうなんですけど…。パラレルワールドの事とか、あとフェイトさんやなのはさんが何でそんなにこの事件の事を隠しているのかが

気になって…」

「なるほど。…パラレルワールドは確かに存在するよ。実際私も向こうの人と戦ったり話したりしたわけだし」

なのはさんはそこから一拍おいて、少し暗い表情で話し始めた。

「でもね、その世界の私。つまりナノハちゃんに戻った瞬間、その世界は観測できなくなったんだ。まるで最初からそこにいなかったかのように。元々、お互いに干渉できるわけじゃなかったんだけど、急にいなくなっただ。昨日まで親友だったのに瞬きしたら出会った瞬間になっっている感じ？っていうのかな。んーなんか違うな。わかりやすく言うと…急に元の関係に戻ったっていうのかな…」

「でも、それが何で隠すことにつながるんです？」

「…パラレルワールドからもたらされた技術はすごい物だった。今の技術部が何十年と研究した末にたどり着くようなものばかりだった…。ナノハちゃんが魔法研究の技術的な面でどれだけの才能の塊だったのか、当時の技術部だけじゃない、管理局全体が驚いていた」
ナノハちゃんというのはパラレルワールドのなのはさんの事だろう。そうか私の前に居るこの世界のなのはさんは魔法戦闘や教導の天才だけど、ナノハさんは魔法を研究したり、それを実現したりする、研究職の天才だったんだ…。その技術の集大成が、『影』という存在だったんだろう。

「それで、無人世界でその技術で作られた武装だったり、デバイスだったりを実験したんだ。技術部も実際に作れるとは思ってなかったみたいで、完成した時は驚いていたな…。そんな時だったんだ。あの報告書には書かれていない事故が起こったのは」

「事故…？」

「無人世界で行われていた実験の最中、突如すべての武器やデバイスが暴走を起こして、その世界と周辺世界四つが消滅したんだ」

「なっ…！！大事故じゃないですか!?!」

「そう。大事故だった。誰も何でそんな事が起こったのかわからなかった。ただわかってるのは、事故が起きた時間はちょうどパラレルワールドが観測できなくなった時間と同時刻だったという事だけ」

「じゃあ、パラレルワールドから離れたから、その技術で作られた物は暴走したという事なんですか…？」

「そうではないか、とは言われていたけど…実際何もわからないのが現状なんだ。それ以降その技術を使って物を作っていないしね。そして、その事故の存在を隠すために私たち事件関係者にはその事件の存在自体を秘密とするように通達された。ティアナが見たような事件の記録も全部消した…筈だったの」

「なるほど…。それじゃあ、なのはさん達は隠ぺいに巻き込まれたような感じなんですね…」

「…そうなのかな…。うん、そうかも。友達の事をなかったように扱いたくなんてなかったけど…」

なのはさんは悲しそうな顔で俯く。

今話を聞いていると向こうの技術で物を作った時はまだパラレルワールドが近かった時って言うことよね…。

「その技術で作られた物の原動力って何だったんですか？」

「え、原動力？うーん…私は詳しくは知らないんだけど…管理局が『魔法石』、ナノハちゃんや『ナイト鉱石』って言っていたロストロギアらしいよ。極少量でも大量の魔力を創り出せるっていう」

「…もしかして、それが原因なんじゃ…」

「ええ…それは無いんじゃないかな。だって、私の友達だって埋め込まれていたけど暴走なんてしてなかったよ？」

「その時、御友人にはパラレルワールド由来の何か物を持っていませんでした？技術とかではなく、デバイスみたいな実物として何かを…」

「その友達には『影』が憑りついてたけど…」

「やっぱり…あ、あの…もしかしてですけど、グリユーエンに収監されていた『断罪の影』の身にも何かあったんじゃないですか…？」

「え、よくわかったね。そう、『断罪の影』は事故の日に忽然と姿を消したんだ。でも脱走とかじゃないの。まるでそこに何にもいなかったかのように…」

なのはさんも何かに気づいたような顔をする。

「さっきのなのはさんの話で引つかかるところがあっただんです。なぜナノハさんは管理局が『魔法石』と呼んでいるものを『ナイト鉱石』という固有名詞に聞こえる名称で呼んでいたのかというところが…」

「確かに…。誰も気にしてなかったけど、それは確かに変だね」

「そして、あの報告書の感じから、『影』というのはお互いの存在を感じあえると私は思ったんです。だから、ナノハさんはそのうちの一つに入り込むことで監視していたのではないかと」

「考えてみれば、闇の書事件の時期からナノハちゃんは私たちの世界に来てたわけだもんね」

「つまり、ずっと異世界で生まれたナノハさんという存在が居たわけです。『影』という存在も一見自由に動いているように見えて、互いを感じ合っているという…。しかもそれは遠い次元世界に居る『断罪の影』が、全ての影の存在を消えたのが認識できるという程高性能の感覚」

「でも、『断罪の影』とか『束縛の影』は『不屈の影』やナノハちゃんが出てきた時すごく驚いていたみたいけど…。そこまで高性能なら、気づいてそうなものじゃない？」

「これは私の推察になってしまいうのですが、『居るはずがない』と思ってしまうことで、その存在を感じられなくなってしまいうのではないかと…。それもかなり強く考えてしまうことで…。『不屈の影』というのは、ほぼ全ての『影』に勝てるという存在、そしてナノハさんは彼らが殺した人なんですから、いないと思っても不思議じゃありません」

「『不屈の影』に関してはいて欲しくないからそう考えてしまった…。ナノハちゃんに関しては死んでいるはずなのだから居るはずがない…。そっか…。確かにその説はかなり納得がいくよ」

「そして、事故と『断罪の影』の消滅がパラレルワールドが観測できなくなった日と同日という事、『ナイト鉱石』という固有名詞をナノハさんが知っていたという事を踏まえると…」

「ナイト鉱石…魔法石は元々ナノハちゃんの世界の物…?」

「はい、そして『影』の動力もまたその魔法石ことナイト鉱石なの

ではないでしょうか？彼らはユニゾンデバイスです。かなり高い技術で作られているデバイス…」

「技術部が作ったデバイスと…同じ動力源…！」

「そして、それらの消滅や暴走のきっかけを、ナノハさんがパラレルワールドに帰り観測不能になった時とすると…」

「ナイト鉱石はあの世界の人間がいないと…制御できない…？」

「そうです…しかし、ナノハさんは元々その世界で産まれ育った…だからその事を知らなかったんです。そしてありのままに自分の世界の技術を伝えてしまった…ナイト鉱石を利用した魔法運用の方法を…」

「あの時はそんな事考えもしなかった…そうか、確かにそうだとすれば全て辻褃が合う！ティアナ！」

「は、はい！」

「ありがとう…！私…その事故とかがショックであまり思い出さなないようにしてしまっていたから…ちゃんと考えた事無かったんだ…。けどこうやってティアナが客観的に考えてくれて、考察までしてくれたおかげで…あの事故の原因が何となくわかった気がする…！」

「そんな…私はただ…そうなのではないかと、思っただけで…」

「ただ直感的に言ったわけじゃないでしょ？私の話と事件の事を踏まえて、じっくり考えてたからそこまで説得力のある説明ができるんだよ」

「えへへ…ありがとうございます」

そして、私となのはさんは自室へ戻っていった。

まさか、自分の考察でなのはさんを元気にできるとは…思ってもみなかった…。

…うん？メールボックスに知らないアドレスからメールが来ている。

不審だから本来開かないはずなのに、次の瞬間、私はなぜか開いてしまった。メールの内容は単純な文だった。

【ありがとう。ごめんね】